神戸市史

附圖 資料 年表
書目 索引
編纂顛末

凡例

一本卷收むる附圖は、主として前輯神戸市史附圖を補はんが爲に、新に發見せられたるものゝ中より選び載せたものである。

一資料中、古代の分は多く既刊に屬するも、神戸市史上重要なるものなれば、其中に就きて必要なるものを選びて之を收め、中世の資料の大部分は未刊に屬するものなれば之を收めて前市史資料を補充し、同時に第二輯別錄一記述の資料として之を載せ、近世の分は楠公碑關係、北風家關係、高田屋嘉兵衞關係及福原鬘鏡のみを追加した。

一古代の資料は記錄文書を問はず、主として年代順に之を配列し、若しくは事項につきて順次を逐ひ、既刊本は抄出せる原本名を錄し、中世の資料も之に準じたれど、之は兵庫の一般資料と兵庫關なる特定の資料とに大別した。尙中世資料の蒐集に關しては、東京帝國大學史料編纂官岩橋小彌太氏、同所員永島福太郎氏を煩はせること多く、こゝに感謝の意を表する。

一年表中、中世の分は成るべく前市史年表中世の分との重複を避け、最近の事項

は收錄すべきもの甚だ多きを以て省略せるもの尠くない。

一書目は前輯神戸市史の分類に據らずして多くは記述の編目に從ひて之を收錄した。

一索引は前市史に準じ、市史編纂係に於て之を作成した。

神戸市史第二輯　附圖

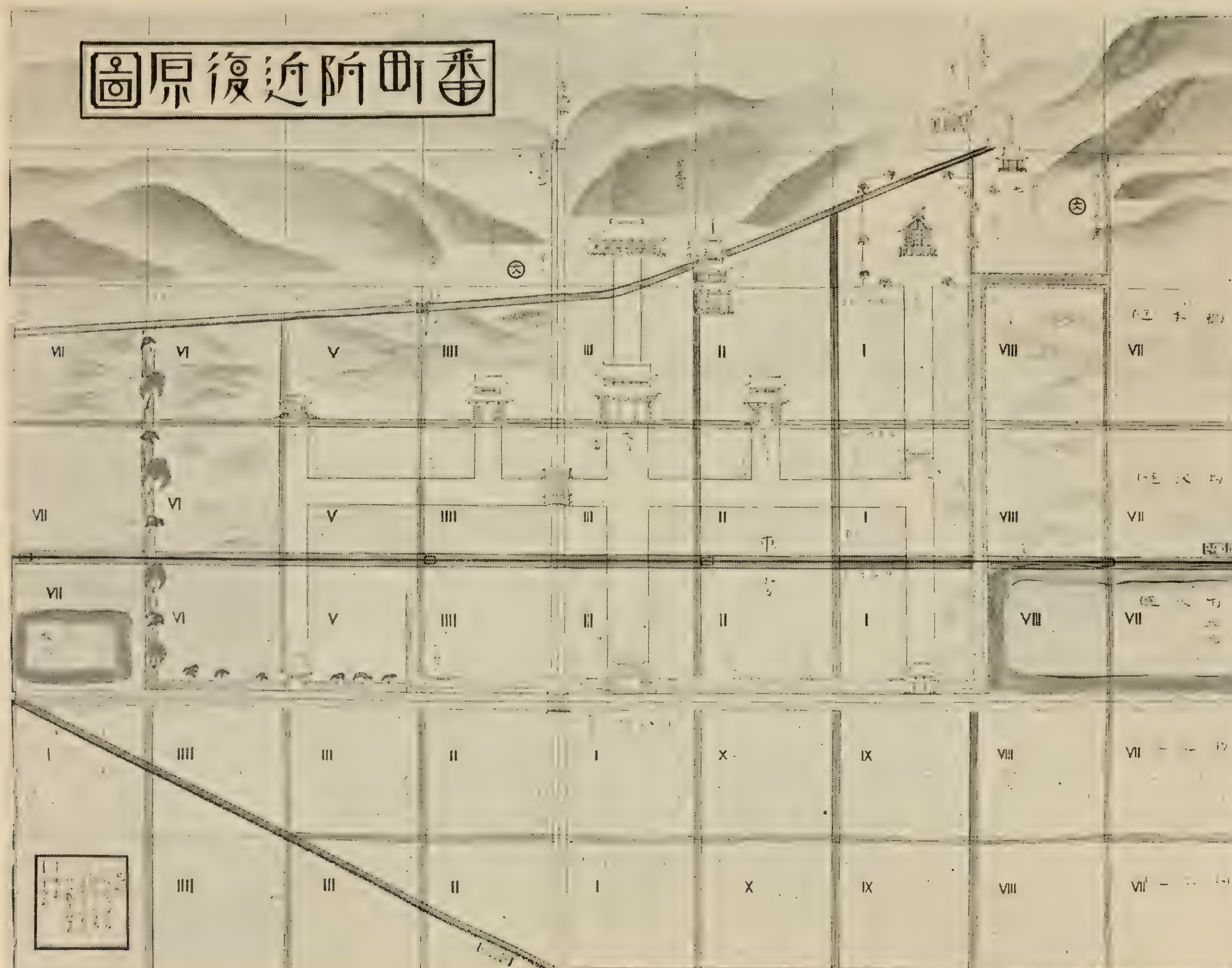
目次



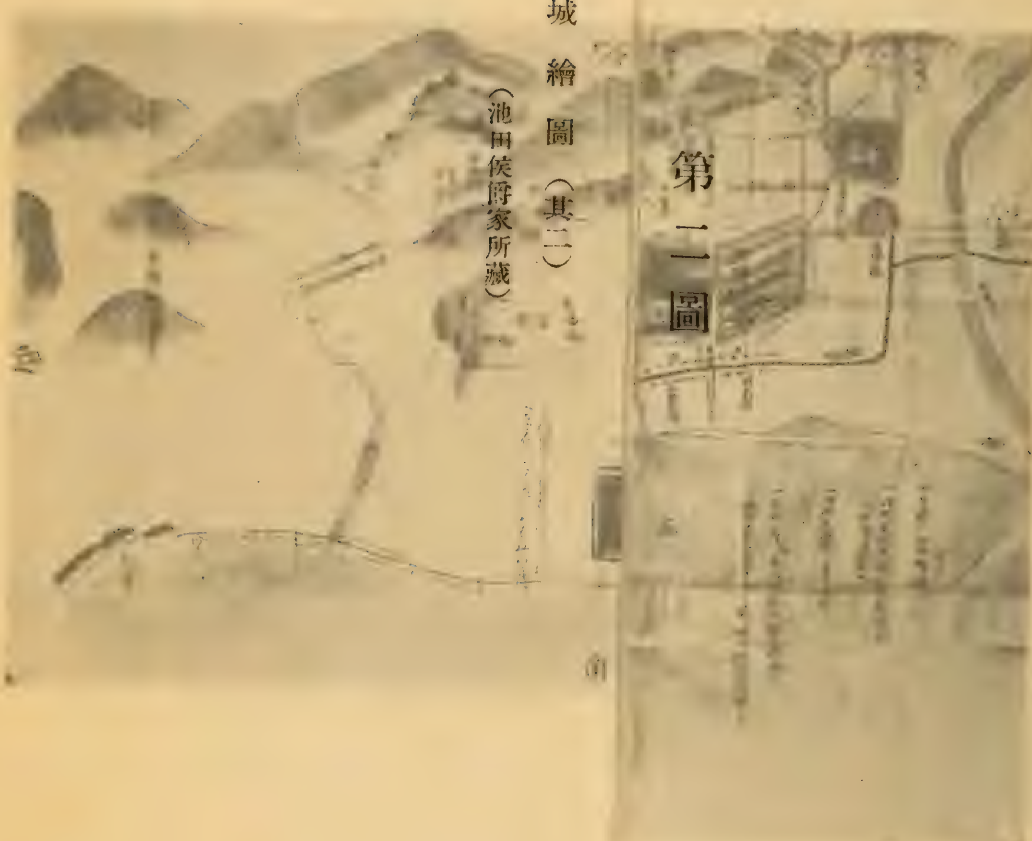
第一圖

番町附近（神戸市林田區）復原圖

上澤通七丁目會下山町三丁目の一線と長田交叉點長田橋の一線、中道通以北、寺山以南の間には、幾多の古字あり、發掘出土品あり、傳說あり、之を地理に合考して假に舊態を想像して復原を試みた。此界線は前神戸市史附圖喜田文學博士神戸地方條里圖に據る。蓋し此地方は神戸市の歷史上研究に値するを以てである。


番町附近復原圖

第二圖



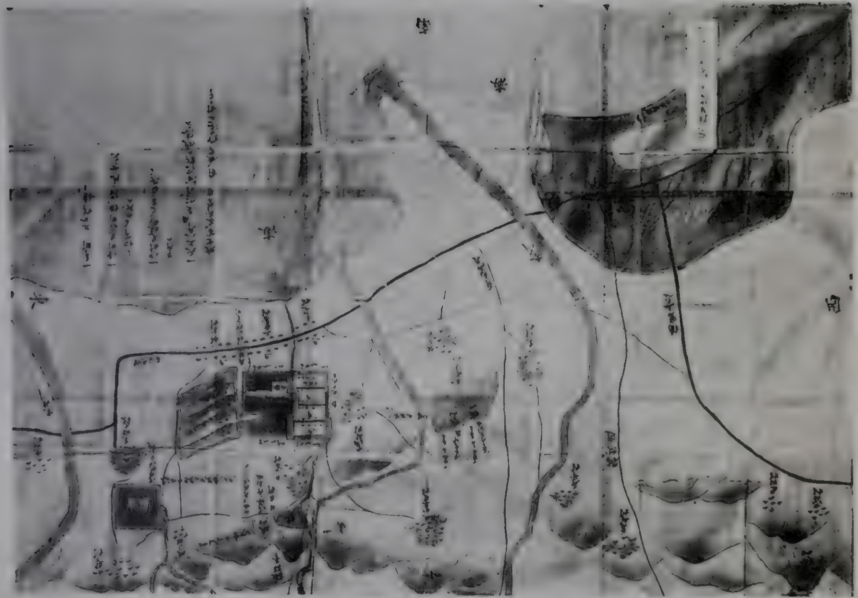
花熊城繪圖（其二）

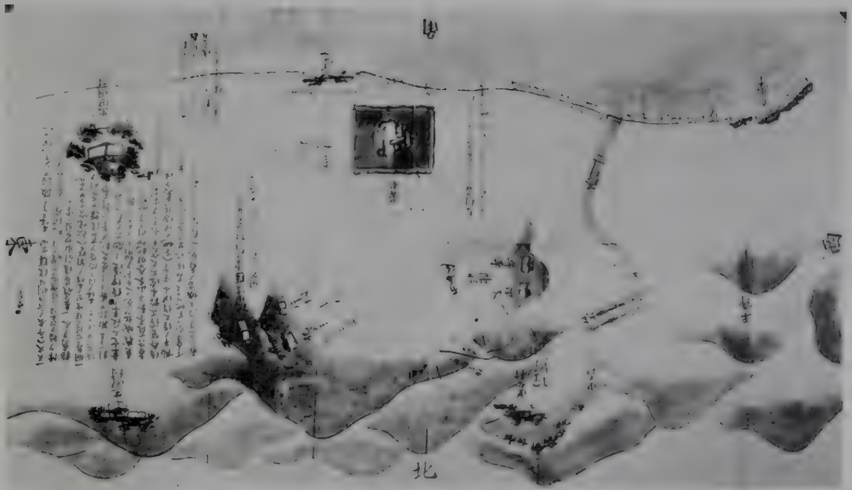
（池田侯爵家所藏）

第二圖

汁頭城繪圖（其一）

（池田侯爵家所藏）




北

第二圖

兵庫地方幕末所領分割圖

（前輯神戸市史附圖ヲ増補ス）



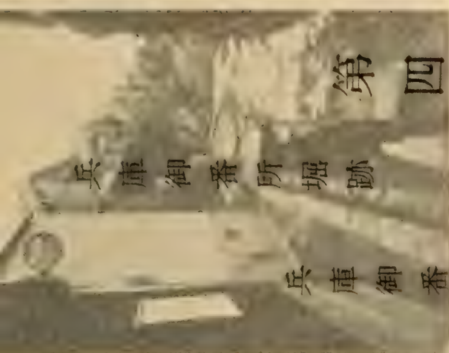
第三圖

兵庫地方幕末所領分割圖

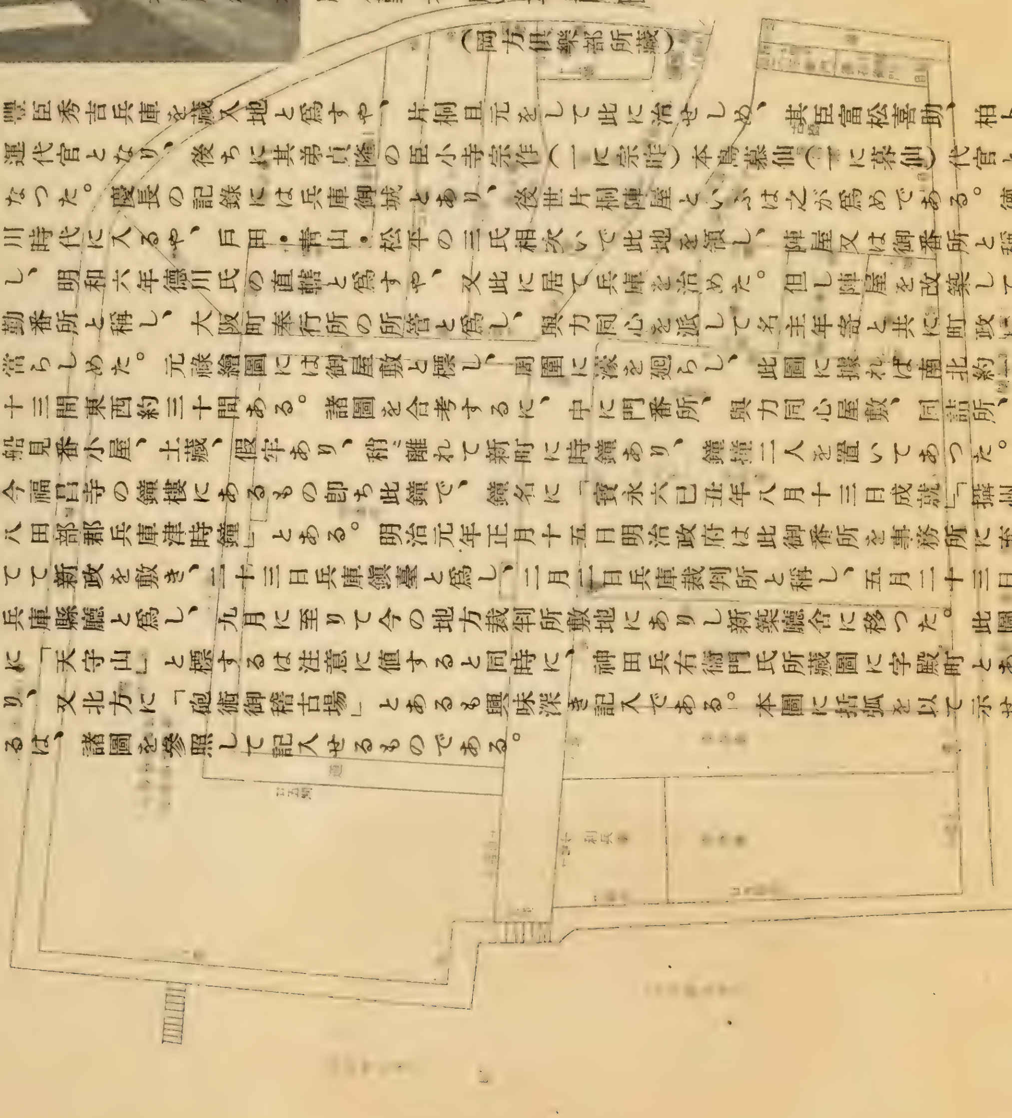
（前輯神戸市史附圖ヲ增補ス）



神戸市内幕末所領分割圖
備考
幕府直轄領
天領
尼領
吉川領
浅尾領
大手
東須磨
西須磨
板宿
西代
野田
林
兵庫
神戸
北野
生田
中一里山

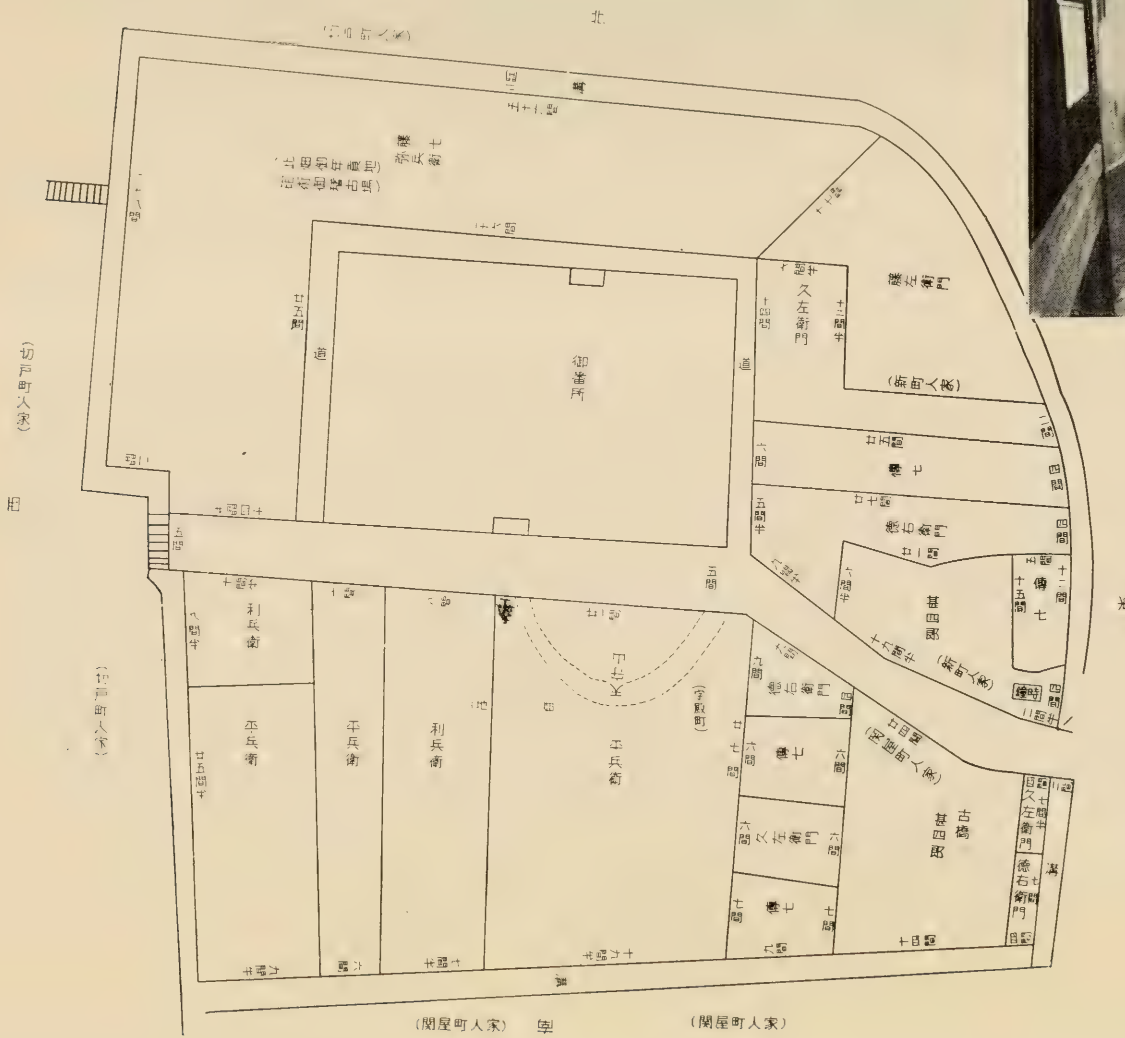


第四圖
兵庫御番所堀跡



兵庫御番所（勤番所）平面圖
（岡方倶樂部所藏）

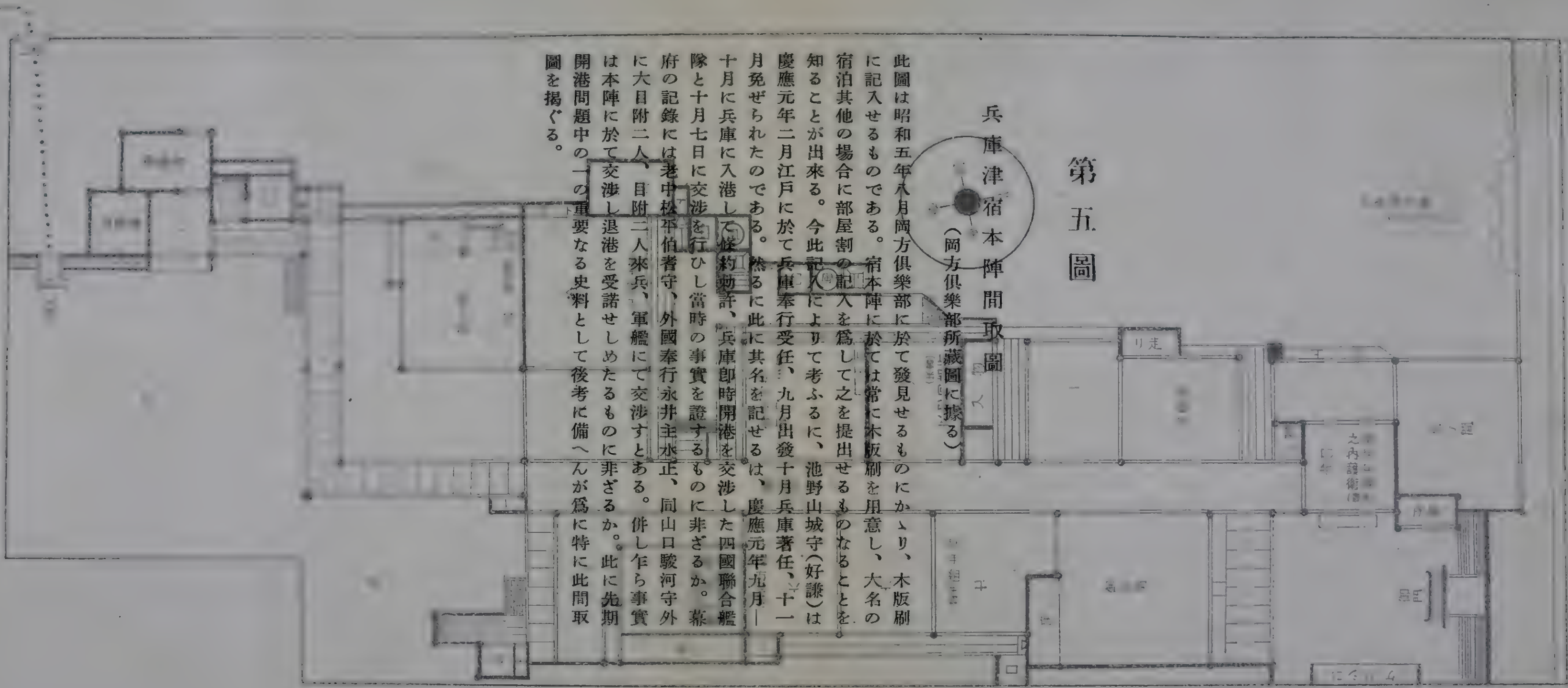
豊臣秀吉兵庫を蔵入地と為すや、片桐且元をして此に治せしめ、其臣富松喜助、相卜運代官となり、後ちに其弟貞隆の臣小寺宗作（一に宗昨）本鳥慕仙（一に慕仙）代官となつた。慶長の記録には兵庫御城とあり、後世片桐陣屋といふは之が爲めである。徳川時代に入るや、戸田・青山・松平の三氏相次いで此地を領し、陣屋又は御番所と稱し、明和六年徳川氏の直轄と爲すや、又此に居て兵庫を治めた。但し陣屋を改築して勤番所と稱し、大阪町奉行所の所管と爲し、與力同心を派して名主年寄と共に町政に當らしめた。元祿繪圖には御屋敷と標し、周圍に濠を廻らし、此圖に據れば南北約二十三間東西約三十間ある。諸圖を合考するに、中に門番所、與力同心屋敷、同詰所、船見番小屋、土藏、假牢あり、稍〻離れて新町に時鐘あり、鐘撞二人を置いてあつた。今福昌寺の鐘樓にあるもの即ち此鐘で、鐘名に「寶永六己丑年八月十三日成就」「攝州八田部郡兵庫津時鐘」とある。明治元年正月十五日明治政府は此御番所を事務所に充てて新政を敷き、二十三日兵庫鎭臺と爲し、二月二日兵庫裁判所と稱し、五月二十三日兵庫縣廳と爲し、九月に至りて今の地方裁判所敷地にありし新築廳舍に移つた。此圖に「天守山」と標するは注意に値すると同時に、神田兵右衞門氏所藏圖に字殿町とあり、又北方に「砲術御稽古場」とあるも興味深き記入である。本圖に括弧を以て示せるは、諸圖を參照して記入せるものである。


北
東
西
南
(切戸町人家)
(関屋町人家)
(関屋町人家)
(新町人家)
御番所
道
七藤弥兵衛
藤左衛門
久左衛門
徳右衛門
傳七
利兵衛
平兵衛
古橋甚四郎
甚四郎

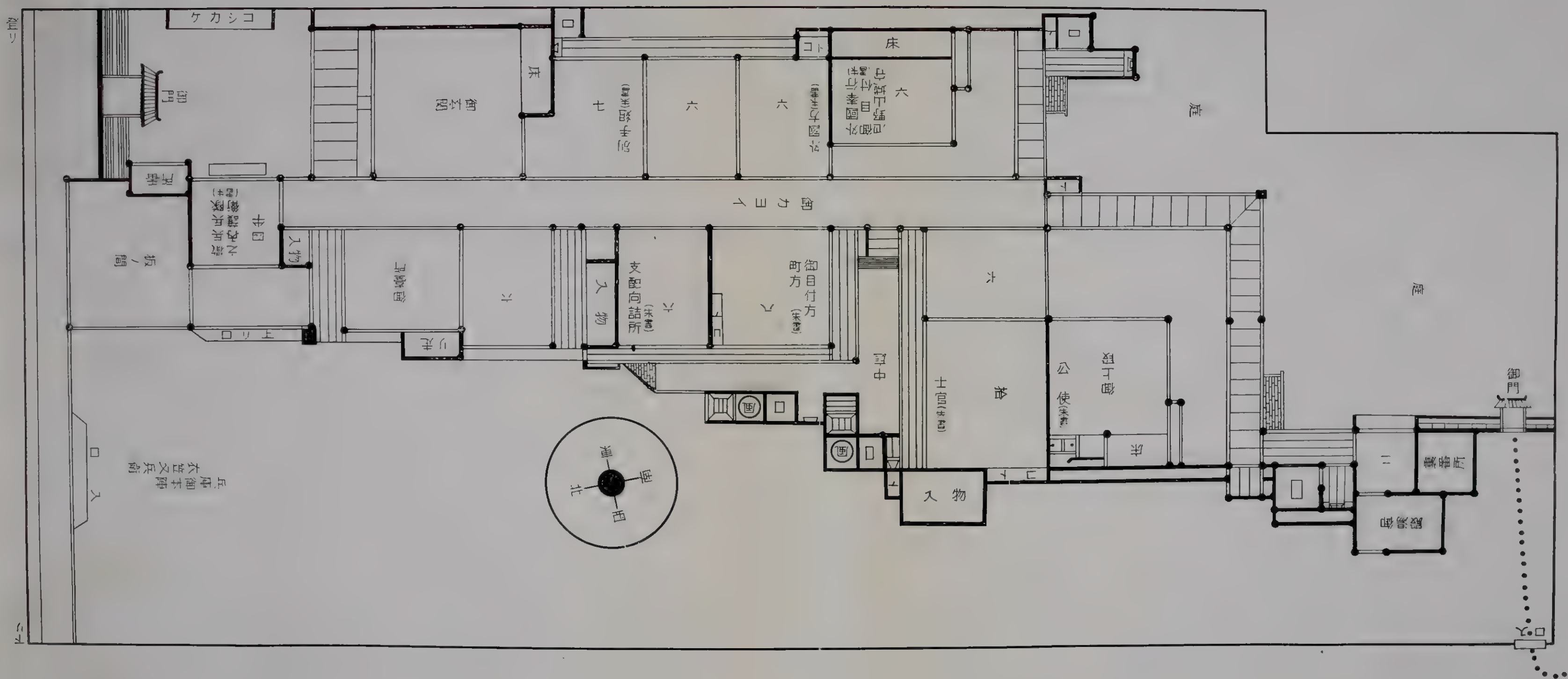


第五圖

兵庫津宿本陣間取圖
（岡方倶樂部所藏圖に據る）



此圖は昭和五年八月岡方倶樂部に於て發見せるものにかゝり、木版刷に記入せるものである。宿本陣に於ては常に木版刷を用意し、大名の宿泊其他の場合に部屋割の記入を爲して之を提出せるものなることを知ることが出來る。今此記入によりて考ふるに、池野山城守(好謙)は慶應元年二月江戸に於て兵庫奉行受任、九月出發十月兵庫著任、十一月免ぜられたのである。然るに此に其名を記せるは、慶應元年九月―十月に兵庫に入港して條約勅許、兵庫即時開港を交渉した四國聯合艦隊と十月七日に交渉を行ひし當時の事實を證するものに非ざるか。幕府の記録には老中松平伯耆守、外國奉行永井主水正、同山口駿河守外に大目附二人、目附二人來兵、軍艦にて交渉すとある。併し乍ら事實は本陣に於て交渉し退港を受諾せしめたるものに非ざるか。此に先期開港問題中の一の重要なる史料として後考に備へんが爲に特に此間取圖を掲ぐ。



御門
床
庭
支配向詰所
御目付方
町方
入物
公使

第六圖

神戸西町地圖

（大藏省所藏地圖）

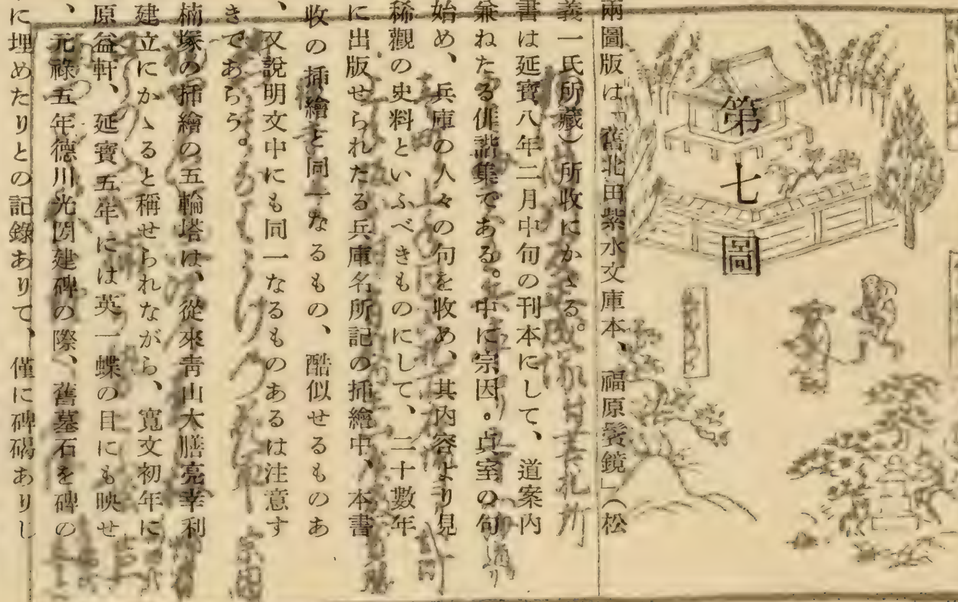


明治初年の元町通西部

此地圖の中、上圖は今の元町通六丁目より東へ同五丁目の一部まで、下圖は夫れより四丁目までを示す。六丁目西端に「番所」と標せるは、所謂關門番所にして、其山側の地は「郵便御役所」を置きたる地である、又八幡町支配とあるは、舊走水村の區域を示すものにして、之を除ける周圍の地は悉く二ッ茶屋村の城内である。



くすのきつか（楠塚）



第七圖

此兩圖版は「舊北田紫水文庫本、福原鬢鏡」（松本義一氏所藏）所收にかゝる。

本書は延寶八年二月中旬の刊本にして、道案内を兼ねたる俳諧集である。中に宗因・貞室の句を始め、兵庫の人々の句を收め、其内容より見て稀覯の史料といふべきものにして、二十數年後に出版せられたる兵庫名所記の插繪中、本書所收の插繪と同一なるもの、酷似せるものあり、又説明文中にも同一なるものあるは注意すべきであらう。

此楠塚の插繪の五輪塔は、從來青山大膳亮幸利の建立にかゝると稱せられながら、寛文初年に貝原益軒、延寶五年には英一蝶の目にも映せず、元祿五年德川光圀建碑の際、舊墓石を碑の下に埋めたりとの記録ありて、僅に碑碣ありしを證せられたるを、こゝに明確に證明せるものである。即ち延寶五年以降同八年年初までに五輪塔の建設を見たるものにして、青山幸利の楠公遺蹟顯揚事業を明かにするを得たことは喜ぶべきである。

須磨寺の插繪の兵庫名所記所收のものと酷似せるも、又兵庫の地誌上興味ありといへる。

すまでら（須磨寺）







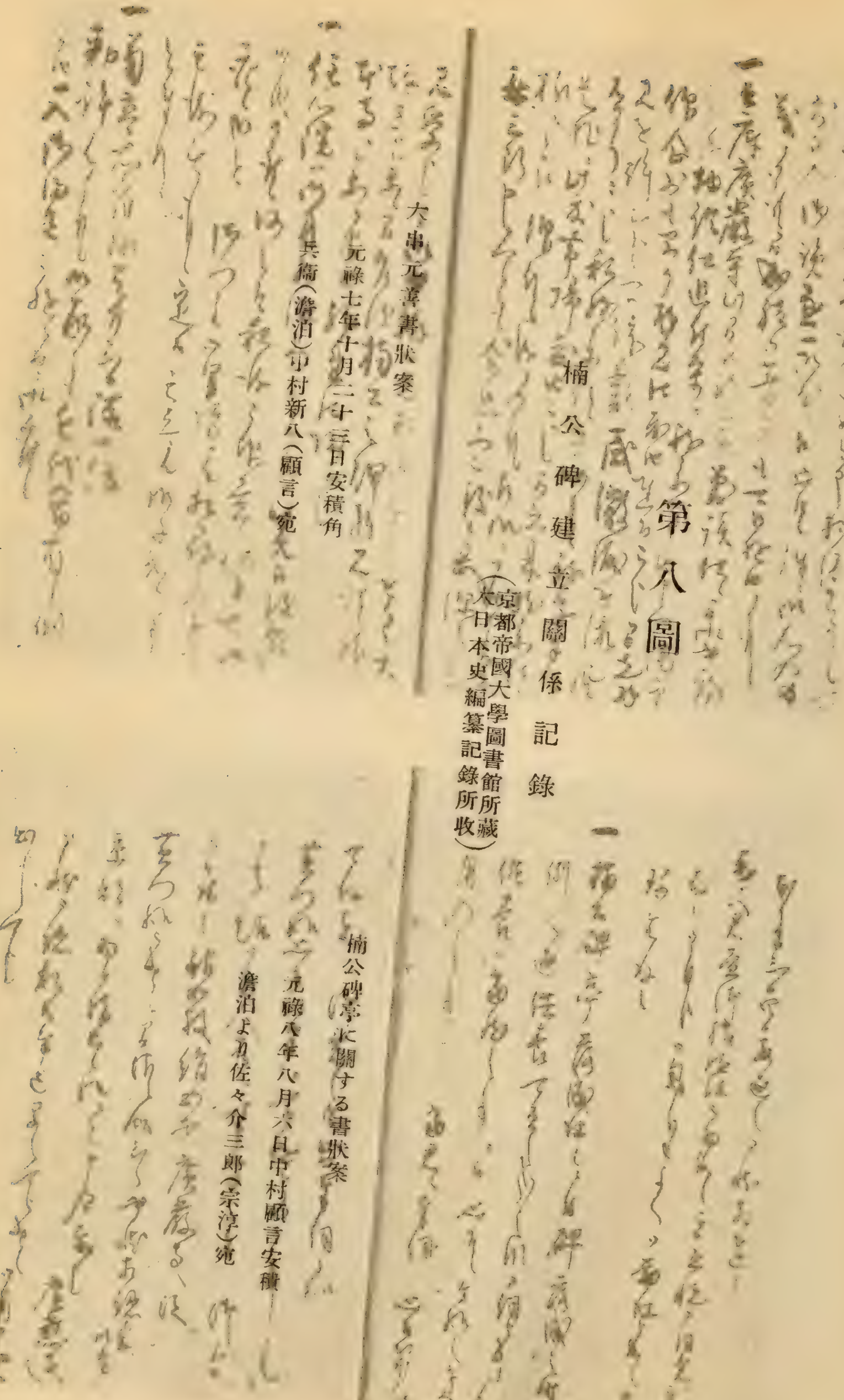
楠河内判官正成塚 付首塚所
中に梅あり兵庫より五丁 小野道ニ有
広町上手ニ有北へ右塚より出町
より坂本村ニ有醫王山広巌寺
禅寺なり

楠やまかとくけの花軍　宗因
楠やなと芸咲の墓し梅　[illegible]
四方の人や楠の露ちる宿　[illegible]
楠やいかく秋を継く石佛　重之

第八圖

楠公碑建立關係記録

（京都帝國大學圖書館所藏 大日本史編纂記録所收）



大串元善書狀案　元祿七年十月二十三日安積角兵衛（澹泊）中村新八（顧言）宛

楠公碑亭に關する書狀案　元祿八年八月六日中村顧言安積澹泊より佐々介三郎（宗淳）宛

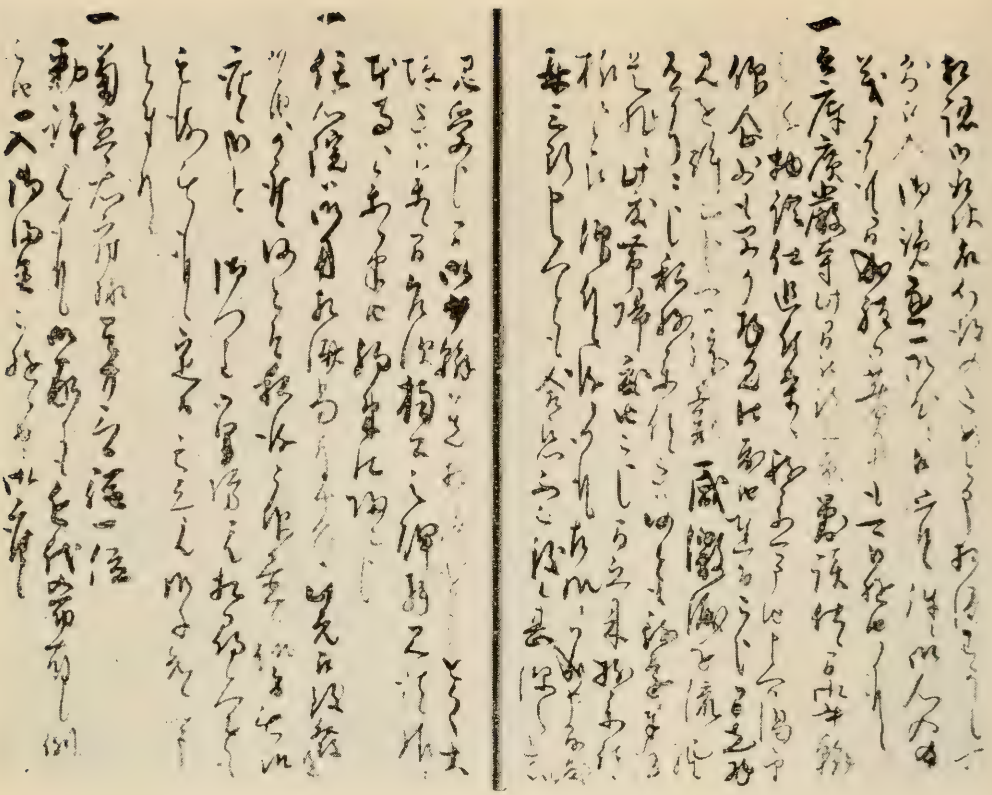
第八圖

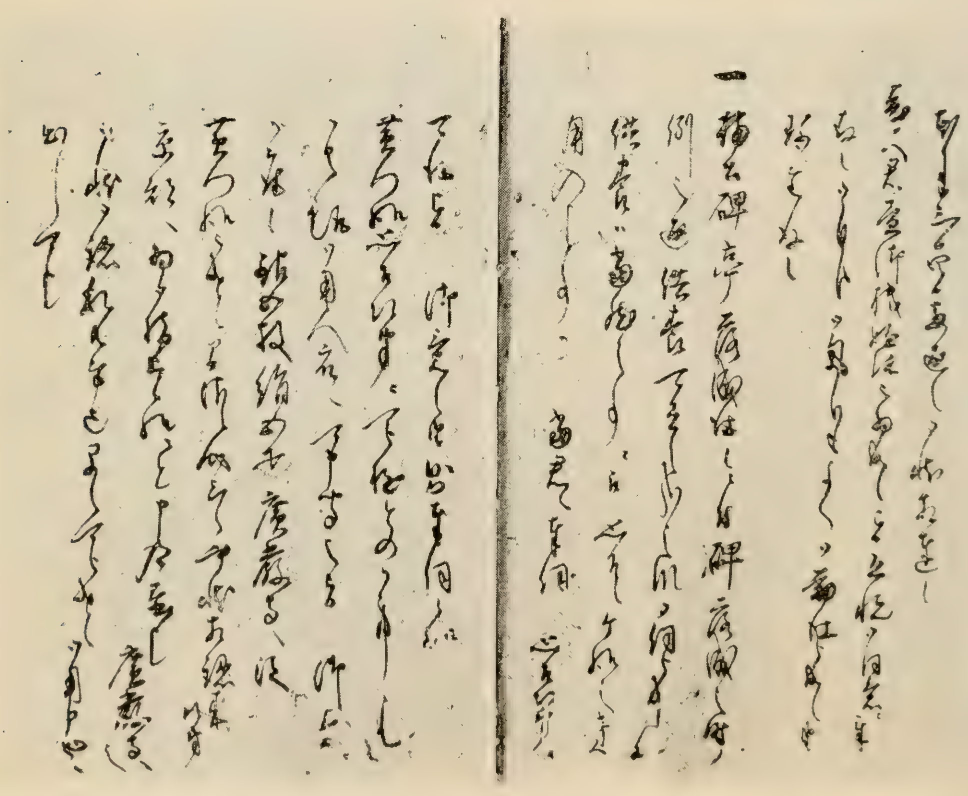
楠公碑建立關係記録

（大日本史編纂記録所收
京都帝國大學圖書館所藏）

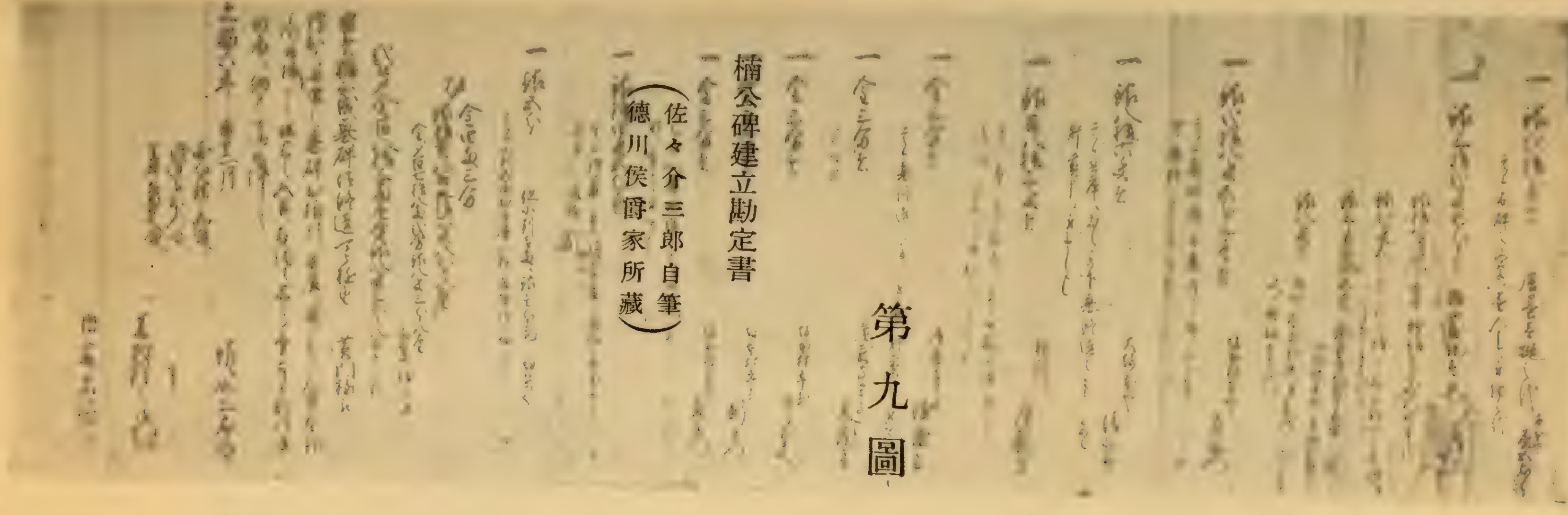
大串元善書状案
元祿七年十月二十三日安積覚
兵衛（澹泊）中村新八（顧言）宛

楠公碑亭に關する書状案
元祿八年八月六日中村顧言安積
澹泊より佐々介三郎（宗淳）宛

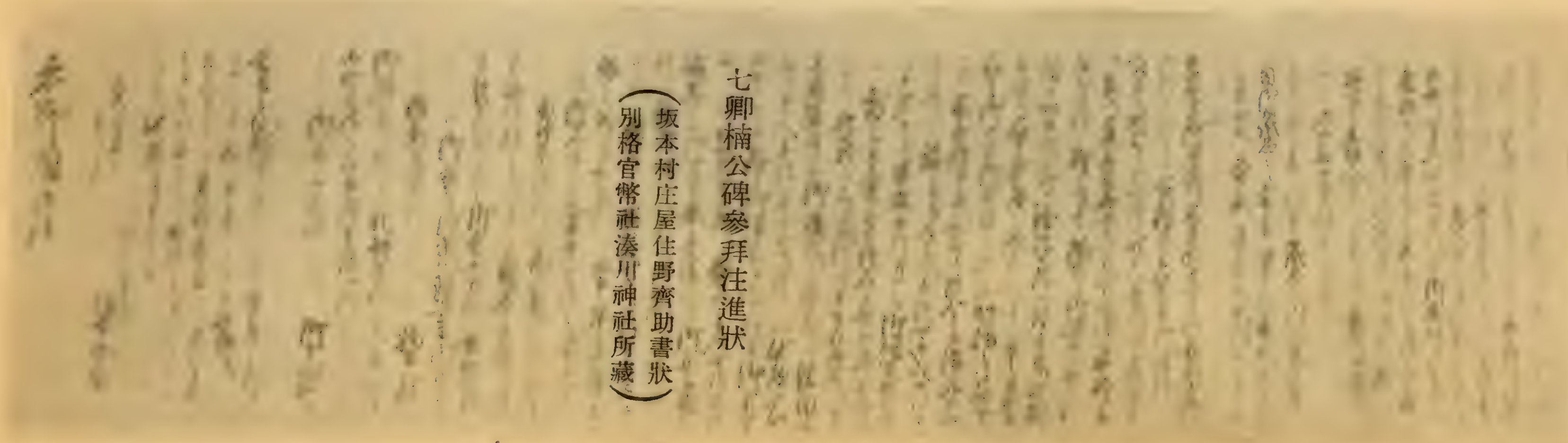




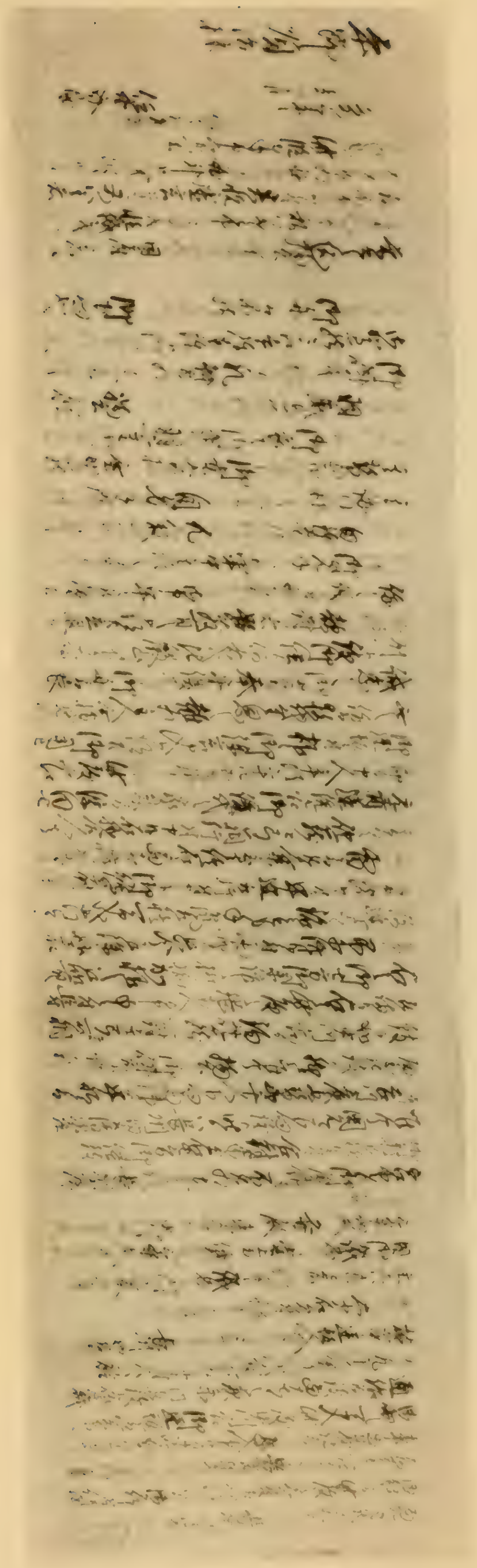
第九圖

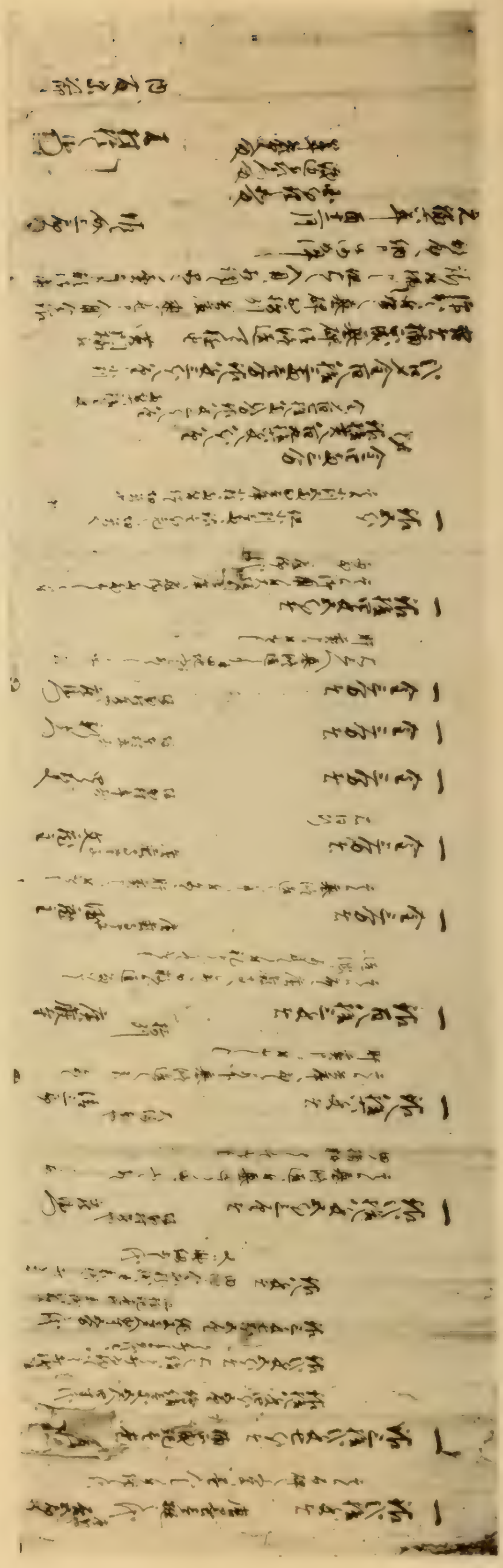


楠公碑建立勘定書（佐々介三郎自筆 德川侯爵家所藏）



七卿楠公碑參拜注進狀（坂本村庄屋住野齊助書狀 別格官幣社湊川神社所藏）







第十圖

明治五年改築前の楠公碑碑亭

（神田兵右衛門氏所藏）

楠公碑屋には屢々變遷ありしが如くである。元祿八年十一月徳川光圀によりて建立せられたる碑亭は、二間に三間四方葺流し、瓦葺であつたが、天明年中四百五十年祭に先んじて方三間に改築せられしこと、當時の記錄に見えてゐる。これ攝津名所圖繪等に掲ぐるもので、其構造は恰も龕堂の如く、四方に格子を入れたるものであつた。其後文化年中に入りて又脇坂淡路守の寄進によりて屋庇の建てられた事が、古賀西使日記に見えてゐる。此寫眞は即ち文化建立のものなるべく、眞木泉州・シーボルト等の參詣記事に照して、碑前の有樣を知ることが出來る。此くて明治五年の湊川神社創建に方りて、今の碑亭に改築を加へられたるものである。尙楠公を海上の神とせる風俗ありしと、シーボルトの記せる記事は、楠寺（廣嚴寺）所藏の「海上安全」の守護札の板木によつて證明することが出來る。





第十一圖

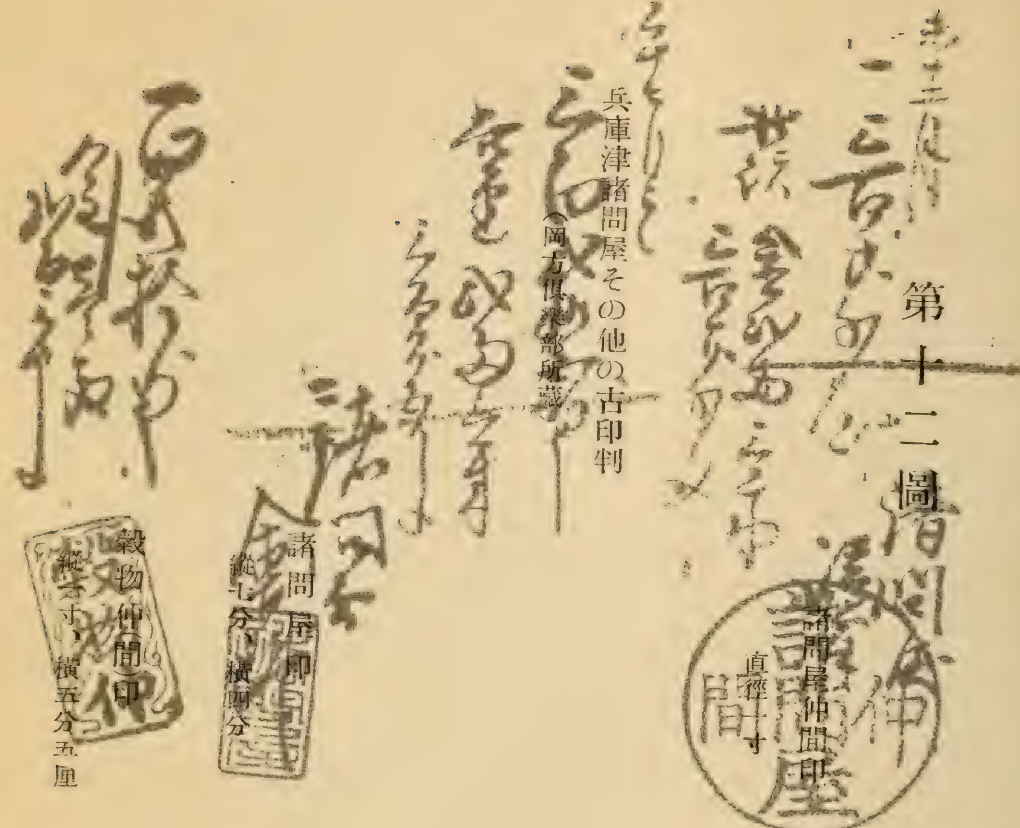
天保六年楠公五百年祭を執行せる

橋本（木屋）藤左衛門像

（橋本又三郎氏所藏）



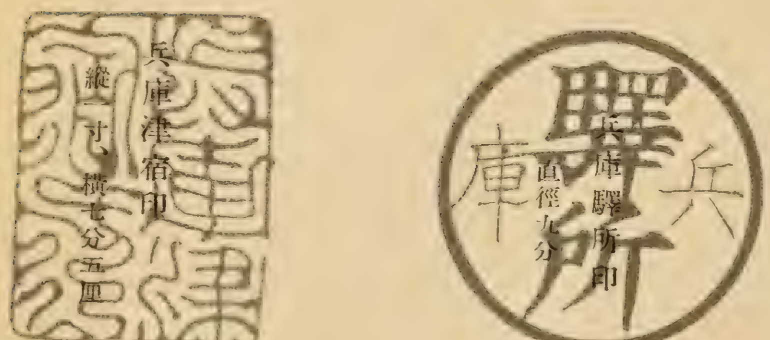
第十二圖　兵庫津諸問屋その他の古印判（岡方倶樂部所藏）



諸問屋仲間印　直徑一寸

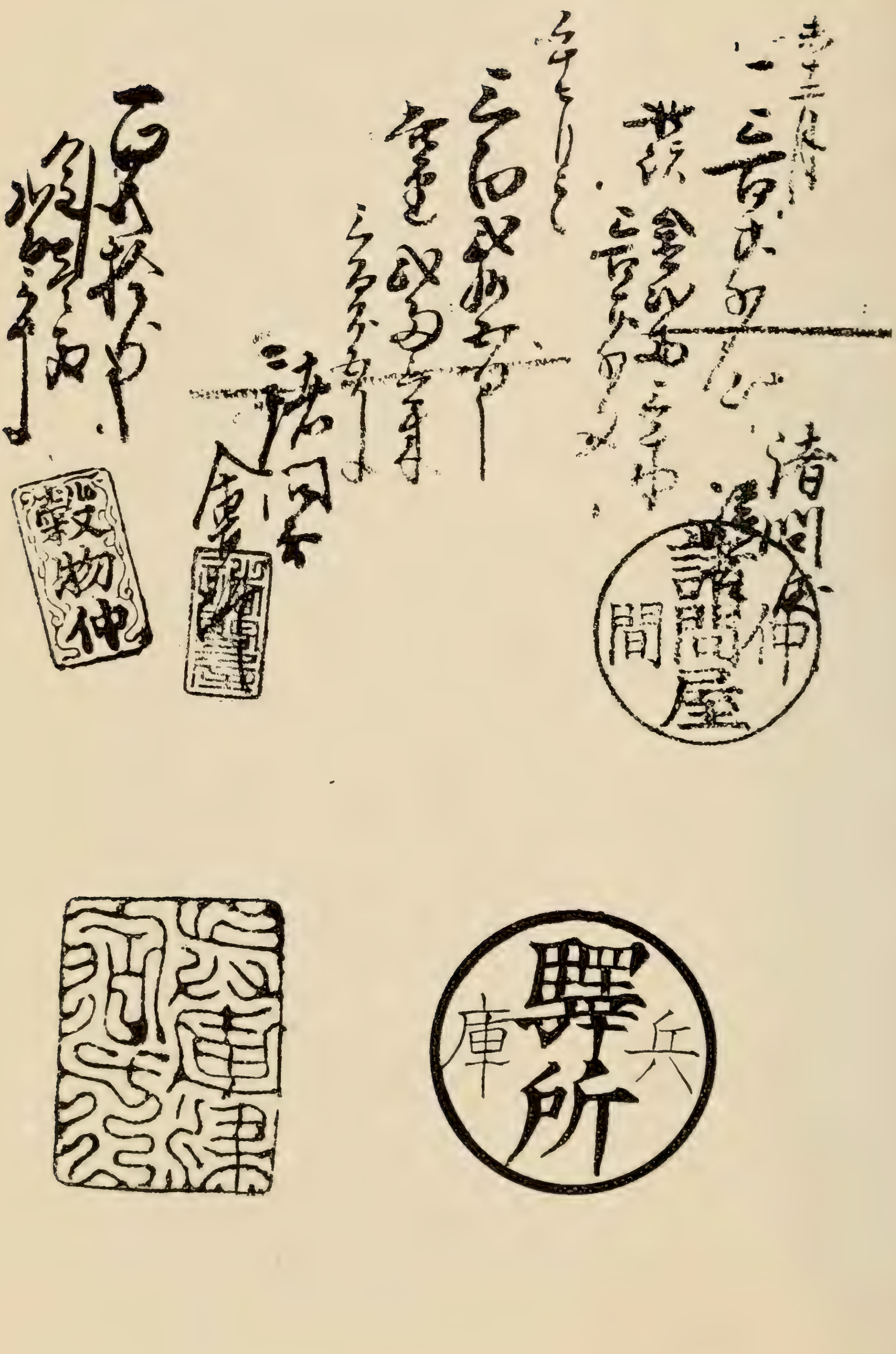
諸問屋印　縦七分、横四分

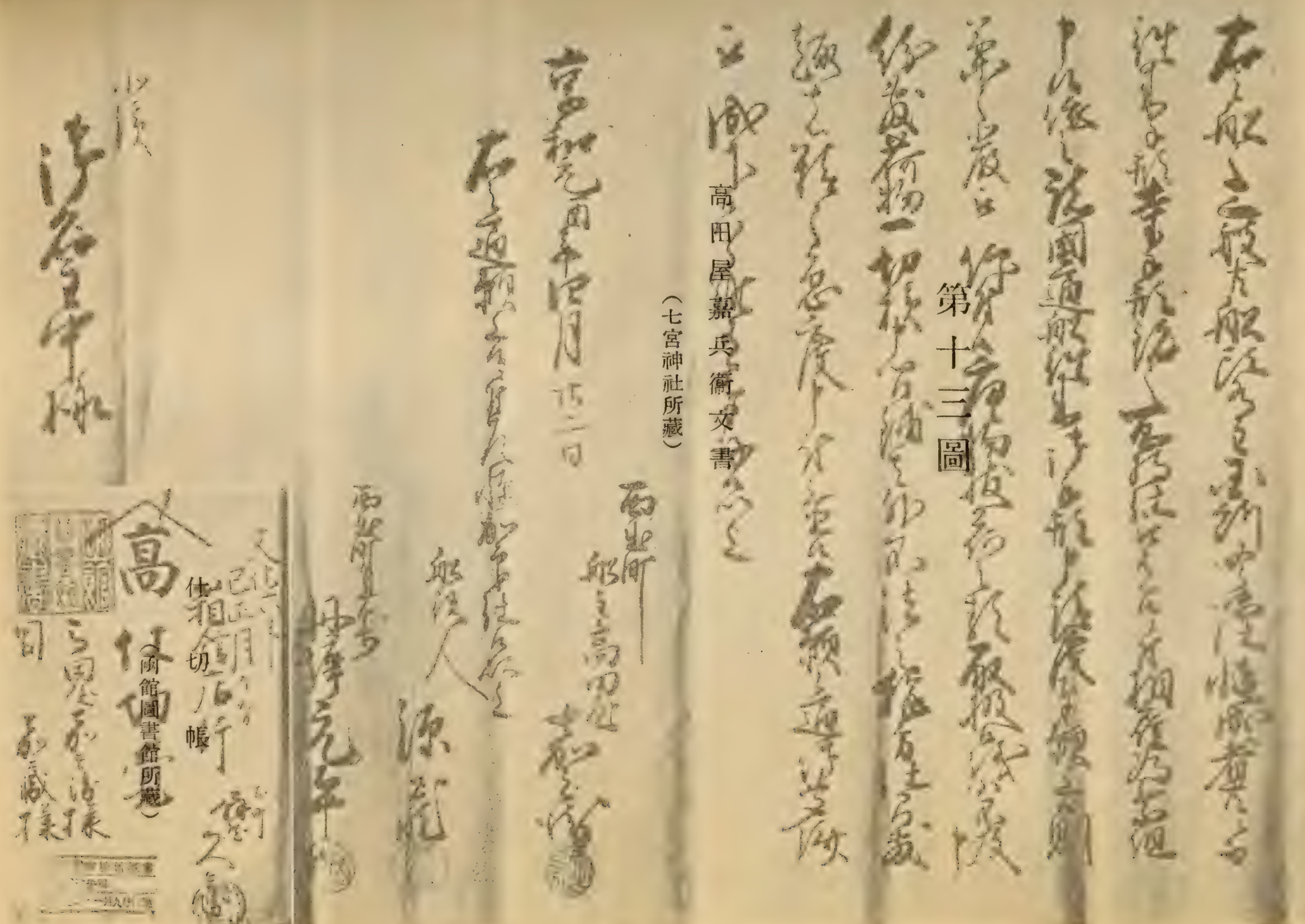
穀物仲間印　縦一寸、横五分五厘



兵庫驛所印　直徑九分

兵庫津宿印　縦一寸、横七分五厘


穀物仲
兵庫
驛所



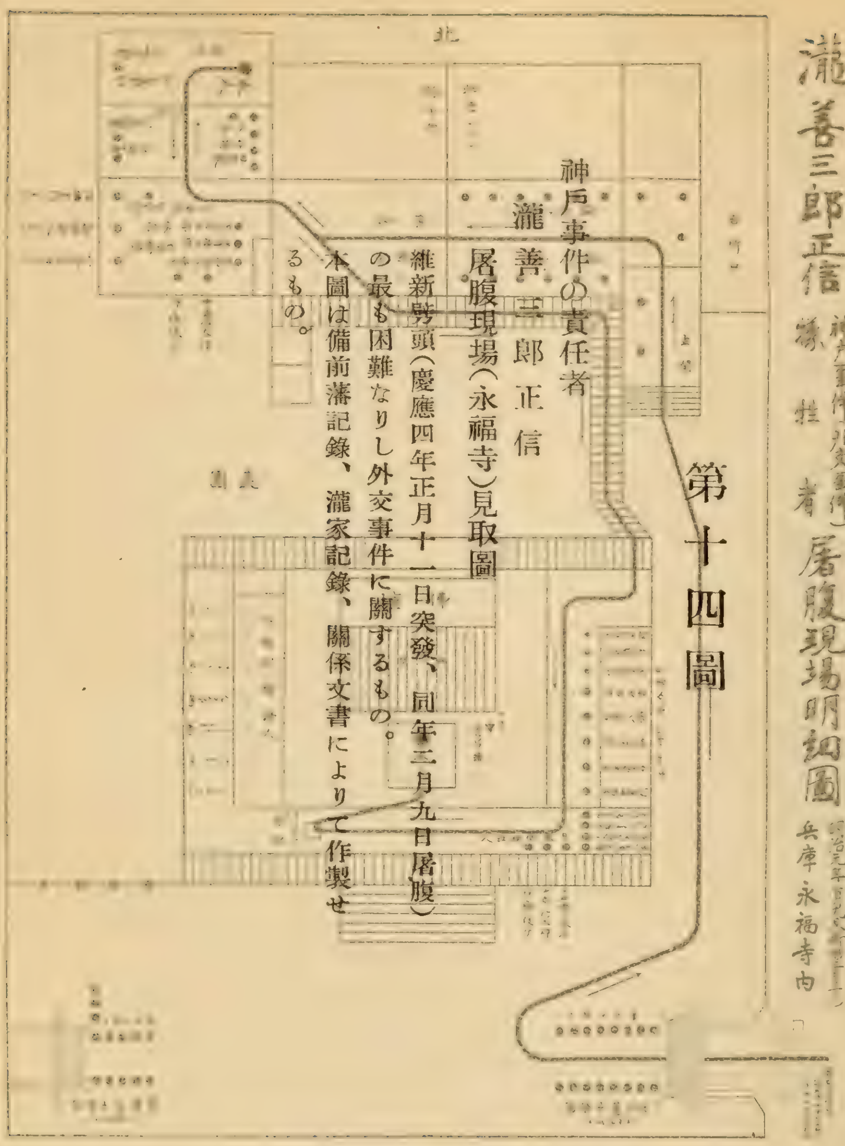
第十三圖

高田屋嘉兵衛文書
（七宮神社所藏）

仕切帳
（函館圖書館所藏）


享和元酉年四月廿二日
船役人
高仕切覚
文化六年
巳正月

第十四圖



神戸事件の責任者

瀧善三郎正信

居腹現場(永福寺)見取圖

維新劈頭(慶應四年正月十一日突發、同年二月九日居腹)の最も困難なりし外交事件に關するもの。

本圖は備前藩記錄、瀧家記錄、關係文書によりて作製せるもの。

神戸に留任せる

六箇國代表者署名

(原本兵庫縣廳所藏)

本書は一八六八年二月九日(慶應四年正月十六日附)、即ち勅使東久世通禧と運上所に於て談判終了の翌日に、要求書として提出せる文書の署名である。

第十四圖

神戸事件の責任者

瀧善三郎正信

屠腹現場(永福寺)見取圖

維新劈頭(慶應四年正月十一日突發、同年二月九日屠腹)の最も困難なりし外交事件に關するもの。

本圖は備前藩記録、瀧家記録、關係文書によりて作製せるもの。

神戸に留任せる

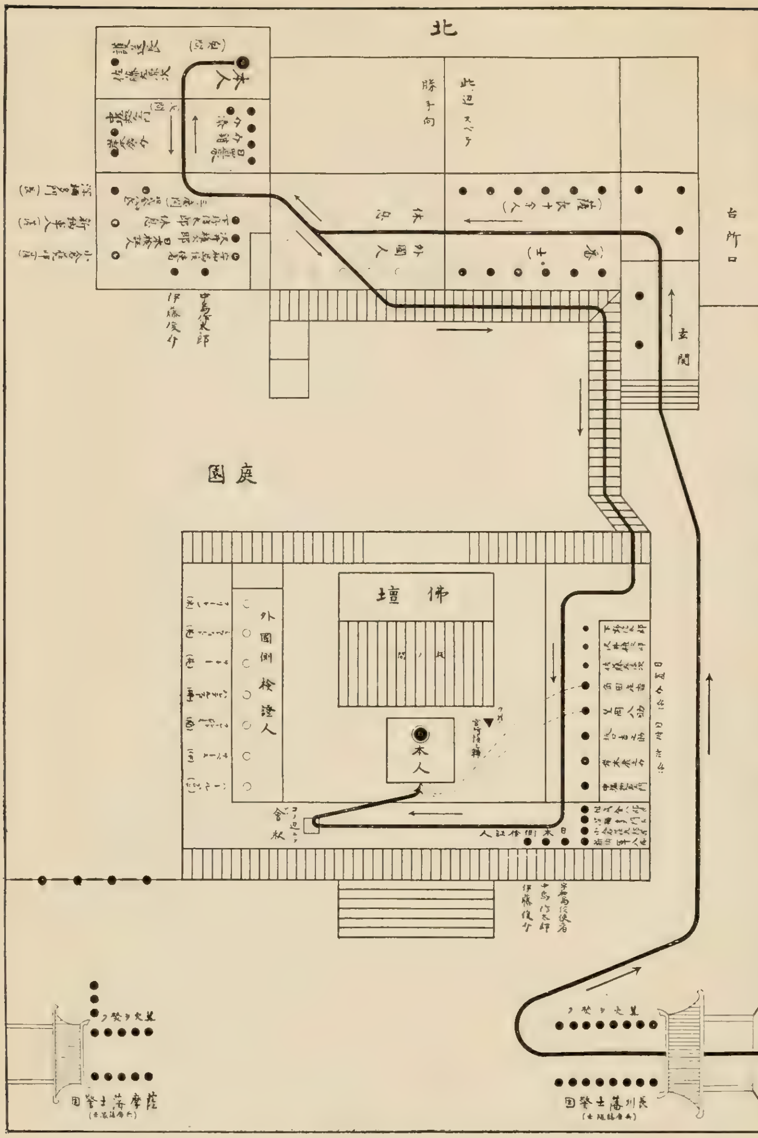
六箇國代表者署名

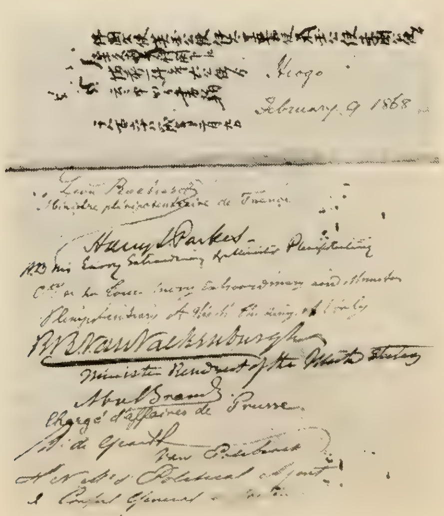
(原本兵庫縣廳所藏)

本書は一八六八年二月九日(慶應四年正月十六日附)、即ち勅使東久世通禧と運上所に於て談判終了の翌日に、要求書として提出せる文書の署名がある。

瀧善三郎正信 神戸事件(外交事件)犠牲者 屠腹現場明細圖

明治元年二月九日(新暦三月二日) 兵庫永福寺内




Hiogo
February 9 1868

Léon Roches
Ministre plénipotentiaire de France

Harry S. Parkes

R. B. Van Valkenburgh
Minister Resident of the United States

Chargé d'affaires de Prusse

Political Agent
& Consul General

第十五圖

神戸（兵庫）の先覺者

明治元年撮影（神田兵右衛門氏所藏）



兵庫市兵隊幹部

明治元年撮影（安田莊右衛門氏所藏）



兵庫市兵隊名譜（北風勝次郎氏所藏）に教師兼取締北風莊右衛門、同安田惣兵衛、小隊長兼目附南條新九郎、右同北風丈助、半隊長磯田彦造、分隊長榎並好之助とあり。北風丈助の服裝は兵庫隊幹部の正裝にして、長劍を帶び拳銃を吊り右手に笛付の籐の鞭を持ち長靴を穿つ。安田惣兵衛は活達にして當時兵庫の豪商の意氣を示すものといふべく、南條新九郎の白線入の袴は當時名主の正裝の場合の袴なりきといふ。卷煙草を口にし洋傘を持てる、又當時嶄新なる風俗を偲ぶ資料である。蓋し此三人共に又兵庫の中心人物であつたのである。

分隊長及並其之助手たり。北風丈助の服装は兵庫隊幹部の正装にして、兵帽を戴き采配を用ひ右手に指揮の鞭の柄を持ち長靴を穿し。安田惣兵衛は帯刀にして當時兵庫の豪商の意氣を示すものといふべく、南條新九郎の白線入の袴は當時名主の正装の場合の袴なりといふ。卷煙草を口にし洋傘を持てる、又當時新奇なる風俗を偲ぶ資料である。蓋し此三人共に又兵庫の中心人物であつたのである。

神田兵右衛門

北風正造
（荘右衛門）

藤田積中

安田惣兵衛
（旗本兼備本陣）

北風丈助
（兵庫北濱名主）

南條新九郎
（岡山、高松藩備本陣）

神戸（兵庫）の先覺者
明治元年撮影（神田兵右衛門氏所藏）

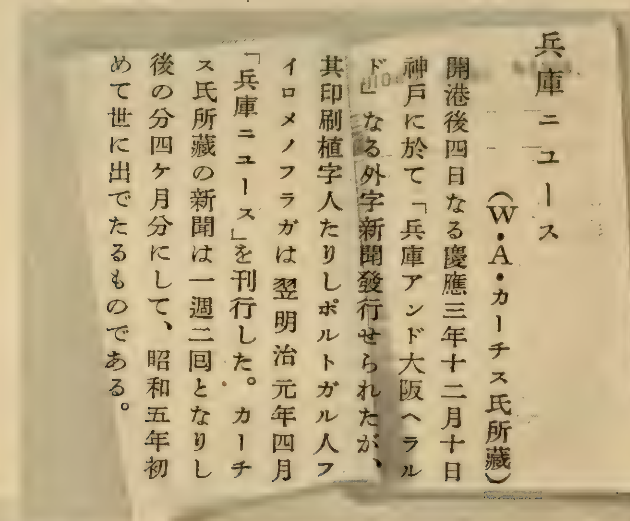
兵庫市兵隊幹部
明治元年撮影（安田荘右衛門氏所藏）
兵庫市兵隊名簿（北風惣次郎氏所藏）に教師兼取締北風荘右衛門、同安田惣兵衛、小隊長兼目附南條新九郎、右同北風丈助、半隊長藤田泰造、

第十五圖





第十六圖



兵庫ニュース（W・A・カーチス氏所藏）

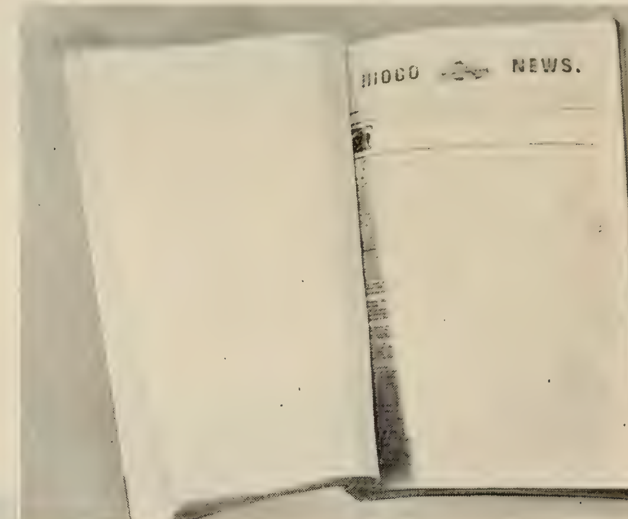
開港後四日なる慶應三年十二月十日神戸に於て「兵庫アンド大阪ヘラルド」なる外字新聞發行せられたが、其印刷植字人たりしポルトガル人フイロメノフラガは翌明治元年四月「兵庫ニュース」を刊行した。カーチス氏所藏の新聞は一週二回となりし後の分四ヶ月分にして、昭和五年初めて世に出でたるものである。



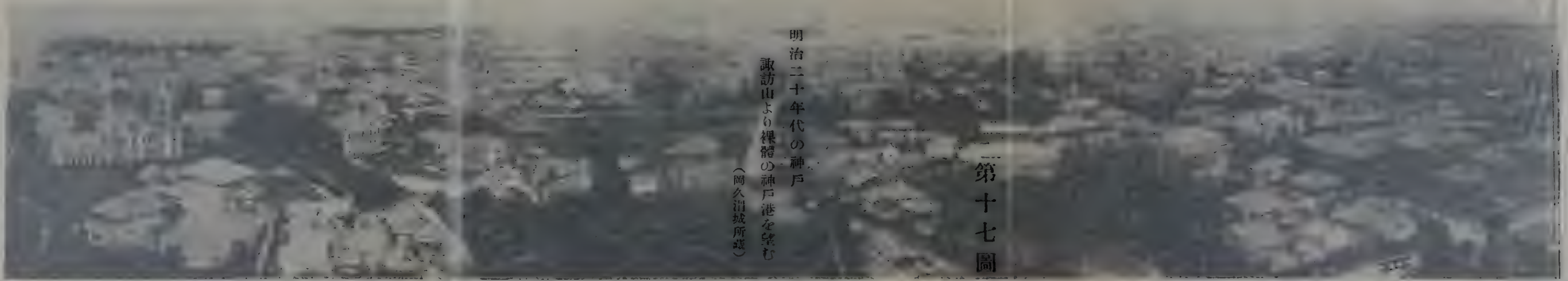
明治初年の元居留地京町（松影寫眞館所藏）

北方煙突の見ゆるは製紙會社にして、後高砂に移る。



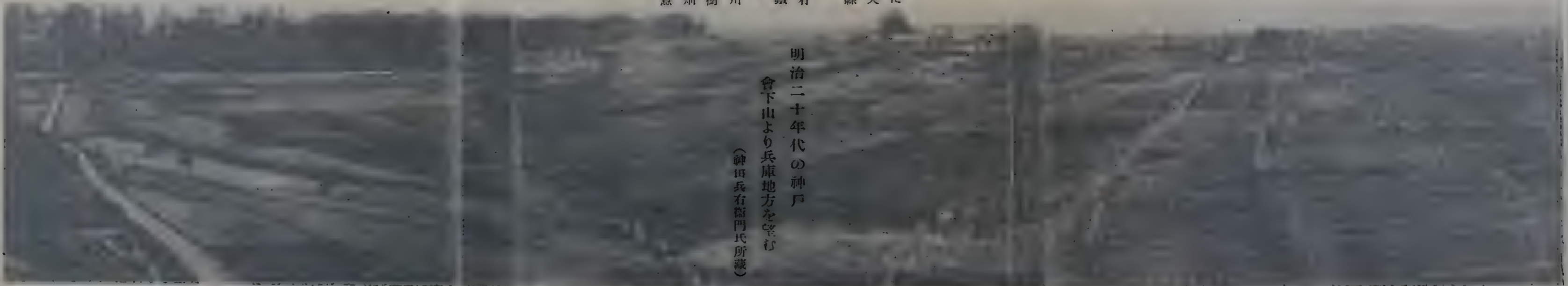

HIOGO NEWS.

第十七圖

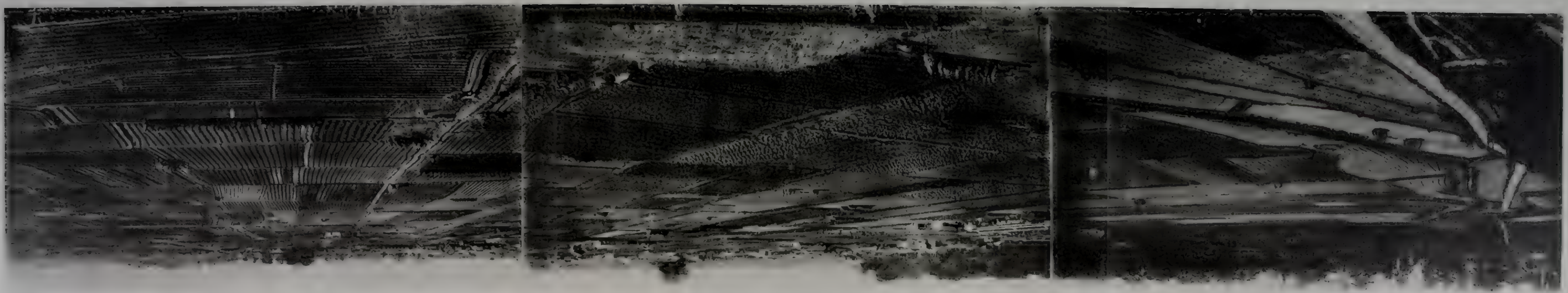


明治二十年代の神戸
諏訪山より裸體の神戸港を望む
（岡久渭城所藏）

上の寫眞にては、中央の八角の縣會議事堂、下にては右端の山陽鐵道の建物、左端の湊川堤防と松樹其間の田畑は共に注意に値する。



明治二十年代の神戸
會下山より兵庫地方を望む
（神田兵右衞門氏所藏）

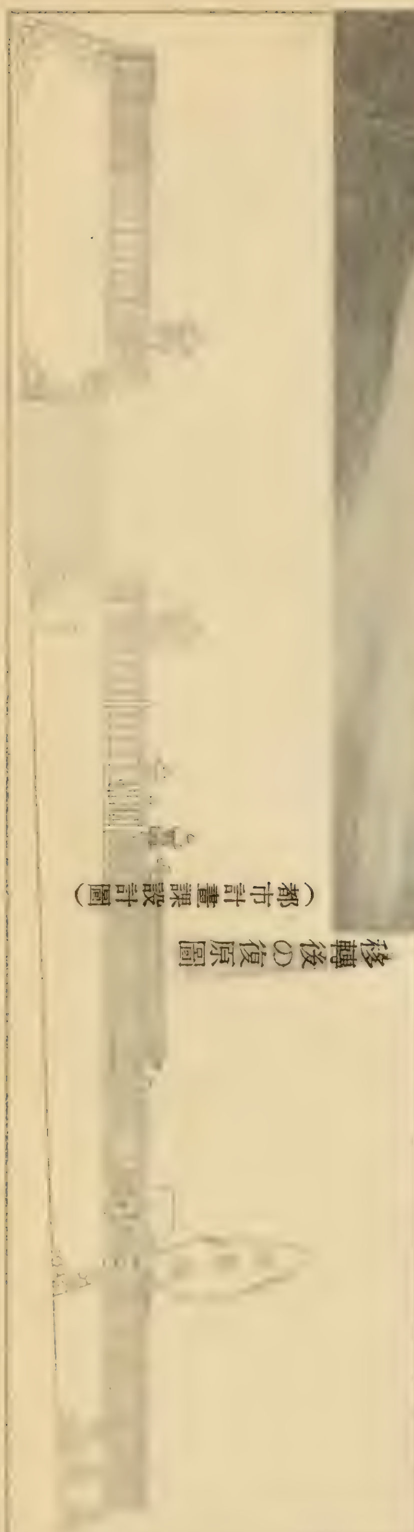




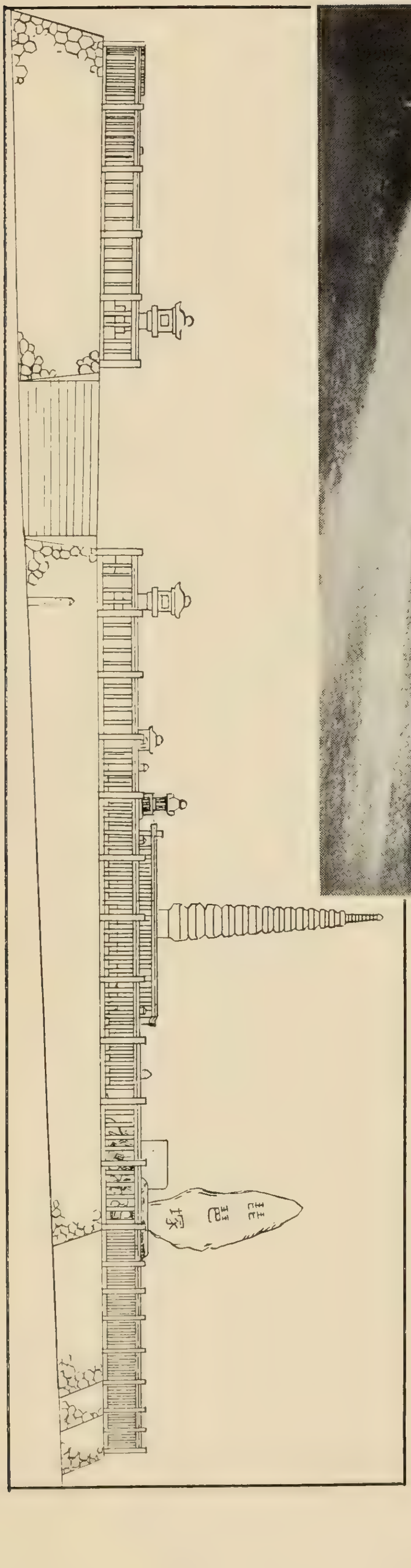
第十八圖

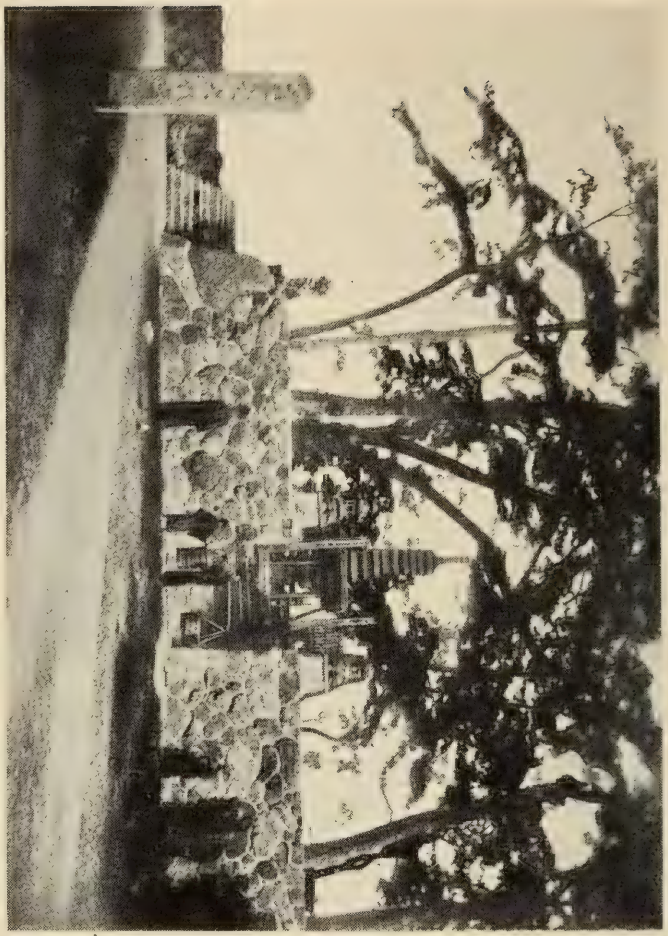


明治初年の清盛塚
（岡八渭城所藏）



移轉後の復原圖
（都市計畫課設計圖）


琵琶塚



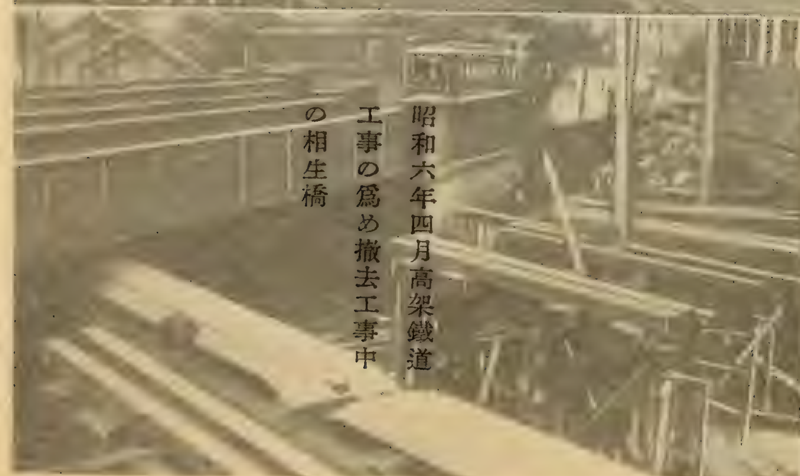
第十九圖



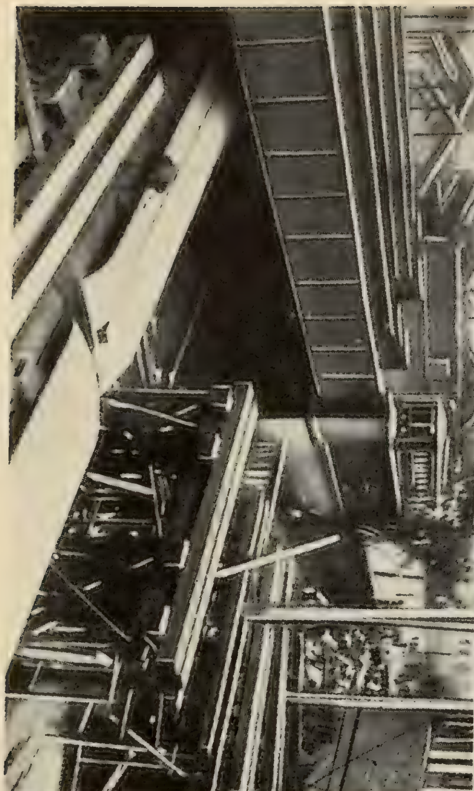
相生橋の版畫
明治初年長谷川小信畫

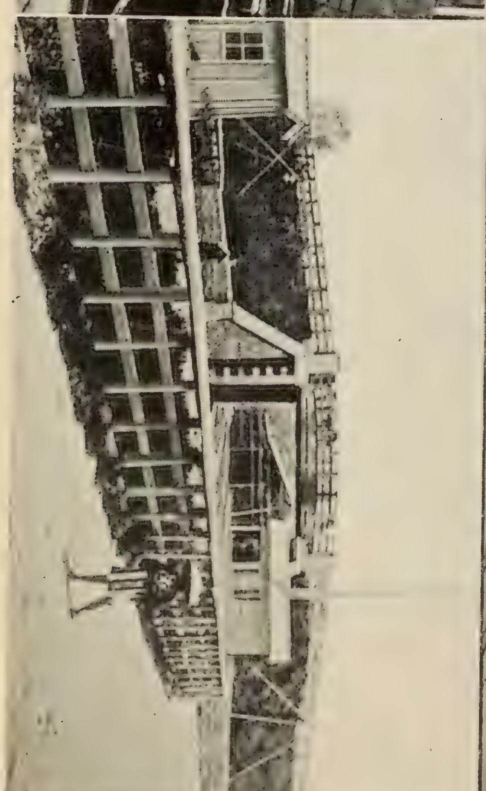


明治初年の相生橋
（岡久渭城所藏）



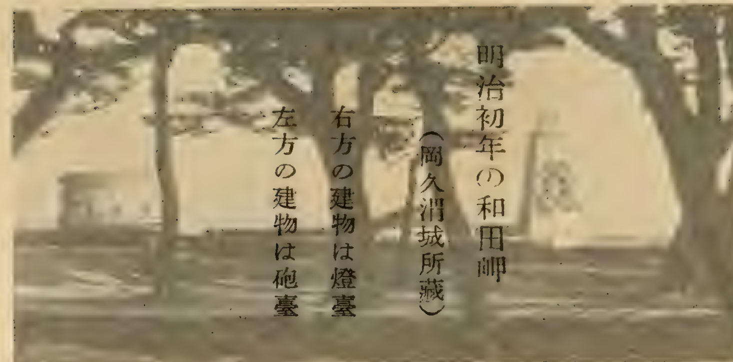
昭和六年四月高架鐵道工事の爲め撤去工事中の相生橋







第二十圖



明治初年の和田岬

（岡久渭城所藏）

右方の建物は燈臺

左方の建物は砲臺



和田岬の版畫

明治初年長谷川小信畫





神戸市史第二輯 資料

目次

古代の兵庫及び附近に關する資料

中世の兵庫及び附近に關する資料

近世の兵庫及び附近に關する資料

古代の兵庫及び附近に關する資料

〇法降寺伽藍縁起幷流記資財帳 徵古雜抄 大日本古文書

法隆寺

伽藍縁起幷流記資財事

〇中略

都合本記地壹佰壹拾陸萬參仟壹佰肆拾代

成町二千三百廿六町二段二百八十八步

合水田參佰玖拾陸町參段貳佰拾壹步參尺陸寸

十三町七段讀涅槃經析

六十九町四段九十八步功德分析

六十八町卅三步衆僧衣分析

二百卅一町九段七十步食分析

十三町三段十步三尺六寸寺主分析

近江國栗太郡貳拾壹町柒段壹佰肆拾肆步

大倭國肆拾玖町壹段伍拾柒步參尺陸寸

平群郡卅六町九段二百一步三尺六寸
添上郡二町一段二百十六步

河內國捌拾柒町陸段壹佰捌拾柒步

志貴郡一町　澁川郡卅六町二段百八十七步
更浦（讃良）郡卅町　和泉郡卅五町九段

攝津國菟原郡參拾壹町陸段貳佰捌拾捌步

播磨國揖保郡貳佰壹拾玖町壹段捌拾貳步

右播磨田小治（田脫カ）大宮御宇　天皇戊午年四月十五日請上宮聖德法王乎令講法華

勝鬘等經而布施奉地五十萬代卽納賜者之中十萬九千五百六十一束二把代

成町二百十九町一段八十二步

合陸地壹千玖佰貳拾玖町玖段漆拾陸歩貳尺肆寸

薗地參拾壹町貳段

近江國栗太郡物部郷肆段

大倭國平羣郡壹拾伍町

河内國陸町貳段 澁川郡六町 和泉郡二段

播磨國揖保郡壹拾貳町貳段

山林岳嶋等貳拾陸地

大倭國參地

平羣郡屋部郷一地東限烏方岳板垣嶺北限澁谷至於保伊知比石迮西限石迮至大谷須疑墓南限寺領同郡坂戸郷岳一地東限平羣川南西限久度川北限志比坂路添下郡菅原郷深川栗林一地東限道南限百姓家習宜池西北限百姓田

河内國日根郡鳥取郷深日松尾山壹地

東限高峰 西限路 南限尔我紀谷 北限智川

攝津國雄伴郡宇治郷宇奈五岳壹地

東限彌奈刀川 南限加須加多池 西限凡河内寺山 北限伊米野

播磨國貳拾壹地

摂保郡五地　於布彌岳　佐伯岳　佐乎加岳　小立岳　爲西伎乃岳

印南郡餝磨郡內嶋林十六地　止奈彌乃利山　伊奈豆毋山　伊布伎山　左豆知乃乎利　多居知乃乎利　斯止ゝ山　石井前山　夜加山　旃多知

山　比利布乃佐伎山　大嶋山　加良止廊（麻）利山　比乃利旃山　旃多知乃乎利　奈閇嶋　加夜波良林

合海貳渚

右在播磨國印南郡與餝磨郡間

合池陸塘

大倭國平羣郡寺邊三塘　河內國和泉郡輕郷六塘　攝津國菟原郡宇治郷一塘　播磨國揖保郡佐ゝ山池一塘

合處處庄肆拾陸處

合庄庄倉捌拾肆口　屋壹佰拾壹口

右京九條二坊壹處

近江國壹處在栗太郡物部郷

大倭國貳處　平羣郡一處　添下郡一處

河內國陸處　大縣郡一處　和泉郡一處　澁川郡一處　志貴郡一處　日根郡一處　更浦郡一處

攝津國伍處　西成郡一處　川邊郡一處　武庫郡一處　雄伴郡二處

播磨國參處　明石郡一處　賀古郡一處　揖保郡一處

備後國壹處 在深津郡
讃岐國拾參處 大内郡一處 鵜足郡二處 三木郡二處 那珂郡三處 山田郡一處 多度郡一處 阿野郡二處 三野郡一處
伊豫國拾肆處 神野郡一處 伊余郡四處 和氣郡二處 浮穴郡一處 風速郡二處 骨奈嶋一處 溫泉郡三處
○中略
牒以去天平十八年十月十四日被僧綱所牒偁寺家緣起幷資財等物子細勘錄早可
牒上者謹依牒旨勘錄如前今具事狀謹以牒上
天平十九年二月十一日都維那僧靈尊
上坐僧 隣信
寺主僧 玄鏡
可信半位僧乘印
可信複位僧賢廣
可信複位僧乘觀
僧綱依三綱牒撿件事記仍爲恒式以傳遠代謹請紹隆佛法將護 天朝者矣
天平廿年六月十七日佐官業了僧願淸
大僧都法師行信 佐官兼藥師寺主師位僧勝福

佐官兼興福寺主師位僧永俊
佐官師位僧惠徹
佐官業了僧臨照

○日本後紀巻第廿二（新訂増補國史大系本）

丁亥朔(弘仁三年)二
六月戊子。(略○中)○辛卯五。(略○中)遣使修大輪田泊。(略○下)

○續日本後紀巻第五（新訂増補國史大系本）

(承和)三年春正月辛丑朔。(略○中)○五月[己亥朔]庚子二。(略○中)○丙辰十八。夜裏大風。暴雨交切。折樹發屋。城中人家不壞者希。斯時入唐使船寄宿攝津國輪田泊。遣看督近衞一人於船處。河水汎溢不得通行。更遣左兵衞少志田邊吉備成問其安危。(略○下)

承和及己亥朔據舊宮崎文庫本傍朱書補、本裏、日本紀略无、泊原作澳、今從紀略、近衞此下、恐當補各字、間原作取據東山御文庫本、及紀略改、

○日本紀略後篇三（新訂増補國史大系本）

村上天皇

○中略

丁未天曆元年正月一日丁亥。（○中略）○七月一日甲申。（○中略）○五日戊子。於陣頭諸卿被レ定ニ造輪田使及諸國申解文事一。

○類聚三代格 卷第五 新訂增補國史大系本

〔貞臨〕

「交替幷解由事」

太政官符

應レ定ニ造大輪田泊使遷替年限一事

右被ニ大納言正三位兼行左近衞大將民部卿清原眞人夏野宣一偁、奉レ勅、件使一任永用、既倦ニ成功一、自今以後六年ニ遷替、功過灼然量レ事褒貶、其遷替之日宜レ責ニ解由一

遷印本无

天長八年四月廿一日

○同上 卷第十六

〔弘十雜〕

「船瀨幷浮橋布施屋事」

太政官符

應掌修作大輪田船瀨事

右得造船瀨使兵部少丞正六位上菅野朝臣牛足等解偁、前件船瀨造作略訖、仍申送者、右大臣藤園人宣、宜廢使者付屬國司、永預交替相續令作、若致損壞、拘以解由、其收官私船米、及役水脚等事、隨損多少、勘錄支度、先申後行、

弘仁七年十月廿一日

（貞十雜）（掠當作椋）

太政官符

應修造大輪田船瀨石掠幷官舍等小破事

右得攝津國解偁、件石掠、每起風波頻致破損、其功程廿人以下、須支度申官修造、而申官之後待報之間、少破之物彌致大損、望請每年以船瀨庄田稻二百束已下、國司加撿挍永修造、但非常之損、申官修造、謹請官裁者、右大臣藤良房宣、依請、

仁壽三年十月十一日

○中略

（延十雜）

太政官符

應令攝津國司撿挍大輪田船瀨事

右件船瀨修營既畢、如聞、彼地每有風波動致損害、少破所漸終成大破、加以土人愚暗不

識公損、侵盜材木、至令頽壞、不加撿挍、何絕煩費、大納言正三位兼行左近衞大將藤原朝臣時平宣、宜下知國司、令專一撿挍、若有疎略、非理致損、遷替之時拘其解由、

致原作數今從前田本

寬平九年九月十五日

貞十二臨下

太政官符

應言上向京公私船數及勝載事

右造大輪田船瀨使所收勝載析雜物、及所役水脚等、毎年四季造帳進官其來尙矣、今撿彼帳、直錄物色人數、無顯其國、船覆勘公文事理不憭、被右大臣藤三守宣偁、宜下符諸國毎年令申與彼使帳相共計會、仍須下知所部勘錄向京公私船數幷勝載及挾杪姓名等、毎月附告朔郡司令申、至于年終惣計造帳附稅帳使言上、不得疎略、

承和五年三月廿三日

○中略

貞十二臨

太政官符

應南海山陽兩道公私船水脚停身役令輸役析事

右得讃岐國解偁、諸郡司解偁、進官雜物綱丁等申云、舟檝之行本自無期、占雲而發、瞻風而泊、若失一時違以千里、而造大輪田船瀨使、舊立長例以來役三日、風潮引船之便盡於

役所、貢進雜物之期、違於式例、望請、言上由緒、被免此役者、謹請　官裁者、右大臣（藤良房）宣、永免件役、船瀨難修、仍須二道、諸國公私舟船、水脚共停身役、令輸役析、其輸法一人日米一舛五合、至有造作雇役當土、若取析乖法幷强役水脚者、罪以重科、曾不寬宥、

嘉祥二年九月三日

○本朝文粹卷第二（校訂本朝文粹）

意見封事

意見十二箇條　善相公淸行

○中略

一重請修復播磨國魚住泊事

右臣伏見。山陽西海南海三道。舟船海行之程。自樫生泊至韓泊一日行。自韓泊至魚住泊一日行。自魚住泊至大輪田泊一日行。自大輪田泊至河尻一日行。此皆行基菩薩計程所建置也。而今公家唯修造輪田泊、長廢魚住泊。由是公私舟船一日一夜之内兼行。自韓泊指輪田泊。至于冬月風急。暗夜星稀。不知舳艫之前後。無辨濱岸之遠近。落帆棄檝居愁漂沒。由是毎年舟之蕩覆者。漸過百艘。人之沒死者。非唯千人。昔者夏禹之仁。罪人猶泣。況此

等百姓皆赴王役乎、伏惟聖念必應降哀矜者也、（○下略）

延喜十四年四月廿八日、從四位上行式部大輔臣三善朝臣淸行上封事

弘長本無封事二字

○倭名類聚鈔　巻第六　活字覆刻本

攝津國第七十二

武庫郡　賀美　兒屋古也　武庫古無　石井井以之　曾彌　津門止都　廣田多比呂　雄田多乎

○中略

兎原郡　賀美　葦原　布敷　津守　天城　覺美　佐才　住吉

八田部郡（○高山寺本無田字）　生田多以久　宇治　神戸　八部倍也多　長田多奈加

○新抄格勅符第十巻抄　神事諸家封戸　大同元年牒　新訂増補國史大系本

符原作府今意改

神封部

合四千八百七十六戸

○中略

佐牙神九戸　廣田神卌一戸　長田神卌一戸　生田神卌四戸　並津國（○下略）

並原作置今意改

○日本三代實錄 巻第二 新訂増補國史大系本

京畿 類聚國史作五畿 紀略與此同

坐摩神 住吉神社神代記作猪加志利乃神

貞觀元年己卯春正月戊午朔、（中略）廿七日甲申、京畿七道諸神進階及新叙、惣二百六十七社、（中略）攝津國從三位勳八等廣田神正三位、正五位上勳八等生田神、從五位上勳八等長田神、從五位上垂水神、從五位下勳八等大依羅神、難波生國魂神、下照比女神、坐摩神、從五位下勳八等新屋天照御魂神並從四位下、（下略）

○同上 巻第三

九月癸丑朔、（中略）八日庚申、山城國月讀神、（中略）攝津國住吉神、大依羅神、難波大社神、廣田神、生田神、長田神、新屋神、垂水神、名次神、等遣使奉幣、爲風雨祈焉、

○同上 巻第十五

從一位 類聚國史作正二位

戊子 十年春正月丙申朔、（中略）十二月庚申朔、（中略）十六日乙亥、地震、進攝津國正三位勳八等廣田神階特加從一位、從四位下勳八等生田神從三位、（中略）閏十二月庚寅朔、（中略）十日己亥、遣使於攝津國廣田、生田神社奉幣、告文曰、天皇我詔旨止、廣田大神

乃廣前爾申賜止倍申久、大神乎彌高彌廣尒供奉止牟所念行須而問尒、攝津國解良久、地震乃後尒小震不止、因卜求之牟禮波、大神乃布志己利賜天、所致賜止奈利申利、又先日尒禱申賜布事毛有利介、因今從一位乃御冠尒上奉利崇奉留狀乎、主殿權助從五位下大中臣朝臣國雄乎差使天御位記乎令捧持天奉出須、大神[神]奈加良毛[聞食天]今毛往前毛天下平安尒天皇朝廷乎寶位無動久、常磐堅磐尒夜守日守尒護幸倍奉賜止倍申賜止波久申、又辭別申久、去八月三日祈申久、風雨旱乃災無之天、五穀無損久、天下饒足米之賜止倍祈申賜比岐、而祈申毛驗久、諸國豐饒尒苅收訖利太利、此又皇太神乃厚助奈利止奈毛、歡崇比所念行須、因今禮代乃大幣帛乎令捧持奉出、大神平介久聞食天、天下平安尒護助賜止倍申賜止波久申、生田乃神社尒告文亦同焉、

神及聞食據類聚國史補

乎原作天、賜原作給、共今從類聚國史

○同上卷第三十一

（元慶元年）

六月庚午朔、（○中略）十四日癸未、奉幣石清水八幡大菩薩宮幷賀茂御祖、別雷、松尾、稻荷、

木嶋、乙訓、大依羅、垂水、廣田、生田、長田［神社］ニ祈ルニ甘雨ヲ也、（神社據下文補）

○延喜式卷第二神祇二（校刻延喜式）

四時祭下

○中略

十一月祭

相嘗祭神七十一座

○中略

住吉社四座

○中略

廣田社一座

絹二疋、絲一絇一兩、綿三屯、調布三端四尺、庸布一段一丈三尺、木綿一斤十兩、鮑一斤十兩、堅魚二斤十兩、腊四斤、鹽一升、海藻二斤十兩、莒一合、□缶水瓮山都婆波小都婆波酒垂𠤷等呂須伎高盤片盤短女坏莒坏小坏陶臼各二口、酒稻五十束、（神稅）

生田社一座

絹二疋、絲一絇一兩、綿三屯、調布三端四尺、庸布一段一丈三尺、木綿一斤十兩、鮑一斤十兩、堅魚二斤十兩、腊四斤、鹽一升、海藻二斤十兩、筥一合、瓱缶水瓮山都婆波小都婆波高盤片盤短女坏匜等呂須伎酒垂莒𨂻莒坏小坏陶臼各二口、酒稻五十束、神稅

長田社一座

絹二疋、絲一絇、綿三屯、調布三端四尺、庸布一段一丈三尺、木綿一斤十兩、鮑一斤十兩、堅魚二斤十兩、腊四斤、鹽一升、莒一合、海藻二斤十兩、瓱缶水瓮山都婆波小都婆波酒垂匜等呂須伎莒𨂻高盤片盤短女坏莒坏小坏陶臼各二口、酒稻五十束、神稅

已上八箇社坐攝津國

○同上 巻第三神祇三

臨時祭

○中略

畿內堺十處疫神祭 山城與近江堺一、山城與丹波堺二、山城與攝津堺三、山城與河內堺四、山城與大和堺五、山城與伊賀堺六、大和與伊賀堺七、大和與紀伊堺八、和泉與紀伊堺九、攝津與播磨堺十、

堺別五色薄絁各四尺、倭文四尺、木綿麻各一斤二兩、庸布二段、金鐵人像各一枚、鍬四口、

牛皮熊皮鹿皮猪皮各一張、稻四束、米酒各一斗、鰒堅魚海藻滑海藻各四斤、雜海菜四斤、腊五升、鹽五升、水瓮一口、坏二口、匏一柄、槲四把、薦一枚、藁一圍、輿籠一脚、杤一枝、擔夫二人、京職差充之

祈雨神祭八十五座并大

○中略

住吉社四座　大依羅社四座
難波大社二座　廣田社一座
生田社一座　長田社一座
新屋社三座　垂水社一座
名次社一座已上攝津國

座別絹五尺、五色薄絁各一尺、絲一絇、綿一屯、木綿二兩、麻五兩、裹薦半枚、毎社調布二端、軾料夫一人、丹生川上社貴布禰社、各加黒毛馬一疋、自餘社加庸布一段、其霖雨不止祭祈亦同、但馬用白毛、

凡奉幣丹生川上神者、大和社神主隨使向社奉之、

名神祭二百八十五座（○中略）

住吉ノ神社四座　大依羅ノ神社四座
難波生國魂ノ神社二座
比賣許曾神社一座 亦號ニ下照比賣一
新屋ノ神社三座　垂水ノ神社一座
廣田ノ神社一座　生田ノ神社一座
長田ノ神社一座 已上攝津國

○中略

座別ニ絁五尺、綿一屯、絲一絇、五色ノ薄絁各一尺、木綿二兩、麻五兩、裹析ノ薦廿枚、若有ニ大禱一者、加ニ絁五丈五尺ヲ一、以ニ布一端ヲ一代ニ絲一絇ニ一、

○同上卷第九神祇九

神名上 宮中 京中 五畿內 東海道

攝津國七十五座
大廿六座 並月次新嘗、就中十五座預ニ相嘗祭一、
小 九座 並官幣 ○中略

武庫郡四座（大二座 小二座）

廣田神社（名神大、月次相嘗新嘗）　名次神社（鍬靫）

伊和志豆神社（大、月次新嘗）　岡太神社

菟原郡三座（並小）

河內國魂神社　大國主西神社（鍬靫）

保久良神社（鍬靫）

八部郡三座（大二座 小一座）

生田神社（名神大、月次相嘗新嘗）　長田神社（名神大、月次相嘗新嘗）

汶賣神社

○同上 卷第二十一（治部 玄蕃 雅樂 諸陵）

玄蕃寮

凡新羅客入朝者、給神酒、其釀酒料稻、大和國賀茂意富纒向倭文四社、河內國恩智一社、和泉國安那志一社、攝津國住道伊佐具二社、各卅束、合二百卌束送住道社、大和國片岡一社、攝津國廣田生田長田三社、各五十束、合二百束、送生田社、並令神部造、差中臣一人、充給酒使、釀生田社酒者、於敏賣崎給之、釀住道社酒者、於難波館給之、

○高倉院嚴島御幸記 新校群書類従本

はかなくて年もかへりて。治承四年にもなりぬ。(○中略) かくていつくしまの御幸あるべしとて。やよひの三日。神ほうはじめらるべき日次のさたあり。(○中略) 福原よりけふ(○けふ按三月廿日)よき日とて。舟にめしそむべしとて。唐の舟まいらせたり。まことにおどろ〳〵しく。畫にかきたるにたがはず。たうじんぞつきて參りたる。こまうどにはあだには見えさせ給はじとかや。なにがしの御時にさたありけむに。むげに近く候はむまでぞかはゆくおぼゆる。御舟にめしそめて。江のうちをさしめぐりてのぼらせ給ひぬ。夕べの雨靜かにそぼちて。旅のとまり。いつしか都戀しく。心ぼそきありさまなり。雨かくふらば。あすはこれにや泊らせたまふべき。またかちよりや福原までつかせ給べき。御舟にてやあるべきなど。右大將におほせあはせらる。あくるあした。雨なをはれやらで。日ついでかぎりあれば。とまらせたまふべきにあらずとて。いでさせたまふ。雨の空は風さだまらずとて。かちより御幸なる。西の宮のへい奉らせ給ふ。にはにて御拜あり。むねのり御使にてまゐりぬ。御こしにていでさせ給ふ。人々馬

にてみなつかうまつる。おとに聞きつゐなるをの松。聞きもならはぬ波の音。いそべちかくいつしかなれぬる心地しつゝ。いづくともわかず山川をうちすぎ。はる〴〵とゆきける。西の宮の前にて。ほつせ奉りて。たひらかに都へ歸るべきよしぞ祈り申さるゝ。ひつじのときはとがの山さかにつかせ給ふ。よもの海を池に見なして。なにかは三千世界ものこらむと見えたり。これにてひるのくごまゐりて。やがて出でさせたまひぬ。いくたの森などうち過ぎて。さるのくだりに福原につかせ給ふ。入道大きおほいまうち君心をつくして。御まうけども。心ことばもおよばず。天のしたを心にまかせたるよそほひのほど。いとなまれたるあり「あり」(イナシ)さま思ひやるべし。まことに三(六イ)十六のほらに入たらん心地す。こだち庭のありさま。晝にかきとめたし。をとに聞きしにもやゝすぎて。めづらかに見ゆ。つかせ給ひてのち。いつしかいつく島の内侍どもまゐりて。あそびあひたり。御所の南おもてに。錦のきぬやうちて。こまぼこのさをたてわたしたり。内侍八人ぞある。皆からの女のよそほひぞしたる。はなかづらの色よりはじめて。天人のおりくだりたらむも。かくやとぞ見ゆる。萬歳樂などさまざままひたり。左右にめぐりてつかるゝことをしらず。朝夕しつきたるまひ人

にはまさりてぞ見ゆる。利曾のがくの聲も限りあれば。これにはいかでかとぞ覺ゆる。まひはてぬれば。うへにめしあげて。御まへにて神樂をぞうたはせらるゝ。近く候ふかんたちべ殿上人もてなしあひたり。山かげくらう日もくれしかば。庭にかゞりをともして。もろこしの魯陽入日を返しけむ程もかくやとぞ覺ゆる。夜もふけしかばいらせ給ひぬ。なにのなごりもなくぞ。うち〳〵はおぼしける。世のありさまにだにもてなしまゐらせば。堯舜のひじりの御代には劣らせたまはじとぞみゆる。か(ぁイ)の天ぼうのするに。とき變らむとて。時の人この舞をまなびけり。大眞といふもの。ほかにはあんろく山といふもの。うちにはおもふ所ありけむ。その心には似たまはざりけむ。君の御心にかはりたれど。いかにと申す人もなし。げにぞおもふにかひなき。

廿一日。夜をこめて出でさせ給ふ。都をいでさせ給ふより。かむたちべ(めイ)殿上人みなじやうえをぞきたる。音に聞きし和田のみさき。須磨の浦などいふ所々。うらづたひはる〳〵荒き磯べをこぎゆく舟は。帆うちひきて波のうへに走りあひたり。福原の入道は。からの舟にてぞうみよりまゐらるゝ。播磨の國まで(き)(イ)こえけるにや。いなみのなどきこゆるにぞ。あはれにおぼゆる。(中略)

五日〔〇五日按四月〕雨ふりしかば。たかさごのとまりにつかせ給ふ。都人のくだるにこそ。なにごとかと上下たづねける。さるの時に福原につかせ給ふ。いま一日も都へとくと。上下心のうちには思ひける。福原の中御覽せむとて。御輿にてこゝかしこ御幸あり。所のさまつくりたる所々。こまうどの拜しけるもことわりとぞみゆる。あしたといふよりもりの家〔まイ〕にて。かさがけやぶさめなどつかうまつらせて御覽せさす。日くれてかへらせ給ふ。

〇保曆間記　卷之上〔寛文十一年長尾平兵衞版〕

法皇鳥羽殿江奉籠居事附主上御祈事

同十四日〔〇治承三年十一月〕太政入道福原ヨリ數千騎ノ軍兵ヲ相具シテ上洛ス朝家ヲ恨ミ奉ルベシト聞フ院ヨリ靜憲法印ヲモツテ六波羅ヘ仰ラルル事共アリケレトモ種々瞋リ申テ恨ミ奉ルサマテノ事ハト思食ケル程ニ同十六日ニ關白殿ヲ始タテマツテ太政大臣師長以下院ノ近習ノ人々北面ノ輩共ニ四十二人官職ヲ停ム（〇中略）入道カヤウニ行散シテ中宮内裏ニ渡ラセ玉フ關白殿御聟ナリ天下ノ事一筋ニ内ノ御計ナルヘシト申テ福原ヘ下向有ケリ（〇下略）

新院嚴島江御參詣事

治承四年正月元三ニモ鳥羽殿ヘハ相國モユルサス法皇モ憚セ給ヒケレハ參近ヅク人モナシ二月十九日俄ニ東宮御即位アリ主上指タルツヽカモ渡ラセタマハス是ハ何事ソヤト思召只是入道萬ヲ心ニ任タル故也（○中略）三月十九日新院安藝ノ嚴島ヘ御參詣アリ（○中略）同二十六日嚴島ノ御參詣トゲサセ玉ヒテ同四月一日ニ福原ヘ入セ玉フ同九日ニ京ヘ還御アリ上ハ平家一體ノテイニテ下ハ法皇ノ御事ヲ祈申サセ玉フ遙ノ海路ヲ淩思食立事御願成就モ疑ナシ（○下略）

遷都事　內侍瑞夢事附三井寺囘祿事

六月二日太政入道遷都ノ事ヲ思ヒ立ツ山門南都近キニヨリヤヽモスレハ神輿ヲ振リ神木ヲ入奉ル是山河隔テ其難アルベカラズトテ都ヘ福原ヨリ申上ラルヽ程ニ同六日ニ俄ニ取物モトリアヘス行幸御幸ナルアハタヽシサ限ナシ池ノ大納言ノ宿所ヲ皇居ト成ニケリ法皇ヲハ籠ノ御所トテケシカラヌ所ニ入進セテ武士トモ守護シ進セケリ鳥羽殿ハ廣クシテヨカリシ物ヲトゾ思召レケル遷都ノ事ハ昔モ度々アリケレドモ桓武天皇ヨリ以來帝王三十二代星霜三百餘歲ト云也此都ホド目出タキ事ナシトテ末代マデ替ラヌヤウニ御計コト共アリキシカルニ入道輙

クカクノコトク計ケルコソ不思議也(〇下略)

義仲蜂起事　主上從福原御歸事附南都回祿事

又木曾冠者源義仲(六條判官爲義孫帶刀先生義賢子)信濃國ニシテ謀叛ヲ起ス同十月十五日頼朝相摸國小坂郡鎌倉ニ始テ館ヲカマヘタリ是ハ源頼義朝臣ノ屋敷彼時奉祝置鶴岡八幡宮ヲ修造ス新都ニハ大嘗會行ハルベカリケルガ其所然ルベカラズシテ五節計ゾ行レケル遷都ノ事山門南都諸寺諸社ヨリ奏狀ヲ以テ申ケル程ニサシモ横紙ヲサク入道モ今度ハ和キテ都ニ還リアルヘシトアリケリ同十一月二十一日都歸ノウレシサニ取物モ取敢ズ雜具已下取捨テ我先ニト歸上ケリ一院新院二十二日福原ヲ出サセ玉フ同二十三ニ行幸成二十六日ニ五條ノ內裏ヘ入セ玉フ兩院相國已下六波羅ヘ付セ玉ヒケリ(〇下略)

〇桃花蘂葉(新校群書類從本)

一家領幷敷地等之事

〇中略

攝津國福原庄。(領家職也。)鎌倉右大將家已來傳領之。武家代々安堵在之。(讃岐國山田庄、同在一紙。)土貢者。

赤松請申時。爲四百五十貫。次第減少。當時香川預之。守護被管。代官職爲家門自專之在所。檢斷人足等事。普廣院幷當將軍下知狀等在之。

○百錬抄 卷第八 新訂増補國史大系本

高倉院十二年 嘉應二 安元二 承安四 治承四

○中略

嘉應二年。仁安四四八改元。依代始也。

元年己丑正月十三日。(○中略)○三月十三日。太上天皇(○後白河)參詣高野聖廟。太政大臣(○忠雅)已下騎馬供奉。月卿雲客莫不裁錦繡。(○中略)○廿三日。上皇自入道大相國(○清盛)福原亭還御高野御歸路入御彼所。有千僧供養事。爲御結緣也。(○中略)

二年正月四日。(○中略)○九月廿日。上皇御幸福原。爲覽宋人也。(○中略)

承安四年 嘉應三四廿一改元。依災變厄會等也。

元年正月三日。(○中略)○十月三日(○中略)○廿三日。太上法皇建春門院御幸入道太

十三日條編年記係十四日

政大臣福原別墅。有船遊事。遊女賜祿。十一月一日御入洛。（中略）

二年二月三日。（中略）○三月四日（中略）○十五日。太上法皇於入道大相國福原亭。供養千僧持經者。三ヶ日被行之。（中略）○十月十一日（中略）○十五日。入道太政大臣於播州輪田濱。修千壇阿彌陀供。上皇去十三日臨幸。令修法華法給。（中略）

治承四年。安元三八四改元。依大極殿火災也。

元年正月廿日。（中略）○三月十八日。於福原千僧供養。上皇去十四日御幸令結縁給。（中略）

四年正月十日（中略）○六月二日。行幸攝津國福原。法皇新院同以臨幸。貴賤上下出平安舊城。赴攝州新都。今日著御寺江頓宮。翌日乘御船。著御福原。世專號之遷都。入道大相國申行之。（中略）○十一日。於新院殿上。被議遷都事。左大臣（經宗）已下參入。以輪田被定其所。而條里不足。又可被縮宮城歟。又平地內無右京。當西有山。隔件山被用右京如何。山谷相交。可有其難。人々定申云。左京不定。右京山谷相交事。有何事哉。於被縮宮城之條者不可然也。○十五日。以輪田難被用帝都。可爲小屋野之由被改仰。而又播磨印南野可宜之由有沙汰。依無水難叶之者。（中略）○十月六日。（中略）○七日。亥刻有流星變。出紀伊國山方。入福原東北山。大如大土器。渡北斗中。舍輝二許丈。入山

之後。其光不レ消及二一町一。本朝無二此變一。若可レ謂二天裂一歟。(○中略) ○十一日。遷二幸福原新造內裏一。入道大相國所二造進一也。○十七日。五節。於二新都一被レ行レ之。大甞會年不レ被レ行レ之。但於二新甞祭一者。於二古京神祇官一被レ行レ之。○廿三日。俄立二新都一。可レ還二幸舊都一。今日遷二御邦綱卿新造亭一。兩院同御幸。○廿六日。著二御舊都一。萬民有二悅色一。依二東國逆亂一。忽有レ議所レ皈レ都也。主上入二御五條皇居一。(○下略)

○吉記 史料大成本

承安四年

三月

○中略

十六日癸卯今曉、院幷建春門院令發向安藝伊津岐嶋給、已無先規希代事歟、風波路非無其難、上下雖奇驚不及是非、御共人、公卿按察使(資賢)右衛門督(宗盛)殿上人左中將知盛朝臣右中將光能朝臣(爲奉行)左馬頭重衡朝臣左少將時實左馬權頭信基右少將成經等朝臣藏人右少弁親宗北面下﨟尾張守信業式部大夫光忠長門守業忠檢非違使康賴左衛門尉信盛僧西光等云々 又顯惠法印參仕、可爲御經供養御導師云々 入道(清盛)相國自

福原可被參仕云々(〇下略)

治承四年

十一月

二日庚戌天霽、官奏々文叓示付史仲宗之由、去夕隆職宿禰書狀到來、仍今日於結政可覽之由去夕相觸左大丞之處、爲申延暦寺戒狀、明曉(今日)也可參新都、仍不可參仕者又遣尋仲宗許之處、稱他行之間不聞左右、而酉刻許仲宗來云、只今宿禰史書狀到來、所詮遣奏文也、仍覽之云々予答云此沙汰次第始終違亂了、先任先例於結政覽奏文之後可歸參新都來七日可有吉書奏之由、去廿六日自殿下被仰下候(之イ)處、答申云承了、但宿禰史不示參衙(済イ)左右尤不審也、來月一日可歸參(候イ)其以前可承存者、猶依不審重尋權弁又遣尋宿禰許了、而件返事等昨日到來者也、雖似私營依近日之法觸左大弁了、而不承引參新都了、依今告猶雖可參衙、右大丞參仕者難參會也、往古强不憚歟、然而故俊憲卿爲藏人頭之時、當時民部卿資長卿、爲非參議大弁不着逢、又當時左大弁爲藏人頭左中弁之時勘解由長官俊經卿爲非參議、大弁長方不着逢每度遁之、一門先達也、又近例也、仍無左右難參着歟、凡此次第偏官懈怠也、於事如此歟、爲之如何、又左大丞一日不逗留甚强心也、不存公平歟、(〇中略)

四日壬子霽風烈於大物待引替牛傳馬等之間、及午剋仍昏黒着新都宿所、窮屈之上依入夜不出仕也、

〇中略

九日丁巳霽、早旦靜賢法印來臨、偏歎世事、關東事於今者、歸故京有沙汰之外難治之由談之、逆徒已及參河遠江等、神社佛寺權門領等、不可失所當之由沙汰、偏破世間無道存此儀云々（〇中略）

十一日己未天晴、申剋先參新內裏撿知之後參內、秉燭之後上下參集殿下令參給之後、予覽日時勘文、不書其所只注行幸日時又直手覽之 次出陣、下上卿左大將其詞云、任勘申召仰諸司、ヨ路ハ御所南大路ヲ東行至于東大路、南行更東折、自東造路南行至于入道太政大臣亭北大路西折、自西南門入御、無大路名之間以今案新儀相計大概許也更不可爲後例 上卿被答云、路難覺悟且可令觸也、次出御、陰陽頭在憲朝臣奉仕御反閇、皇后同輿、別當候御輿寄、公卿左大將源大納言不供奉途中被參會新內裏新大納言花山院中納言別當平中納言皇太后宮大夫具馬副 右宰相中將實守三位中將賴實 前大貳親信 駿河三位雅長 源宰相中將通親 等供奉、殿下駕御車令候御後給、皇輿入御新內裏右衞門陣、神祇祐永親獻御麻、入御之儀如例、少納言有家奉仕鈴奏、入御畢之後殿下於御直廬覽吉書、先官方權右中弁光雅朝臣藏人方予、內藏寮臨時公用請奏 次政所光雅

朝臣藏人方吉書等、宣下上卿源大納言上卿暫可被祗候之由有沙汰、經程之後、藏人弁行隆奉仰、々勸賞事於源大納言家賞幷造宮賞追可仰云々於家賞者尤可然可被行者、於本御所可被宣下歟、又造宮賞事宣下之條思慮未成、依方角禁忌事入殿相國新造私亭、可被進之由、議定切訖、而指圖之躰似皇居、然而私移徙畢被進了、何可及造宮賞哉、次供夕御饌予爲陪膳、予以下雲客兩三行大盤、又左少將有房朝臣藏人佐光長等供奉賢所、當時祗候之輩多稱障、仍所供奉也、

十二日庚申霽、午剋許先參內、欲見廻所々之間、自院有召（帥奉）逐電馳參、使者兩三人、帥云、有歸都之儀、但前大納言爲御使向禪閤畢、可相待歸參者、然間殿下令參給、數刻雖似有沙汰無被仰下之趣、仍昏黑退出、戌時許遣使於大理許相尋之處件沙汰後千（畢カ）云々深更藏人弁示送云、歸都一定也、彼是不審之間、自殿下有召逐電參入、以信廣被仰云、可有還御平京、早可申沙汰者、次參內謁女房更闌歸蓬、夜半有火事（濱邊在家、二町許）

十三日辛酉天陰雖小雨降不及濕地、平旦招陰陽權助濟憲掃部頭季弘等朝臣、問還都平安京日次、（出御十一月十四日壬戌廿三日辛未院御方廿二日庚午着御十七日乙丑）逐電參院付女房奏日次亥、（出御院御方十六日甲子廿六日甲戌着御）可申攝政之由有仰、先雖可申依便路且令奏也、次參殿下付棟範、申日次事仰云、早奏聞可有左右、便申他事、次歸參院奏殿仰趣仰云、有思食樣暫不可有日次沙汰者、若又後千（畢カ）

歟、乍成奇退出改着楚々衣裳未剋參內、

〇中略

十四日壬戌山嵐濱風拂面入骨、不及指出頭、當都冬天之間如此云々每事難堪乎以蟄居、賓客等來如常、其中左京大夫光臨被談世事殆及昏黑、歸都猶一定、但定日不分明之由左少弁告示之、

十五日癸亥寒風慘烈、今日不出仕、未剋許謁新中納言晡時歸畢、藏人佐已下人々來臨、此外無別事、山大衆使參上、依山門訴歸都一定之由被仰含所司了、是行隆奉行也、

〇中略

十九日丁卯天陰、（〇中略）

今日新嘗祭也、當都依無其所、於平安神祇官被行之、上卿藤中納言成範、參議堀河宰相賴定、右少弁兼忠、少納言有宗等參勤云々

〇中略

廿日戊辰天晴、申刻許自藏人弁許以出納國貞示送云、還都一定也、來廿三日行幸前大納言字治河亭、廿四日渡御寺江、廿五日渡御木津殿、廿六日可有御入洛、皇居五條內裏也、存其旨可申沙汰之由有仰者、即仰官外記旁令致沙汰云々

○中略

廿二日庚午臨夕雨降、欲出之處、關東事既熾盛歸都事未定之由、巷說嗷々逐電參院、于時殿下令參給、人々參集、事已未定、猶豫之條短慮不及、萬人相傾、而間及申尅有召、參御前、大理傳宣仰云、歸都猶一定也、兼又日吉社并延曆寺領等充滿近江國、仰件庄々早可相禦凶徒、又邊民之中挾狼心同梟惡者、各可討伐之由可下知之旨、可仰山座主、奉兩條事馳參殿下、于時令退出給之故也、以棟範申入子細奉御報之後歸參院、次參內、次退出、

風聞說、居住美濃國之源氏等打入近江國云々

或又近江國住人等合戰之間嗷々之由云々

今夕新院渡御本內裏、蓋是御出門也、行幸明日也、然而依御衰日今日有御出門也、

廿三日辛未天晴、先〔參〕院謁、帥并時光懸懃行幸雜事、又以女房有奏聞事等、次詣禪閤、次參殿下、申行幸間事、次退出、

今夕依可有還都爲御出門、行幸前大納言邦綱卿宇治新亭、幸此都之後〔新〕造華亭也土木未終功近日不日致沙汰云々予黃昏參內、每事尋沙汰之、攝政殿令參給之後取日時勘文、今日許載之而廿六日可着御日也同可書載之由仰之令書直掃部頭安倍季弘朝臣依當時祗候上萬成勘文於藏人所勘之覽殿下、次出陣、宣下上卿花山院中納言、兼雅可勤仕竈神上卿也依無他上卿仰之全不可有難之由外記等稱之路事不仰之、次第不思得故也、諸社行幸之時不仰之所相准也、但件行幸兼巡撿路

次歟、雖不相似又何爲之、此次仰勸賞事、其詞云家賞追可申請上卿召大外記賴業下日時勘文、又仰
賞事、予依此事兩度參院又爲御使詣禪門被申云全不存但猶可候者追可申請者抑行幸此亭之時可有造宮賞之由藏人弁宣下云々今有此賞彌以首尾相違歟爲之如何次出御、掃部
頭季弘朝臣奉仕反閇、少納言有家勤仕鈴奏、右宰相中將實守卿奉納劍璽、皇后同輿、別
當卿遲參之間、藏人頭重衡朝臣候御輿寄、雖可被待具可忩之由殊有沙汰、未知何故、出
御右衛門陣之間、大理有參會、于時小雨降其路深泥、落馬人已多入御宇治之後無鈴奏、
予暫祗候退出、
賢所供奉左少將時實朝臣右將不參但一人供奉有例藏人宮內權少輔親經着御之後供御供云々、
御竈神上卿花山院中納言左少辨行隆諸衛佐不參、尉以下供奉頗以不具、
行幸供奉公卿、別當右宰相中將實守藤宰相定能源宰相中將通親、
近衛將有房淸經等朝臣許也、
供奉諸司事、兼雖下知敢不驚參、可謂末代、是遷都之故也、
遷都事世以稱奇異、然而以口如鼻、無申出之人、今依關東逆亂事此沙汰出來、一定之
後又有障碍、暫以延〔怠〕定日又不聞、今被遂行畢、偏社稷宗廟之結構之由、天下貴賤悅
喜之云々、
廿四日壬申陰晴不定、卯剋參宇治御所、此間人々參集辰剋有出御無御反閇、爲頓宮之

故也、將不仰可渡之由、皇后御同輿、供奉公卿左大將〔實定〕別當〔時忠帶白羽矢差利鴈矢非楚忽事不審也火長一人不帶也〕右宰相中將〔實守〕藤宰相〔定能〕近衞左少將有房實教〔負狩胡籙差利鴈矢出御之後參會〕清經〔胡籙同實教〕公守等朝臣之外、文武百僚如不供奉、但介冑之士如雲相列、予候御後、中宮權大進光綱藏人源兼時同候之、〔也イ〕前右大將〔宗盛着麹塵直垂鹿皮行縢〕具數千隨兵在御後、隔一町許爲後陣、彼一族左兵衞督〔知盛〕同以相從未剋着御大物、寄御輿於御船令乘移給、公卿別當近將有房朝臣清經朝臣候御船、予在別船、

上皇同御進發、〔行幸以前也〕令駕御車給、公卿帥大納言前大納言源宰相中將、殿上人大藏卿雅隆朝臣左中將泰通朝臣右中將隆房朝臣左少將通資朝臣刑部少輔時光安藝守在經等供奉、

法皇早旦御進發、〔御輿〕左少將資盛朝臣一人在御共、行幸幷御幸、申斜着御前大納言〔邦綱〕寺江亭、〔主上上皇御所各別法皇以御舟爲御宿所〕

內御方出車可爲四兩之由女房稱之、然而引替牛不足之間、用二兩、件引替、自殿下連連被獻之、殆過分也、今度人夫傳馬引替等兩方沙汰依可依違、一向自院廳加催可被奉分之由、雖有其議還都定日未定期日空迫、不聞所々散狀之由、奉行人刑部少輔時光所稱也、人夫乏少之間、累代御物之外惣載海船、可謂違例、中宮御方被止出車、女房

乘海船尤不便事歟、

今夜予以船爲宿、

廿五日癸酉時雨時々降寒風慘烈、卯剋參御所、上皇御舟解纜之後主上乘御々船、內侍持劔璽、左少將淸經朝臣傳取安御船、（內侍可參儲否之由雖相示可准御輿歟仍近將直役之）予猶候私舟今夜可着御木津殿之由、雖有其議日暮風烈、又賢所御舟遲々、維華船於桂（社イ）下（稱唐崎）有御宿、木津殿元自（ヨリイ）不可有下御、早以宿御何事有哉、爲尋供膳事、雖尋藏人不見來之間及曉更、釆女出雲（第一也者）尋來云、參木津之處無着御、諸社行幸頓宮釆女勤陪膳、可供歟如何、尤可然、早於御舟可供之由仰之、古老者爲不闕事參入、（マヽ、）少感言了、

廿六日甲戌天霽風（閑）遲明起唐崎、予於東淀下自船騎馬、傍岸伺王船、參高畠、私舟可遲遲之故也、主上幷新院御船未剋着御、先可有御幸也（之カ）由、雖有其議忩可有行幸之由、前大將再三被申行、供奉諸司員少、尤可被待具歟之由、雖申行、無左右可寄御輿之由有沙汰、仍乘御、公卿自元供奉人、別當前（外イ）左大將以下皆遲參、近衞次將元供奉外公時一人參入、藤中納言參會造路、右大將參會七條朱雀、平中納言參會內裏許也、介冑士相隨前後文武百僚雖不被相整、還爲壯觀、其路至七條東行、至大宮北行、至六條東行、至東洞院北行、入御五條皇居東門、見物雜人如堵如墻或致合掌、或有悅氣、是則萬民之悅無過還都之

故也、入御了、殿下退下御直廬、覽吉書、先官方、權弁光雅朝臣、加賀國年料米、一イ藏人方予、內藏寮請奏、次政所光雅朝臣、文摭遲々之間用假文摭可有吉書可有用意之由於途中相觸信清遲々條若是兼無存知人歟次殿下令退出給、爰大理被觸予云、職事不論晝夜可宿直、又直官人事可致沙汰、又駕輿丁等可令祗候、是被稱宮仰也、內侍所入夜渡御、供御供、又御竈神渡御大內々膳、上卿遲參、左少弁一人扈從云々、行幸以後新院御幸、公卿、元御共人之外、新大納言前大貳八條三位駿河三位等參會云々、以平中納言六波羅亭爲御所、元可幸閑院之由、雖有沙汰忽改易云々、一院着御六原泉亭、藏人佐光長爲御裝束行事參入、兼日上洛、着縫腋袍參會、未弁可否、內御方出車、自福原雖相具爲用意依催儲、雖有餘分不及不足、

○玉葉 國書刊行會本

嘉應二年正月十三日、甲子天晴、不出行、或人云、賴盛卿今夜向福原、是依入道相國命也云々、重盛卿又明日可向云々、山僧發向之由風聞之比、尤不可然歟云云、

同二年正月十七日、戊辰終日、甚雨、不止、不出行、人々云、入道相國今曉入京云々、又云、成親可被停止別當之由、頻辭申云々、

同二年四月廿一日、辛丑晴、此日上皇還御、先是、入道相國歸京云々、今日、臨時除目、重盛任權大納言、六人也、成親別當右衛門督、權中納言信基左衛門佐云々、

同二年九月廿日、丁酉今日、城南寺競馬云々、五番、其事了、法皇令向入道太相國之福原山庄給、是宋人來着爲叡覽云々、我朝延喜以來未曾有事也、天魔之所爲歟、

同二年十月卅日、丙子晴、少將光能爲院御使、向入道相國之許福原、云々、世人不知何事、

同二年十一月三日、己卯晴、物忌也、今日有臨時祭定云々、攝政被參內、光能自福原歸參云々、

同三年十月廿二日、癸亥今日、上皇渡御鳥羽殿、明曉爲乘船也、院藏人來、催大乘會袈裟事、

同三年十月廿三日、甲子今曉、上皇渡御入道太相國福原別業、公卿六人、重盛卿、資賢卿、兼雅卿、成親卿、宗盛卿、時忠卿等也、殿上人十人許、不及記云々、

承安二年三月十九日、丁亥或云、福原千僧供養、導師法師公顯說法、叡感之餘、被仰可任僧正之由云々、事若實者、未曾有事也、

同二年三月廿日、戊子今日、上皇自福原歸給、此日於院、被定建春門院平野御幸

儀、內府以下公卿七八人參入、雖大臣候、中宮大夫隆季與奪平相公、親範書
定文云々、

同二年十月十一日、(〇中略)今日、太上法皇令補阿闍梨給、前大僧正覺忠(園城寺)、放解文、一身阿闍梨也、上卿左大將師長卿、職事藏人右衛門權佐光雅仰之、被仰左大辨實綱卿云々、希代之珍事、上代未有如此事、是自來十五日、法皇已下、仁和寺宮、山七宮、凡僧綱、凡僧一千口、於福原被行法華法、可有加持、入道太相府依可爲其大阿闍梨、殊有此事云々、事躰非言語之所及、(〇下略)

同二年十月十三日、法皇今日向經輪田千僧給云々、今曉請印云々、

同二年十月十五日、自今日被修千僧云々、

同二年十月十九日、今日、上皇還御自福原、鳥羽南殿修造之後渡給、非御渡儀、

同三年三月廿二日、(〇中略)
自去十四日、至于廿日、入道相國、於福原被修護摩云々件之間、自宋朝送使者、入道不合眼、以人令逢之間、唐人大怒、歸了云々、凡異朝與我國、頻以親昵、更々不被甘心事也、

同四年三月十六日、(癸卯)法皇幷女院向入道相國福原別業給、來十九日可參詣伊津岐

嶋給云々、件社此七八年以來靈驗殊勝、入道相國之一家殊以信仰、仍所參給也云々、

同四年三月十九日、（丙午）智詮阿闍梨來、入道相公、成賴病惱之間事所語示也、

安元元年十月十一日、（戊子）雨猶不止、申刻以後晴、巳刻許、法皇幸禪門相國福原別業、（密々事也、）來十三日依可供養千僧持〔經〕者也、及晩風頻吹、（〇下略）

同元年十月十五日、（壬辰）晴、今日、法皇自福原歸給云々、（〇下略）

同二年十一月廿四日、（乙丑）天晴、戌刻、女房歸洛、共人等語云、昨日申終着南都、（以覺乘得業竹林院爲宿所、）戌刻參御社、（用輿、）正預有政申祝、今朝寅刻參南圓堂、卯刻參東大寺、（各用輿、）歸宿所、巳終出奈良云々、有安來以件男入道相國之許有示送事、（兵仗辭退〔事〕、）明曉可下向云々、（入道在福原山庄也、）而或人云、明後日〔且〕可被下向阿波國、及詣熊野之由云云、其事實者明曉不能罷向之由所申也、尋聞一定可左右之由仰了、

同三年三月十四日、（甲寅）天晴、入夜小雨、女房密々詣廣隆寺、未刻、頭右中將光能朝臣來仰云、神宮上卿事、先日所勞平滅之時、可奉行之由申、重又令辭申、何樣事哉、先々奉行之時、殊辨理致令申沙汰、叡慮善之、故再三被仰之、今强遁申之條、頗遺恨所思食也者、內々示云、御氣色頗不快、令奉行御、尤宜

歟云々、（余所慍不輕、仍以季長朝臣所傳申也）余令申云、初被仰下之時、雖臥病席、恐忤詔旨、奏疾愈之後可奉行之狀矣、其後雖加醫療、敢無減氣、彌以倍增、猶待其減者、自涉旬月歟、神事擁怠之基、還有其恐、因之、重所奏子細也、而今承重勅定、不能申左右、但非敢詐僞稱病、雖然、綸旨重疊、於奉行者不可辭申、至出仕者、更不可堪、此條猶可有後恐歟、可然之樣、可被奏者、光能云、法皇今曉臨幸福原、來廿二日、可有御入洛、彼時可奏此旨云々、此事、未得其意、疑光能之結構歟、左相府依病辭退、已以允容、被責仰病身之條、爲恐不少、疎遠之身、於事如此、是末代之習耳、

同三年三月廿二日、（壬戌）天晴、未刻、隆職宿禰來、進康和四年、太神宮禰宜宣綱、依放火落書等事、被糺問之間宣旨目錄、申刻、頭左中將定能朝臣來、爲訪余疾也、昨日、院御共歸京云々、福原千僧之間事、問之、答云、先自十五日、三ヶ日之間、有千壇供養法、（此中、百壇護摩、其中壇法皇修、自餘、東寺、天台、眞言師等、各宗長者已下、大略無殘人云々、）自同十八日、三ヶ日、供養千口持經者、供養法者、入道之所修、供養持經者者、法皇之所令行給也、是奉爲建春門院也、其持經者等、殿上侍臣已下、北面武者所、主典代、廳官、皆悉被宛之云々、還御之時、入道進引出物等、唐物等珍重云々、（下略）

治承二年正月廿二日、丁巳朝晴、午後雪降、忽及寸、酉刻、天晴、右大將宗盛、去廿日爲御使、下向福原、今日歸參云々、僧綱等、又今日下洛、山僧敢不承引云々、今日恒例代厄祭也、

同三年十一月廿日、(○中略)午刻許人傳云、法皇御幸鳥羽、是爲伐賴盛卿、在六波羅云々、御所近々之故所渡御也云々、

未刻人來云、已寄六波羅合戰云々、凡夢歟、非夢歟、未覺悟、又云、伐賴盛事、諸無實也云々、

今日午刻、禪門被向福原了云々、(○下略)

同三年十一月廿四日、戊寅天晴、前博陸、昨日自河尻被向福原了云々、武士等相具輿參迎、所相伴之人々、少々ハ參了、少々ハ留了云々、誠不能左右事歟、今日終日念誦、入夜奎玄法印來、隔簾謁之、粗談世間事等、前大舍人頭兼盛自院被付白川殿倉(タツシ)者也、被切手了、又爲行、爲保被殺了云々突入海了云々、又云、爲天下安穩、被始卅壇護摩云々、(○下略)

同三年十一月廿六日、庚辰晴、傳聞前博陸、自福原被向淡路國了、共人只一人、殘輩皆追上了、武士等相具(將)去了云々、(○下略)

同三年十一月廿九日、癸未〔天〕晴、傳聞前關白、自二福原一遷二淡路國一云々、又人云、奈良大衆蜂起熾盛云々、成下御寺可レ放火一之支度上云々、南北二京、天魔充滿之比歟、

同四年五月十日、辛酉天晴、今曉入道相國入洛、武士滿二洛中一、世間又物忩云々、今曉有二夢想事一、

同四年五月十二日、癸亥天晴、申刻以後頗陰然、而雨不レ下、近日有二旱魃之愁一云々、知盛卿平滅云々、昨日禪門下向了云々、(〇下略)

同四年五月十七日、(〇中略)凡昨日朝、彼宮(八條宮)逐電之由、聞進至二福原一了、

同四年五月廿三日、甲戌天晴、申刻、源納言來、談二世上事一、官兵引二率洛中諸人一、可レ下二向福原一之由、近日誕奇(謳歌カ)、卽可レ有二行幸御幸一、不レ殘二一人一、可レ被二相具一之由云々、南都大衆來廿六日可レ入二京一之由風聞、〔凡世間之事、〕非二直也事一歟、不レ過之者、只仰二天道一、憑二神明一、信二三寶一、凝二謹愼一許歟、

同四年五月廿五日、丙子陰晴不レ定、昨日座主登山、山僧可レ攻二三井寺一之由、爲二相語一云云、過半有二承諾一之由風聞、參二女院御方一、禪門明日可レ上二洛之由云々、去廿三四兩日、或女房爲レ余見二吉夢一云々、

同四年五月廿六日、（〇中略）今日入道相國、可致上洛云々、（〇下略）

同四年五月卅日、（辛巳）天晴、大將新修泰山府君祭、未刻、邦綱卿告送云、來月三日、可有行幸于福原、上西門院同可渡御之由有其聞、仰天之外無他云々、申刻、大外記頼業、同示送此由、又晩頭行隆示送云、三日行幸、忽被縮二日了云々、凡非言語之所及、留京洛之輩、併以可恐〔事〕也、公卿僅兩三人、殿上人四五人許、可候御共云々、天狗之所爲、實非直事、生合亂世、見如此之事、可悲宿業也、（〇下略）

同四年六月一日、（壬午）〔天〕晴、午刻參院、明曉、福原遷幸、（行幸、及兩院御幸云々、）已以一定云々、余以使者、問可參福原哉否於入道相國、報云、無可寄宿〔之〕所、仍忽不可參、追自彼可申案内云々、先是、昨日候上皇之招客之處、仰云、參御共之輩、偏以禪門之左右也、一切不〔被〕仰是非、只聞食許也云々、仍所問也、今日、於院謁邦綱卿、其顔色頗有怖畏之色歟、今日大將所惱頗宜〔云々〕、

同四年六月二日、（癸未）〔天〕晴、卯刻、行幸於入道相國福原別業、法皇、上皇、同以渡御、城外之行宮、往古雖有其例、延暦以後、都無此儀、誠可謂希代之勝事歟、敢無知由緒之人、疑可被攻南〔都〕、（大衆猶蜂起、敢無和平云々、）之間、可有不慮之恐歟、又餘黨

猶不レ休、爲レ禦二彼怖畏一歟、云レ彼云レ是、不レ可レ及二洛中之恐一事歟、或說、可レ有二遷都一云云、縱雖レ可レ然、忽臨幸如何、事體可レ謂二物恠一、必有二其徵一歟、又云、留二洛陽一之輩中、有下可レ蒙レ刑之者上云々、凡異議紛紜、巷說縱橫、緇素貴賤、以二仰天一爲レ事、只天魔謀レ滅二朝家一、可レ悲々々、遷幸儀、以二見物之傳說一注レ之、自二八條連（通カ）一至二草津一、武士數千騎、二行並レ轡夾二幸路一、先入道相國、駕二屋形輿一、

次女車一兩、次女房輿二、二品、及攝政之室家云々、

次行幸、鳳輦、供奉人々、公卿四人、

左大將實定、別當時忠、宰相中將實守、通親、近衞司、左中將泰通朝臣、右中將隆房朝臣、職事頭前亮重衡朝臣、頭辨經房朝臣等也、隆房朝臣着二狩裝束一、褐衣布帶、白狩袴、(浮線綾云々、)脛巾、狩胡籙、螺鈿野劔、有二尻鞘一、葉是城外之儀云々、太以不レ被二甘心一、如レ此事可レ依二時宜一事也、後聞、隨身狩衣、小袴、烏帽云々、

次攝政、乘レ車、前駈二人、殿上人二人、騎馬在二車後一、

次內侍所

藏人左少辨行隆、左少將有房朝臣等候レ之、各騎馬云々、

次御竈神、

上卿右衛門督實家、辨右少辨兼忠、各乘レ車、但辨依レ仰、自二草津一歸京云々、

次御幸、

公卿、帥大納言隆季、前大納言邦綱、

殿上人、左少將通資朝臣、同時實朝臣、

右中辨兼光朝臣、已上可レ從二行裝一、

中務權大輔經家朝臣、

右京權大夫信行朝臣、

安藝守在經、已上京出許云々、或説在經可レ參二福原一云々、

次出車二兩、

次前大將宗盛卿、駕二手輿一、

今夜就二大物一、明曉御二福原一、

內裏、平中納言賴盛家、

上皇、禪門之別庄、

法皇、平宰相教盛家、

攝政、安樂寺別當安能房云々、

參入輩多以無宿所、如立（座イ）道路云々、

同四年六月三日、甲申天晴、源中納言雅賴來、談世上事、或人云、遷都不可然云々、付便脚、送書於院女房及邦綱卿之許、

同四年六月四日、乙酉天晴、法性寺座主道快、中御門大納言宗家等來、各相逢謝遣之、此夕、參女院御方、今日、以使者、觸白地可參入之由於邦綱、人々多參入云々、

同四年六月五日、丙戌天晴、傳聞、南都大衆成二途了云々、定和平歟、民之慶也、

同四年六月六日、丁亥天晴、遣邦綱卿許使者歸來云、雖白地無御宿所者、御參不可叶、如只今一切無其所、猶相尋且又付形勢、自是今一兩日之間、以飛脚可令申云々、又云、去四日夜、主上自賴盛家、遷御禪門別庄、太上皇御所也、則居替給云々、家主賴盛叙正二位了、奉超右大將殿、不可說々々云々、余全不爲苦、物狂之世、不足論是非、勿論々々、

同四年六月七日、戊子天晴、興福寺衆徒和平了、所逃籠之者等、上下相幷廿余人、隨仰早可召進之由令申云々、又切院雜色本鳥、幷凌礫有官別當、及破長者宣（者イ）之輩、同以搦出了、早可進云々、然而近日、禪府遷都之外、不及他沙汰云々、

今日、參女院御方、祇薗御輿迎如恒、雖天下穢、本社沙汰、先例不憚云々、

同四年六月八日、(己丑)天晴、邦綱卿以書札、示送云、御參事伺形氣之處、遷都之間事、可被仰合、仍可參住也、而一切無其處、仍參候寺江別庄、(即作卿山庄也、)自彼所早且參福原、入夜可歸寺江之由、有院宣、又入道相府被存此旨、早可下向云々者、來十三日可首途之由報答了、宗雅來、談福原子細、白地此兩三日上洛云云、自今日七ケ日、屈二口僧行仁王講、爲拂災難也、

同四年六月十一日、(壬辰)天晴、及晩小雷、參女院御方、傳聞遷都事、大略雖爲一定、被待下官之參入云々、此事敢無可定申之趣、只可隨形勢也、萬人如此、一身不諂者。其害擧足可待歟、

同四年六月十三日、(甲午)天晴、此日、余相勞所惱、參福原離宮、申刻出京、(狩衣、直衣、網代車、)共人最略、定是彼所之風儀也、

季長朝臣、季信、資忠、信光、國行、(已上、各打梨布衣也)　侍四人、隨身上﨟二人、

女房車一兩、

到草津乘船、(二尾、〔瓦イ〕邦綱卿船也、水手八人、)所相具之女房四人、同乘此船、雜船等、召女院御庄、終夜浮淀川、近日炎旱、河水干乾、淵變作瀨、船筏滯停、雖念不速、

同四年六月十四日、乙未、天晴、寅刻、就二前大納言邦綱寺江山庄一、暫以休息、未一點乘レ船、女房等不レ從、制二于大物一、駕レ輿、高屋形輿、同所レ借二用前大納言一也、輿舁十二人、寺僧都被二借送一、共人四人乘レ馬、資忠留二寺江一、侍二人、今二人留二寺江一、隨身二人同乘レ馬、此間頭辨以二御教書一、問二遷都之間三ヶ條事一、依レ爲二路頭一、不レ能二公報一、子細在レ奥、戌刻到二福原一、於二湊川邊一、又乘レ車、大納言牛車等也、牛童遣レ之、亥一點、就二大納言宿所一、乍レ乘遣二入之一、下レ車休息之後、改二着直衣冠等一、前駈二人、着二衣冠一、先參二新院御所一、頼盛卿家也、去四日渡御、以二本御所一爲二内裏一云々、于レ時及二子刻一、依二御寢一不レ入二見參一、〔參〕謁女房一退出、欲レ參二內一之處、及二深更一、仍明日可レ參、就レ寢、

同四年六月十五日、丙申、天晴、早旦、大夫史隆職來、談二遷都之間事一、持二來奈良京舊指圖一、相次頼業眞人來、各謁レ之、又前大納言來、巳刻着二直衣一、車如二昨日一、隨身二人同相從、先參內謁二女房一、主上御寢云々、以二藏人兼時一、招二頭辨經房朝臣一、昨日所レ被二尋問一之三ヶ條、示二子細一畢、

一左京條里不足事、

右南行〔及〕二五條一、東行及二洞院一、西大路不足之條、可二何樣一哉、其地狹少者、若可レ被レ縮二宮城一歟、

申云、須下依二地形之廣狹一、被上レ定二條里之進退一、不足之條、暗難二計申一、如レ被レ注

下者、減於平(安)城、殆可謂(過)半歟、隨而被縮宮城、何難之有哉、若可被縮者、其町數尤可有議定歟、南北五町、東西四町、如何、

一右京、平地不幾事、

右宮城西有小山、隔件山可被用其地、隔山之條如何、加之平地不幾、山太(谷カ)相交、被用右京、不可及其難歟、

申云、如被仰下者、山太相交、高下不等云々、専難用京都之地歟、但非大山、非深谷、漸々成功者、盖同平地哉、又當時於不可及事之妨者、忽雖無其沙汰、何事之有哉、如此事隨便宜、可被相計歟、

一大嘗會事、

右任式文、今年可被行之處、期日以前、宮城(若)難出來者、於何處可被行乎、遷都大嘗會、彼是共大營也、同時被遂行者、諸國煩多、民力定疲歟、何樣可被進退哉、以前條(々)、殊加斟酌、可令計言上給者、依新院御氣色、言上如件、以此旨可令申上給、經房恐惶頓首謹言、

申云、謂大祀謂遷都、共是國家重事也、相並被行者、國費多歟、暫還御舊都、被遂大嘗會之後、一向有遷都沙汰尤宜歟、且是表神事之不輕、欲

遷都之無煩之故也、但遷都事、必可被忩行者、又以勿論雖須延行大祀、撰（禮イ）式以來曾無此例、仍新宮之造營、併難終其功者、猶可備禮儀之所々、成不日之功、可被早遂歟、其條不可叶者、縱雖無例、延引之外又如何、

經房云、外記勘申云、七月以前、卽位之主、明年被行大嘗會之例、大同、弘仁是也云々、

　申云、共是撰式以前事也、不足爲例者歟、

又云、於離宮被行大嘗會如何、是新都造營（宮イ）難叶、仍當時御在所等、少々造加舍屋、被行如何云々、

　申云、於離宮被行大禮之條、縱雖有古昔之例、專難遵行歟、

此外經房有相語旨等、

次參新院、依召參御前、頃之退下、謁女房等、此間時忠卿參上、於御前召經房朝臣、仰下云、

改和田都、以（門イ）小屋野、可爲其地、早遣木工寮、可打定其地、和田之京、町數狹少、難議萬端、衆人不甘心、萬民有苦色、於小屋野者、頗有便宜云々、但愚心案之、不如無遷都、女房等語云、遷都萬人莫不歎息、或有流淚之族云々、

上皇不被仰是非云々、又聞相少納言宗綱、被拷問之間、申種々事等云々、又行隆來示云、都地改定小屋野了、此旨可申之由、禪門所申也云々、未刻歸宿所、此間兼光來、暫以談語、酉刻乘車出福原、於初所改乘輿、二里許行之間、腰痛太以難堪、仍乘馬於廣田社前、改乘手輿、今度用陸路也、亥四刻、就寺江路之間、被吹濱風、心神惱亂、仍浴湯、今夜汗不發、

同四年六月十六日、丁酉天晴、風病更發、浴湯兩三度、汗快出、今日送消息於禪門、及邦綱等之許、又御院女房之許、

同四年六月十七日、戊戌天晴、昨日返事等到來、各告送云、以播磨印南野、可爲京云々、邦綱示云、嚴嶋內侍女託宣可改小屋野之由云々、又大夫史隆職、同告此旨、傳聞昨日有小除目、故攝政御(殿イ)息大夫任侍從、又被任上官受領等、具不記之、又有叙位解官等事、上卿左大將、執筆通親云々、又外記中原俊康、被止巡年云々、今日又數度浴湯、

同四年六月十八日、己亥天晴、今日只一度浴、明後日爲上洛也、今日依所勞、可上洛之狀申院了、

同四年六月十九日、庚子天晴、邦綱卿告送云、昨日左大臣以下、參近邊之公卿等、

參會院御所、被尋問園城寺僧徒、可被行罪科之趣、各任定申旨被宣下云々、僧綱廿七人、解却見任、沒官所領云々、隆職示送云、雖有此沙汰、未被下宣旨云々、昨日進院御返事到來云、早可上洛云々、

同四年六月廿日、（辛丑）天晴、寅一點乘船、申四刻付淀橋爪乘車、日沒以後歸家、上下共人同下向之日、今日又浴湯、

同四年六月廿六日、（丁未）天晴、參女院御方、入夜藏人左衞門權佐光長、自福原送札狀云、

　神今食事、

右今月依穢延引、來月九日於舊都可被行候、釆女歸參、奏事由之後、可被解齋候、而山海相隔、途路有程、不待釆女歸參、只計其程、先可有解齋歟、於釆女者、雖不被相待、任行程可參奏歟、將又不可參歟、宜令計申給者、新院御氣色如此、以此旨可令言上給、光長頓首謹言

　六月廿五日　　左衞門權佐光長奉（上イ）、

進上　和泉前司殿、

量程暗有解齋者、釆女歸參事無其要之由、令申了、後聞釆女猶歸參云々、

同四年七月十一日、辛酉、天晴、上野守頼高、自福原上洛、來云、爲右中辨兼光奉行、欲持參唐繪御屏風一帖、爲被書色紙形也、而院中無人之間、兼光不上洛、以使者可被申之由、被仰下、仍以頼高所令申也、即持來本文二枚、禁忌之字太多、可計除之由、被仰下云々、屏風、今明之間可持參、且所參啓也者、當時所勞之間、不能下筆之由令申了、

同四年七月十五日、乙丑、天晴、人語云、去十日夜半、欲奉盜出春日御正體、大衆起合奪留了云々、或云、別當僧正社司等同意、爲奉移福原所爲云々、仍大衆爲拂別當、或云凶徒之所爲云々、眞僞難知歟、誠我氏欲盡、可哀之秋也、

同四年七月十九日、己巳、天晴、此日、姫君着袴也、早旦仰家司季長朝臣、奉仕御裝束、其儀、(〇中略)

事了賜祿於左馬允奉頼、(マヽ)(職事取之掛一領也、)依奉仕御前物也、先々久信勤仕之、而候福原辭之、仍雖非重代仰之、

御前物役人、

季長朝臣、長經、頼高、兼親、貞俊、光兼、仲資、長俊、

過三ケ日可撤御裝束也、

今日依有所思不招客、天下騷動未落居之上、遷都之間、世間彌不穩、就中取諸身（勞イ）、萬事不可好威儀、仍所用密儀也、

同四年七月廿日、（〇上略）

今日基輔參向福原、付其便人々許通音信、

同四年七月廿三日、癸酉〔天〕晴、〔午刻許、定能卿來談、未刻、知康入道來、語定成與憲基相論之間事、大推項背間論也、〔又左馬權頭宗雅來、談福原之間事、入夜參女院御方、聊依不例御、然而殊事不及、大將室頗不豫云〕

同四年七月廿四日、甲戌〔天〕晴、申刻、基輔自福原歸來、余申旨付女房申入了、仰云、所勞事返々不便聞食、屛風色帋形、强不可忩、以病隙可書進者、女房等語云、御惱殊重、御不食、惟悴逐日增給之上、〔日〕來溫氣御、此間又以御增、大畧遂不可有憑云々、來廿八日嚴嶋御幸延引云々、關白及禪門之許、同問不審、各有返報等、大將室、今日溫氣散了、女院別事不御云々、

同四年八月二日、壬午〔天〕晴、午刻浴湯、此間、花山院中納言來、始來也、余浴之後暫而出逢、于時被參女院御方了、晩頭季信自福原歸來、語云、新院御不例、六借御云々、又攝政所勞瘧病云々、但其體非普通、更發之時其面赤、又間日同以惱

亂云々、戌刻、女房除服、（母尼上姉卒去也、）陪膳季信役、兼親於門外除之、陰陽師漏刻博士憲成、今日、侍從瘧病平全、獻勝祈之、

同四年八月四日、（甲申）天晴風吹、未刻、大外記頼業來、持來帝王略論一部五卷、依借召也、又先日爲加點、所下給之貞觀政要、同進之、召簾前問世間事等、申云、去廿九日出福原、今月朔日入洛、遷都事不可弃故郷之由、被仰下了、福原立離宮、暫可有經廻云々、不及八省大内、又大路小路隨便披之、撰可然卿相侍臣等、可宛其地云々、大禮事延引之由、被仰下了、其後猶今年可被行之由、雖云々、說未聞一定云々、又云、嵯峨隱君子（等）道命期勘文、（追撿之、仁和比有此勘文、○本註據一本補之）不可改平安宮之由、有所見、貞觀之比、依大極殿炎上、時人可有遷都之由謳歌、且是古昔之例、大途經八十年有遷都、延暦已後、及八十年、疑其期至歟云々、隱君子聞之云、桓武聖主、鑒此地久可爲帝都之故、新所營給也、東有嚴神、（謂賀茂、）西有猛靈、（謂松尾、）南開北塞、又見地宜足可爲帝都、永代不可變易之趣、具被勘錄了、且是非卒術之所及、以人意不可測、天之令然之地也云々、而今有遷都之儀、我朝若有運者此事不可遂、我朝若可盡者此事可成就歟、國之安否只在此、事遂可見歟云々、又語云、新院有御夢想事、建春門院夢中參

院中給、深懷怨心、其故遙弃我遷幸給、尤非本意云々、是又遷都不快之祥也、先是中宮有御夢想、幷隆季之靈夢等、（件夢等見去月記、）不信此等靈告、猶被營新都、誠是天魔所爲不可疑、可悲々々云々、又云、去月廿九日、新院被辭兵仗封戸〔等〕、雖可被辭尊號、可被發遣公卿勅使、（院御沙汰、）而止太〔上〕皇字（云イ）之事背先例、因此議出來、於尊號者、暫不被辭遁歟云々、後聞尊號猶被辭了云々、使藤大納言、奉書草（上イ）俊經卿、淸書定長云々、

同四年八月八日、（戊子）〔天〕晴、實顯法橋來、酉刻、頭辨經房朝臣送札云、來十二日以前可參入、福原新院御氣色者、禮帋云、大嘗會事、可被豫議云々、中依疾重不耐參入之狀、傳聞、去朔日、爲時忠卿奉行、召經房朝臣、大嘗會、猶今年可被行、於當時御〔在所〕（福原）可被行、可申沙汰之由、被仰下云々、而經房朝臣依申可被問人々之由、可及僉議云々、左大臣、及堀川納言等被召、是在京之輩之內也、實定、隆季在福原、自餘之輩、强不可預僉議歟云々、又傳聞、隆季卿密語云、遷都事凡猶不可叶ものを、無所據沙汰かな、今始終可見云々、此語達禪門之聞、太以攀緣被講不安之由云々、凡此遷都〔事〕、頗後々之體有沙汰之間、依此一言、更起勵心被骨張云々、太以無由事也、近日之事、皆天魔之

謀略也、不レ能二左右一〔了〕攝政瘧病猶不レ愈、痢病又以不レ快云々、後聞、今日春寛祈落了云々、

同四年八月十一日、辛卯天陰雨下、左衛門權佐光長來、日來候二福原一、去六日入レ洛云云、呼二簾前一問二不審等一、先大禮事、一定於二福原一可レ被レ行云々、余問云、彼地可レ爲二帝都一之由被レ仰歟、將又於二離宮一可レ被レ行二大嘗會一歟、其條專不レ可レ然歟、還二御古京一不レ可レ叶ハ、以二福原一被レ定二都地一之後、可レ被レ行二此禮一歟如何、申云、此條無二申出之人一、只如レ承者、如レ形造二營里內一、可レ被レ遂二行一歟、凡其間事可レ被レ問二人々一云々、又方角事爲レ被レ尋、召二在京之陰陽等一云々、又語云、新院御不例、聊宜御歟、但不レ及レ減、此五六日、昌雲僧正奉レ祈云々、攝政瘧病、至二于六日一未レ致二平愈一云々、大將室又發了、（驗者大夫君圓隆、自二女房方一被レ請云々、）但宜自二一昨日一、次第有レ減歟、

同四年八月十二日、壬辰〔天〕晴、物忌也、多武峯怪異也、入レ夜獻二福原一之使（木工允重承、）歸來、云、禪門返事云、御不例返々歎承不レ少、聊も不快者、一切不レ可レ有二御參之儀一云云、新院御減之〔由〕承〔候〕、殿下已令二落居一〔給〕了、旁不レ可レ有二御不審一云々、攝政返事云、希有存命了、又御不例、尤歎思給云々、邦綱卿密々示云、新院御事御減之由、雖レ云々、全不レ然、大略一日之中、起居給事不レ過二一時一、御溫氣全不レ散、殆遂レ日弱了令レ見給者也、不レ可レ及二外聞一云々、又去比可レ有レ還二御古京一之議粗出來、

隆季時忠等相議、被仰遣禪門之許之處、尤可然、但於老法師者、不可參御共、云々、人々忽以興違、其後都以停止了、大嘗會事、日來延引之由、相存之處、禪門被申云、何故不被行哉、太以不得其心云々、此語自風聞、忽此議出來、凡萬事非言語之所及、只以目云々、又持來女房若州返事狀云、御所邊事、只同御事也、無增減云々、（以下略）

同四年八月十四日、甲午天陰、時々晴又雨下、光長稱參福原來、院御惱事、可問女房之由仰之、又攝政瘧病平愈、神妙之由、可傳申旨同仰之、午刻、法性寺座主來、被示合可被籠居之間事、雖制止、頗無承引歟、只生涯無益之由也、邦綱卿送札云、大嘗會猶延引之由、被仰之了、明年可被行云々、是期日近々、造作不可叶之故也、人々所定申如此云々、又新院御不豫、聊似有減、但御温氣未散云々、又攝政瘧病、春寬令祈落之、而不蒙賞之由、大以腹立云々、

同四年八月十八日、戊戌天晴、院主典代來、催大將方云、來廿三日、於法勝寺爲御祈、可有藥師經千僧御讀經、可調進經卷、又可參入云々、以隆信朝臣、問後成入道所惱、又同院藏人來、催余分經廿卷、今日及晩雨下、今日以陰陽權助濟憲問福原方角事、申可有憚之由、

同四年八月十九日、己亥〔天〕晴、大將室今日溫氣散了云々、禪門今日被參嚴嶋了、自彼可被詣宇佐云々、

同四年八月廿日、庚子雨下、大將室俄煩胸、殆及危急、然而即復例了云々、疑邪氣所爲歟、邦綱卿送札云、新院御溫、自去七月十一日、于今未令散給、又昌雲僧正依持病發動、此五六日不奉祈云々、又云、禪門明曉（去十八日文也、仍十九日進發歟、）可被參嚴嶋云々、召主稅頭定長、問所勞之間事、入夜民部卿資長來、爲訪大將室病、自日野只今出洛云々、余依疾隔障子謁之、爲方違、參御堂御所、依脚氣用輿、竊下乘入之、雖無禮病（氣イ）無餝儲、爲之如何、

〔同四年八月廿五日、乙巳雨下、經家朝臣來、語福原事等、昨日所上洛云々、新院御不豫、同樣御云々、〕

同四年八月廿九日、己酉〔天〕晴、未刻、頭辨經房朝臣來、日者爲行千僧事上洛、明後日二日、又可參福原離宮、適向京都爭不參哉、且爲承御不例子細可參也云々者、以基輔朝臣傳示之、答、只今可謁之由、但所惱之間、不耐出簾外、唯隔物乍臥可令申也、兼又光盛申著儒事、可申沙汰之由、仰付之頭辨、又云、備後御領事、責取國司廳宣了、近日被止奏事、於事雖不得便宜、相構所申沙汰也、國司頻所讒、

然而令申給旨有理、仍所被責者也、今度參上之時奏（奉イ）事之由書副院宣可進、且所告申也云々者、件所最少所、雖不及執申、隆季所爲奇怪、仍訴申御沙汰次第、殊恐畏申、又私芳恩尤難謝申、就中境節如此事、不及沙汰之比也、殊悅恩之由返答了、小時余於西面出居謁云、（隔母屋簾、余着小直衣寄臥也、）先余示所勞子細、經房大有驚之氣色、又問遷都事、答云、福原如只今者離宮也、明後年可被造八省云云、今年五節以前、可被造皇居、是禪門私造作也、彼人移徙之後、可被借召之儀云々、即件離宮之傍、占置八省之地、幷可立要須之所司之跡等、此離宮卽可用內裏、於大內者不可移建云々、件指圖、源納言造進之、堀川納言又加潤色云々、凡此儀不能左右、非言語之所及歟、大嘗會事、先度有沙汰延引、今又俄有此儀、又延引之子細、如何之由、問之、答云、先今月朔比以別當時忠卿被仰下云、（於御前仰之、）猶今年可被行大嘗會也、仍可被造營內裏、其間事、早々可令申沙汰者、爰經房乍恐申子細云、大禮今年被遂、是正禮也、而先日有沙汰延引、今迫期日之後、忽有此儀、恐神事懈怠之因緣歟、何況造內裏之條方角禁忌如何、延曆十三年、自長岡京被遷平安城之時、被犯王相方、（十月有遷都、而此京當北方、仍謂犯之、）以此例不可有方忌之由、有儀定歟、倩見沙汰次第、頗背違彼例、故何者、

彼者自延暦十二年有其沙汰、內裏造畢、人家過半移住、同十三年十月遷幸之後、公事併於新都被行之、偏是遷都之儀也、於今度者、六月二日卒爾遷幸、彼時不被仰遷都之由、一是其後雖有可被遷都之議、其地度々未定、當時御所、未被定仰可爲帝都之由、已似離宮、二是舊都人屋一人未移住、諸公事併於彼都行之、三是以此等之儀、比延暦例、敢以不符合、至不被避方忌之一事、被追用件例、道理不叶歟、加之、彼延暦例者移徙也、不可同犯土歟、又自長岡京當北之條、未被打丈尺、旁貽疑殆者也、且被尋問陰陽道輩、且被仰合有識卿相、尤宜歟、其議一決之後、可被仰一定歟、言上子細、雖有甚恐、爲後沙汰所執奏也者、時忠云、不可有方忌之由、賴業眞人所申也云々、爰新院御定云、周公營洛邑、無方忌之由、令稱申云々、忽以漢家攝籙之例、難比本朝帝王之儀歟、經房申旨、一々有其謂、早以此等之趣、可相觸攝政者、卽參攝政第申此旨、被申可被問人々之由、歸參奏此趣、左大臣閣下、左大將都督、堀川納言等許、可召之、不可及廣云々、仍各催申之處、閤下無御參、自餘四人參入、去十二日於院殿上會議、先是、去八日於脇陣召陰陽師泰親朝臣、季弘朝臣等也、在憲遲參、幷兩大外記大夫史等、內々尋問此事、先方角事問泰親、泰親申云、先日議定之時不參會、雖不承子

細、於犯土作事者、尤可被忌、勿論事也、但爲禪門之沙汰、被造可然之舍屋、彼人移徙之後、被借召、被用皇居可宜、公家之沙汰一切不可然者、以此趣問季弘〔定時〕先日議定時申不可有憚之由者也、季弘申云、移徙犯土可同之由存之、而延暦已有移徙、今度犯土何事〔之〕有哉旨所存也云々、爰泰親大怒作色云、汝受誰人訓說仕公〔候イ〕哉、太奇怪也云々、季弘卷舌無申旨、只申可從父申狀之由、初爲謏時議、以詐僞奏君、今被糺決之日、爰詞從父命、誠是謀計之由、不忠之臣也、人以謂可取召怠狀、衆庶莫不惡季弘云々、次問齋場所事〔於〕泰親、申云忌正方也、仍不可有憚、次問大嘗會之事、又申云先例不忌方角也云々、次問大禮事於兩大外記、大夫、史等、先賴業申云、大事不再擧、先度有延引之沙汰、更又有此儀、非無事之憚、猶可被延引者、師尙申云、孝謙天皇、於離宮有大嘗會、任彼例今年於離宮被行、何事之有哉、隆職申云、期日已迫、次第神事可遲々歟、今年被遂行者、爲守式文也、而日來無沙汰、今月以後有沙汰者、還違式文歟、猶於今者、明年可宜者、同九日、在憲朝臣參上、申云、泰親申牒狀尤不可有異議、抑福原者、自舊都當申方角、仍非正方、無妨于造齋場所云々、兼又先日議定之場、於方角事者、一切不可有沙汰之由、別當卿有其仰、仍呑舌退出了、

以季弘申狀被據用之間、成恐之處、今又有此議、素勿論不足言事也云々、以此等之趣、去十二日被仰人々、忠親卿發語云、方角事、陰陽之兩儒申旨無異、餘人不能加詞、大犯事、於離宮被行何事之有哉、但皇居爲禪門之沙汰、雖可被造、其所未出來、遮大嘗會事、有沙汰之條如何、被造齋場所、又以不可然、此條何樣可候哉云々、隆季云、已爲朝家大事、難申左右、可在勅定、人以謂、有樣頗惡氣歟、左大將、同忠親卿、左大臣、申云、次第神事懈怠有不法之事歟、於今者延引可宜、若必今年可被遂之由、有靈告者、非此限云々、奏此趣之處、可延引之由、被仰下了、次第如此云々、余雖不候會議之場、事爲重事、仍以奉行職事御狀、具注之、爲備後鑒也、經房又云、昨日參詣十ヶ所、其次見廻洛陽、一切未荒廢、恐遂可還此都歟云々、季長朝臣歸自福原、入夜來示攝政邦綱卿等返報、新院御惱、殊事不御云々、女房返札云〔々〕自來月可聞食御藥歟、又可有御灸治云々、又季長云、逢大夫史隆職之次、語云、近日天下暗然、余可內覽之由、有內議歟云々、此事不可然々々々々、

同四年九月九日戊午〔天〕晴、節供如常、陪膳季長朝臣、自福原光長注申云、新都兩度小火事去月廿八日僧房、去五日盛俊倉之外、無別事候、新院殊有御減云々、天下之幸也、安

藝御幸十二日延引、十月許云々、未聞定説、禪門十二日又被參安藝云々、關東有反逆之聞、去五日大外記大夫史等、依召參院有評議、可追討之由、頭辨宣下、左大將被成官符、維盛、忠度、知盛等、來廿二日可下向云々、但羣賊纔五百騎許、官兵二千餘騎、已及合戰、凶賊等遁入山中了之由、昨日（六日也、）飛脚到來云々、然者大將軍等發向、若有後手事歟云々者、（已上光長札、）（○下略）

同四年九月十一日、（庚申、）自夜雨降下、去八日所遣福原之返札等持來、經房朝臣注送云、新院御惱、毎日更發事雖不御、御溫氣未散云々、（○下略）

同四年九月十二日、（○中略）後聞、禪門安藝詣諸延引云々、

同四年十月三日、（壬午、）〔陰〕時々微雨、入夜、大夫史隆職來、只今參向新都云々、自今夜、女院御方被始行御懺法、恒例九月十五日被始、今年延引也、傳聞、熊野合戰謬説云々、又傳聞、關東事已及大事、

同四年十月六日、（乙酉、）陰晴不定、入夜左衞門權佐光長來、明曉參新都云々、召簾前仰所惱子細可披露之由、後聞、今旦新院自嚴嶋還御云々、

同四年十月七日、（丙戌、）〔天〕晴、賴輔入道、基輔朝臣等、參福原、爲令見給地也、以政朝臣參上、申梅宮社司奏狀可付職事之由、（載三ケ條事、依炎旱被行御卜之處、卜申神社〔祟〕之由、依當其方角、可注申神事違例之由、去七月被

宣下、即注進此事等、予今無沙汰、仍重所申云々、仰可付光長之由了、

同四年十月八日、丁亥（天）晴、入夜傳聞、高倉宮必定現存、去七月下着伊豆國云々、當時御座甲斐國、仲綱已下相具祗候云々、但不能取信、凡權勢之人、依遷都事、失人望之間、如此之浮說流言、不可勝計歟、誠不便事歟、

同四年十月九日、戊子（天）晴、入夜爲冬節、參宿女院御方、後聞、去六日禪門參嚴嶋並宇佐宮等云々、

同四年十月十三日、壬辰（陰）、賴輔入道、基輔等自福原歸來、給地猶未定、仍不能打定云々、

同四年十月十八日、丁酉（天）晴、酉刻、右中辨兼光來、召前談世上事等、下向維摩會、明後日可歸參福原云々、一乘院法印被勤他寺探題、所作優美、萬人莫不拭感淚云々、又衆徒有申長者事、其趣、勅勘之僧綱已下、可被免之由也、又兼光語云、去八月新院御祈爲行御神樂、參賀茂社之次、神主重保相語云、去比通夜寶前、眠歟非眠歟之間、御寶殿震動、于時故法性寺殿、正束帶御坐寶殿傍、又歎息而曰、無由遷都之有キ天、如此久寶殿モ令搖動給也トテ、事外ニ思食歎タリト、見了覺了云々、此事實可恐事歟、又（語）云、五節臨時祭等之間、有種々難義等、可被問人々云々、又云、新院御不例雖有少減、未令復尋常給云々、

又次余所惱子細示聞了、良久退出、

同四年十月廿日、己亥（天）陰雨下、傳聞、延暦寺衆徒、熾盛蜂起、以奏狀付職事了、是可止遷都之由也、若無裁許者、可押領山城近江兩國之由、成支度之由云々、今日申刻、大藏大輔泰茂來、召前問天變及新都作事之間事、申云、此間天變少々所見也、就中去九日流星殊重云々、但不見給候、福原之司天等所見也云々、又新都作事、竹柱之外一切不可候、爲他人之沙汰條、猶不打任事也、如法爲私沙汰造畢之後借召者、不可有憚、凡作事指圖以下用途等、一事已上爲御沙汰、只假以他人爲名之條、偏似謀神、矯餝之沙汰也云々、此事猶召在憲泰親等、可尋問也、今夕定能卿入京云々、

同四年十月廿一日、庚子（天）晴未刻、中御門大納言被來、隔障子謁之、依所勞猶不快也、語云、去八日攝政上表、候其席、其後暫經廻新都、去十六日歸洛、大乘會事、可奉行也云々、又語云、候福原之間、有被尋問事、在憲泰親等朝臣、爭申御方違之間事云々、其趣、泰親申云、雖大將軍方之內、一所不留御四十五日者、其忌可浮、仍可有御方違、且是例也、在憲申云、以宿不當禁忌之方、所謂方違也、於同大將軍方內者、雖替所、其忌不可浮、其理不當、其例不聞、

未曾有事也云々者、召兩方勘文、可決羣議之由、令申了云々、余案此事、在憲申狀有理、泰親申狀、偏諛時議歟、可謂不忠、申刻、南方有火事、頗雖騷動、即打滅了、此間二位中將來、依物騷不對面、今日早旦、定能卿息兵衞佐親能來、只今爲方違、相具父卿向大原云々、

同四年十月廿八日、丁未自夜雨下、午後陰晴不定、大乘會結願也、延暦寺衆徒、訴遷都奏狀、披見之處、頗優美、所申得道理之故歟、左中將清通、今夜初參進名簿、

同四年十一月二日、庚戌〔天〕晴、主稅頭定長來、今日經房朝臣許送書札、報云、今日參結政、可見官奏之文、明曉籠夜可參新都云々、後聞、今日未刻、入道相國歸來云々、

同四年十一月五日、癸丑〔天〕晴、傳聞、前將軍宗盛、可有遷（還カ）都之由、示禪門云々、不承引之間、及口論、人以驚耳云々、（〇下略）

同四年十一月六日、甲寅〔天〕晴、自福原或人示送云、重可遣追討使、教盛、經盛等之子息云々、豈叶事之要哉、世上之嘲、只在此事云々、〔實嚴阿闍梨來、〕

同四年十一月八日、丙辰〔天〕陰雨降、物忌也、入夜、右近府持來旬番奏簡、大將加名

字返給了、傳聞、可有還都之由、雖被仰山僧等、忽不可然、大略被誘仰之體也、始終不可叶事歟、又前大將、並教盛卿等、自可赴云々、凡遠江以東十五ヶ國與力、至于草木、莫不靡云々、

同四年十一月十日、戊午〔天〕晴、爲方違、參女院御所、今夜遣福原之使歸來、歸都事、頗有沙汰云々、

同四年十一月十一日、己未〔天〕晴、宗雅來云、還都事可被令問人々之由、重衡朝臣所示送也云々、此日、遷奉新造入道相國家、（於此第可被行五節、仍所新造云々、）

同四年十一月十三日、辛酉〔天〕陰、或人云、決定可有歸都事云々、爲悅不少、但凶黨不可依此還御歟如何々々（云イ）、此日、於福原離宮新造皇居、被行萬機旬云々、上卿左大臣、出居左中將泰通朝臣不待內侍出昇殿、希代事歟、是左大臣命云々、可奇々々、

同四年十一月十四日、壬戌〔天〕陰雨下、此日欲參福原之處、可有歸都之由、一定已了云々、仍爲聞慥說、暫以遲留、入夜人傳云、還都事、雖有沙汰、殆以後〔乎〕于今定日不聞云々、仍明曉可首途也、昨日旬御鎰奏之外、被止番奏庭立奏等云々、

同四年十一月十五日、癸亥天晴、大將相共辰刻出京、余烏帽狩衣直衣也、大將水干袴、共人七八人許、或車或馬、侍五六人、隨身等相從、又女房車一兩也、巳刻乘船、十餘町棹下之間、自福原飛脚到來、持來書札、披見之處、大將殿御下向、隨重令申可候也、縱雖出途中給、必々可令留給、於子細ハ追可申云々者、是禪門命也、雖不知子細、無左右歸了、近日之事、萬事非無不審、何況縱横之浮說、不可勝計、雖然天下之大事、不可默止、仍强病豫參、且是爲恐憚時議也、而自彼已被止參入、此上何故可企推參哉、仍以歸宅、牛馬皆返遣了、以輿赴歸途、大將暫騎馬、其後用輿、于時未刻、經家基輔兩人爲新昇殿之者、仍必可候五節之上、不參之子細爲令申披、所令參也、於大將者、可參帳臺試及童女御覽之由、蒙催領狀、而無音不參之條、人以成言歟、今依此告自路罷歸之由、可披露之旨仰含了、

同四年十一月十六日、甲子天晴、此日、大原野祭也、依脚病不能拜之間、自河原進發、又以貯劔一腰、奉納春日御社、去十三日付覺乘得業了、依吉日今日所令進也、又女房相具姫君、參詣吉田社、余有祈願旨、祇園等、定能卿五節之間雜事、今日沙汰送了、先日打出幷借物等遣了、巳刻自福原重脚力到來、昨日被示不可參之由、全非他事、依女院御不

豫、幷余所勞、存無心之由、被止云々、又云、來二十五六日之間、可有歸都、五節於彼新都可被行、申刻、靜賢法印、來語賴輔入道宅云、去十四日出福原、彼時遷(還カ)都事猶未定云々、時忠不甘心之故云々、

同四年十一月十八日、丙寅〔天〕晴、今曉有最上之吉夢、自今日七ヶ日精進、可奉轉讀般若心經三千卷、（太神宮、賀茂、春日、各千卷、法樂）是皆依靈夢所始也、邦綱卿送書云、一日還御事、返々神妙、此都大風、凡無物于取喩、人家多以破損、因之禪門被優(變カ)申御風病歟云々、又示曰、大將殿還都之日、於鳥羽之邊可奉待行幸云々、此日物忌也、

同四年十一月十九日、丁卯〔天〕晴、物忌也、傳聞、還都、來二十六日御出門、來月二日可有御入洛之由被仰、延暦寺衆徒大悅、始種々御祈等云々、今夜余夢天下動靜事、吉凶未決、或人云、東亂及近江國云々、

同四年十一月廿日、戊辰〔天〕晴、右中辨兼光來談、還都之間沙汰起、事子細惟多、不遑記錄、

同四年十一月廿一日、己巳〔天〕晴、閭巷云、近江國又以屬逆賊了、前幕下之郎從、下向伊勢國之間、於勢多及野地等之邊、昨今兩日之間、十餘人梟首了、其中有飛驒守景家（彼家後見、有勢武勇者也、）姪男、被伐了云々、甲賀入道、（年來住被國、源氏之一族云々、）幷山下兵衞尉

同源氏云々、等、爲張本云々、未刻自福原人告云、還都被縮畢、來廿三日出門、廿
四日著寺江、廿五日着木津殿、廿六日御入洛、必定了云々、愚案、若可有還
都者、日來之間、早々可有也、以官軍於近江伊勢兩國可相禦也、而一切無追
討使之沙汰、敵軍已充滿隣國之刻、忽以還都、豈叶物議哉、莫言之々々、自
今日三ヶ日、賀茂春日兩社奉幣帛、仍修祓、

同四年十一月廿三日、辛未晴、入夜雨下、今日修祓如昨日、申刻人傳云、去夜、手
嶋藏人某、元祗候三條宮、近年夙夜禪門幷幕下邊、放火福原人宅、逐電向東國了云々、又聞、近江國併
一統了、水海東西船等、悉付東岸、又以雜船筏等、渡勢多浮橋了、凡北陸道
運上物、悉以點取了、大津之邊人家騷逃、凡皷動無極云々、三宮御坐遠江橋
下宿、賴朝等在美濃尾張之境、先以美濃近江等國人之勢可推入大津及山科邊、
以三井寺可先陣、隨形可寄宿法勝寺及大內等云々、於今者、勿論猶以無追討
使之沙汰、福原之邊人氣色自若、敢無驚之色、偏以醉鄕、適所在之武士、此
兩三日之間爲出立追討使事、各賜身暇、下向本國、福原之勢僅二千騎云々、大
略運報盡了期歟、新院御惱危急云々、入夜下人云、歸都停止了、明曉故進人
可聞眞僞也、傳聞、山與三井寺有鬪諍、依其事延曆寺可燒園城寺云々、後聞、

宮頼朝等在駿河國云々、宮ハ不審物也、

同四年十一月廿四日、壬申天陰、傳聞、還都必定了、昨日御出門、今日着御寺江、明日渡御木津殿、明後日早旦御入洛云々、依近江騷動、還都可有猶豫之由、雖其議出來、猶一定了、法皇禪門同可有上洛、一人不可殘福原云々、今日泰親朝臣來、依先日召也、去今月之間、天變十餘度、其內禪門前將軍等、必定可有事、

壽永三年二月四日、癸亥雨下、向大將第、所勞大略減了、行步猶不快云々、源納言示送云、平氏奉具主上、着福原畢、九國未付、四國紀伊國等勢數萬云々、來十三日一定可入洛云々、官軍等分手之間、一方僅不過一二千騎云々、天下大事、大略分明云々、

同三年二月六日、乙丑天晴、或人云、平氏引退一谷、赴伊南野云々、但其勢二萬騎云々、官軍僅二三千騎云々、仍可被加勢之由申上云々、權右中辨光長朝臣來、召簾前仰雜事、又聞、平氏引退事謬說云々、其勢不知幾千萬云々、

同三年二月八日、丁卯天晴、未明、人走來云、自式部權少輔範季朝臣許申云、此夜半許、自梶原平三景時許、進飛脚申云、平氏皆悉伐取了云々、其後午刻許、

定能卿來、語合戰子細、一番自九郎許告申、（搦手也、先落丹波城、次落一谷云々）次加羽冠者申案內、（大手、自濱地寄福原云々、）自辰刻至巳刻、猶不及一時、無程被責落了、多田行綱自山方寄、最前被落山手云々、大略籠城中之者不殘一人、但素乘船之人々四五十艘許在島邊云々、而依不可廻得、放火燒死了、疑內府等歟云々、所伐取之輩交名未注進、仍不進云々、劍璽內侍所安否、同以未聞云々、

同三年二月十日、（中略）入夜藏人右衞門權佐定長來仰、院宣云、平氏首等、不可被渡旨思食、而九郎義經、加羽範賴等申云、被渡義仲首、不被渡平氏首之條、太無其謂、何故被渡平氏哉之由、殊鬱申云々、此條如何可計申者、申云、論其罪科、與義仲不齊、又爲帝外戚等、其身或昇卿相、或爲近臣、雖被遂誅伐、被渡首之條、可謂不義、近則、信賴卿頸所不被渡也、加之、神璽寶劍猶在殘之賊手、無爲歸來之條、第一之大事也、若被渡此首者、彼賊等彌令勵怨心歟、仍旁不可被渡其首、將軍等只一旦申所存歟、被仰子細之上、何强執申哉、賴朝定不承申此旨歟、此上左右可在勅定者、定長云、被問左大臣、內大臣忠親卿等、各申不可被渡之由、一同云々、定長又語云、重衡申云、書札副使者、（重衡郎從云々、）遣前內府之許、乞取劍璽可進上云々、此事雖不可叶、試任申請可御覽、

云々、

○山槐記（史料通覽本）

治承二年六月二日乙丑　陰晴不定、入道大相國自福原上洛云々、（○下略）

同三年六月廿二日己酉（○上略）今夕前太政大臣殿自伊都伎島令還向給云々、□日御供侍民部大夫政清曰、

七日辰終剋令出京給、巳剋於鳥羽□給□申剋着御河尻寺江山城法眼山庄給、今夜令□此所給、

八日巳剋出寺江、至于尼□（去寺江廿町許、）令乘御車給、□車入道大相國被獻之小車也、懸連牛三頭如□依濱砂深也、申剋着福原（去尼□五里許、）左兵衞督頼□宿所給、（去禪門亭四五町、禪門被致其儲沙汰、前兵衞尉行員爲行事、）頃之依禪□以御車令渡湯屋給、（禪門居去一町許、）禪門有御對面、大宮權大夫經盛卿被候、有女田樂、（着水干大口、伊都伎島巫號內侍□皷、々佐々良志時□）事畢禪門被歸了、有御湯、及晴禪門於□大相國又御乘船、別船也、（入道被乘唐船、十二月左大臣被□）□庭有怖畏事、仍今度爲早速被獻伊勢□下積白米六石六斗、雜菓鹽梅種々物等被入□今日水手號中間卅六人乘之、不出御船、

九日未明禪門船打皷、仍他船等皆出廻輪田崎□之間日出、及辰剋至于小馬林、（去經島廿町許、）

禪門被申云、今日之體不快、猶如元可令歸給、□着經島、

十日早旦出御船、着小馬林、禪門幷大相國殿□手輿、（恐海路之故也、）未剋着高砂古、雜船等兼參會□所、今日雖海路無別事、

十一日未明出御船、巳剋過室、申剋至于虫上□頭着牛間戸、件所有入道宿屋、□可給□不被下目、予備前國通生庄□（許路云々）沙汰進雜事、

十二日丑剋出御船、巳剋令過予通生庄前給、本庄沙汰人造酒正祐安眞人、新庄沙汰人和泉□男九條院藏人大夫光仲、兼日下遣、令催設御□本庄濱以黑木爲柱、葺松葉、御所三間、子午□有御湯殿、侍廊五間、卯西立、以御所南妻庇□船寄御所東、結木柴垣、侍西引幔、件所地□□云々、雖設御膳御湯、於此所依鹽合吉不令下給、□過給、仍御膳雜事入小船、渡政淸船云々、□進御船云々、今日申剋主（マ、）于備後□□鹽ヲタルム、晩頭至于備後鞆、夜中□粟原、今日京雨下、彼邊晴云々、□御船初夜程着御伊都伎島、即□

十四日巳剋着束帯有御奉幣、御供□居□着淨衣、前駈幷侍着布衣、有御經、(大宮□)□供養導師被物一重、紙裏一、無請僧、次禪門□宮有內侍田樂、今夜令宿客宮御□

十五日太政大臣殿田樂束裝八具(格子絹□染水干□組括紐色參□大口地、皆覆綾繪紺帷、)被獻、禪門賜件裝□於內侍、又有田樂、又有妓女舞樂、又大臣殿□引米卅石、(御下向之時予於河尻所獻卅石也、廿石入政淸船、□十石了、依荷重、福原賜伊都伎島神主、於彼宮□云々、件神主依穢氣不參宮、在福原云々、)積置舞臺□桶二口各入(○以下缺之、)

同三年十一月十四日戊辰(○上略)入道大相國率數千軍兵自福原上洛、被着八條亭、京師怖恐、衆口嗷々、或曰、故內大臣所賜之越前國法皇召取之、大成怨、又白川殿庄園法皇又有御沙汰、又除目間非據等不甘心云々、

同三年十一月十五日己巳　天晴、中宮大進基親送書於少將兼宗許云、來十七日中宮可有行啓八條殿、如法午可剋獻出車者、申承了之由、入道大相國怨天下、被奉迎取中宮、可被下向福原云々、天下上下如死灰云々、

同廿日甲戌　天陰、辰剋許奉渡法皇於鳥羽云々、院邊人歎息云々、(○中略)入道大相國被歸福原云々、後聞、今夜留船於木津殿前、河中下伊加利、子息

武士等陣左右岸炬火、被斬人頸、召寄船前切之投河中云々、交名未聞、(○下略)

同廿二日丙子　天陰、(○中略)去夜前關白出古河宅、自淀河下向、令乘舁居屋形船給、覆幔、前皇后宮少進仲盛着淨衣、監物家重着直垂小袴、牛童千手丸招出納乘御船、入中持一合樋臺輿等看督長二人同乘之、雜船一艘武者船一艘在後云々、今日巳刻令過寺江給、於此所奉逢之人翌日所來談也、即是向福原給云々、(○下略)

治承四年三月五日丁巳(○上略)日向國辨濟使右官掌職直曰、輪田泊石椋造築役事賜便路諸國官符到來、可出請文由仰了、爲後代彼案文幷請文案召取續曆、

太政官符太宰府、

應下知管內諸國雜物運上船梶取水手下向時、人別三ヶ日勤仕攝津國大輪田泊石椋造築役事

右得入道前太政大臣家今日解狀偁、謹考案內、輪田崎者上下諸人經過無絕、公私諸船往還有數、而東南之大風常扇、朝暮之逆浪難凌、是則無泊之所致也、爰近年占攝州平野之勝地、爲遁世退老之幽居、依其境之相近、聞此崎之爲要、方今仕數代之聖座(主カ)、飽殊私之朝恩、遂登相國之官、更入菩提之道、寤寐所思者四海之靜謐、造次所求者萬國之歡欣、是以老爲救諸國之歎、一

爲除諸人之怖、殊勵私力雖築新嶋、波勢常嶮石掠不全、自非凝(假)國々之功力者、爭得致連々之營築乎、伏尋舊記、粗訪故事、延喜聖代下綸旨、仰山陽南海之兩道、修輪田船瀨之舊泊、聖代之政尤足因准、然則下知畿內河內和泉攝津幷山陽南海兩道諸國、不分庄公、不論權勢、令致不日之勤、規(欲)禦逆風之難、其人夫者田一町別畠二町別各宛一人、可被雇(衍カ)可被雇召、於其時節者、各可依申請、但播磨造小安殿、備前造大極殿、已以營大功、不可准他國、宜除留(公田)支配庄園、至于東西海兩道國々者、當國大小雜物運上之時、其船梶取水手下向之次、慥任先例役經三日、望請官裁、被下宣旨於件國々、任延喜例被修築彼石掠者、海行路(波)(○恐有脫カ)之怖畏不聞、官物私財之損失永絕者、

右大臣宣、奉勅、依請者、府(國)宣承知依宣行之、符到奉行、

正五位上行右少(左イ)辨藤原朝臣、修理左宮(城)判官正五位下○左大史小槻宿禰

治承四年二月廿日

日向國雜掌調成安解申請　官符事、

壹紙、被裁應(○廳歟ノ)下知管內諸國雜物運上船梶取水手下向時、人別三箇日勤攝津國大輪田泊石掠造築役事

右去二月廿日下太宰府之太政官符今日到來、偁、得入道前太政大臣家解狀、

儞、輪田崎者上下諸人經過無絕、公私諸船往還有數、而東南之大風常扇、朝暮之逆浪難凌、是則無泊之所致也云々、望請官裁、被下宣旨於件國々、任延喜例被修築彼石掠者、海路被行之怖畏不聞、官物私財之損失永絕者、

右大臣宣、奉　勅、依請者、仍所請如件、謹解、

治承四年三月五日　雜掌調成安

同四年三月十九日辛未　天陰、自辰剋許小雨、午後大雨風加、今曉新院自八條二品亭令參安藝伊都伎島給云々、去十七日可有御進發之處、天下誰(雅イ)定出來俄延引、今日可着御河尻寺所也、前大納言邦綱卿山庄在件所也、明日可着御攝津福原亭（禪門亭也云々）、帥大納言（隆季、執事）、前大納言（邦綱）、藤大納言（實國）、新宰相中將（通親）、左中將隆房朝臣、右中辨兼光朝臣、宮內少輔棟範以下(候于イ)內(候カ)御共云々、前右大將（宗盛）、雖候御供、依禪門命自福原可被歸洛云々、依洛中之不定歟(盧候也イ)、

同四年五月廿六日丁丑(○上略)今夕入道大相國自福原入洛云々、(○下略)

同四年五月卅日辛巳　陰晴不定、早旦向東山、晚頭歸華、未剋許或者云、來月三日內院新院可令渡福原亭、士女稱遷都、子細無知之人、洛中騷動悲泣云々、

又云、二日(一イ)云々、(○下略)

同四年七月三日癸丑　天晴、法勝寺御八講也、如例公卿侍臣參入云々、上卿帥大納言（隆季）、祗候福原、仍假被仰中御門大納言（宗家）、辨又頭左中辨經房朝臣也、同祗候、仍權右中辨光雅朝臣假奉行也、（○下略）

同四年七月七日丁巳（○上略）帥大納言（隆季）昨日自福原着舊都、今日參入云々、

同四年七月八日戊午　陰晴不定、未剋時々雷鳴、（最勝光院雨不下、三條邊雹下云々、）午剋參最勝光院、依御八講初也、此御寺上卿大理、（時忠也（○也恐當作本文））而祗候福原、予可奉行之由被仰下也、（頭辨經房奉行也、）（○下略）

同四年七月九日己未（○上略）內侍甲斐（雅兼女）自福原參上云々、內侍等競望此役、依有歸舊都之志也、

同四年七月十五日乙丑　天晴、巳始剋參最勝光院、盂蘭瓮可奉行之由、先日自福原、爲頭辨奉行被仰下也、右少辨兼忠同可奉行云々、（○下略）

同四年七月十六日丙寅　天晴、午剋雨下、須臾止、今日於法勝寺被行如說仁王會、去月廿一日同御寺池蓮一莖有二花、依御祈新院令行給也、藏人頭左中辨經房朝臣奉（仰カ）兼召中袈裟於公卿侍臣、可被進請文之由被下仰、（予幷侍從忠季任催狀調獻袈裟一帖、示稱可加横被寺家不納云々、仍後日調加送之、）頭辨依爲法勝寺辨奉行之歟、但其身候福原、今日事權右中辨

光雅朝臣所奉行也、(中略)總在廳維禪云、千僧無御幸之時儀如此者、次引僧綱布施、申剋事了退出、依無御幸不設御所、此事先日於最勝光院師卿被示合云々、爲院御沙汰被行千僧之時、雖無御幸、猶設御所、(マヽ)得大寺左府爲上卿、冷泉中納言朝隆爲行事辨、被行千僧御讀經之時、雖御熊野詣之間、設御所、今御在所福原也、爲之如何、予曰、雖有御熊野詣之間例、可無御幸之條、不可有疑、不設御所之可有其謂也者、被就此議、凡今日事、十八日參福原之時於舟中記之、

同四年七月十九日己巳　天晴、未剋着野田、(在西宮松原如來東北五六町、)前大相國御坐也、中承雑事退出、深更着福原宿所、(下略)

同四年七月廿一日辛未　天晴、於福原被立山陵使、告申御卽位之由也、(下略)

同四年七月廿五日乙亥　天陰、被發遣祈雨奉幣於十三社者、廿二日三條大納言(實房)於福原被定申日時使等、卽又奏清書了、使王御馬申、今日於神祇官被發遣也、藏人左少辨行隆爲行事、八幡皇太后大夫(朝方)、賀茂右兵衞督(宗通)、松尾平野右京大夫(基家)、云々、

同四年七月廿八日戊寅　陰晴不定、未剋雷雨、卽休、

自今日法務大僧正禎喜於東寺修孔雀經法、新院御惱御祈也、(新院御所福原也、)後聞、新院御温氣未散、逐日御憔悴、今夜遷御藏人頭重衡朝臣宿所、日來御所平中納言(頼盛、)宿所爲惡所之由、陰陽等申云々、攝政御發心地未令發給云々、

同四年八月七日丁亥　陰晴不定、朝間時々雨、今日釋奠也、上卿闕如、可參勤之由、爲頭辨經房朝臣奉行、去二日有書札、仍參入、本分配三條大納言(實房、)在吹田、申故障歟、大學寮火事(已イ)以後、於官廳所被行也、(廟寮(○舍イ倉イ)殿燒、仍前祖所奉渡也、)以正廳爲廟堂、以西廳爲都堂、南門設上卿參議座、南門外東腋立平張二字爲廳屋代、申斜始參廟門、(駕毛車、)著門内兀子、式未置、召使取之召(々)使來云々、着座以前置也、(件式置折敷、無筥歟、)召使者先來向壬生辻邊追前、申云、辨(右中辨兼光朝臣也、)被申云、出立可尋(候歟イ)、予云、近年無其事云々、不可然(候歟ノ)、立北幄中、予召召使、相尋事之具否、申云、兩大外記(頼業、師尙、)大夫史(隆職、)仍福原、於頼業眞人者、爲參釋奠去比雖罷歸舊都、依火急召一昨日又參入了、六位外記近日有二人、一人候于福原、一人在舊都、而(申カ)部放生會上宰相闕如之由參福原、只今歸着鳥羽之由雖申達、未參入、史一人可參之處、未參入、遣召了、(○下略)

同四年八月八日戊子　天晴、頭辨經房朝臣奉新院仰、自福原有召、來十二日以

前可參入者、大嘗會事可被議云々、（以下略）

同四年八月十日庚寅　雨降、未剋止、日未出々舊都參福原、一昨日亥剋爲頭辨經房朝臣奉行、自新院有召、來十二日以前可參入云々、內々示送曰、今年猶可被行大嘗會歟之由可議定、不候于福原之人、左大臣、右大臣、下官有召、不及廣者、晩頭着河尻、乘輿向守部庄、（美作權守雅長入道預、在河尻乾、去都一里、）堂前立屋形宿、

同四年八月十一日辛卯　天晴、巳剋出守部、午剋着西宮、暫休息、未始（剋イ）出西宮、申終剋着福原宿所、依窮屈今日不參所々、告參入之由於頭辨、自大理許被送五色、

同四年八月十二日壬辰　天晴、未剋着束帶參內、乘輿、次參新院、左大將（實定、直衣）車、三條大納言（實房、束帶輿、）被祇候、頃之左府（直衣輿、）被參、相次帥大納言（隆季、直衣、）參入、良久頭辨經房朝臣參入、奉院宣仰左大臣、意趣內々書紙屋紙二通、一通者大膳權大夫泰親朝臣、掃部頭季弘朝臣、大外記賴業、大外記師尙、大夫史隆職等申狀、其後、陰陽頭在憲朝臣、助濟憲朝臣參入、又後一通者、頭辨云、爲備忘、各申狀粗注之、但見苦候歟、左府答何事之有哉之由、被乞取、次第見下之、候座之人、左大臣、左大將、帥卿、予等也、右府依所勞不被參入、頭辨

曰、非定議、只各評定可申也者、然而左府猶被目予、仍予發語云、方忌事在憲泰親朝臣申旨一同也、尤可被憚大將軍方歟、但偏被棄舊都者、當時皇居可爲御本所、自其所可被立方忌之處、此地非遷都儀、只爲離宮云々、仍可有憚儀歟、抑禁忌方不可遷本所忌之由申條、不審事也、延曆冬節遷御平安京、本所忌遷忌方之條顯然也歟、然而今依右(故イ)被定都有御猶豫者、如內儀、入道太政大臣終土木功、被新皇居、何事之有哉、但今年依可被行大嘗會、件造營之條首尾不相叶歟、其故今明雖被始造作、遂移徙之後被罷內裏遷幸之條、今月中不可叶、而九月可被造齋場所、不被定皇居、先被立齋場所之條、不可然事也、雖似避禁忌、相待彼所進(兼イ)(造イ)設齋場所、還有御自由之恐歟、今年新嘗會節會以前終彼造作、於大嘗會者、明年被行之、可宜歟、弘仁欲有遷都、雖不被遂(年イ)其事、事猶大嘗會延引、今度雖非遷都儀、已被遷皇居、非無事之條、任彼吉例、明年可被行歟、於離宮被行大嘗會之條、師尙勘申例尤可相准之上、於舊都一切不可被行者、不可及議、大嘗會營無方忌沙汰之條先例也、至齋場所者、有方忌之時避正方例也、而在憲朝臣當申方之由申條、猶晴難決、委可被尋事歟者、帥卿申云、大嘗會國大祀也、神慮難測、左右可在勅定者、左大將申云、

同予、左大臣申云、大略同予、今年强被行之條、還可有不法之恐、又齋場所幷引標之間、其地等可有沙汰者、頭辨參御所、申定事趣、歸出仰云、定申旨尤可然、不可及異議、於今者各可罷出者、仍左府以下退出、頭辨送書云、定申趣尤神妙思給者、大外記師尙云、朝家大事議定、五六輩之內、應召人々有珍重之氣色、隨令定申之趣神妙、左相府左將軍被奉同、不可申盡者、

今日福原賜地、皇居可被立之所南町一町也、爲輪田四郎則久沙汰、仍請取了、

同四年八月十三日癸巳　朝間天陰、申刻雨、頃之休、入夜雷雨、及曉晴、卯刻向輪田原歷覽、爲令居家人等點小松原二三町許、次向泊方、乘高瀨船差廻、登堤上望見南海、件船輪田四郎則久所沙汰進也、歸宿所、頃之刑部卿賴輔朝臣來、相次頭辨經房朝臣（着葛袴、）來、各（言歟）其談了被歸畢、申刻修理大夫經盛卿（直垂小袴、折烏帽子、）光臨、良久談雜事、被歸之後、着直衣參新院、次參內、進作馬一疋小鬮扇二枚、依御寢間、申置帥典侍退出、今日陪膳左中將泰通朝臣也、次參攝政殿、瘧病令落給爲悅申也、今日御物忌也、多武峯御體破裂事了、予同物忌也、然而不被閉門、仍參入、以近江介俊光朝臣申參入之由、被答云、所勞雖復例、未及起居、仍不見參者、即退出、秉燭之後凌甚雨俄歸舊都、依不違放生會忌

十五日以前爲入山城國境內也、今夜又攝津國可着生田忌(マヽ)、仍旁所營出也、途中雷雨失爲術、半更着大物乘船、于時雨止、留船於神崎、

同四年八月十七日丁酉　今日於福原有駒引事云々、(以下略)

同四年八月十九日己亥　後聞、今日亥刻、大理(時忠)室(內御乳母、帥典侍、)於福原宿所產男子云々、自舊都當大將軍方、

同四年八月廿二日壬寅　雨下、曉更參福原、一昨日自新院有召也、於富森邊天曙、於今津留船羞饌、申終刻着大物羞饌、日沒程乘輿、於武庫河邊臨暗、水深雜人步渡及胸、舁居輿於渡船渡河、戌刻着西宮宿所、今日神輿令出輪田御崎給、亥刻許還御本宮、在人等云、オレソキ於輪田有御祓也云々、御禊歟、
(以下略)

同四年八月廿三日　天晴、今日被發遣大奉幣云々、辰刻出西宮宿所、未刻着福原宿所、尋申參入之由於大理(時忠)、返報云、今日休息、明日令參院可宜歟者、仍不參所々、依近隣向給地歷覽、令打丈尺、四方或卅一二丈、或卌(卅イ)四五丈也、

同四年八月廿四日甲辰　天晴、未刻着直衣參內、次參新院、頃之別當參會、被披皇居差圖、前中納言雅賴圖之、若有難者可申者、件差圖面摸大內、少々縮

間數也、北方只如里亭、仍不可及評定、無殊可申事、但露臺西土庇離長橋言(立カ)之、臨時祭雨儀之時無往反路如何、此外事少々雖有所疑、非可事闕、此事可有違例、此旨粗申了、秉燭令出、(〇下略)

同四年八月廿五日乙巳　朝間時々雨下、午後甚雨、卯剋向給地見廻、大理(時忠)被來逢、遣召季貞、具福原差圖來、內裏以下人々賜地等、披差圖見之、頃之歸宿所、

同四年八月廿七日丁未　天晴、早旦向給地歷覽、頃之歸宿所、未剋着束帶參內、先是攝政參給、(八葉車、隨身乘移馬、)予先參殿上、今日被發遣宇佐和氣使、去九日被勘日時、藤大納言(實國)奉行、而去廿三日無音歸舊都、藏人宮內權少輔親經一昨日聞此旨、相尋並庄(大納言領)之處、昨日申剋使者歸來、申被歸舊都之由、當時祗候此離宮人、左大將(實定)、別當(時忠)、右衛門督(實家)、皆經服、予不參勤者必可闕如之由、去夜深更親經示送、仍所參入也、神寶於舊都被調之、昨日凌風雨着大物、今朝雨止風靜着葦屋濱、自件所々參着福原也、(〇下略)

同四年八月廿八日甲戌　陰晴不定、辰剋出福原宿所、今夜留船於吹田、(〇下略)

同四年九月五日甲寅　天晴、今夜前越中守盛俊福原宅燒亡、新院御所近隣、物

忿云々、（〇下略）

同四年九月六日乙卯　天晴、福原宿所棟門一字於舊都造畢、今日自堀川下畢、

同四年九月九日戊午　天晴、去六日頭辨（經房）返事申、自福原今日到來云、坂東大亂、遣追討使三人、右少將維盛朝臣、薩摩守忠度朝臣、武藏守知度等也、

同四年九月十二日辛酉　天陰、時々雨下、今日祈年穀奉幣定、出羽條事三ヶ條定云々、後日右兵衛督（家通）自福原歸舊都、所被示遣也、

又後聞、奉幣宣命被載頼朝叛逆、

同四年九月十三日壬戌　陰晴不定、及晩雲收月明、後聞、今日於福原有內印事、依頼朝叛逆追討使官符請印云々、上卿右衛門督（實宗）云々、付官符不可改、只內印許云々、

同四年九月廿日己巳　雨下風、福原宿所屋一字於舊都造畢、件屋具少々、（〇以下缺文歟）

（〇下略）

同四年九月廿二日辛未　天晴、今日東國追討使右少將維盛朝臣賜官符出福原、

同四年九月廿三日壬申　天陰、追討使昨日出福原、今日着六波羅云々、

今日有政、仍申剋參外記、宰相辨不參、少納言仲家參入、諸事如元、召使來

白(向イ)外記乾角引戸之由曳(申カ)之、甚雖然舊都事只隨彼等所爲、强不存式、入外記門、召使召入持深沓云々、雜色有若亡事也、太神宮々司祓成穢氣未決之間行御祭、仍可辨懸助(贖物カ)事、伊賀條事等請印也、

同四年九月廿九日戊寅　朝間陰、今曉東國追討使右少將維盛朝臣出六波羅家發云々、去廿二日出福原、廿三日着舊都、其後于今所逗留也、傳聞、上總守忠淸於此都忌十死一生日、少將云、於今者途中儀、於舊都可忌日次、忠淸云、六波羅者先祖舊宅也、爭不被忌者、如此間相論云々、

同四年十月五日甲申　天陰、未明出舊都參福原、於七條大宮天明、辰剋於鴨河尻乘船、酉剋着神崎渡上邊、今夜宿此所、

同四年十月六日乙酉　陰晴不定、午剋出神崎宿着大物、乘輿、於西宮勸盃饌、亥剋着福原、其時小雨、卽休、今日新院自伊都伎島御還向也、傳聞、去月廿八日御參宮之後大地震、但不及他國云々、掃部頭季弘朝臣候御共、占申公家御愼之由、

同四年十月七日丙戌　天晴、辰剋向給地、令木作宿所、今度工十餘人所相具也、未剋歸宿所、着直衣參新院、少將兼宗着束帶乘車後、大理於院被示曰、賴朝

已虜領安房國（頭辨知行國也）之由、頭辨經房朝臣付我奏新院、注進脚力申詞者、予乞取彼狀披見、駿河國住人五百餘騎發向伊豆國攻賴朝、賴朝黨引籠筥根山、八月晦日賴朝等出筥根山乘船、夜半着安房國、九月一日分與諸郡於與力輩、追捕人家、奪取調物、此旨具所注進也、晩頭御馬二疋御覽、府生佐伯國賢藍摺水干着葛袴騎御馬、秉燭之後參內、卽退出、

亥終剋有流星變云々、出於紀伊國方入福原東北山、其大如大土器、渡北斗中、餘輝二許丈、挾北斗在東西、流星入山之後其光不消、及一時曲折、又南山方其光不消一道殘、長五許尺、傳聞、掃部頭秀弘朝臣曰、本朝無此變、若是可謂天裂歟、希代之變也者、（以下略）

同四年十月八日丁亥　天晴、巳剋向給地見作事、未剋大理被渡西町、彼人給地也、依招引向件所、被示合造作間事、於木屋被勸酒饌、刑部少輔時光、左少將兼宗、相模前司有隆、侍從時宗等在此座、晩頭歸宿所、

同四年十月九日戊子　天晴、頭辨經房朝臣被來宿所、

夜陰自大理（時忠）許有書狀、禪門新造其遂（マヽ）可爲皇居寢殿、障子圖賢聖如何之由被示送、且可申合之由有命者、予答云、件條不打任事也、東三條寢殿只被畫山

水、代々聖主爲皇居之時更不被改之、雖擬南殿山水障子可有何難哉、但所詮可有御計、大入道殿以對屋清涼殿有補佐(鋪設カ)之由所承傳也、非無准據、左右可在御心者、

同四年十月十日己丑　天晴、向給地見作事、自去十六日唐船着輪田泊、今日遣侍男令交易藥種、

同四年十月十一日庚寅　天晴、早旦向給地見作事、未刻歸宿所、着直衣參新院、次參內、主上有出御、

今日可有攝政初度表、而當日俄延引、

今日伯可有復任事、而依上表事有憚、仍延引、而上表延引、須被行之處不具、仍不(被)行之、(〇下略)

同四年十月十二日辛卯　天晴、早旦向給地、立門二字、居東廊礎、晩陰(頭イ)歸宿所、

同四年十月十三日壬辰　天陰、今夜依御方違行幸前右大將宗盛家、夜陰召使來告留守之由、雖答承之由殿(後イ)參內、依騎馬所勞不供奉也、左少將兼宗相伴、花山院中納言兼雅、別當時忠、藤中納言成範、右宰相中將實守、前大貳親信、新宰相中將通親、供奉、少納

言惟基奏鈴、於大將亭同有奏、公卿向御殿中門南方、東上北面列立、件所三間四面寢殿、東庇巡當中門廊、仍東方無所之故(也)云々、抑此御方違者自舊都被違大將軍方（福原當申方、）也、被用泰親朝臣說也、遷御大將軍方之後四十五日、一度雖同方令宿他所御、可令深忌御之由所申也、是爲先例云々、而在憲朝臣後日聞之（初度行幸之時在憲在舊都、）申云、於同大將軍者、雖令宿他所、便更不可有被違其之儀、是偏泰親朝臣今案也者、仍去夜被問人々、帥大納言（隆季、）新大納言（宗家、）予等也、予申云、兩家之所習難決申、泰親朝臣申有例之由、先被尋彼例之後、以勘申狀被問在憲朝臣、隨例之有無幷吉否可被計行歟者、兩亞相被申旨大概又如此云云、而在憲泰親在舊都、忽難決之間、於今者任先々儀可有行幸之由、被仰下云々、今日福原宿所上棟也、所讓與之男長房從者來行其間事、

同四年十月十四日癸巳　雨降、午後休止、早旦向給地見作事、申剋歸宿所、今日有攝政初度上表、予可勤勅使之由、先日以頭辨經房朝臣示送、仍申終剋着束帶先參新院、少將兼宗在共、及晩參內、中務權大輔經家朝臣自舊都未參着間遂不付內侍所、其間予着陣、藏人季隆（右衞門權佐親雅男、）依可從事也、（以下略）

同四年十月十七日丙申　天晴、早旦左衞門權佐光長來宿所、着葛淺黄水干葛袴、

巳剋向給地山、未剋歸宿所、今朝藏人左少辨行隆(直垂小袴、)來、予給地見作事云々、

(〇下略)

同四年十月廿一日庚子　天晴、早旦向新造宿所、大理(〇被脱カ)着(綾茶染直垂、)居相具侍從時宗被渡、藏人左衞門權佐光長(葛權水干、白葛袴、)右衞門權佐親雅(白襖、)安房守定長(紺水干、葛袴、)相模前司有隆(藍摺水干、葛袴、)又大理有勸誘、晩頭分散、

今夜此新造宿所有移徙事、自舊都依當將軍方、讓與此地於井(升イ)戸次郎長房、仍彼男今夜所渡也、着水干袴云々、權漏剋博士季親着束帶勤反閇、與祿大褂一重、(去十四日攝政上表之時予爲救使所賜之祿也、)令予付取之、先是季親打封於帳中、無黄牛水火等、

同四年十月廿四日癸卯　天晴、北風烈、今曉出福原向舊都、於都賀天明、午剋着河尻、戌剋着桂下宿、舟中老臥寒浪底、難堪忍者也、

同四年十月廿七日丙午(〇上略)

今日被發祈年穀奉幣、自舊都神祇官被發遣、上卿左大將(實定、)辨右少辨兼忠、八幡使藤中納言(成範、)賀茂右京大夫(基家、)松尾一條三位(實清、)平野法住寺三位(雅長、)云々、此奉幣自去八月四ヶ度延引、尤爲奇、今度被勘改日時(イ无)直宣命、予(於カ)福原去十七日所奉行也、十月祈年穀希代事歟、但有例云々、

同四年十月廿八日丁未　天晴、今日大乘會結願也、仍未剋參法勝寺、朝座間也、源大納言(定房)一人被候座、予暫入西戸、於長床與頭辨經房朝臣(行事辨)雜談、朝座了僧徒退下、予着堂前座、不解劒、例也、頭辨進西南壇上、於此所上卿遙被目、可打鐘之由也、衆僧引列昇、講詒(論カ)了賜布施、講師料頭辨取之、長床僧綱以下右馬權頭基輔朝臣堂童子隼人正清定內藏助倫仲取、講師退出、次有行香、惣在廳經緣居正面戸外、圖書官人又過間居、此後源大納言、予、右京大夫(基家、朝座間被參也、)頭辨、右馬權頭、大外記師尚、堂童子二人列居、預等自行香机下至于戸內列立、次第傳輪授圖書官人、官人傳惣在廳、惣在廳傳公卿也、相引立正面東間以東、圖書官(人カ)取火舍、次西行々香、列正面西間以西、次如初列居正面、返輪各復座退出、于時申剋、法勝寺事師大納言(隆季)奉行也、而候新都、仍修(候イ)此會事許被仰源大納言、依東國逆亂事被止舞樂、頭辨云、欲被行定考之時、新大納言(宗家)於福原請殿下處分、被仰云、停止可宜者、而定考延引于今不被行、依蒙此處分、大納言被行圓宗寺最勝會之時被止樂了、此旨申源大納言之處、有沙汰已被止最勝會樂了、可隨彼儀歟者、仍止之、將門亂時正月節會止樂云々、頭辨曰、賴朝黨進出駿河國富士河邊合戰、追討使官軍敗向伊勢國之由風聞者、

同四年十一月六日甲寅（○上略）

或者云、追討使右少將維盛朝臣今曉入舊都六波羅、九月十八日着駿河國、同十九日頼朝黨營于不志河送使、不知其狀、維盛朝臣問所爲於忠景、忠景曰、兵法不斬使者、然而此條私合戰之時事也、今爲追討使、可及返答哉、先問彼方子細可斬者、維盛朝臣從此言令痛問、使者云、軍兵有數萬、敢不可爲敵對者、問此後斬首了、或難此事云々、官兵纔千餘騎、更不可及合戰、兼又諸國兵仕（士カ）內心皆在頼朝、官兵互恐異心、暫逗留者欲圍塞後陣云々、忠景等聞此事無欲戰之心之間、宿傍池鳥數萬俄飛去、其羽音成雷、官兵皆疑軍兵之寄來夜中引退、上下競走、自燒宿之座（屋カ）形中持雜具等、忠度知度不知此事、追退歸、忠景向伊勢國、京師維盛朝臣入京、着近州野路之時有五六十騎云々、此事或感之、兵法引退隨事無難之故也、或又謗之、近日門々戸々虛言甚多、此事定少實歟、然而閭巷說隨聞及粗注、後日頭辨經房示送曰、東國追討事、平中納言（頼盛）平宰相（教盛）可下向之由雖有沙汰、先伊勢守清綱定安自海道可下向云々、又鎮西武士自船可遣云々、薩摩守忠度朝臣參川守知度、筑前守貞俊、大夫尉忠綱留參河國、右少將維盛朝臣在近江國之由所聞也、新都有歎息氣、又今日（六日）也、

權右中辨光雅朝臣應撰、爲語美濃源氏等可下向之由、昨日(五日)被仰下、萬人奇驚之間被改算博士廣房、而今日(六日)又被改史生、臨夕又停止云々、或山僧來曰、衆徒强盛發起、訴可令還御舊都之由、有重々案不可言、座主於假治井行調伏法、依東國(亂カ)也、衆徒嘲之、一山不同心云々、彼日頭辨經房朝臣示送曰、今日被仰昇殿人々、右大辨重方朝臣、侍從實保、侍從隆保、因幡守隆清等也者、

同四年十一月十三日辛酉　天陰、臨夕時々小雨、可有還御舊都之由、閭巷謳哥、定訛言歟、

同四年十一月十六日甲子　陰晴不定、風烈、出河陽宿、於神崎渡乘輿、出松原如來東、其間路甚狹善道、申剋着福原宿所、秉燭之後向花山納言宿所、被羞酒饌、及陰(深カ)更歸華、

同四年十一月十九日丁卯　天晴、今日童御覽云々、後聞、御殿無便宜、仍南殿母屋懸御簾、以南廂擬弘庇云々、予案之、爲此儀者雖御殿何放出哉、四條殿近衞殿之時只於簀子有御覽歟、又陣床後及軒廊渡長橋爲座上路、中宮殿上南殿西簀子尤有便宜、何强構長橋哉、左大將(實定輕服)、別當(時忠)、右宰相中將(實守輕服)、新宰相

中將(通親)、依召候御前、藤大納言(實國)、因幡兩所童有御覽云々、不被憚東國亂歟、新嘗會於舊都於神祇官所被行也、其間事先日被問人々、今夕花山納言被來入予宿所、丹波前司行雅、侍從兼經在共、羞酒饌、及半漏被歸了、

同四年十一月廿日戊辰　天晴、秉燭參新院、少將在車後、攝政被參、依仰被參御前、予參內、(福原新造皇居也、)良久被始行節會、有出御、內辨左大將(實定)、外辨三條大納言(實房)、藤大納言(實國)、新大納言(宗家)、花山院中納言(兼雅)、予、右兵衛督(家通)、右宰相中將(實宗)、三位中將(實賴)、藤宰相(定能)、新宰相中將(通親)、着座之後卽訪五節所、內辨一人留候、小忌未參會、且被行也、去夜於舊都被行新嘗會、曉晤(晚膳ノ)以後可馳參也、予不復御前座退出、明曉可歸舊都之故也、頭辨云、還御舊都日次今日被定仰了、來廿三日御出門可幸土御門大納言亭、(福原新造亭也、)廿四日可着御同人山庄寺江亭、廿五日可着御木津殿、廿六日可有行幸同新五條亭者、新院御八條殿御所云々、

同四年十一月廿一日己巳　天晴、曉天出福原宿所、於筒居邊天曙、午刻着河尻乘船、秉燭至于江口上五六町、宿船、

同四年十一月廿二日庚午　天陰、曉天月出之後出船、於淀邊小雨、申終刻着草津乘車、秉燭之後歸三條、去廿日近江國已同心東國、飛驒守景家郞等五六騎

向伊勢國之內、近江國人等射(討イ)殺之、斬三人首懸勢多、水海船皆付東岸、往來不通云々、

依可有還都今日新院有御出門、御幸本皇居、(禪門家、雪御所北也、)云々、

同四年十一月廿三日辛未　朝間雨下、或者云、故義貞子某、住攝津國豐嶋故親弘跡(孫イ)也、件男昨日燒豐島宅夜中馳出今朝過此京向近江國、兄等在彼國之故也、伊多美武者所ムム、追之至于山科、然而早以入近江了、仍空歸云々、傳聞有還都事、出福原皇居行幸前大納言邦綱卿家、件所同福原內也、是御出門儀云々、

同四年十一月廿四日壬申　天陰、自前大相國被仰遣云、東國逆亂及近江國、仍自福原還御事延引、今日前右大將(宗盛)可着此京、爲討江州云々、風聞如此、京中不安閑歟、爲之如何、予則參彼殿(花山院)、申承雜事、申剋向東山、晩頭歸三條、自福原行幸寺江邦綱卿家、法皇御坐御船、新院御法眼丶丶房云々、新院御車、依御惱別當三位(御乳母、邦綱卿女也)候御車、法皇御輿云々、

同四年十一月廿五日癸酉　陰晴不定、風烈、今日出御寺江可着御木津殿云々、而依風留御船於唐崎云々、彼日新宰相中將(通親)云、本儀雖着御木津不可下御云云、(○下略)

○元亨釋書 卷第二十六 新訂增補國史大系本

資治表七

起二寛治一盡二建暦一合十二君

○中略

嘉應皇帝

○中略

四年。春三月。沙門公顯爲二僧正一。夏。秋。冬十月。平太師清盛營二法華道場一。

承安二年十月十五。平太師營二道場于福原一修二法華法一。(後白河)道皇爲二大阿闍梨一。

○中略

十有二年。春二月癸卯。天皇禪二位于皇太子一。夏六月。遷二都于攝州福原一。秋。冬十有一月辛未。復レ都。十有二月。太師清盛燒二南寺一。

治承四年二月讓位。二十一也。六月初二。平太師(清盛)奉二幼主一遷都。睿山大衆捧レ状。奏二新舊二京利害一凡十七條。褒レ舊貶レ新。因レ此十一月二十三。翠華至レ自二福原一。六月遷都。曷爲不レ日。都城不レ成也。寶字四年之遷逾レ歳。曷爲不レ日。雖レ逾レ歳不レ成

同。（〇下略）

○兵範記 京都帝國大學所藏本

仁安四年

三月

〇中略

廿日丙子（〇中略）

〇裏書
廿日

今日未刻上皇着御入道大相國福原御所云々一昨日自高野還御今朝自天皇寺着御云々廿一日丁丑天晴國忌廢務

今日入道太相國福原被供養千部法華經卽令誦持僧千口讀誦天台座主權僧正明雲爲導師上皇臨幸御齋庭

○顯廣王記 安元三 端欠 京都帝國大學寄託賀茂御祖神社藏本

三月小建

○中略

廿日庚申院御幸福原依千僧也凢件千僧貴重之事歟

○中略

五月小建

○中略

廿一日庚申明雲被流伊豆國雖無天台座主配流之例依勅定歟奉下上卿別當右頭中將

廿三日壬戌前座主被向配處之間山大衆二千人許遮近江國ミ分寺中路奪取其身登山了座主頻雖被固辭衆徒敢無承知以外ミミ違勅ミミ也召居兩大將可固坂本之山有院宣等向先可仰入道隨其左右之由兩人被遁申云ミ仍爲御使今朝字平內左衞門馳向福原、

廿五日甲子入道殿御返事不分明歟雖然申時入道被入洛

○中略

廿九日戊辰夜半被搦取西光云ミ可有故自申刻軍兵等充滿洛中馳散上下

六月大建

〇中略

廿三日辛卯鑄師隼大夫正依下給中馬一疋金物不足料物上今日丹波少將向福原云云此事無懺云〻

〇古今著聞集 卷第二 新訂增補國史大系本

釋教第二

承安二年三月十五日。六波羅(清盛)太政入道福原にて持經者千僧にて法花經を轉讀する事ありけり。件の經以下御布施まで諸院宮上達部殿上人北面までも。藏人右少弁親宗が奉行にてすゝめけり。法皇御幸成て其一口にいらせおはしましけり。法印三人が御行道ありけり。諸國の土民結緣のために。あるひは針或は餅四五枚など引けり。法皇もうけさせ給ひけり。濱にかりやをつくりて道場にはせられたりけり。佛は一千體ぞおはしましける。又四十八壇の阿彌陀護摩も有けり。法皇も其中にくはゝらせ給ひけり。十七日まで三ケ日にてぞ轉讀し奉りける。導師法印公顯勸賞に僧正になされにけり。公顯僧正上洛の後。師匠の法印公舜弟子にこえられながら。よろこびのためにきたられぬ。公顯申されけるは。ま

づなしまいらせてこそ罷成べきに。内外について其おそれ侍り。さりながらかみならせ給はゞ僧正の上にゐたてまつらん事驚くべきにあらず。法印として僧正のでしもちて上にゐたらんこそ。希代の事にて侍らめとこしらへけり。法印歸る時庭中まで送りければ。法印なく〳〵謝せられけるとぞ。

○清獬眼抄 新校群書類從本

凶事。

一流人事。

○中略

松殿配流事。

後清錄記云。治承三年己亥十一月十四日戊辰。天霽。大政入道自福原入洛。申時許。御共軍兵等數百騎云々。右大將。宗盛卿。爲扈從上洛云々。定有事歟之由。天下諸人推之。

十五日己巳。天晴。仁和寺舍利會。予着冠所參勤也。夜半許。有除目。是非院御沙汰云々。拜任云。解官云。偏爲大政入道家御沙汰也。配流人々不知罪過何

事一也。
關白內大臣藤原朝臣基通近衞二位中將。大政入道御聟也。
解官中納言中將師家八歲松殿御息也。
上卿源中納言雅賴。（〇下略）

〇達幸故實抄　第三　新校群書類從本

參議要部付散位。

〇中略

一行幸間事。

〇中略

叙位書樣事。

承安元十一九日。參內。着二奧座一。頭弁來仰云。正五位下能盛。左衞門尉盛國。左兵衞尉平貞綱。盛國可レ爲二撿非違使一。各福原家賞。予着レ端令レ敷レ軾。召二外記一召二硯紙一。亦非二折堺一之紙同可レ進之由仰レ之。依可レ令レ書二叙位一也。予令二官人招一頭弁一。弁取レ笏着二横敷一。今日宰相不參也。先書二除目一。次書二叙位一。

顯弁位姓名書連之。自成不審問予。々答曰。書正五位下。其傍下一字。可書姓朝臣名者。書了持來。見之無朝臣。然而依及深更追密々可被書入歟之由示了。

○一代要記 己集 史籍集覽本

第八十　高倉天皇大宋孝宗乾道六年己丑

○中略

○承安元年辛卯、(○中略)○二年壬辰、(○中略)十月十五日三箇日、入道前太政大臣、於攝州輪田濱、令修千壇阿彌陀供、令修法花法、(○下略)

第八十一　安德天皇宋孝宗淳熈八年辛丑

諱言仁、高倉第一子、母中宮建禮門院平德子、太政大臣淸盛女、治承二年十一月十二日誕生、同年十二月七日爲親王、同十五日爲皇太子、同四年二月二十一日受禪、年三歲、(○中略)六月二日行幸攝州福原、(○下略)

第八十二　後鳥羽天皇大宋孝宗淳熈十二年甲辰

○中略

元暦元年甲辰、(〇中略)正月比、平家悉赴二西國一、福原南群居、以二一谷一爲二城郭一、其勢六萬騎、二月七日、義經自レ京率二東國勢一、自二二方一(丹波路攝津路)寄戰、自二卯刻一至二巳刻一、平家落了、大將軍十人打取了、重衡被二生取一也、凡所二打取一、上下三百餘人云云、主上並女房等乘レ船逃了、(〇下略)

〇歴代皇紀　卷四　(史籍集覽本)

〇第一段　八十
高倉天皇(諱憲仁)

〇中略

〇第二段
承安四年(辛卯)(四月廿一日)

(〇上略)　〇二年十月十五日至十七日三ヶ日於輪田濱入道大相國十(千イ)壇阿彌陀供養法幷四十八壇同護摩中央建法花道場修法華法太阿闍梨太上法皇一身阿闍梨伴僧廿人皆智證門人僧綱八人有職十人非職二人
護摩壇權僧正公顯護摩阿闍梨仁和寺法親王山法親王前大僧正覺忠自余僧綱濟々
(〇下略)

〇裏書第一段
裏書云

高倉十二年　嘉應二　承安四　安元二　治承四

叡山訴事者（○中略）其後山洛合戰之由天下大騷動而禪門大相國自福原上洛經一兩日人以不審之同六月朔日西光入道被召八條亭卽又召大納言成親西光斬首事其外法勝寺執行僧都俊寛檢非違使康頼信房等被召捕事（日記在別）件輩幷大納言子息等皆以被遠流事（○中略）

○裏書第二段

治承三年十一月（○中略）同十一月十三日平禪閤自福原上洛　同十六日奪取關白任二位中將基通卽日宣下關白內大臣等　同十六日解官人五十余人太政大臣師長大納言按察使源資賢中納言中將師家前關白息　三位中將隆忠同太宰大貳三位信親信參議右兵衞督光能等已上公卿自余殿上人院北面受領等日記在別　同十八日奉追籠一院於鳥羽殿關白配流之追討使康綱大夫尉關白御宿徒（淀イ）間之家兩三日間御出家其間京中偏軍陣也太政大臣配流尾張國（於國出家）資賢幷子息少將等兩三人丹波國北面受領衞府配流之輩委不注之（○下略）

裏書第四段

●僧正

○中略

大尋範　法務興福寺別當承安二年三月廿二日轉之

正覺讃　同日轉

權公顯　元法印大僧都同日任輪田千僧導師賞

○第一段
八十一　安德天皇　諱言仁

○中略

○第二段
治承四年四月廿九日（○中略）同六月二日福原卒爾行幸一院新院攝政諸公卿等皆以扈從人不知其由凡希代事也其後右京荒蕪未渡新都諸女院幷右大臣許也可被立新都所等未定云々卽福原幷攝津小矢野播磨國伊那美野等也　伊豆國流人前兵衞佐源賴朝（故義朝男）謀反之由風聞　同八月比也與力源氏等有其數東國勇士大略同心甲斐國武田等殊張本云々　同八月廿六日禪閤方人大庭三郎景親等於相模國與賴朝度々合戰雖然賴朝彌增軍勢仍被下追討使少將維盛（故內大臣重盛息）薩摩守忠度（禪門息）等也九月廿八日出福原京付古京次日下向關東以上總守忠淸（維盛乳母夫也）爲宿老下着駿河國富士川邊源氏等來向云々而無指事官軍逃去歸京維盛十一月五日入京仍源氏等彌載勝押領近江國以東諸國一切不通人近江美乃源氏皆以與力東國然間又南都同心于東國稱有官宣猶謀反然間遷都事萬人憂腦春山衆徒頻可有還

右恐誤古

都之由訴申　同十一月廿三日還古京行幸件日御門出福原次日公家一統新院行付寺江神崎次付御桂本(依大風不至大津殿)廿六日着古京公家五條内裏一院泉殿(六波羅)新院池殿(同六波羅中納言頼盛家)禪閤諸公卿等皆以歸洛(○下略)

○裏書第一段
裏書云

安德三　養和一　壽永二

○中略

●壽永二年

(○上略)同六月一日(○中略)同十一日肥後守貞能自鎭西上洛付福原　同十八日入京其勢七千(十イ)騎云々相具源八爲朝息頸キクチハラタ等扈從云々

○中略

○第一段
八十二諱尊成
後鳥羽天皇

○中略

○第二段
○壽永三年正月廿日(○中略)○同三年正二月比平家悉發西國軍勢福原以南郡居播磨室并一谷邊以一谷爲其城重々堀池等以外其勢六萬騎云々同二月七日東國九郎

加羽保田等自京率東國勢寄自南方(丹波路攝津路)七日卯剋合戰自後山傷入放火至已時平家散々落了大將軍十人(平家族也交名有別參位中將重衡生取)打取之前帝并女房等前内大臣等中納言教盛知盛參議經盛等乘船逃了凡所打取上下千三百餘人其内生取東丶丶國勢二萬騎許云々(○下略)

○帝王編年紀 卷第二十二(存採叢書本)

第八十代
高倉院(諱憲仁云童帝當大宋十一代孝宗)

○中略

承安四年(嘉應三年四月廿一日改元依太一御命期御愼并天變)

元年辛卯正月帝御元服

○中略

今年入道大相國(清盛公)於福原輪田泊(攝津國八部郡)始被築島于時龍嫌起風陽候擧浪不得防固爰理(埋)一人祭海神石面書寫一切經卽以其石得修固號曰經島爾而已降上下無煩舟既全泊者行基菩薩之草創(天平年中)島者入道相國之興隆也行基是文珠應迹相國又匪直之人歟其由粗見清澄寺慈心上人傳上人依閻羅請到彼閻王宮之人也同四

年甲午七月廿七日有相撲節
十月十五日至十七日三箇日於福原輪田濱入道大相國被修千壇阿彌陀供養法幷四十八壇同護摩大阿闍梨太上法皇伴侶二十人被用園城寺僧綱有職等護摩壇權僧正公顯（本覺院）仁和寺法親王前大僧正覺忠自餘僧綱濟々覺忠僧正（法性寺殿息）蒙一座宣旨依十（千）壇行法其濱謂千僧矣

○中略

治承四年（安元三年八月四日改元依大極殿火事幷天變也）

○中略

同四年庚子二月廿一日癸卯（厭對日）讓位於皇太子（言仁三歲）（○中略）
六月二日相國禪門俄申行遷都之儀行幸御幸法皇密々渡御攝籙已下悉以追從即着御攝州福原別業爲皇居或印南野或昆陽野帝都之地有評定然而遂被定福原畢新都之儀天下愁穎（類イ）何事如之哉

○中略

九月新院幸伊都伎島（安藝國佐伯郡）
十月六日還御于福原新都

○中略
十一月廿三日去福原新都有還幸古平安京今夜宿寺江廿四日宿辛崎廿六日入洛
主上還幸五條內裏是依山門奏狀也

○皇代記 新校群書類従本

人代。
○中略
高倉天皇（○中略）
首書 承安二年壬辰平相國福原和田泊始築經島。（○下略）
安德天皇。諱言仁。平德子。高倉第一子。母建禮門院入道太政大臣平清盛公女。 治三年。養和一。壽永二。 治承二年戊戌十一月十二日辛未々時誕生。 十二月八日親王宣旨。 同十四日癸卯爲皇太子。年一 同四年正月廿日著袴眞菜。 同二月廿一日癸卯受禪。三歲。 四月廿二日甲辰卽位於紫宸殿。 六月二日癸未行幸攝州福原。入道大相國別業。 是爲遷都云々。 兩院御幸。 內侍所同渡御。 十一月六日遷幸。

六日恐廿六日遷恐誤還

○皇年代略記 新校群書類從本

童帝
安德天皇 諱言仁。高倉第一子。母建禮門院。子時中宮德子。入道太政大臣平清盛女。 在位三年。治承二年戊戌十一月十二日誕生。六波羅亭。十二月八日爲親王。同十五日甲辰立太子。一。四年庚子正月廿日癸酉着袴。三。二月廿一日癸卯受禪。三。四月廿二日甲辰即位。紫宸殿。依大極殿燒亡也。六月二日癸未遷都於攝州。今日行幸福原宮。號平野殿。十一月廿六日還幸平安城宮。五條。(○下略)

首書
治承四四廿九大風。閏五月十五高倉宮追捕。宮逃去入園城寺。同六月二日福原遷都。遷都日主上桑〔乘歟〕鳳輦。御乳母帥典侍奉抱之。中宮依御不豫駕網代御輿。密々行啓。十一廿二遷幸故郷。治承五正十四高倉院崩御。天下諒闇。萬機如元一院聞食。同八月賴朝有謀反之聞。養和元二年天下飢饉兵亂旱魃餓死疫癘。來月自福原可有播磨國伊那比野之由被定之云云。(○下略)

四歲幼主始
後鳥羽院。諱尊成。高倉第三子。母七條院。故正三位贈左大臣藤原信隆女。 在位十五年。

(○中略)

首書
壽永二八十一被行源氏勸賞除目。十十四大地震。十一十九義仲於法住寺合戰。三年正二月之比平家悉没落西國。以一谷爲其城。二七一谷城攻落。前

帝前内大臣以下乘船逃脫。（〇下略）

〇皇帝紀抄 第七 新校群書類從本

當唐太上皇乾道五年
高倉院。諱憲仁。後白河院第三皇子。母建春門院。贈左大臣平時信女。
八十代童帝
御宇十二年。仁安三年二月十九日受禪。年八。三月廿日即位大極殿。治承四年二月廿一日遜位。同五年正月十四日崩六波羅亭。年廿一。同夜奉殯斂清閑寺邊。

當乾道
嘉應二年。仁安四年四月九日改元。依即位也。

（〇中略）

（〇此間缺文）

當淳熙元年
四年（承安）七月廿七日。有相撲節。十月十五日至十七日三箇日。於福原輪田濱。入道大相國修千壇阿彌陀供養法并四十八壇同護摩。大阿闍梨太上法皇。伴侶廿人。被用園城寺僧綱有職等。護摩壇權僧正公顯。仁和寺法親王。前大僧正覺忠。自餘僧綱濟々。覺忠僧正蒙一座宣旨。

（〇中略）

當同四年
治承四年。安元三年。依

(〇中略)

四年四月廿九日。(〇中略)六月二日。相國禪門。俄申行遷都之儀。行幸御幸法皇密々渡御。攝籙已下悉以追從。卽著御攝州福原別業爲皇居。或印南野。或昆陽野。帝都之地有評定。然而遂被定福原了。新都之儀。天下愁嘆何事如之哉。十一月廿三日。去福原新都有還幸平安古京。今夜宿寺江。廿四日宿辛崎。廿六日入洛。主上還幸五條內裡。

(〇中略)

當唐太上皇淳熈八年
安德天皇。諱言仁。高倉院第一皇子。母建禮門院。入道太政大臣清盛公女。
八十一代童帝
御宇三年。治承四年二月廿四日受禪。年三。同四月廿二日即位紫宸殿。同六月二日行幸攝津國福原。同九月依關東謀叛。同廿八日平氏等發向。十一月廿三日出新都。赴古京。同廿六日遷幸平安京。壽永二年七月廿五日赴西國。元暦二年三月廿四日於長門國團浦入海。頭書無御書始八十島使等。

(〇中略)

後鳥羽院
一院。諱尊成。高倉院第三皇子。母七條院。修理大夫信隆卿女。
八十二代童帝

御宇十五年。壽永二年八月廿日受禪。年四。元曆元年七月廿六日卽位於太政官廳。文治六年正月三日於大內御元服。十一。建久九年正月十一日遜位。此時內侍所神璽寶劍自西海未歸王府。每事新儀也。

（〇中略）

元曆一年當淳熙十一年壽永三年四月改元。依卽位也。

元年正月廿日。（〇中略）二月七日。義經。範賴。義定等。發向福原。於一谷合戰。平氏日來歸住。雖構城廓悉以退散。其中重衡卿一人生虜。前內府奉具先帝。乘船迯了。（〇下略）

〇高野春秋編年輯錄 卷第七 大日本佛教全書本

治承四庚子年春正月朔日。（〇中略）

夏六月三日。遷都於攝州福原。天子上皇行幸。百官相隨供。怖入道相國之惡行也。御願山寺各拜賀。殊當山者平相國御歸依故。寺僧可遂參祝歟。此事未考古史也。

（〇中略）

十二月　日。淸盛揚言退去福原。遷復舊都矣。境地狹。殊不吉相續。貴賤不樂。

（〇中略）

壽永元壬寅年春正月朔。(〇中略)

二年癸卯春正月朔。(〇中略)

秋七月廿五日。平氏擁二安德天皇一。避二京城一遜二福原一。是依下木曾義仲及源行家登二陣于叡山一。直二下洛中一。故不上レ克レ留レ足也。(大變故記レ之。)

中世の兵庫及び附近に關する資料

○大乘院日記目錄（内閣文庫本）

治承四年六月三日

遷都於福原十一月廿六日歸都

　元曆元年二月七日

一谷合戰打洛(落)平家一門了

　觀應二年二月廿七日

夜呂山石塔以下合戰打負テ尊氏以下松岡城ニ引籠饗(アヘ)庭命鶴丸依申沙汰惠源寺御

合躰無爲師直師泰舍弟出家入道尊氏上洛ノ於路次被打師直師泰(武藏入道)了

　應永廿年

閇門事

○魚住大輪田造築太政官符（攝津國古文書）

太政官符攝津國司
應任東大寺大和尙重源申請知識不論神社佛寺權門勢家庄薗公地令伐川造築魚住太輪田泊等石掠幷一州小嶋析材柯木竹等點進津津破損船瓦兼雇役河尻邊在家人夫事
右得重源去四月廿八日奏狀偁重源敬稽舊記魚住泊者天平之昔行基菩薩所建立也弘仁之間破壞年久天長九年依故右大臣淸原眞人奏狀殊降叡旨早令作治自承和末癈而□修貞觀九年東大寺僧賢和伏請天裁更致修固不終其功空以入滅延喜年中淸行朝臣雖上報事未及營築濱岸彌頽地域遂亡每至雲陰月暗風急星稀莫不落抗弃攬東呼西叫回茲近世山陽南海西海三道公私之船十之八九居然漂沒於是彼泊住人近邊僧侶等歎曰此泊之爲躰也非啻舟船失利之憂遂有人徒損命之悲自非上人誰救此難請任舊跡早企新功且是行基菩薩勸衆庶人成東大寺碩德之餘復修此泊倩見當時之次第盍躡天平之蹤跡者重源且發大願且依宣旨東大寺大佛殿南中門等纔雖建立其餘堂舍未造已多廻何秘計支此大營再三雖辭遁緇素尙固請若奪其志奈菩提何仍

愁以然諾試試相勵其上大和尙田泊者古今之間或雖修複二十年來石掠頹壞風波相突舳艫易迷河尻一洲者洪濤湧湧萬里無岸廣潟浩浩四面受風既來而□(欲)入河尻不待而空沒海底二所之煩蓋又如此既謂普濟何弃此所況乎慇懃之趣更出綸綸哉然猶貧道之身更無獨營之力勸進之行恐少同心之人是以殊被宣下欲唱知識其川度一者不論三道諸國幷神社佛寺權門勢家庄領運上米內斛別一升可分得之一者修築之固欲川舟瓦彼三道國衙者一郡別一艘庄園者一所別一艘可被宛召之即自其本所各欲被送着一者和泉攝津播磨備前備中紀伊伊勢淡路讚岐阿波等十箇國津津浦浦幷河尻淀津等破損之船多以有之各可令點之一者山城河內攝津播磨淡路等五箇國不論庄公材柯析木幷竹等可令伐用之兼又攝津播磨淡路三箇國幷河尻在家等者修復處所亡得便宜各雇人夫欲令使仕愁而言之雖似一旦之煩費豈非萬代之勝業上奏之旨必垂哀憐望請天慈上件條々被下宣旨令遂修造者忝誇聖主授手之仁將休庶民咽淚之瞀(愁)者右大臣宣奉勅依請者國司宜承知依宣行之符到奉行

左中辨藤原朝臣　　右大史三善朝臣

建久七年六月三日

○一遍上人縁起 同縁起

去程に兵庫よりむかひに舟を奉りけれともいなみの邊にて臨終をへき由思ひすれ共いつくも利益のためなれは進退縁にまかせへしとて兵庫の嶋へ渡り給ふ扨兵庫の嶋へ渡て觀音堂に宿給ふ其比他阿彌陀佛病惱の有けるに聖曰我をてに臨終ちかつきぬ他阿彌陀佛はいまた化縁つきぬ人なれは能々看病すへきよしのたまふ然るに所々の長老達出來て御教化につきて機の三業をはなれて念佛ひとり往生の法と領解し侍りぬ然而なを冣後の法問請たまはらんと申けれは三業の外の念佛に同すといへ共たゝことはかりにて義理をも心得す一念發心もせぬ人とものとて他阿彌陀佛南無阿彌陀佛はうれしきかとの給ひけれはやかて他阿彌陀佛落涙し給ふ上人も涙をなかし給ひけるにこそたゝ人にあらす化導をも受繼へき人なりと申あひけれさて遺誡の法問をかき給ふ其詞に云五蘊の中に衆生をやまする病なし四大の中に衆生をなやます煩惱なし本性の一念を背て五欲を家とし三毒を食として三惡道の苦をうくる事自業自得の道理也然はみつから一念發心さすより外は三世諸佛のゑひもをよはさる所なり

八月中旬より病悩いよ〳〵増氣して臨終ちかつき給とふらひに人も來り書札なとありけれハ他阿彌陀佛もからひて返事せらるへし今ハ念佛の外他事有へからずとて其後ハ人に對面有事なかりけり

同廿二日聖床爪のいたきと思ひたども神の結縁に來給ひてつミしらせ給ひけるにといもどけるを人心得すして不審を殘しけるに其日ハ西宮のまつりにて神輿輪田御崎へ御幸成給ひけるに上人臨終ちかつき給ふ由聞へけども神主今一度最後の見参にいらんとて神輿をもなれ奉りてちかくなんまうでたる由いひ入けれも聖のともに符合したる間ふしきの思ひをなして大明神のいらせ給ひたるにこそとて此よし申たりけども上人見参ありて十念さつけ給ふ神主今生の面拝只今もかり也とて落涙を念佛の外餘言なしとく〳〵といもどけれもなく〳〵立出ぬをてに臨終近付給ふとて諸人群集しけるに今日にてハ有まし夜に入て終へきよし云めさどけども人ミ少しつまりにけりさて漸明て同廿三日辰の始晨朝の阿彌陀經の終日とひとしく禪定に入かごとくして往生し給ぬ諸人更に是をしらず念佛結願の後他阿彌陀佛あミた經を始給ひたりける時こそもや御臨終としりて聲ミになきかなしミなれ于時春秋五十一嗚呼禪客去ていつくにか有只思ひを西刹蓮臺

の夕の雲ふかく慈訓とゝまりて此時なし屢なみたを東域草庵の曉の露にそふさても時衆幷ニ結緣衆の中に前の海に身をなくるもの六人なり身命を捨て知識をしたふ志半座のちきり同生の緣豈むなしからんや遠く釋尊化緣つきて無餘圓寂に歸し給ひし時を思ひやれは十地究竟の菩薩もなみたを袖の上にながし三明漏盡の羅漢も魂をむせの中にきは賢聖なをしかりいはんや凡夫をや綠松風冷しくして夜の聲沙羅双樹のかなしみをつたへ蒼海月明にしてあかつきの浪拔提金沙のうれへをうつに佛日すてにかくれて闇にまよひ法燈なかくきえて道をうしなへるかなしみをの〳〵南浮の再會むなしくへたゝりぬれはたかひに西刹の同生をたのむはかりにてこゝかしこに泣悲しみける有さま詞のはやしを尋ね硯筆の海をくみてもいひつくしかたくこそ侍けれ

○南行雜錄（天地根元圖）

一應永十八年大明使不達都自兵庫歸、

○如是院年代記（新校群書類從本）

（己丑）第八十代高倉

承安（癸巳）三　築兵庫島

治承（庚子）四　二月二日遷後白河法皇於福原　六月二日行幸福原

（辛丑）第八十一代安德

壽永（癸卯）二　七月二十四日平氏一門奉天皇出都　赴福原二十五日自福原赴九州

（癸亥）百二代後小松院

應永（壬午）九　八月一日大明國使僧天倫一菴至兵　庫九月五日接大明使其儀甚盛

（辛卯）十八　大明使王內官不達於朝　九月九日自武庫回

○報恩院領輪田庄　東福寺文書

捻處分　開山國師有奧書　東福寺

○上略

報恩院

○中略

院領

攝津國輪田庄
丹波國賀舍庄
　當院者故禪閤草創終老地也子細見于供養願文
一家地文書庄薗事
宣仁門院
○中略
右大臣
家地
○中略
家領
　女院方
○中略
攝津國輪田庄報恩院領
○中略
以前條々所注置如右但先年受重病時楚忽令書處分未加再治自然送數年爰前關白

有不慮事太略如違背向後之進退推而可重家門之孤害子孫之障難不可疑殆仍所改直先度之處分也(中略)近則故太政入道同有關東傳領庄々悉以處分諸子尤足准據歟爲後鑒粗勒子細而已

予依手振假他筆寫(守)此狀努力〱不可違犯

建長二年十一月　日　　　　　愚老在御判

○兵庫中庄內寄進狀 圓藏院文書 矢部郡

兵庫中庄內山野開發田畠荒野事

合四至 限北井土居屋 限西下庄堺 限南神撫後 限東東彌太郞入道作

右件於田畠山野者可令寄進妙法寺毘沙門五大尊限永代也四至內者於寺僧等一圓計以荒野開發地利爲燈油佛性可致御祈禱忠勤向後更不可有違亂者也仍寄進狀如件

正應二年七月廿八日

延應以來御寄附之狀次福原西方公文注進仁三ケ寺御公事御閣之由明鏡之處今

度福原庄官百姓等無故御公事ぉ相觸彼寺家之條依爲存外向後所令停止彼等綺
訴之也仍狀如件

應永十四年十二月二日　　沙彌在判

延福寺〻僧中

○富田妙雄書狀 東寺百合文書

御書畏拜見仕了抑屋形兵庫下向之事可有御察候御祈禱又被憑申候次ニ上野殿安
富殿者無下向候又神道之事只身の(可カ)無隙候により又御無沙汰仕候ていまゝて延引
無面目候乍去月迫まては此邊ニ被居事ふあるへく候さも候ハヽ誘引可申候身も
令申樣人を可進之處御狀畏入候爲御心得申入候上久世之事寒河か方へ守護代ニ
契約之子細候て遵行ありけに候内〻可有御心得候此事身の方より申たる由をは
中〱御披露あるましく候堅固さもなき事に其と身の一に候とて身ニハ内〻か
くしけに候それより御意候て此後者東寺之八幡も御照覽候へ屋形より守護方へ
一度まても候へ無使候若内の者の事にても候へハ員屓候て使なんと候つらんと
御疑も候らんと存候て乍恐以誓文令申候此狀中〱可有御披露候恐惶敬白

九月十六日　　富田上妙雄（花押）

安藝殿

御返報　　妙雄

○兵庫の狼料 東寺百合文書

（端裏書）

「乘南注文新勅旨米（安藝）內可除事 文保三正廿」

ひやうこゐの上下のらうれうの事

三百文　　乘南らうれう

又貳百文 三人のとうりうのふん　米貳斗これハとうりうのふんにて候以上いそふんをちうし申候

此外上粮粁壹石

○御學狀等執筆引付 內閣文庫本

興福寺東西兩堂律學衆等申春日社神供幷律學料所攝津國福原庄內正元淸友兩名間事申狀如此子細見狀候歟之由別當前大僧正御房御消息所也恐々謹言

十一月二日（〇延文五年）　　法印公憲

謹上　赤松信濃大夫判官殿

○鹿苑院殿百年忌陞座（叢林文藻）

鹿苑院殿（足利義滿）百年忌陞座

又按大周師台靈小祥忌陞座語云公幼時託之播州赤松氏在彼一日晝寢忽覺指壁間地藏像云是人語我云吾與汝永不離赤松聞之喜甚進而言斯乃皇祖仁山將軍之所畫也豈非皇祖遺德而感菩薩應身耶（○中略）既而自播歸洛取途於攝之兵庫夜宿琵琶塚々導海水以開池沼起台榭一方佳致也時方月明潮滿景致可愛矣公謂近臣云汝等宜舁此地至京師左右皆驚其大語晉明帝年數歲屬長安使來元帝問曰汝謂日與長安孰遠對曰長安近不聞人從日邊來帝異之明日宴群僚又問之對曰日近帝曰乃異問者之言乎對曰擧目則是日不見長安由是蓋奇之雖然與公之度量廣大將運四海於掌握之發乎童稚天然之語者豈同日而語乎奏進曰應安元年公十一才加冠（○下略）

○高麗使兵庫到著（善隣國寶記）

貞治六年丁未

古記云二月十四高靈(麗)使萬戸相右衛保勝中郎將金龍撿挍左右衛保中郎將於重文到着攝津國福原兵庫嶋通書其略曰海賊數多出自貴國地來侵本省金浦等燒官廨擾百姓甚至殺害于今十有余歳海舶不通邊民不得寧處云

○室町殿兵庫下向（東寺王代記）

康應元年三月四日室町殿九州進發丑剋出京當日下著于兵庫翌日著岸讚岐國云々供奉濟々

○鹿苑院殿嚴島詣記（新校群書類從本）

左のおほいまうち君安藝の國嚴島まうでのことあり此のたよりにさすらひ給ひて石上ふるき都のあとなればつくしの國をも御覽ずべきなるべしかつは浦づたひのめづらかなる所々をも御覽じかつは四の國にいたりてやまと言の葉歌津といふ處をも御らんじ又は武藏入道（頼之朝臣）ふるき好をもとぶらはせ給ふべきにや御舟よそひの事はやがてかの入道うけたまはりて百余そうたてまつるなるべし舟のうちにてのざうやくみなこの人のまうけなりむかしも嚴島には高倉院（八十代）御幸な

り平のおほきおほいまうち君（清盛）もたび〳〵詣でられしためしも侍りけめども此の度は引きかへて珍しき御姿どもにてはなだ色にめゆひとかやいふ紋をそめて袖口ほそく裾ひろきうちかけと云ふものを同じすがたにき給ふ赤き帯に青色のはばき赤色の短き袴なり御とものの人人皆みさきばかりなる金がたなどもさゝせらるかたはらの人はそしり侍りけめどもかやうのことはあながちに法も式もさだまらずたゞ時代にしたがふことぞかし今のやうなどとて定まりたる器などをだにも初めてしいだして用ひらるゝためし古へもなきにしも侍らねばそしりはかへりて道せばきなるべし旅の衣のたつ日さだまりて（後小松）康應元年三月四日夜深く都を出でさせ給ふ東寺の南の門うち過ぐる程にかの寺の鐘の聲もきこゆめり桂川のほとりと覺えて火の影所々にみゆこあゆとるなりけりげに瀬にひかるらむかしその日の午の時ばかりに攝津國兵庫の津につかせ給ひぬ御ましの舟にまゐるべき人々かねて定めらる

修理大夫　　右京大夫

日野辨　　畠山左近大夫將監

同七郎　　（關口）今川修理亮

眞下　古山十郎
この外はおの〳〵の舟にて參り侍り
畠山右衞門佐　山名播磨守
細川淡路守　土岐伊豫守
探題伊豫入道　今川越後入道
同右衞門佐　同中務大輔
伊勢右衞門入道　曾我美濃入道
朝倉因幡守　若王寺別當
古山珠阿　松壽丸
士佛
かやうの人々なり侍二三人しもべ三四人ばかり召しぐすべしと定め下さるれば舟數よりも人かずはすくなかりき兵庫にては赤松の千菊丸此の所のあるじ申し侍りけりまことにこゆるぎのいそぎありくさまことわりと見ゆその夜の曉に御舟に移らせ給ふ百よそうの舟ども皆ともづなをとくめり人々はかねて舟に乘りて夜をあかし侍りけり

「浪枕かゝるね覺めのありけるを老いの習ひと何かこちけむ」波の上やう〳〵しらみ行く程に和田の岬明石のせと淡路のせととがり崎などいふ浦々過ぎさせ給ふげにも山水のたゝずまひ繪にかゝまほしく見ゆけふ五日雨風はげしくなりてたて崎とかいふ海中にいかりをおろして御舟をとゞめらる四方の空くらかりしかば御舟を洲にこぎかけしかども煩ひなかりき御座の舟ばかりを二つたてらる是をことふねどものしるべとせり（〇中略）

廿五日出で給ひて播磨の國室の泊につかせ給ふ赤松參れりこゝにもうき橋かけて磯際なる寺にいらせ給ふこぎ入る程風あらく浪高くて舟ども爭ふ程に人々もみな家家にうつれりかれ飯酒などもさま〴〵にあり赤松まかなひ侍りけりいかめしかりき一時ばかりありてやがて是よりかちぢをのぼらせ給ふ御ともにはただ御舟に侍りし人々ばかりなり

僧たち（絕海和尙）　修理大夫
右京大夫　日野辨
畠山七郎　關口修理亮
赤松　眞下

古山珠阿

などばかりなりしもつかへの者までもみな馬にのせらるさても武藏入道はつちのといふあたりよりいとま申してとゞまりけるけや御所はけふこの國に常住寺といふ寺にとゞまらせ給ひて寅の時ばかりに出で給ひて攝津國兵庫津にて朝の御物參りて其の日都にいらせ給ふとなむ廿六日なるべし舟なる人々はけふ廿六日兵庫につきけり細川淡路守大內左京權大夫などなるべしかちよりおひおひにまゐりし人

畠山右衞門佐　同左近大夫將監

山名播磨守　土岐伊豫守

探題　同右衞門佐

同中務大輔

などきこゆみな廿七日八日などにぞ京に入りける

○周防國美和莊兵庫運上（東寺百合文書）

最勝光院方評定引付（應永七戊辰）（應永七年）四月廿二日

一衆行事可下於人歟由披露之處今程時分且可有斟酌之由衆議畢

九月廿六日

一衆行方代官職事妙觀院如元領賜而先地下代官大力可仰付之披露之處先年依未進等當被召放之上者不可叶云々

同廿七日

一衆行方代官職事大力依未進等被召放之上如元妙觀院宛賜者地下代官事別人ニ可申付云々此條披露之處重々京進難有評定可申付云々就其如此問四十貫文分可致沙汰之由可申云々

同廿九日　假屋

一衆行事如刀帶（帶刀カ）京進四十貫不可叶其數八幡宮等神用幷地頭等皆令勘落仍一圓致知行執沙汰了彼例雖被准所詮三十貫分可沙汰云々評定候處慥四十貫文可加問答之由衆議畢

十月二日在假屋

一衆行年貢事京進四十貫文難叶所詮兵庫マテ四十石分令運上於彼所四十石分可渡申寺家御使之由重申之評定之處先一年分米ニテ令運送隨事樣後々送可有沙

汰歟將又三十五貫分可令致其沙汰歟之處三十五貫文可治定云々

同三日

一乘行年貢事京進三十五貫文不可叶由堅申之重評定之處爾者先一年分現米兵庫マテ令運上隨彼和市等後々ハ代錢三十貫歟現米四十石歟追可治定云々

同五日

一乘行此間以治定分國守護方平井狀所望之處已諸寺社領皆付給人於年貢者可致沙汰之由自國申上云々就中當所事如刀帶（帶刀カ）沙汰舍弟兵庫入道可執沙汰之由令申云々

○東寺領矢野庄注進狀（東寺百合文書）

注進

東寺御領矢野庄供僧御方（應永十一年）十年貢幷麥大豆雜穀以下散用狀事

合佰八拾捌石捌斗五合內

（○中略）

一國下用

違目可記之
百七十六文　四月廿六日衣笠方ヨリ唐ノ進物之夫二人室津まて十二日役食半分定
百六十文　五月十二日衣笠方兵庫唐ノ進物ノ奉行ニ出時夫一人食半分定
九升八合　六月廿九日唐エノ牛ノ皮持之夫二人衣笠方ヨリ明石まて十四日役半分定
(〇中略)
應永十二年二月十三日　玄舜(花押)
了濟(花押)

○唐船兵庫著岸　兼宣公記

應永十一年四日十九日
大法自廿二日可被始行之由仰下之處(〇中略)自今日被始行者也是唐船已著岸之間(義滿)可有御下向兵庫之間被忩云々

○唐船兵庫著岸　和漢合運圖

(應永十二)五月四唐船五艘來三艘同着兵庫津　和光院本同

○將軍義滿兵庫下向 南都眞言院傳法灌頂記裏書

應永十一年四月廿七日戊戌御所樣兵庫御成云々
五月七日丁未御所樣自兵庫還御

○唐船兵庫著岸 宮內省圖書寮藏教言卿記

應永十二年八月九日
一裏松殿(日野重光)被參兵庫云々
十日
一唐船兵庫ヲ出云々目出々々
同十三年五月十八日
一御所樣還御云々目出々々
十九日
一唐船九州着岸之由注進云々
廿日

一又北山殿兵庫へ晝程ニ御成云々
廿四日
一裏松下向兵庫被召云々十徳之姿云々
廿八日
一(烏丸)豐光弁殿參兵庫十德姿云々
廿九日
一(山科教興)倉部池尻殿へ罷向未弁殿ハ無下向云々
六月六日
一(坂士佛)法印參兵庫云々
一法印欲參兵庫之處可爲明日還御之間自路次歸云々
七日
一裏松ハ戌剋歸宅云々所詮唐船ハ未筑紫云々然而唐ヨリ進上一双兵庫ニ着岸珍重々々
八日
一唐船已六七艘着岸云々目出々々兵庫土藏有御荒猿云々珍重歟

九日
一倉部參北山殿卽構見參畏入也東(日野資教)洞院禪門懸御目云々
十五日
一北山殿唐船着岸之間御成尼崎云々晝御立也
十六日
一倉部罷向裏寄合云々先日參兵庫之時餞送之義云々今夜宿
十七日
一北山殿自尼崎還御云々目出
後六月十日
一寳丸唐船長門國アカマノ關ニ付云々此舟ニ金(小弁コイトカ兄法師也)阿ミ乘昨夕注進北山殿ノ御倉預
ハ式阿ミ云々多阿ミ之弟也
十一日
一倉部罷向裏松先日兵庫下向之時面々餞送之儀沙汰之今日畑子振有其沙汰裏依
無隙于今令遲々歟人數北(木造俊康)畠黃門伯卿向弁禪門按察房倉部(丹波)定康朝臣飯以下種々
肴物結句帷共引物梅染色々云々面々喜悅祝着云々

八月四日
一倉部裏松へ罷向明曉兵庫へ御成ニ被參御共之間今夜逗留爲餞送歟人數北畠按
察房本庄以下七八人云々
同十四年七月廿一日
一倉部裏松例日風呂ニ罷入歟
一明曉御成兵庫之間送餞如例倉部致歟北畠黄門定康朝臣云々百疋ツヽ歟
廿二日
一唐船歸朝之間既着岸兵庫之由有聞之歟間御所樣御成裏松御共云々
九月十五日
一北山殿兵庫へ御出晝御立云々
廿二日
一北山殿自兵庫還御云々今度ハ船歸朝二十萬貫到風聞珍重

○李朝囘禮使宋希璟の來朝（老松堂日本行錄）

永樂十八年（○應永廿七年）

十五日（〇四月）巳時風順發船到牛窻（〇備前大多府島三浦博士說）日沒泊此地（〇中略）

（〇詩略ス）

過一場（〇一ノ谷）此場北接盤山三面大海人言源（原イ）氏平氏昔日爭位相戰之地「也」

荒原短壠鎖烟霏　滄海茫茫水鳥飛

聞說當年爭戰地　自相雄長捴爲非

十六日到泊攝津州兵庫去王所二日程翌日亮倪先歸王所代官報告於王而止之故留泊報人「回」來代官來謁設酒

高低板屋若蜂屯　數日停帆滯海門

殊俗亦能知禮義　慇懃來謁更停樽（呈尊イ）

二十日發兵庫向王所路中雜詠二首

過利時老美夜（〇西宮）店

（〇詩略ス）

（〇中略）

六月二十七日發深修庵宿山城州要溫梁（〇淀）夜三更王之護送文及來夜半上船順流向兵庫行兵馬島後（翌年イ、予イ）余乃初來王初疑後悟（命各宗寺僧輪次饋餉又向我殿下献書契及禮物又送）待遇一行與本國回書等事雖各盡

禮然王「之」惑未解之時吾身幾「於」危「矣」（護送文以禮送之）

絶域經年作楚囚　幾塡虎口恨（思イ）難收

天恩（乃指皇天）忽降歸心浩　萬里滄波一葉舟

宿阿麻沙只（〇尼崎）「村」詠日本事　日本農家秋耕「畓」種大小麥明年「初」夏刈之（大小イ麥イ）卽種苗「種」秋初刈「稻」之又種木麥冬初刈之（木麥種大小麥イ）以一畓一年三種（乃イ）者川塞則儲水爲畓川決則去水爲田故也

水村山郭火烟斜　無役人閑異事多

耕地一年三刈穀　若知仁義亦堪誇

泊攝津州兵庫阻風尋長福寺

繫舟滄溟（海イ）曲　尋入梵王宮　帆影飛前浦

鍾聲動遠空　窓外脩脩竹　庭中落落松

水亭更深邃　高樹起秋風

七月初三日發兵庫風逆日沒宿津口（〇不詳）四日過牛窓

○北山殿兵庫下向（迎陽記）

（應永八年）九月十六日壬寅　晴今曉北山（義滿）殿御出兵庫姫君御方寢殿高橋殿池尻殿被伴申青蓮院宮聖護院三寶院僧正等下向前管領管領右京大夫以下御共云々高麗船著岸被御覽又御逍遙料云々廿六日壬子　晴今朝自兵庫還御也今曉自禁野云々參北山殿謁長方朝臣有一獻

○北山殿兵庫下向 吉田家日次記

應永九年七月四日

乙酉天晴（○中略）次向右金吾禪門數刻雜談有飯酒被談之去年自北山殿遣唐使遁世法師無爲渡唐（○八年五月十三日出發）歸朝已著筑紫之由注進到來珍重々々

八月三日

甲寅天晴（○中略）今日北山殿被伴申姫公御尼衆御喝食女院御弟子也御下向攝州兵庫唐船著岸之間爲御覽云々件唐船去年自日本被遣種々至寶於異朝遣唐使遁世者素阿彌云々准后（祖）被下御書菅相公秀長草進之了無程無爲之歸朝希有事歟右兵衛督（佐）入道一色修理大夫入道山名右衛門佐入道等供奉云々

九日

庚申晴（○中略）今夕北山殿御歸京云々

○鹿苑院兵庫下向 足利家官位記

鹿苑院義滿　（應永）同九年八月三日令出兵庫給

○白石寺請文 東大寺文書

（端裏書）「白石寺請文原智舜坊 應永九壬午八月日」

請申　周防國白石寺御年貢談義供料事

合參拾捌貫文者

右於御年貢者不依水損旱損海陸等之損亡不依國動亂請申參拾捌貫文分者每年三月中於兵庫津御寺之御使者可渡申候也但國動亂事者如今年壬午自守護方一國平均國廳等御年貢已下押妨程之時者任所在可致沙汰候更寄於事左右不可有不法之儀候若雖爲少事背請文面致未進等不法候者被召放御代官職被拂御領內幷私之田地等可被押召候者也仍爲後日證文請文如件

應永九年壬午八月　日　　白石原長元智舜坊(花押)

○東寺領矢野庄注進狀東寺百合文書

注進
東寺御領矢野庄永享四年分供僧御方御年貢并大豆雜石(麥脫カ)(穀)以下散用狀事
合佰貳拾五石四斗五升
(○中略)
國下用
(○中略)
十文　上樣兵庫マテ之送夫配符
一宿半分之定
壹貫八百七十五文同人夫之粮物半分之定
(○中略)
永享五年五月　日　　玄舜(花押)
祐舜(花押)

○室町殿兵庫下向（内閣文庫本薩戒記）

永享六五

廿

晩頭洞院大納言（實煕内裏番予合番上首也）送消息云

禁裏番事室町殿兵庫御下向御留守之間當番之日別而無懈怠可令懃厚給之由被

仰下旨日野中納言申候可得御意候哉恐々謹言

請文云

兵庫御下向御留守之間禁裏番殊可勤厚之由承了可存知候但至明後日（廿二日）丙穢

候先度言上了可得御意候哉誠恐謹言

唐船幷本朝船明日可著岸云々仍明旦左相府可令下向給云々

廿一

寅剋許左相府令下向攝州兵庫給御覽唐船着岸也按察大納言（公保）日野中納言（兼郷）

新中納言（永藤卿）左兵衛權佐永豐朝臣右衛門權佐資任等同下向飛鳥井中納言（雅世）可

下向之由兼日有相府仰然而依撰歌事猶被止之白川二位入道（資忠卿）伯三位（雅兼）等兼

日下西宮爲獻釣也

廿二
今日唐船着兵庫云々

○鹿苑院兵庫下向 満濟准后日記

永享元年十月七日
大内左京大夫入道今夜自兵庫密々京着云々、明日日次不宜故云々、
永亨六年正月十六日
(○上略)故鹿苑院殿兵庫御下向時、青蓮院(尊道)一品親王連々御同道候キ、毎度板輿直綴御躰候き、今度之儀、又可爲同前哉、
二月廿五日(○上略)兵庫事、可被仰付赤松播磨守歟、但猶可相尋管領之由被仰出、其子細ハ唐船粮米幷公方樣渡御煩以下事ハ、爲洛中土藏約(役カ)可致其沙汰之儀無子細云々、但諸土藏者共同不置代官於兵庫者、只今沙汰之儀、定後々無足怖畏可相殘歟、然者尤不便ニ思食也、如何云々、

○兵庫下庄知行狀 若王子神社文書

（義持）
（花押）

禪林寺若王子別當職同社領攝津國兵庫下庄淡路國由良庄伊勢國窪田庄駿河國內谷鄉信濃國小菅幷若槻庄等事任相傳當知行之旨大納言法印忠意領掌不可有相違狀如件

應永廿八年十二月廿五日

○康富記 内閣文庫藏和學講談所本

嘉吉三五六

肥前入道語云近日高麗人可來朝也先々要脚被懸仰諸大名被出之處今時分諸大名諸國役出錢不可叶之間高麗人不可被入立京都可被追返也其內事管領畠山被存之間諸大名一揆して可被返高麗人也可爲如何樣哉意見密々談合淸大外記之由語之唐船者誠不可入日本之由有先々御沙汰歟於高麗人者旣神功皇后御退治以後來服之三韓之隨一也高麗相通者可叶神慮也不可入之由今更被仰者可爲後年煩歟如何て可被返候也所詮上古往昔ハ來朝之貢賦也近來者爲商賣所入來也然者牒狀之文章違上古歟古今之牒狀取集見合天就文章之咎可被返高麗人歟之由外史意見歟

嘉吉三六十九
是日高麗人參于室町殿懸御目者當御代初度且奉吊(弔)普廣院殿喪之由聘使也云々(○中略)凡今度高麗人來朝㝡未付兵庫津之以前於管領有評定其謂室町殿御幼稚時分也諸大名國役已下要脚無沙汰之時節也旁爲無益歟之間不可被入日本(都イ)之由被仰遣處高麗人申云非如先々商賣之料爲普廣院殿御吊(弔)參洛之由候間就其可被入歟之由諸大名等有評議遂以被入云々普廣院殿御代永享六七年比來朝之後今度初者也

寶德三八十五放生會延引

九一
神木入洛之沙汰令語給自東北院有消息明日二日移殿可有御動座之由令治定云々無勿躰次第也近日世上御沙汰次第爲奈何(○下略)

二日
後承是日曉春日社御神木有御動座于移殿云々是南都領攝州河關以下訴訟事依御裁許遲々可有入洛之由兼日所聞也社官等就便宜此由告申處□(也カ)云々

三日參華山院殿懸中納言殿御目了
神木入洛寬治七年初度也爾來部類記令取出給有一見予少々讀申之第一卷寬治分

申出退出了

○コノ後四日五日六日ノ條何レモ神木動座ニ對スル公家ノ故例ヲ撰出スルコトニカヽル、煩ヲ避ケテ省略ニ付ス

七日自武家被遣使節於南都依神木入洛之有聞也管領畠山左衛門督入道御教書數通被成之同被成遣綸旨者可然之由武家就御申沙汰被成下綸旨於寺門社家等云々

御使奉行飯尾美濃守貞元同左衛門太夫爲數松田主計允是三人也傳聞分

　條々

一兵庫河關事永代爲南都領不可被成其煩之由被成御教書

一南都運上之荷於河内國三荷守護方押取之云々先之守護方運上之荷於奈良押取之間爲其返報自守護方押取之雖然及南都大訴之間自守護方荷可返之由有御成敗云々

一八幡祠官壇法印幷神人淀四郎左衛門等事放生會以後可有其左右之由被仰之云々

一八幡奉行飯尾大和入道流罪事雖申入只可被改易八幡奉行之由被仰之云々

以上條々武家御教書ニ委被載之綸旨ニハ武家如此條々申御沙汰上者神木入洛事可停止之由被仰下云々一昨日先之長者宣被成下云々（○以下神木入洛先例勘奏ニカヽル省略）

九十四

是日或語云今月七日就春日神木御入洛事被制止之由綸旨御教書等被成下南都使節奉行三人下向之日朝之程於宇治邊自或藪中猪走出（自元負手歟云々）渡宇治差京方欲上歟之處川之面二三丈游而游返而平等院前藪中走歸於彼篁中忽死云々爲希代之有樣之間自宇治註進管領云々如何々々傳說也承及分聊注之

九十五放生會儀依訴訟等叓未定云々

十六是日放生會被始行（○下略）

廿四日己未時々小雨下春日御神木今夕有御歸座于本社云々就南都領攝州兵庫河關已下條々訴訟事社家寺家令一味及大訴今月二日有御動座于移殿者也依之於訴訟者可有御裁許於神木御入洛者可停止之由今月五日被成長者宣於社家寺家同七日使節（飯尾美乃守貞元同左衞門太夫爲數松田主計允）下向之時訴訟大略裁許之御教書（管領畠山左衞門督入道）被成遣之剩如武家成敗可有御裁許之旨綸旨被成遣畢其後猶連々雖有申子細度々被宥仰之由御寺同神民等應御下知之分也今如此御座（歸脫カ）天下惣別珍重大慶何事如之哉

（○中略）今月六日綸旨事例幣御神事中也定被經御沙汰歟但承久元年四月十二日中右記云藏人弁談曰爲止南北大衆亂發所被下宣旨於興福延暦寺也但祭以前佛寺之

宣旨可有憚哉否條被尋先例之處後冷泉院御時依急事祭以前被下宣旨於東大寺也
仍今度被仰下也者然者今度之儀無子細事也
是日南都者甚雨也仍神木御歸座事不可叶歟之間延否事於神前決御鬮之處只今夕
可有歸座之由有御鬮其後入夜戌剋爲吉時之由卜定之處入夜爲晴天然間御歸座無
爲也社家之閇門閇戸悉不開之但諸寺(一乘院大乘院東大寺已下歟)閇門未被開之此條不可然之由傳
奏廿六日被申下之間開門云々今度大訴九箇條悉以有御裁許神慮異于他尤可恐之
後日淸少納言令語云南都傳奏萬里小路前内府被送消息之次ニ今度春日神木御歸
座以前一兩日主上御夢想事可有御歸座之由被御夢御覽了其翌日可有歸座之由註
進自南都到來又主上重御夢ニ既御歸座之樣具被御覽了其後眞實無爲御歸座之由
有註進希代之事也云々
十廿三
室町殿御修法(仁王經法)日中結願也去月以來南都北嶺訴訟未落居(〇中略)旁以就物
忩㝠被致御祈禱者也云々
十一廿一
參萬里小路南都無爲賀申候(〇中略)

是日參萬里小路殿以備後守申入云南都儀屬無爲公方使節上洛之由承候公私惣別珍重候祭禮廿五日治定候哉外記史參向事去年不參之處此春被成綸旨及嚴密御沙汰候由畏存各參向候處社家不承引爲同前之由如今者爲公私不可然候歟又重一途有嚴密御沙汰者可罷下不然者難參向之由申之處返答之趣南都儀誠悉令落居興福寺一昨日令開門使節之奉行人上洛□□下惣別目出候可見參之處取向書狀取亂候間無見參候次春日祭事南都大訴御裁訴無爲神事可遂行之由及御沙汰候外記史事此春及嚴密御沙汰被成下綸旨了御成敗事者可伺申候定可有一途御沙汰歟如此春相搆可被參向候早可被致用意之由被仰之間先申暇退出了

今日聞春日神木已下大訴令落居興福寺々門今月十九日令開門上使奉行飯尾美濃（貞元）守同左衞門大夫（爲數）松田主計允等昨日（廿日）夜令上洛云々或語云淸水寺同開堂門（南都末寺之間此間閉門戶）

享德三十

十五

是日奉行兩人飯尾美濃守同孫右衞門尉等尊公方御使下向兵庫自唐歸朝之船荷去爲撿知也云々管領使今月五日下向云々

○兵庫寄進御教書（基恒日記）

文安六年四月廿九日

一就御元服石清水御寄進之地在之先規也仍攝州兵庫庄内以御教書御寄進也右筆貞基

○一條新御所兵庫御生涯（大乘院寺社雜事記裏文書　四十一　文明元・十二・十七條）

新御所さま御生涯事御承知事候間委細不申入候心あるもなきもこれを御いたわしく不申物ハ候ハす候御書を被下て候ハヽ御ミたいさま御ゆくゑをハわれ〳〵とゝけ申候へく候御菩提所御しるしをも被仰付候ハヽ不日ニ被仰下候われ〳〵可相下候以上

一條殿樣新御所さま兵庫御生涯事被仰下候間去月十一日ニ紀州より人をこし候處御生涯一定ょて候今出川殿さまにて候由申候て御生涯候さ候間御ミたいさま御行末委細尋申候へハ一條殿樣御狀なんともなく候てかくのとく尋申候條くせ事なる樣ニ申候て委細不申候御たいさま御こしまて切とり候てあさましき御事ニて候御生涯の御在所ニ七日かたのとく御追善をいたし候て御しるしをたて候

て罷歸候尙々御ゆかしくもおほしめし候ハヽ御書をくたされ候て御ゆくゑをよく尋申候ていつれへも御とも申候へく候通路なんきニ候之間おそろしく候て參候間中〳〵ならよりと申一條殿さまよりと申候へとも人おそれ候てかくし申候やらん申候ハす候結句事の子細を尋候てせッかん候間めいわくにて候御書候ハヽ何時にても候へとヽけ可申候尤參御とふらい申入へきにて候へ共四十八日念佛よて候又少堂之建立かれこれ（〇下文なし）

〇一條家領兵庫福原庄（佐々木信綱氏所藏文書）

南都も號德政狼籍子細候無油斷時分候

此間無殊事候之間閣筆候世上之儀色々轉變無盡期之條珎事候一勝一負更無定相候此間儀如何樣候哉京極六角就土岐所緣爲合力美濃勢着伊吹山下候之由承及候無一途御成敗候者始終可爲珎事候公武御由斷驚存候先度油煙事承候此正月御狀時分不所持候間隨心院僧狀ニ申候て一延令進之候其後又御音信之次一延推進之候憔參着候哉無心元候福原庄事守護方一圓知行之由申候間家門忽以令牢籠候仍就廣橋（綱光）申入候家門先々得分無其隱事候爲守護申付候て代官事者誰人ニ申付候ハ

んとも可爲細川取計候此間香川被致代官候同事候便宜之時ょ可有傳達廣大候哉爲其態上三位入道(顯郷ナラン)候如何樣明春者企參洛可致奉公之由存候事候期後信候也謹言

十□月十三日　(一條兼良)(花押)

町とのへ(顯基)

(○南都德政蜂起ノ事ヨリ本文書ハ文明四年ノモノナラン)

○後法興院記

文明十五年十二月

廿八日傳聞左幕下(冬良)一條下向攝州云々、家領福原庄事此間對守護種々有問答事云々、去月末被罷向細川九郎(政元)亭問進渡狀云々、雖然香川猶令抑留云々、聊爾至極之下向太不可然歟、

明應十年二月

廿一日細河京兆四國下向事治定、可爲來月云々、

廿二日高倉入道來、令對面、數剋雜談、京兆下國事停止云々、

廿九日京兆下向兵庫云々、

明應十(文龜元)年三月

三　日民部卿來、令對面、相語云、去月廿八日戌剋神木御動座移殿之由去廿九日南都殿下幷傳奏に有注進云々、可恐々々、

十四日京兆上洛云々、

十六日從一乘院有注進、去月廿八日神木御動座一定云々、諸堂閇門事限來月十日可相待由自河州令對策云々、

卅　日從一乘院有注進、就新造儀寺門助成事去十七日千疋分進上云々、當時寺社大訴之砌一段懇切之至也、一乘院へ遣令旨、悅喜之由可有傳達之由仰遣了、

六月

九　日春日社師時就注進云、寺訴悉裁許、昨日神木御歸座云々、珍重之由令返答、

文龜三年八月

二　日傳聞、昨日於攝州兵庫京兆被官人高橋令生涯云々、安富寄子云々、依是安富遁世云々、但不知實否、

十七日傳聞、於兵庫(藥師寺)元二令生涯云々、一昨日之事云々、但實否不分明云々、近日京兆式狂亂之躰云々、後聞虛說云々、

○大乘院寺社雜事記裏文書 八十九 人數事裏文書

そのゝちハさしたる事も候ハぬまゝ文まてさへ申入候ハて心よりほかまおほえさせをハしまして候なに事ともかと御ゆかしくおほえさせ御ハしまし候まつまつひやうこの事かもしさりわたしまいり候ほとまめてたくおほえさせ御ハしまして候このしやう月よりの御あらましまて候つるやう〳〵さきの月廿二日御所さまならせ御ハしまし候てふゐ〳〵に候ほとにめてたさ申つくしかたくて候かやうに御れうけん候ほとま御月あてこのほとハ五百疋つゝまいり候又ひやうこの御てらゐ百疋つゝまいられ候もこの月まて四月御とり候ハす又七月八月まハちともまいらせもとり候ハぬほとにかた〳〵御つまり申御ハししつかつ御（マヽ）御しハありたらせ御ハしまして候ことに一こんなとおひたゝしく入候ほとにことしの事ハハや日も候ハて御めゐわく申つくしかたく候さりながら中しやう殿ひやうへのすけなとりやう人くたらせ給候めてたうて候しせんのときハ御心候て□□□給候へく候このほかハしつかい六百疋の御月あて又去月しわすなとまハひもかそう申候事まて候さやうに候へともやう〳〵万疋にたるたらぬ事まて候へハ御ちきむにかり候ほとに一かと候ハんする事にて候いかにもしやうたいなく

候ハて御所さまの事をよくしたてまいられ候やうにおほせ事にて候二もしさま
のひめきミことしうちまいれまいらせ候ハてハせうしまて候我等もことの外と
しより候てひやうしやまなり候ほとにめてたくとく〳〵いれまいらせたくこそ
候へあわれ〳〵しん御所へ御所へ御たんかう御申候ていつあたまても二千疋は
ありの事をことしうちに御れうけん候て給候へあしミやうねんひやうこまても
又おしほまても御あけ候ていれまいらせ候ハやとおほえさせをハしまし候よろ
つめてたくこのよしこのよし申給へあしこ
「〆(ウハ書)

大せうゐん殿ゟ

御ちこ御中

ゟ申給へ

□」

(〇右ハ文明十六年正月ノモノカ)

〇冬良書状 大乘院寺社雜事記裏文書 九十一 文明十六・四・十五條

年甫嘉祝於今雖事舊候日新猶以珍重々々抑御樋送給候千萬々々祝着候則可致返禮之心中候處于今不得便宜候間遲々非疎略候抑舊冬者不存寄與風下向候定被聞食及候哉今度直務之儀香川代官未引退候間下向候ハてハ難事行之由皆々意見候間于今在庄事候彼代官引退百姓等少々出頭候間先以大慶此事候毎事早々令上洛可申入候也恐々謹言

二月十日　冬良

（ウハ書）
「〆

大乘院殿

□□御中

冬良」

○大乘院寺社雜事記

文明十六年九月廿三日

一自松殿書狀到來、東山殿御出陣事、細川へ被仰出之、物忩無是非、又伊勢因幡守於丹州之領地、打止物部次郎左衞門尉之披官惡黨了、隨而自物部方可押寄于因幡方云

云、一段之珍事出來、定而可爲無爲歟、各迷惑無是非云々、今度無爲、家門御地子自物
部方如催促、先度之兵庫之禮物料紙分ニ給之了、先以目出云々、

廿八日

一越智代官岸田一兩日在奈良、兵庫關所庄主藤春房承仕神人相論事、學侶中ニ致披
露云々、大綱無爲歟、今日罷下了、近日學侶儀每篇無正躰、珍事〳〵、

卅日

一乘盛來、兵庫關事岸田罷上色々申、藤春房幷神人、承仕如元可下向云々、寺門儀悉以
失本意了云々、近日學侶之作法以外事共也、自東北院君殿庄事被披露、不及是非云
云、

文明十九年二月三日

一二條殿より御書到來、青連(蓮)院殿爲薪見物可有御下向、御門徒衆悉以下向云々、御隱
蜜分也、松殿中將爲案內者、自兵庫可被召上云々、

十日

一昨日日中松殿自兵庫參會申、色々申合之、

廿一日

一今日和田御崎・明石・八棟寺（清盛公影）等見之、戒安寺殿ニ行向、折紙百疋進之、

長享元年十月廿九日

一慶英律師來、色々物語共在之、兵庫關所庄主藤春房事、宗藝・與弘・營尊五師・訓英以下申合、四門札ニ頸ヲノス云々、凡希代事也、自越智方以岸田色々申、訓英擬講帳本云云、去廿七日札打之云々、西南院領幡（播）磨國世賀庄代官事、三百五十貫ニ延明房律師請之云々、當年田樂頭懃仕、此因緣云々、

延德元年八月廿日

一専實・藤賀・宗順・湊九郎・新法師・菊松・德力召具巳剋ヨリ堺ヲ出、清賢以下ハ至兵庫、爲湯山也、予至譽田社、御廟等巡禮、譽田之在所一見了、東一院ニ一宿了、上衆五人、下部等宿屋也、

○眞田左衞門尉賴定請取狀（小早川文書）

就御上洛次且御判御禮錢之事

（○中略）

四月十六日京著仕候てより私請取御公物料足之事

合

（〇中略）

一拾六貫文　生田飛脚上候時兵庫よて請取

一壹貫文　兵庫よて生口殿御禮錢

（〇中略）

以上參百九拾四貫文

文明十九年八月二日　眞田左衛門尉頼定

〇大乘院寺社雜事記

明應四年十月廿八日

（〇中略）

一近日浮說共、細川母儀他界隱蜜、安富及生涯上者、無力細川令下四國云々、

十一月二日

一廿八日夕方細川出京、爲淡路國發向或四國下向云々、於路次遊佐幷越智之岸田罷向禮申之云々、先以下著兵庫律（津カ）云々、

○蒲生貞秀連歌 近江信樂院藏

(永正初年)
九月すゑよ兵庫まて
まてしハし菊やもみちの宿の秋

○宣胤卿記

永正四年七月三日
一爲一乘殿御使家幸朝臣來世上巻說事就其攝州福原庄守護代藥師寺三郎左衞門尉可押領之由申之可被如何哉事也召西川房親申合申其返事了
永正十四年九月七日
一自勸修寺黃門狀到來在賀州弟秀顯於俊名可猶子者彼卿窮困過法候間令違變了近日顯基卿猶子事懇望父前黃門令談合予可一定申上云々彼卿一向無足近年只一條殿兵庫福原庄代官之余慶許也始終儀可爲如何哉能可思案由返答了彼卿條々巨細也勸付返々已及昏色之間不及寫置也

○二水記 内閣文庫本

永正十七年八月

十一日及晩行五條油小路見――此舟兵庫之舟也五位(段カ)帆云々大船也此謂者近江―
城―爲責落六角四郎召上――細川――下云々從此舟已令沒落了計略奇特也

○公卿補任

享祿元年

房通二十 十二月廿日兼右大將
月日兵庫下向十二月十六日歸京

○東寺百合文書

大嘗會米事院宣御教書如此早任被仰下候旨三代御起請之地幷三社御領等外者平
均隨田數來廿三日以前被運送段別參拾文宛代錢於湊河宿者任配符田之等可請取
之若令日限違期者任御事書之旨嚴蜜可致其沙汰候恐々謹言

暦應元年十月十六日　沙彌圓道(師直)在判

謹上　攝津國諸庄園領主御中

○兵庫下庄領知之覺若王子神社文書

領知之覺〇天正初期カ

攝津國兵庫下庄京着貳百貫

我等坊主代迄知行候處ニ中比少〻間不知行之事ニ候其後三善日向守下庄ヲ知行候之時理ヲ申候へハ百石餘日向存候間日向所ヨリ被相渡申候日向相果候而ヨリ于今不知行

淡路國由良庄京着百貫

伊勢國窪田庄京着三百貫

(〇中略)

駿河國内谷郷

信濃國小菅并若槻庄

是も我等坊主代迄知行候を信長京入之時分ヨリ不知行候

大旨如此候

○後藤基景須磨城合戰軍忠狀（後藤文書）

後藤佐渡八郎左衞門尉基景申軍忠事

去年（正平六）九月十二日播州伊川城御發向之間御共申致軍忠畢同廿六日於攝津國須磨城致合戰同廿八日神呪寺罷向同廿九日坂根幷稻野合戰之時及散々打物致忠節畢此等子細佐用兵庫助見知了同十二月播州大河內御發向之間同廿一日田原御陣馳參同廿九日大河原合戰之時基景被射乳中畢此等次第赤松勘解由左衞門尉見知之上者爲賜御證判言上如件

正平七年二月十二日

承了（花押）（赤松則祐）

○園太曆（觀應元年）（大日本史料本、內閣文庫本校合）

禁中守護事自兵庫申上義詮朝臣許事

十一月八日己未天晴入夜或人云將軍此間逗留兵庫遣飛脚於義詮朝臣許京都有物忩事者有行幸仙洞於一所可警固申旨示之云々又或說來十三日可有事云々頭弁

頭中將藏人弁藏人次官等招引以春宮大夫內々有示之事是夜討事將軍留守內々有申入事非虛說就中所々可有大事禁中無人不便面々必可祗候之由各傳仰勅定也如此事尤執柄可被申沙汰事也偏院中御沙汰就其如愚身仰含尤非普通歟然而勅定不能申子細也

永福門院依世上物忩御寄宿事

永福門院自今夕被來坐世上物忩之間女房獨住非無怖畏就中北小路里邊千葉軍勢多寄宿狼藉之企觸耳仍難治之間談女房被合宿(後イ)彼方也

〔園太曆目錄〕柳原家本

(觀應元)十一月十二日將軍明曉起兵庫被向中國事

(〃二)二月廿七日師直師泰以下切腹事

〔園太曆目錄〕和學講談所本

觀應二年二月十九日將軍引退兵庫事

廿七日於湊川邊師直已下被討事有注文

〔園太曆〕觀應二年　大日本史料本、內閣文庫本校合

二月十八日天晴彼是曰將軍責上起兵庫於雀松原邊合戰八幡勢頗被追越歟仍軍勢差下云々又及晚將軍引退之由云々彼是不信受事也

将軍引退兵庫事
十九日天陰今日或曰一昨日將軍責上仍合戰兩方損命者數百人逐(遂カ)將軍勢不利引歸兵庫云々

師直手者逃上合戰之趣語事
廿日天陰入夜光元申云師直手者密々有逃上事謁或者語云十七日合戰之後十八日又有合戰兩方又多殞命者又師直股受矢又師泰內甲被射歟鎧胸流血以外失力躰也云々

於湊川邊師直已下被討事
二月廿七日天晴今日或云將軍去廿五日起湊川城上洛之處於武庫川邊鷲林寺前上杉修理亮討師直師泰兩入道以下十餘人川津高橋以下又切腹云々是父重能敵也

川津高橋切腹事

以謂親敵致其沙汰歟盛衰遮耳目可哀々々

師直
武藏守入道
師泰
越後守入道
師兼
高刑部
師夏
武藏五郎
師世
越後大夫將監
高備前
豐前五郎

高南遠江兵庫助
已上
河津左衛門尉
鹿目左衛門尉
同平次兵衛尉
彦目
此外文阿彌陀佛正阿彌陀佛
廿八日天陰(〇中略)師直師泰以下被討事皆實說云々人數已下委可尋

〇觀應二年日次記 京都教王護國寺本

二月十五日將軍此間瀧野ニ居住之處細川奧州播磨書寫山ニ責寄之間彼瀧野ヲ引却懸河へ被移云々十五日夕飛脚到來云々
十八日將軍兵庫ニ到着於雀松原合戰之躰正以見知之由早馬到來云々
將軍勢於二千餘騎云々兵庫ニ取陣云々
錦禪勢者西宮雀松原打出等取陣云々

今日終日合戰將軍方勢內五百騎許殊以進出テ及合戰其內或令降參八幡方或及打死之間彼五百騎勢雖（一人カ）久不歸將軍方希代大合戰也云々

廿六日自曉天降雨

（○中略）

執事武藏守師直　越後守師泰　武藏五郎執事子　越後將監越後子　被打了凡者執事兄弟出家（了カ）ノ上者被除政道之人數被扶置候條自將軍被申間不可有子細候由自錦小路殿被申返事云々仍師直者着禪僧衣越後守念佛者ノ裳无文着之云々將軍立兵庫ノ琵琶頸寺上洛之時分彼執事越州等欲令供奉之處以秋山新藏人被申云執事越州等供奉之條見苦候ト云々仍將軍御進發之後三里許ヲ相隔テ後陣ニ彼兄弟上洛云々而於武庫河邊上杉豆州養子同戶部實子　究竟軍兵五百騎許ヲ令隨□待儲テ誅之云々武藏五郎越後將監同時ニ被打云々其外親類家人等數十人被打畢云々

○東寺王代記書籍館本

承安二三井公顯爲僧正平太師清盛營法花道場于福原

治承四夏都福原六月二日　冬復都

觀應二同二年正月一日桃井播磨守從越中率大勢發向于山門彼云此洛中騷動以外也將軍執事自中國歸洛逗留山崎正月十四日宰相中將引退於京都了同十五日將軍執事自山崎馳上京都於四條河原合戰死人不知其數先代未聞之事也同十六日將軍以下沒落於京都引退于丹波將軍執事佐渡判官入道以下下向于播磨國宰相中將仁木細川輩逗留于丹波國二月十七日將軍率大勢自播磨國責上畠山石堂爲左兵衞督入道手馳向于攝津國打出邊合戰將軍方打負軍勢成散々了其後以和談儀師直師泰遂出家將軍相共歸洛之處二月廿七日於攝津國榎河邊上杉（豆州養子）馳向誅師直師泰以下輩了豆州出家後爲師直被誅師直出家後爲｜被害因果相感尤以可怖

應永十二四月十四日丹後國迯（マヽ）戸御參詣同廿日御下向此御次四（篠カ）村八幡御參詣卽三寶院滿濟當社爲別當之間自十九日彼社參住云々同四月廿五日兵庫還御

十三五月四日ヨリ御葛食御所樣御祈禱阿闍梨地藏院僧正坊無例伴僧八口俄九日結願今日依兵庫御立也同十七日亥初剋下五月十九日兵庫ヨリ還御又重翌日御下向云々六月七日兵庫ヨリ還御六月十一日唐人入洛進物濟々驚目畢今日直參于

十五正月十九日唐人立京都下向了(于カ)兵庫二月一日兵庫御下向同五日御上洛二月三日唐人出船云々北山殿供奉人勢々同廿八日還幸供奉人少々

○後藤基景兵庫島軍忠狀 後藤文書

後藤八郎左衞門尉基景申軍忠事
右爲攝州警固去年八月御下向兵庫島之時卽馳參於神呪寺瀨川等之御陣致警固以下忠畢爰但馬丹波凶徒就打入播州法樂寺御發向之間令御共之處爲法樂寺搦手得平因州相共可罷向之由承之間馳向之處今月五日凶徒打出之間於安田庄致合戰畢然者給御證判爲備後證言上如件
文和二年三月日
承了(赤松則祐)(花押)

○細川家譜

嘉吉元年辛酉六月赤松滿祐將軍義教ヲ弑シテ義教ノ子義勝ヲ立テ嗣トス七月赤松退治ノ命ニ依テ諸將播州發向ノ催有リ赤松是ヲ聞キ領國ノ兵ヲ率テ所々ニ砦

ヲ搆ヘ教春軍勢ヲ催シケル内又出陣ノ催促有リテ八月十五日進發十七日兵庫ニ着シ此由管領ニ達ス廿六日明石ニテ合戰教春手ニ手負ヒ討死有リ右戰功ニ依テ太刀一振刀一腰ヲ賜ハル九月十日白旗城陷ル

○大内政弘書狀 萩藩閥閱錄 百二ノ二 冷泉五郎

今度兵庫津難儀之時節被馳加當津殊去月十六日合戰之次第御高名之至候仍助四郎（大内義豐）殿自身被摧手候御祝着察存候誠以本望此事候以諸勢無爲了簡先御下向候尤可然候偏對當家被廻遠慮之條旁以御計略無比類候早々御上洛待存候軍勢兵船已下同申付候富備中守（安貯カ）内藤中務丞可被仰合候每事期後信候恐々謹言

（文明元年）十一月八日　政弘判

下野守殿（大内弘豐）

今度兵庫津難儀之時節御親父相共被馳加當津殊去月十六日合戰之時自身被摧手太刀討高名之至無比類候誠祝着此事候攝州錯亂之間依不及合力以諸勢無爲了簡先被下國候肝要候對當家御忠儀不可過之候早々上洛待存候軍勢兵船已下申付候每事期後信候恐々謹言

十一月八日　　　　　政弘判

助四郎殿

○東寺執行日記

文明五年十月

廿三日淀へ國方勢下向游佐越(中脱カ)守濟(齋)藤新右衛門也

同日攝州へ大內(政弘)方勢打入申候所々在々燒之

廿四五日比大內衆引返云々下ノ生田此方へ參處播州衆生田城へ打入□□

廿八日攝州へノ入衆引シリソクト申

十一月十二日此邊者共陣立淀有之

十四日山崎事有之譽田引返申

十二月五日山名(政豐)殿御內延屋大內方へ爲合力攝州ヱ下向申百四五十人

廿六日彦五郎ヲ西陣へ遣也

○東寺過去帳

享祿四辛卯中於諸國（山城丹波攝津播磨和泉河內備前美作加賀越中）在々所々細川方赤松方合戰其外土民等向一揆討死衆不知幾千萬凡於攝州兵庫尼崎天王寺死亡輩浦上掃部助鳥村以下沒河衆一萬餘人云々細川右京大夫常桓（享祿四年六月八日於尼崎道場被切腹了）

○住吉神主國冬請文案（德富猪一郎氏所藏文書）

東大寺八幡宮御願料所攝津國兵庫經島升米事募當社造營之號神人等令難澁關米候云々此條帶院宣幷武家下知之上者所申雖非無其謂之由存候於當社事無子細異他候之間向後全不可對捍之由嚴蜜（マヽ）加下知候若猶以當社之寄事申子細輩候者爲社家可鎮濫吹候更不可有相違候且可被仰合滿寺候哉以此旨可令申入給候恐々謹言

應長元
七月三日　　住吉神主國冬（裏在判）

謹上　大輔法眼御房

○兵庫關合戰交名注文（攝津國古文書）

注進　正和四年十一月廿三日於兵庫關所對兩御使致合戰放箭致及傷惡行輩等交
名注文事
合
治部卿律師良慶　　成林房大宮閇籠之時蒙衾宣旨者也都賀河住
寶藏坊伊賀堅者　　勝藏房大進元者號西城坊大輔房弁承依爲惡黨蒙衾宣旨者也
西谷淨定坊信乃堅者弁承同　　妙法院門徒播磨注記懐玄成實坊同宿弁承舍兄也
福智院尾張坊
帥註記都賀河住　　東塔西谷摩尼坊少輔阿闍梨頼甚
同谷勝藏坊讃岐房彦勝頼甚舍弟
北谷大寶坊少輔房玄賀　　南谷戒前坊帥注記定尊
同坊肥前注記親覺　　東谷圓實坊弁坊都賀河住
同坊宰相阿闍梨永玄　　同坊大輔房祐賀
同南谷極樂坊侍從注記教惠
同坊播磨注記良緣　　西塔北乘明坊遠江堅者堯玄
同上總阿闍梨貞祐　　彥太郎左衞門尉細曹住

同舍弟兵衛太郎同
□納言房河原崎住
童子八郎飯來住
石熊勾當西宮住
□舍弟熊夜乃(叉)同
生福同
馬四郎同
五郎太郎同
左近次郎同
□太郎同
藤太郎入道同
ふこの平次兵庫住
正願法師同
同下人彌三郎同
藥師堂前又三郎同

ゆむら北□かふりの住
市熊次郎賀嶋住
儀又太郎同
摩尼王同
阿古法師同
愛得次郎兵庫住
堅物同
小六郎同
阿波入道同
得次郎同
木ゝ入道同
とか四郎同
進士入道同
嶋本初熊太郎同
小四郎馬允同

大德同
掃部丞同
大藏丞同
大夫太郎同
番阿同
又五郎同
五郎三郎輪田庄住
三郎太郎同
公文彌次郎同
同舍弟御房三郎同
越前房都賀河記代兵庫住

越前房 同 目銭取手　　又太郎 ミメウシ 兵庫住　　南 三郎太郎 同
平五郎 淀　　藤太郎 同　　江口又太郎 同
左近次郎 同　　竹王太郎 同　　石王次郎 同
五郎 下津住　　橘次 淀　　孫太郎 イモアライ
□次郎 下津住　　藤内次郎子息 同　　觀音四郎 水垂
後藤右衛門尉 打出　　有熊右衛門尉 同　　清左衛門尉 同
乙次郎 賀嶋住　　九郎太郎 今市住　　松次郎 尼崎住
松熊三郎入道 同　　中五郎 同　　熊松右衛門尉 同
同子息 同　　宮王四郎入道 同　　江三 同
石見房 同　　石見房 西村重房住　　刑部次郎 西村住

右此外雖有惡黨等數輩不知名字之間隨見及且注進如件

正和四年十一月日

注進　罷置惡黨等交名人等事

合

本關屋　阿明房（マヽ）　得万女惡黨關所
犬女　きぬや　敎順殿原
本屋
入道五郎惡黨四所　姫鶴女　大藏進惡黨關所
大夫太郎　孫太郎　衞門太郎
進士入道　若菊等
右且注進如件
正和四年十一月日

○園太暦（大日本史料本、内閣文庫本校合）

康永三、八、十五日條
東大寺八幡宮神輿入洛例
文保三年正月十九日寅刻東大寺八幡宮神輿一基奉振弃七條河原
訴訟之起東大寺大勸進僧改定被補員外僧事兵庫津析被改付他所事此二ヶ條
也

正和四年十二月十八日寅刻同宮神輿二基鳳輦葱華奉振弃于内裏北面二條面訴訟依兵庫津關米事也

○魚住造築太政官符攝津國古文書

應令沙門性海不論神社佛寺不嫌權門勢家室泊尼崎渡部二ヶ所間於一所限十年取石別一升米築魚住嶋全島舟泊事

右得性海今月廿一日奏狀偁謹考舊貫攝津播磨兩州之際行基菩薩建泊之晴始計一日之行程定置五ヶ之要所室韓魚住輪田尼崎等是也就中魚住泊者天平營築已後年紀五十餘廻卽暨于延暦有便于停船而海岸隨歲頽壞水宿逐日荒凉爰若天長則右大臣清原眞人歷奏聞以興廢貞觀亦東大寺賢和上人蒙勅裁以繼絶加之建久者重源上人尋賢和之蹤建保者重聖上人追先師之例開諸官符宣下之鴻慈闕取庄園運上之麼牙以其用途修彼旅泊未終大功空唱寂滅自尒以降時更七八代數逾七十年或經或營不再不三囙茲從攉生泊迄兵庫嶋東西二十餘里上下往來扁舟或任風而揚扤(帆)或隨潮而廻掉然間日暮塗遠之程雲陰浪激之時匪啻運漕之失利剩多漂沒之逢灾思濟度衆生之者誰不救之存饒益有情之者不助之仍抽羊僧懇篤雖跋魚住之興隆齡餘五旬更

非餘算之可恃身無一德況非無緣之可成若不蒙知識之恩何以果速之功肆卜室泊尼崎渡部將取石別一升津料但於彼三所敢勿重疊有漏于一所者爲勸于餘所也兼復每下向船令上置石縱遂修築不可點止誠是五嶽之巓積從飛塵九層之臺起自累公之故也望請天慈早任建久建保之嘉模被下嚴密嚴重之宣旨者一嶋忽彰鼇蓬之勢四海鎮考鳧藻之槃者右少弁藤原朝臣賴藤傳宣權中納言藤原朝臣實泰宣奉勅依請者

正應二年九月廿九日

修理東大寺大佛長官左大史兼隱岐守小槻宿彌在判

○東金堂細々要記（續史籍集覽本）

貞和三年十月

今度東大寺發向云衆分云國民或依人數之多少或依軍忠之淺深矢直兵粮等如形下行之其料足學侶ヨリ兵庫關請增足ニテ（十月廿一日事也）百貫文成功中﨟ヲ足ニテ明教房丈ニ百貫文借用之尙不足之間明教房丈ヲ法橋ニナストテ二百貫ヲ宛無子細領狀云々仍四百貫文ヲ下行歟

○足利義政御教書（千鳥文書）

興福寺造營料攝津國兵庫關務役事直務以來不致沙汰之處號所料爲地頭領家去々年嘉吉式始而責取之云々然間先年兵庫致置御料所之時沙汰之實否被相尋之處於關務者雖有改替之儀至彼役者不令收納之由御代官（定光禪住定宣）註進狀分明之上者向後不可致其沙汰之旨可令下知給之由所被仰下也仍執達如件

文安元年九月廿八日　　沙彌（花押）

興福寺別當僧正御房

○足利義政御教書（兒玉文書）

麻生上總介自九州知行分米五百石內貳百石（雜具等在之）運送之云々海河上（付兵庫兩關）諸關渡無其煩任例可勘過之由所被仰下也仍下知如件

文安貳年十二月十二日

沙彌（花押）

沙彌（花押）

兵庫關幷河上五ヶ關等關所

○兵庫關御下知狀 春日神社文書

(端裏書)
「兵庫關之儀御下知以下之狀合八通在之」

興福寺雜掌申兵庫關事號所料(領)及違亂候太不可然早任御教書之旨可被停止其綺之由候也仍執達如件

文安五
六月廿三日　　　　永祥(花押)
　　　　　　　　　眞妙(花押)

赤松治部少輔殿(教弘)

(端裏書)
「香河」

攝津國兵庫南關所料事任先度御教書之旨可止催促之由候也仍執達如件

文安六
四月十三日　　　　通川(花押)

三嶋五郎左衞門尉殿

「長鹽」

攝州兵庫南關所料事任先度御教書之旨可止催促之由被仰出候仍如件

文安六
卯月十三日　　宗永(花押)

井上四郎左衛門尉殿

兵庫南關所料事支證分明之上者可取止催促由候也仍執達如件

文安六
四月十三日　　永祥(花押)

眞妙(花押)

攝州守護代

○河上五ケ關料注進 攝津國古文書

河上五ケ關料月宛目安事

淀以下五ケ關所者爲古關自往古月宛公平分大都治定之條更無其隱者也其內十十

一十二幷正二月者一年中之內規模之月々也仍爲散御不審任前之雜掌月宛注進之

一淀關所月宛

(○中略)

一禁野關所月宛
（〇中略）
一渡邊神崎兩關所月宛
（〇中略）
一兵庫目錢事相對于余關之時令一倍云〻
以上四ヶ關所之公平去年十月以來至當年二月五ヶ月分都合一千九百九十貫文也於兵庫目錢者爲彼一倍之上者五ヶ關都合定三千九百八十貫文也然者公用之外過上分既及九百餘貫畢被懸當雜掌可被召出者乎
（〇本文書ハ應永頃ノモノナラン）

〇艮阿書狀 東寺百合文書
「中村狀 應永十五年於段錢五月京著」
舊冬貴札委細拜見候畢
抑防州反錢事公役重疊之間國計會□御察候雖然先百貫文被積進和泉丸も船着岸時分彌富彌十郎可申案內候兵庫へ人を御下候て可被召候（〇下略）

應永十五
三月十二日　　　　良阿（花押）
法泉院
　　御坊中

○寺家三十講記　興福寺所藏

就寺家三十講事學侶事書等

應永廿三

六月十七日學侶評定申云

寺社造營要脚兵庫幷河上諸關過書國料停止訴訟事以學侶兩度列參雖達申入御遵行于今停滯滿寺愁吟歎而有餘者哉此上事以嚴重祈禱可達訴訟者也就其一宗紹隆之供（洪）基修學鑽仰規模不可過御三十講今度大訴速蒙裁許寺門忽開眉者今年明春之間被始行此講演之可有御立願此御講事眞俗御大儀雖不能左右偏以寺社再興之賢慮可被經御沙汰之旨評定如此

就御三十講御立願事事書一通令進候衆議之趣委細見彼面哉以此旨可有御披露由

評定也恐々謹言
六月十七日　供目代
學舜房得業

就兵庫關所等事同十一月十五日御教書到來了
春日社興福寺造營要脚攝津國兵庫目錢關事一圓所被返付南都也次當關幷河上諸
關事被停止過書國料畢。早任先例被關務可專寺社造營之旨可令下知學侶給之由所
被仰下也仍執達如件
應永廿三年十一月十四日　細川
沙彌判
興福寺別當僧正御房

寺社造營要脚攝州兵庫關所如元一圓所被返付南都也早差下律家之代官可全關務
就中當關幷河上關過書國料被停止了如元被知行可專寺社之營作之由可令下知學
侶給之旨被仰下候也仍執達如件

應永廿三

十一月十四日　　權大納言兼宣（廣橋殿）

謹上　興福寺別當僧正御房

○兵庫嶋堀人夫配符（古代取集記録）

一兵庫嶋堀配符永享五年五月晦日三百六十人ノ配符被差同七月十一日ニ延願房內山方坂本ヘ嶋堀之夫之侘事ニ被出一喉小河殿ヘ榼二素麵一貫文分苽三十上原方ヘ料足二貫其日ハ侘事難義ノ由被申間次ノ日十二日內山方一人□歎間百八十人之分被免了殘又百八十人ノ內上原殿ヘ被歎間兵庫ノ奉行ニテ候間彼ニテ心得テ十人ノ分ハ可免由ヲ返事候定百七十人七月十七日ニ懸處地下ノ現夫寺庵名主悉被立乍去現夫百十九人立奉行實報寺入道道衆殘五十一人ノ未進也閏七月五日夜人夫退堀仕迯而歸乍去殘衆十四人實報寺方彼ニテ置夫ヲシテ此間ノ樣沙汰候同七日ニ實報寺方被歸畢上原方ヘ侘リ百八十人ノ夫請取ヲ被取畢乍去小河殿未進五十一人漸々ニ可□地下ヘ被申候ヘ共又延願房實報寺罷出侘無沙汰被置了人夫ノ粮物等地下反錢ニテ支配候て十月十日ニ大西方ハ五

十九文平方ハ四十七文東保ハ五十一文ツヽ粮物御用有テ下行スル間利分等ヲ打加テ支配畢頭書粮物下行ノ散用狀實舜所持有テ上洛［　　］是ヲ支配シテ可有沙汰也先年覺賀在庄ノ嶋堀地下役モ如此

（○播磨鵤庄ノコト）

○兵庫嶋堀人夫配符 東寺百合文書　廿一口方評定引付（永享五）

六月四日

一兵庫嶋砂堀人夫事五段別一人宛矢野庄懸之仍昨日三日上原方へ以宮野令免除談合之處返事云免除更無之若免引懸有之者可申由返答間奉行付可經上意之由治定畢

七月三日

一兵庫嶋堀人夫沙汰用途五貫文地下ヱ被仰之處五貫文事者旁不可叶參貫文可致沙汰雖然耕作已下計會時分間先壹貫七百文進之候可然之樣ニ被仰人夫預免除候之樣可有御扶持之由歎申之間披露之處上原方へ明日貳百疋隨身而免除不叶者人夫被滅之樣可談合也次沙汰用途五貫文可進之由堅可書下之由評議畢

同十二日
一矢野庄兵庫嶋堀人夫事
十一月廿五日
一矢野庄之内熊藏ノ西坊參洛仕目安幷借書案捧之子細之趣者去七月比兵庫嶋堀夫錢爲寺家爲地下存六貫文學衆方代官中野ニ傳(轉)借仕之處中野御代官職改替御沙汰及候中野倉未進ニテ此借物御立用候催促仕之處依計會不致沙汰候寺家可有御返弁之旨歎申披露之處中野所ニ年貢已下被置之國下川可仕之處其年貢私ニ召仕國下用借物之段更寺家不可有御存知也此子細上使於庄下令落居既領狀仕處中野依無沙汰寺家而可預御返弁之由申其謂無之然者寺家不可有御存知之由可有返答之旨衆儀畢又田所五貫文借書進之遍目同遍ヲ歎申不相替之上者寺家御返事同遍畢

○倉光下郷幷乙犬兩郷契約狀 石清水八幡宮記錄

契約申　條々事
一倉光下郷幷乙犬兩郷間事

一倉光參拾石乙犬廿石之由申定候上者其外ニ於被出御沙汰公平者不可綺(マヽ)御公平減少候如備中入道淨春沙汰五拾石分ニ可有御結外(解)雖然地下不慮之儀出來時者可爲行結解之條勿論候

一彼米者到來者急々致沽却以其代可結解申候

一兵庫兩關幷河上關事先御年貢內過書ニ被入て可有御船賃駄賃等事ハ可有御結解事候

右條々重而申定候條如件

永享六年三月晦日　　良清

○經覺私要抄　五　內閣文庫本

寶德二年八月七日

一兩人(〇任英光藝)語申云昨日令同道泰永得業可參之由令契約之處嚴重集會之間遲々候其子細者兵庫以下(寺門)關者細川寺ヲ作候財木舟ヲ可通之由申於寺門不可叶由返答之間於細川分國者寺門關不可立之由內々形勢漏之仍爲寺門爲重事之間學侶六方令會合神水爲之仍肝要可及次第大訴之由評定云々

○相國寺國料兵庫北關公用錢納狀 竹内文書

納
相國寺國料公用錢事
合參拾貫文者
右爲兵庫北關之沙汰所納之狀如件
寶德四年貳月廿一日　納所周苗(花押)
都文正盛(花押)
御奉行所

○藥師院舊記

亭德二八月十八日兵庫南ノ關之公事興福寺訴訟閉門東大寺一同心可然旨被申牒
畢
嘉吉二十一月廿七日興福寺彌勒院覺舜房五ケ關悉可給由訴訟被相申七大寺閉門
畢

○寺院細々引付 三内閣文庫本

康正二年六月

九日

今度御用錢事寺門沙汰之次第室町殿御腹立無力計云々仍兵庫關以下被押寺領之由有其沙汰先京都通路東西被留之仍今朝自門跡被上人夫以下自木津歸了執行承之歟

十日

依寺訴昨夜八方大衆蜂起了則今日被注進京都禪南院所從昨日令下向之間以歸洛之次被仰了

○大乘院寺社雜事記

長祿二年十一月十一日

一學侶使節增秀得業・專懷五師參ス、各付衣・五帖ケサ、就兵庫關事爲寺門、雖捧事書、云傳奏云武家奉行、不能請取披露候、以外事候、所詮爲寺務可然樣ニ御注進候者、可畏入之由令申、予返事ニハ、亘細承候、以其趣可進書狀、早々京都へ可注進之由仰了、仍

重而書狀進之者也、西國舟夷丸云々、

長祿四年三月廿七日

一就寺訴可及大訴之由、自學侶申合六方云々、一昨日不成集會之間、昨日六方集會在之云々、

六月廿二日

一昨日椿井佛所榼一双・二種持參之、賞翫之由仰了、先日寺訴無爲故云々、

九月廿一日

一弘寬來、兵庫關事自細川代官職事所望、仍昨日學侶集會在之、今日又六方・學侶同時集會云々、寺門大儀迷惑者歟、一昨日自柚留木方申下云々、

寬正二年八月廿二日

一丑剋柚留木對御判物下向、則以柚留木被付供目代了、副狀折紙奉行不參之間、寺務御自筆者也、於田能村大和守者被關所、關分悉以被下細川了、倚々就住宅等可有嚴蜜之御沙汰云々、次池田事於借物者悉被破之、於代官者可爲如元歟、次於十石船事者一切不可承引旨、細川申切了、於自余船者可爲如寺門訴訟云々、□（白カ）關白殿被申入大內之間、則被仰室町殿被召細川重々御問答、仍此分大綱落居云々、且又大明神御

威光也、千部論結願日如此成下了、忝者也、柚留木申、此分大都無爲者也、此上者明日社頭閇門等事及其沙汰者、爲寺社可爲珍事、家門大閤被仰柚留木云々、當時天下時宜神社・諸寺訴訟更以無仰天、然上者雖及神木入洛、歸座期不可有之、然者寺社滅亡之儀歟、相構其子細可得其意之由、念比ニ被仰付云々、仰誡ニ尤者也、(〇下略)

寛正二年九月三日

一就寺訴寺務幷東北院僧正上洛間事申勸云々、仍英深・好嚴・有圓五師三人爲使節御上洛事申入之、御對面、条々被仰合㝡中、宗秀・定清兩五師又參ス、東北院ハ只今上洛事無益候、先御寺務御上洛候て、其後俊圓上洛候ハて不可叶之旨候者、可罷上之由返答云々、仍如何云々、可有御沙汰哉之由、五人五師各申上、御返事趣、依寺務上洛可爲寺訴無爲条更以不覺悟者也、雖然自衆儀被申上者、無力在御上洛、可被仰合傳奏云々、各畏入退出了、五人之内別會五師一人ハ、付衣・白五帖ケサ、自余小衣也、

九月六日(前半ハ市史資料篇ニ掲載セリ)

(〇上略)

六方・學侶大集會、寺訴事及評定、則宗秀五師・好嚴五師兩人參ス、御敎書等到來之上者、於今日閇門者可延引仕候、三个条之内兩条ハ御裁許候、田能村關所事ハ無一途

之儀歟、(〇下略)

寛正四年十一月廿五日

一就寺訴今日辰貝定當寺幷七大寺・東大寺以下可有閇門旨一決之處、自京都光宣法印申下子細在之間、筒井令上洛色々取申入之間、云閇門云若宮祭禮、十个日分申延了、十个日內如寺門本意無之者、可有其沙汰云々、

一尊藤參ス自(寺カ)訴事大略可爲無爲歟云々、亘細飯尾左衞門大夫ニ申置之、不可有等閑上及大訴上者、不可有余議事也、

寛正四年十一月廿八日

一光宣法印就寺訴事昨日自京都下向、今日午剋學侶滿集會成之、寺訴条々御裁許之趣共致披露云々、子細如何、(〇下略)

十二月十二日

一當寺・東大寺、以下七大寺自午剋令閇門了、以外珍事也、

寛正五年四月六日(此一條のみ河原勸進猿樂記の內)

一云棧敷云出立、大綱致用意處、學侶・六方令申趣ハ、寺門大訴最中、令押留神法會(事脫カ)折節、兩門之內勸進猿樂見物不可然旨、種々申入之間、其子細令注進京都、不能上洛、可謂

無念、御棧敷幷棧敷錢計進之了、家門御衆幷武家奉行人等、內々於當門跡棧敷見物云々、成敗以下事仰付柚留木法橋了、

四月廿五日

一今度寺訴御禮御樽五十荷公方新足五十貫・樽二十荷日野大納言、二十貫・樽飯尾左衞門大夫、

寛正六年四月廿四日

一昨日兵庫關代官神人・承仕湯誓事延引之云々、

應仁三年四月二日

一近江入道今日令下向和泉國、傳馬事申入之間、小吉田庄一疋仰付之了、大納言局兵庫ニ被下向、

一文明元年十一月八日

一美乃國ヱ書狀遣之、卜撿弟子下向次也、新御所御事雖不未聞申遣是心院殿了、

十一月十四日

一予令參殿下、新御所御儀以外事無力次第、被仰出云、福原庄事日野大臣可申給之由風聞、不得其意之由云々、當時不道之時節、尤以不能左右之由申入了、

十二月廿六日
一河内太子より家門ニ御炭二荷・卷數進之、每年儀也、兵庫福原庄之内一名、太子ニ御寄進故云々、
文明三年正月廿四日
一雜掌柚留木法橋重藝來、付衣、當年始也、京都事色々相尋之、每事珍事之時宜也云々、
一切御成敗不事行、上下萬民任雅意計也、
（○中略）
兵庫福原庄事可成御判之處、日野殿禮物事依被申之、不申沙汰、沙汰外事也云々、子息右少弁事、出家入道遠流赤松分國、希代不思儀事云々、
文明四年六月十九日
一於四恩院學侶神水集會、兵庫關所事上使法樂侗々致糺明云々、幷五个屋中院唯識講・興善院講・法花會・五節供憑支以下色々定新制、依炎旱嚴蜜事共云々、
七月十一日
一就福原庄事、自香川中務丞方書狀進之云々、就其巨細蒙仰者也
十二月七日

一筒井罷上、攝津國御神供預(領)以下數个所無沙汰、有名無實也、雖爲大亂中、彼國事公方御分國也、依何事嚴重領知事可有無沙汰候哉、所詮細川右京太夫猛惡造意歟、五社・七堂等可被籠名字之由、學侶一決之間、爲申延云々、此事自兼日學侶面々申合事之由觸聞了、東方御分國無爲在所猶以如此、於西方者中々不及是非歟處、剩於西方者少々無爲子細就寺社本所有之歟、希有事也、

十二月九日

一細川間事自筒井方申上之云々、

文明五年十一月三日

一攝州池田與藥師寺與一合戰事、兩方無殊儀、依之京都通路一向無之、此間上下六个日上洛也、經兵庫ハ上下廿日計云々、希有之二京之間也、

文明十年二月八日

一就福原庄(領家)事自禪閤御書到來、六日御書也、今日到來、寺門向事更以無御違變儀候、香川新左衞門尉方無御補任候、香川ハ惣領斷絕、非分ニ新左衞門號香川云々、安富ニ地頭分事候間、定可致代官歟、

三月九日

一唐院書狀、安富在京爲寺門可然事也、家門福原庄事、自寺門申合歟、香河事柚留木色
色勝手ニ申成云々、珍事之由被申之、
五月四日
一松殿・石左衞門上洛、福原事訓英方より申學侶衆申合、於御年貢者速ニ御家門ニ可
進上之由、自寺門以柚留木可申付香川云々、此子細可被仰付云々、珍重、松殿以堯善
令申訓英方畢、
五月七日
一自禪閤御書被下之、福原庄事妙德院巨細申狀御悅喜、年貢事香川方ニ可有御催促
云々、
文明十一年閏九月八日
一攝州ハ平均ニ寺社本所不可沙汰之由、國人等一決了、
文明十四年十月十七日
一於東室學侶神水集會在之、題目
一兵庫關析事、
文明十五年十一月十日

一宗順下向、去六日自京都河内通ニ罷下之由申、今日又孫九郎下向、松殿中將・兵衞佐
　來十四日可下向兵庫福原庄之由被申下之、

文明十六年二月九日

一丸入道自京都罷下、家門女中モ兵庫ニ可有御下向歟云々、
　赤松ハ落伏堺ニ云々、惣領ハ有馬之息七歲、案(安)堵云々、天下儀無法量者也、

三月十九日

一自今曉大雨下、日中時分予歸小宿了、二條殿より柳・折等被下之、爲御禮參申了、大閤
　御方・上樣・姬君等入見參了、姬君一條殿入御事、松殿ニ申合治定了、來月早々申入、同
　道可下向兵庫云々、

文明十七年四月五日

一去月廿八日於幡(播)州山名・赤松大合戰云々、山名方打負云々、

四月十日

一自赤松三个國打取喜事歟、當社へ一鄕可寄進之由申送、今日學侶集會在之歟云々、
　返事一大事也、且如何無心元、

六月十四日

一今日幡（播）州室合戰、赤松方浦上掃部打負云々、

七月四日

一五師中寺官ハ不可上洛之旨、昨日一決了、各有子細五師共也、難上洛哉、

七月晦日

一東北院自京都下向云々、六月十八日上洛了、寺訴事ハ一切不可成旨必定々々也云云、東院・慈恩院ハ未在京、不可思儀事也、閣東北院爲兩人可申沙汰條且如何、

九月十日

一東院僧正・慈恩院律師寺訴無爲珍重之由遣使者、喜悅云々、則慈恩院來、色々京都事被相語之、此事應仁二年故日野左府申沙汰、被付南都了、此條率爾不得上意云々、所詮日野所領被召上之、爲替地可被仰付南都云々、此條難義之由申入之間、色々有御沙汰、被付南都了、守護遵行等一切無爲云々、奉行人ハ去月五日雖被召出之、一切被召仕之事無之間、今度事伊勢守書上也、一段之儀也、初ハ公方御腹立以外事也、仍東北院僧正ハ俄ニ馳下了、凡此輿之次第云々、兩人高名不可過之、五山十刹領知共事、應仁大亂以前ニ至、當知行分事ハ悉以被返付之間、等持寺領共事申入之、其隨一也、爲等持寺不便々々云々、但定而日野領爲替地可被付之歟、

九月十日奥付
兵庫關月保錢事

一三百九十貫文御寄進狀御判物在之否事、一亂中事也云々、

一文明八年・九年以來度々被成奉書之由事、事實歟如何事、
等持寺方堀川局也、應仁二年御寄付也云々、

文明十八年六月廿九日

一松殿・町殿・右さ衞門參申、

七月六日

一松殿・町殿上洛、福原事巨細仰付之、

八月廿一日

一松殿中將昨日兵庫ニ下向了、

○崇德院御影堂禪衆言上狀（六波羅密寺文書）

崇德院御影堂禪衆等謹言上

右當院領讃岐國北山本新庄年貢運送國料船（號福江丸）事、海阿上諸關無其煩勘過之處限

今春兵庫兩關號新國料過分之關役、申懸剩以前無爲之役錢共仁責執之條言語道斷之次第也所詮應永八年以來任御教書等旨彼役錢等被糺返於國料船者無其煩可有勘過旨嚴密之被成下御成敗者可爲御祈禱之專一者也仍粗言上如件

長祿四年卯月日

○地頭高橋方書下案文 攝津國古文書

（端裏書）「案文地頭高橋方書下」

攝津國南關所料事被止催促之由被仰出之上者先度預置問丸於船役者、可被渡付關所至在所者如元不可有相違仍如件

長祿四十月七日　賀　賴判

高橋太郎三郎殿

○山名是豐書狀 攝津國古文書

御札之旨令拜見候仍攝州福原庄領家之儀示給候兵庫三ヶ庄之事者依功隨候致成敗候段雖勿論候非守護間遵行之事不及覺悟候就中自一條殿御書拜領候最御返事

雖可申入候以此趣可預御意得候恐々謹言

五月四日　（山名）是豊（花押）

興福寺供目代

御返報

○經覺私要抄 十二 内閣文庫本

寛正四年十二月十二日

一依兵庫關以下事訴訟有數ヶ條然而無許容之間今日午刻諸堂令閇門云々東大寺七大寺同前可歎可驚祭禮不可有歟神慮難測者也

十四日

一弘寛來寺訴事共演說了自十七日□前大般若於社頭可在之其後可開門之由申云々以外次第也

廿四日

一社頭閇門昨日日中以前閇□又遷座云々但移殿斩理□間番匠共召集云云然者□遷座歟云々

廿五日
一昨夜酉剋八方大衆在之則□大明神奉下移殿へ遷御昨□者遷座瑞者哉徳
治以(來カ)下□瑞也又後夜春日山鳴動云々

○防州公用米代錢支配帳（東大寺文書）

防州公用米代錢支配帳　酉正月廿五日注進

○正米四石　正稅米
　此內一斗二升　南關米引之
定米三石八斗八升
代錢四貫七拾四文

○正米八石　藏奉行得分　當所
　此內二斗四升　南關米引之
定米七石七斗六升
代錢八貫四拾八文

○正米四石　厚東名（當所灯油方）　半分宛

此内一斗二升　南關米引之
定米三石八斗八升
代錢四貫七拾四匁
○正米拾二石一斗八升二合　大前公文名　油倉
此内三斗六升五合四勺　南關米引之
定米十一石八斗一升六合六勺
代錢十二貫四百七文
○正米廿九石二斗　方丈御得分　四ヶ所加定
此内八斗七升六合　南關米引之
定米廿八石三斗二升四合
代錢廿九貫七百六十九文
○正米拾石　坊主得分
此内三斗南關米引之
定米九石七斗
代錢十貫百八十五文

○正米十二石三斗三升三合　大行事兩所分合定
　此內三斗六升九合九勺　南關米引之
定米十一石九斗六升三合一勺
代錢十二貫五百六十二文
○正米七石　先使田　安住坊
　此內二斗一升　南關米引之
定米六石七斗九升
代錢七貫百廿九文
○正米拾六石一斗四升　東室殿佐波令
　此內四斗八升四合二勺　南關米引之
定米拾五石六斗五合八勺
代錢十六貫四石卅八文
○正米五石　如意輪院　東里（マヽ）公文名
　此內一斗五升　南關米引之
定米四石八斗五升

代錢五貫九十二文
○正米四石一斗六升六合　戒増堂方
此内一斗二升四合八勺　南闕米引之
定米四石四升一合二勺
代錢四貫二百四十三文
○正米四石一斗六升六合　□玉房方
此内一斗二升四合八勺　南闕米引之
定米四石四升一合二勺
代錢四貫二百四十三文
○正米五石　富海□□殿
此内一斗五升　南闕米引之
定米四石八斗五升
代錢五貫九十二文
（表紙）
「寛正六乙酉正月廿五日注進
與田方

四十貫文之内一貫六百文雑用　二月十六日渡與
殘卅八貫四百文請取國下了

防州散在公用支配帳

油倉」

○大内合力勢兵庫著岸（經覺私要抄）

應仁二年正月九日

一元次語云大内合力勢又舟廿六艘着岸兵庫云々小（少貳）尓三（三カ）保賀（加）々ト云者也云々自越智方申遣古市云々

○豊後孫三郎割符方渡米注文（東大寺文書）

豊後孫三郎割符方□江渡米注文

合應仁三己丑二月　次郎右衛門執進上

割符六内（堺ヨリ三　兵庫ヨリ三）

七十參貫文　加賃分拾一貫文兵庫ヨリ南都マテ運賃ししう文之由申之

分米百四石貳斗拾石別七百文宛

此內遣方
拾石　　大前公文石上足子歳之內
貳拾石　亥歳目才持上奉加錢分割符於路次失了然間此米不渡仍早々遣方ニ仕
　　　　候也
拾石八斗二升八合　富田公用之內
　已上四十石八斗二升八合渡之
殘未進六十三石三斗七升二合
富田公川此後も納候て可渡之候也
卯月五日　　　　　玉舜
油倉江參

○足利義政御教書（唐院古文書寫）

（花押）
攝津國福原庄御寄進狀被遣唐院可有披露寺門之由被仰出候以此趣各可被存知之
由重而被仰下候也恐々謹言

(文明二年カ)卯月十六日　　忠顯

興福寺學侶衆徒御中

○兼雅書状 大乘院寺社雜事記裏文書 文明十二年七月廿五日條

當寺領攝州兵庫關所なたと公事之子細候而自池田方なたの得語候而兵庫之關所之物悉取候之由申候次雖恐存候新唯識會出仕之ために此日水清(精)之御念珠被借下候者畏存候此書狀御便宜ニ御所樣へ被進候而可被下候

吉陣来十一日越前江可罷下候御用之事候者可蒙仰候寺門之兩使も可罷下候爲路次隠蜜候仍越前之儀志ゝ幷堀江(惣領)屋形方へ降參候志ゝ者具足數百人計候乍去今度之合戰にしまい惡候而多被打候間今者其程者候ハす候兄之志ゝ者未朝倉方候屋形方へ降參候者弟にて候堀江者具足數二百計是も合戰に人多打死候間今者百人計候旨申候次當年御講者御略候へく候設後年始行候共先日申入候色々其外若證義に參懃候へき事も候ハん程に候裝束共依躰申出事も候へく候自余方中候共無御領狀者可畏存候旨可有御披露候恐々謹言

六月十八日　　兼雅

御番衆御中

○多聞院日記

文明十七年卯月十日

赤松殿兵部少輔、備州肩背郷内御油田都染尾張分之事、始而被寄附興福寺畢、則赤松殿ヨリノ状ヲハ唐院本源房方ヘ被渡之了、幷分國中當寺領不知行之在所、悉以可有還附之由被申、屋形書狀、同浦上掃部助之書狀到來、珍重々々、隨而此書狀就奉行所唐院方、自赤松殿被申寺門者也、其子細者、唐院侍者藤春房兵庫關所庄主而被在關之處、赤松方沒落之衆少々關所ヘ出入蒙扶持、又今度出頭之剋ニ、船少々自關所仕立、赤松牢人罷出、雖關所寺門之儀無存知、藤春房私ニ依知音如此沙汰之、又唐院之坊主本源御房ハ赤松之家ト就本家山緒也、旁以就奉行所唐院自屋形被披露云々、仍寺門先祝著之由令返牒、以卷數被申礼畢、

○大乘院文書內閣記錄課本

東大寺東南院門徒等謹言上

右當門跡者聖寶僧正御建立三論宗長官七大寺本院也爰當門主背釋門之法不儀之御行儀重疊之子細以前既令言上了所然就兵庫北關事御惡行企越常篇間爲滿寺令罪科申之處御所行依難遁被開於門跡被隱居畢此等趣爲滿寺以事書被達上聞者也就中彼隨心院僧正御房可奉見門主由雖致注進若君御入室可然由及一寺評定之間一條大閤御恩奉定新門主者也併門跡再興之計略御願相續之懇誠殊可奉全天下太平御運長久之御祈禱旨門徒等粗言上如件

文明六年潤五月日

○鹿苑日錄

等持寺日件　延德元年五月十三日

齋了、納所正都寺月單、自二月至四月、米相殘者十石七斗餘、錢相殘者二十九貫餘、午後的都寺新井勘定、去年長享二年戊申中所納五百石餘下行了、猶有過上四十五貫餘、又的都寺爲上使掌之、上使免兩年之分十貫文、合五十餘貫在焉、命出官、予退後卽返之、粟津去々年未進九貫餘、日羽去々年未進七貫餘、小布施去年未進及百貫文、又五位庄舊未進四十貫餘在焉、現管莫大也、又命評定衆、以三十貫文、以爲虹梁二本之木之價、然則佛

殿成就也、正脈佛殿代十貫文在焉、早可辨之、又不知事尾張中庄、兵庫兩關等已後訴之返之、如此謀之則可也、一々留言矣、

○過書（東寺百合文書）

東寺造營材木事京進條河上以下河內國中無其煩可被勘過由也仍執達如件

明應二

三月二日　直秋在判

基守在判

所々役所御中

○過書（東寺百合文書）

東寺造榮（營）材木運送事任公方御下知之旨河上以下攝津國中無其煩可被勘過者也仍狀如件

明應貳

三月四日　元長在判

攝州
所々役所御中

〇文龜年中記寫 內閣記錄課本

文龜元年六月私引付
一就今度和州武家知行之儀去二月廿八日奉成神木御動座訴訟於京都及內外之調法者也仍河內遊佐越中守就國幷當國越智以下國衆數十ヶ日在奈良都鄙計略同寺門雜掌柚留木幷承仕兩人善良善圓被在京之儀於當國武家者悉以可被停止　公方樣御判（〇此處脫アルカ）
一就今度御歸座御判物事
大和國諸關所幷兵庫關等事訴訟之趣被聞食入向後令停止武家輩之入部既裁許之上者不日可奉成神木歸座之狀如件

文龜元年六月五日　御判

興福寺學侶衆徒御中

今度大和國諸關所幷兵庫關等事訴訟之趣被聞食入如先規被停止武家輩之入部御裁許之上者早任御判之旨不廻時日可被奉成神木歸座之由所被仰下也仍執達如件

文龜元年六月六日　加賀前司在判

前丹波守在判

興福寺學侶衆徒御中

今度大和國諸關所幷兵庫關同越(前カ)訴條々注文在別紙事被裁許訖宜被存知之由所被仰也仍執達如件

文龜元年六月六日　加賀前司在判

前丹波守在判

興福寺學侶衆徒御中

今度神訴之儀大儀子細共候之間急度難事行存候處早々如本意落居候殊被成御判誠寺社大慶不可過之候哉弥重候仍御判物幷奉書等使者同渡雜掌候定而可有注進候哉早可被奉成神木歸座事肝要候（〇中略）於子細者兩使同柚留木可被申候哉不能一二候恐々謹言

六月五日　清房判

興福寺學侶衆徒御中

大和國諸關所幷兵庫關等事就訴訟神木御動座候然間兩條之儀寺門如本意被裁許候殊被成御判候珍重候寺社大慶不可過之候哉次越前條々同被成御下知候此間一兩所之儀被仰出子細候委曲申含雜掌可被得其意候恐々謹言

六月五日　清房判

長秀判

興福寺學侶衆徒御中

今度神訴條々事被聞食入被成御判候御本意至目出候然者神木御歸座事早々被遂其節候者尤以可爲珍重候恐々謹言

六月七日　　　貞宗在判

興福寺學侶衆徒御中

南都領攝州兵庫南關事藤春房雜掌御（帶脱カ）下知幷當方奉書以下依爲寺訴去渡申條如元可被全寺納之儀可爲肝要候者可預御披露候恐々謹言

五月卅日　　元家判
　　　　　　宗益判

興福寺
　供目代御中

一御歸座無爲之趣（同九日）以飛脚京都注進畢淸閑寺殿（叡聞幷殿下）兩奉行（加賀丹後）伊勢守安富筑後守勢州奏者蜷川丹後守
各珍重旨返牒到來畢

一應仁元京都東西兩陳(陣)確執之時
細川右京大夫勝元當社ニ被籠願書寫之事
敬白　春日社立願事
一就今度御造替勤一家面々幷扶持人等可奉致奉加事
一攝州兵庫關所事社家知行之間者於私儀不可存等閑事
一所領壹所可奉寄進事
一毎月朔日御神樂事
一毎年籠御師社頭百ヶ日可致奉公事
右之條々今度題目如所存令靜謐有落居者悉以可奉果遂仍立願狀如件
應仁元年六月一日　　勝元判

文龜二年八月八日
一去朔日於兵庫京兆下知而高橋三郎左衛門生害仍安富ハ此事令述懷遁世云々高橋生害之題目篇々也慥ニ不聞三日澤藏ハ兵庫へ罷下畢安富ハ明年甲子六月被

召返七月末比於京令死去（〇安富ハ以下加筆カ）
八月十七日
一細川殿兵庫ヨリ堺ニ被出云々依今度安富逐電南庄澤藏軒ニ被下歟仍屋形并宗益方禮錢過分ニ被申懸云々京兆之振舞珍事也安富筑後ハ行方不知言語道斷也始終ハ爲細川家不可然之由風聞畢
廿四日又兵庫へ被歸畢

〇學侶引付寫（内閣文庫本）

元龜元年十二月七日於唐院沙汰人集會評定曰
一兵庫津南之關并淀河末之河上關之儀所及令調略運上之儀可有評定之由攝州神領政所今西方申上由因禪房僧都演說之條尤珎重之儀也一虛兩著之樣能々可申越事專意由一決了

近世の資料

楠公墓碑建設關係記錄

（〇前略）

佐々介三方ゟ連名書狀參候而指越申候此中楠公贈官位ノ事其元へも被申上候
由新奇ニ存候（〇下略）

六月十八日（〇元祿五年）　　新　八（〇中村顧言）

金　平　樣

（第十九卷）

（〇前略）

一楠公贈官位之事相知れ申候而殊之外ノ御喜色頃日何となく御機嫌おもしろく

被思召候ハ此故ニ御座候との御意之段御紙面致承知候忠臣義士之事造次顚沛も(カ)思召被出候故かやうの事御中心ゟ御欣悦被遊候と乍憚奉感候此段館寮へも語申候尤介三郎へも申遣候此中能序御座候ハヽ　殿様へも御物語申上候何も好古の士へハ段々かたり傳へ申候皆々抃躍仕候就夫右之由世間へも早ク知らせ度被思召候間參考太平記正成戰死之所へ此事再出所等手入板彫改入致候方へ遣し申候樣にと被思召候由奉得其意則內藤甚平方へ其ノ段申傳候宜樣にもくろみ相伺に(カ)て可有之と存候

(〇中略)

一楠公贈官之事ニ付太平記評判大全之說ニも御座候て出所有之事ニ候へ者皆々難捨被思召候甚平ハ太平記全部たんれんの事ニ候又ハ其時代の紀傳を請(カ)取申候ものにも右之二書ノ說ノ內おもしろき事も見出候ハヽ申出候て他日の考に可備候旨被　仰出候由奉得其意則甚平方へも其段申傳候

(〇下略)

六月廿五日(〇元祿五年)　　新　八

金平(〇鵜飼)様

（第十九卷）

（〇前略）

一楠公之碑面出來仕候由に而介三方へ急面之一封致到着昨四日御□□□出し六日飛脚に指出申候（〇下略）

七月五日（〇元祿五年）

新　八

金　平　様

玄桐（〇井上）様

（第十九卷）

一筆致啓上候殘暑甚御座候へ共黄門様益御安泰被爲成候半と恐悅至極奉存候

（〇中略）

一佐々介三郎方ゟ先日之返書參候楠公贈官位之事　御喜色ニ被思召候段從其元被仰下候趣申候へば介三郎も殊之外感喜仕候由ニ御座候俊明極の傳先日拔出

指上候此度全編差越申候間只今進申候御覽ニ御備可被成候
(〇中略)
一金平殿より被仰遣候和泉之界ニ有之候赤松系圖之事相心得被申候由ニ候以上
七月十六日(〇元祿五年)　新八
玄桐様
金平様

(第十九卷)

一楠正成花押藪四冊五位部ニ入候所削去其所へ別人ヲ補正成者第二卷二位三位ノ所へ附贈三位と補之源忠吉卿次へ出候て可然候由被　仰出候旨奉得其意候則雲平へ申渡し申候御意之通もくろミ候而相伺申ニ而可有之候左様ニ思召可被成候
(〇下略)
七月十九日(〇元祿五年)　新八
金平様

（第十九巻）

（〇前略）

一楠正成花押藪ニ入改候事雲平もくろミ置申候即時相伺可申候太平記參考へ補入候一件も甚平方もくろミ致申候尤文意ハ相伺可申由ニ御座候

（〇下略）

七月廿六日（〇元祿五年）　新　八

金　平　樣

（第十九巻）

（〇前略）

一正成花押藪に入改候事もく路ミ其窺之通被入　御覽候處贈三位ノ中と有之候ヲ贈位之中と仕別ニ立申かた可然との　御意之由奉畏候又大内政弘ヲ今迄四品ニ入申候事不吟味ニ被思召候正成と一所ニ別部ニ立跡へハ他人ヲ入カへ可申由被　仰出旨逐一奉得其意則雲平へ申渡候

（〇中略）

一内藤甚平方參考補入ノ窺ノ事頂書ハ殊之外不叶　御心本文へ補入之方ニ罷成候由頂書大キニ件（マヽ）　尊慮申候由委細御紙面致承知戰汗之至奉存候ゑり改候事ヲ費用も多クとの了簡にてハ無之候頂書仕候て結句人見分申候も分明にて且又書躰も被苦（カ）間敷かと奉存先日拙書にも縷々申延候左樣成事御申出候事も不罷成時宜ニ御座候よし御尤ニ存候本文へ補入ニ成候事御好之事ニ御座候へバ甚平方早々改被相窺候樣にと申談候

（〇中略）

一佐々介三郎方ゟ御用狀一通致到着候間只今指越申候先日介三郎方へ被遣候楠公碑面之文字
殿樣被染健毫秀拔活動驚心目候由介三郎方ゟ被申越候拜見不仕殘多奉存候

（〇下略）

八月四日（〇元祿五年）　新　八

金　平　樣

（第十九卷）

佐々介三郎方ゟ御用狀參候間相屆ケ申候
一楠公石碑出來仕候無殘所見事ニ御座候殊碑面之文字筆勢等も能雕申候希世ノ
壯觀之由珍重奉存候さぞ御喜色之御事ニ奉存候
（○下略）

八月廿七日（○元祿五年） 新八

玄　桐　樣

角兵衞（○安積）樣

（第二十一卷）

（○前略）

一介三郎方□書搜索御滿悅被思食候就其いつ迄成共致逗留猶々尋求可申候上方
ニ久敷滯留憚申間敷由可被申遣之旨奉畏候
（○下略）

九月十日（○元祿五年） 金平

玄桐様　新八
角兵衛様

（第二十一巻）

（○前略）

一内藤甚平方太平記補入之伺其元へ被差越御好之通御直ニ御書改被遣相濟候由
一段之御事ニ奉存候被入御念候御紙面具ニ得其意候
（○中略）

一參考太平記甚平方一部拜領被仰付候樣被仰上候由御紙面之趣御尤至極ニ存候
殿樣へ申上一部拜領爲致候樣ニ被仰出候由奉畏候其段申上相濟次第御本之内
恰好之本無之候ハヽ一部求候て遣し候樣ニ料見可仕候補入之伺相濟甚平方へ
被仰遣候由前よも相認候通一段之御事ニ御座候其内甚平方拜語承知可仕候
已上

十一月廿一日（○元祿五年）　金平
中村新八樣　角兵衛

（第二十一巻）

廣嚴寺

（〇前略）

折節在京早速御書翰頂戴仕候段冥加相叶候て難有仕合ニ奉存候歸寺仕近日御禮可申上由（〇下略）

十月廿三日（〇元祿七年）

右兩人（〇安積角兵衞、中村新八）

（第二十九巻）

（〇前略）

一兵庫廣嚴寺此間被致上京對談仕候間御書翰之件物語仕追付寺へ持參可申由申候へハ渴望仰企少も早く拜見仕度由達而被申候間先拜見を許し申候へハ拜戴感激涙を流し難有かり被申候私持參仕候迄ハ何とも待遠ニ奉存是非此度帶歸度由被申候間元來持參仕候樣ニと被仰付候後ニ御座候右樣ニハ成申間敷と再三斷申候へとも合點不被致候甚深之志見受申候間御書翰ハ先相渡し遣申候と

かく大坂迄ハ參候間乍次楠公之碑拜見仕候樣ニ本寺へ參候半由約束仕歸シ申候

（○中略）

一御書翰一通眞字ニ寫シ點付くれ候にと廣嚴寺被賴候故先私寫シ候て點付遣し申候乍去後世迄副本ニ成殘申候物ニ御座候間能筆衆ニ一通被仰付私方迄御上せ可被下候私書遣シ候と引かへ申度奉存候先年介三郎殿御作被成候記をも梅村源七被致淸書候樣ニ承及候間此寫シをも[若]カ源七ニ可被仰付哉是又爲御心得申進候以上

十月廿三日（○元祿七年）　（○大串平五郎）

右兩人（○安積角兵衞、中村新八）

（第二十九卷）

黄門樣數年之御素願相達御本望之至ニ被　思召候欣然不大方則御返答小林主稅頭あて所ょて御書被遣候此度差上被申候間御持參可被成候此一件無殘所御首尾御同意大慶至極奉存候其外御記錄之御物語色々御懇之御意共是又御喜色

ニ御座候

一兵庫廣嚴寺上京御書簡拜戴感激之段其上是非願ニ付直ニ御書簡御渡被成候段委曲御紙面之趣是又御欣悅ニ御座候

（〇中略）

一廣嚴寺御書翰一通能筆ニ眞字に爲寫指越可申由相心得申候自此方追而指登可申候（〇下略）

十一月十二日（〇元祿七年）

新　八

介三郎

角兵衞

大串平五郎樣

（第二十七卷）

以書付申上候私儀方々巡行仕昨十五日歸京仕候

一兵庫廣嚴寺へ參碑拜見仕候承及候與ハ體製（マヽ）恰好西洲衆なとも多く被致造（マヽ）詣御盛擧之段何も感歎被仕候依之寺も自ら名顯漸々繁昌仕候半とて住持一入被有難候乍（マヽ）兩返事此度被下置候御書簡御禮申上度由にて私方迄小簡越置被申候處

野文八下リニ差下シ可申候（〇下略）

十二月十六日（〇元禄七年）　平五郎

三人衆へ（〇角兵衛、介三郎、新八）

（第二十九巻）

（〇前略）

一廣嚴寺へ御越楠公之碑御一覧驚歎之由御尤ニ存浦山敷存候

（〇下略）

正月十一日（〇元禄八年）　新八

介三郎

角兵衛

大串平五郎様

（第四十三巻）

（〇前略）

一廣嚴寺返簡被遣則致披露候楠碑拜謁之諸詩幷住持御自分へ被贈候和韻等何も

備高覧候處御喜色之御事ニ御座候參考太平記一部住持被申請度口ふりニ御座
候由文八被申傳候間其後（マヽ）も申す所如何にも可被遣候間於京都一部相調御自分
方ゟ書狀相添□□こと御意ニ御座候間左樣御心得可被下候
（〇下略）

十八日（〇元祿八年正月）

角兵衞
新八
介三郎

平五郎樣

（第四十三卷）

（〇前略）

一舊冬楠碑御（マヽ）拜見ニ付文章一篇御構作廣嚴寺へ御藏置度候間致內見備御覽候て
も可然候者首尾見合可申由是又衆人之目ニ觸候事候間文字顚倒等吟味可仕候
由依之草稿之まゝ被遣候間吟味之上書直させ差上披露相濟候者誰に（マヽ）ても爲致
淨書可差登候由委曲御紙面得其意申候則一覽仕候所雄文長篇珍重に存候於館
與諸兄評議宜樣相極御還山之後備英覽候而御意之趣重而可申遣候

十八日(〇元祿八年正月カ)　　　　三人(〇角兵衞、新八、介三郎)

平五郎様

(第四十三巻)

以書付申達候餘寒猶甚候へとも黄門様益御安泰ニ可被遊御座と恐悦之至奉存候

一大串平五郎拜楠公碑文一篇致著述先頃拙者方迄差越申候入黄門様御覧不苦思召候ハヽ廣嚴寺へ藏置申度由御座候委細ハ平五郎書中ニ申來候間來書相添進候書中之通草稿塗抹之儘にて有之候間此方ニて少々致吟味書直し差上候間以御序被入御覧宜様ニ御披露被成可被下候尤御意之趣御報ニ可被仰下候

一先年今井小四郎長崎へ御用にて參(マヽ)候節兵庫へ立より弔楠公文一篇致著述候此度平五郎文章廣嚴寺へ藏置候様ニと被仰出候ハヽ其序ニ小四郎文章も藏置候様ニ仕可然哉と奉存候其元御首尾次第此段も御伺被備高覧可被下候何も藏置

候樣ニ相濟候ハヽ二篇共ニ爲致淸書京都へ遣シ可申候（〇下略）

二月四日（〇元祿八年）

三人（〇角兵衞、三郞新八、介）

玄　桐　樣

與三郞（〇淸水カ）樣

（第三十卷）

本月廿三日之御用書今朝相達致拜見候

一平五郞拜楠公碑文被入御覽候處御熟覽被遊御稱美被遊候由殊ニ武人ヲ武夫と改可然と被思召候由御意之趣委細奉畏候平五郞方へ申遣候ハヽ別て難有可被奉存候小四郞文も被備高覽候處秀逸ニ被思召候兩人之作共ニ廣巖寺へ藏置候樣ニと御意之旨是又奉畏候兩篇御遣し請取申候則淸書爲致京都へ爲指登可申候平五郞書狀御遣し請取申候（〇下略）

二月廿五日（〇元祿八年）

三人（〇角兵衞、三郞新八、介）

玄　桐　樣

(〇前略)

一日外被遣候拜楠公碑文來翰ノ通史館ニテ何も打寄再三致吟味御ハリ紙之通取舍取極其外何も取寄候通不顧推□少々加改削候則手書いたし玄桐方迄先頃遣し置申候頃日披露相濟申候由にて返り申候別して御稱美之由申來り珍重ニ存候則玄桐書狀相認懸御目候武人ヲ武夫ニ改候樣ニと御意之由書中之通可被加手候若先年今井小四郎弔楠公墓文も廣嚴寺ニ納置可然と存候右之御序ニ相伺申候所是も勸置候樣ニと被仰出候貴文清書之上(カ)此方にて爲書遣し候樣ニと御注意ニ候へとも於此元了簡仕候ニ其許ニ能書數多有之其上改削之所々一々御心ニ可叶申候や如何其段も難計候間御熟覽之上取舍取極紙なとも御好次第御申付其許ニ而清書被仰付廣嚴寺へ遣被置可然存候小四郎文章ニハ此元よて清書爲致候上にて遣し可申候紙ハ横切うら打唐紙ニ爲書可申と存候貴文草稿幷西山へ相伺中書相談進候間御採納可被下候以上

三月六日(〇元祿八年)　　三人(〇角兵衛、新八、介三郎)

平五郎樣

（第四十三卷）

（〇前略）

一去年兵庫ノ廣嚴寺へ御自筆にて被下置候御書翰御文集ニのり候て有之候間御寫可被遣候是にハ壹通爲寫遣し候樣ニとの段去年相伺相濟有之候ハ被仰上候ニ及ふ申候御書翰さへ御寫し被遣候ハヽよく御座候此方にて爲取認差登セ可申候

三月六日（〇元祿八年）

三人ゟ（〇角兵衞、介三郎、新八）

玄桐樣

（第三十一卷）

當七日之御用書一昨晩相屆□候

一神名帳貳册幷廣嚴寺へ被遣候御書翰之寫し分共何も相違うけ取申候

（〇下略）

三月十一日（〇元祿八年）　　三人（〇角兵衞、介三郎、新八）

玄桐樣

與三郎樣　　（第三十一卷）

三月八日之御用書同十八日ニ相達致拜見候

一參考太平記壹部御調候て兵庫廣嚴寺へ被遣候處廣嚴寺爲御禮京都御やしき迄被參候由御書中之趣委細得其意則西山へ申上候太平記之請取手形被致候由にて被遣候入御念候事ニ存候

（〇中略）

一廣嚴寺ゟ介三郎方へ狀御登慥ニうけ取申候貴樣ゟも別紙ヲ以介三郎方へ被仰越候趣得其意申候奉伺候而埒明申候て早々廣嚴寺へ返事可仕候尤其時分御自分へも樣子可申進候

一廣嚴寺京都迄御禮ニ被登候付御書可被遣哉の段被仰下何も相談仕候ニついてハ御禮御書被遣候ニハ及不申事と存候左樣可被成御心得候尙近々可申進候

三月廿日（〇元祿八年）　　　　三人（〇角兵衛、介三郎、新八）

平五郎樣　　　　（第四十三卷）

（〇前略）

一頃日平五郎方ゟ申來候先比參考太平記一部相調兵庫廣嚴寺へ遣し申候處爲御禮京都御屋敷へ態ゝ參り難有存候何分にも宜敷御禮申上候樣にと被申候由御序之節此段被仰上可被下候（〇下略）

三月廿七日（〇元祿八年）　　　　二人

玄桐樣

與三郎樣

平五郎樣　　　　（第三十一卷）

（〇前略）

一拜楠公碑文御改定之御札則西山へ申上候何も取寄少々申進候樣御釆納之由本望之到ニ存候小四郎文章跋尾有之可然候由御尤千萬ニ存候此許ゟても兼て右樣取寄候樣跋尾書加へ淸書も出來有之廣嚴寺へ被遣候御書翰之副本源七方ゟ取纒出來次第一所ニ差出可申候間承候右樣御承知（〇下略）

三月廿九日（〇元祿八年）　三人（〇角兵衛、新八、介三郎）

平五郎樣

（第四十三卷）

（〇前略）

一廣嚴寺へ被遣候御書簡副本書寫出來申候間差登申候小四郎文章も一所ニ遣申候御點檢被成廣嚴寺へ可被遣候此方にて軸之物ニ仕立遣し可申哉と存候へともあの方にて類ヲ以テ一軸ニ仕立可被申哉も難測或ハ又貴樣御文章と一軸ニ御仕立可被成哉其段も難測候ニ付まづ此まゝ差登申候貴文と同軸御仕立にて勿論之儀別ニ一軸ニ仕立候て可然儀に候ハヽ其元にて軸表紙等宜樣ニ被仰付

可被遣候

一爲參考太平記之御禮廣嚴寺其元へ被參候儀先頃西山へ申上候處御滿足ニ被思召候よし申來候間左樣御心得可被成候（○下略）

四月四日（○元祿八年）

三人（○角兵衞、新八、介三郎）

大串平五郎樣

（第四十三卷）

（○前略）

一廣嚴寺への御書簡副并今井小四郎文章淸書相達御收納被成候由得其意申候

（○下略）

四月廿九日（○元祿八年）

三人（○角兵衞、新八、介三郎）

平五郎樣

（第四十三卷）

本月三日四日兩通之御狀相達候

老大君益御機嫌能被爲成候旨恐悦御同意ニ奉存候御自分御氣分もよく御勤仕被成候由珍重ニ存候

一楠公碑亭落成仕候ニ付碑落成之時ノ例之通供養可有之哉之段御伺被成候處供養ハ當然之事ニ被思召候ケ様之費用入申候事ハ　當君へ奉伺　思召次第ニ可仕旨御意之由則奉伺候處　黄門様思召次第ニ可被遊との御事にて其趣御用人衆へ可申聞之旨御意ニ御座候銀五枚絹五疋廣嚴寺へ従　黄門様被遣候間佐々介三郎書狀相認來次第京都へ爲御指上候様にと申合置申候廣嚴寺へ之書狀ヲ認私共方迄草々可被遣候御用部屋へ出し可申候（○下略）

八月六日（○元祿八年）　新　八

角兵衛

佐々介三郎様

（第三十八巻）

本月十日之御用書相達拜見

一湊川碑亭供養之儀相濟候段被達　西山様御耳候處御喜色ニ被思召候由得其意

奉存候就夫廣嚴寺へ之御狀御認被遣則被仰下候通□箱ニ入上書爲致銀絹ニ相添京都役人衆迄御指越京都ゟ兵庫へはさと以飛脚被指越候樣ニ役人衆迄御申越候樣ニと來書之趣委細御用人衆へ申達候所逐一被得其意早速仕出し被差登候間右樣御心得可被成候(○下略)

八月十四日(○元祿八年)

新　八

角兵衛

佐々介三郞樣

(第三十九卷)

右自京都帝國大學圖書館所藏大日本史編纂記錄抄出

北風家關係記錄

○文化中蝦夷地御用取扱一件

一文化貳丑閏八月三日從江戶表御奉書到來左記

其方儀蝦夷地產物賣捌取扱之儀申渡候尤此度其地町奉行衆江為申達候間可得

老大君益御機嫌能被爲成候旨恐悦御同意ニ奉存候御自分御氣分もよく御勤仕被成候由珍重ニ存候

一楠公碑亭落成仕候ニ付碑落成之時ノ例之通供養可有之哉之段御伺被成候處供養ハ當然之事ニ被思召候ヶ樣之費用入申候事ハ　當君へ奉伺　思召次第ニ可仕旨御意之由則奉伺候處　黄門樣思召次第ニ可被遊との御事にて其趣御用人衆へ可申聞之旨御意ニ御座候銀五枚絹五疋廣嚴寺へ從　黄門樣被遣候間佐々介三郎書狀相認來次第京都へ爲御指上候樣にと申合置申候廣嚴寺へ之書狀ヲ認私共方迄草々可被遣候御用部屋へ出し可申候(○下略)

八月六日(○元祿八年)　新　八

角兵衛

佐々介三郎樣

(第三十八卷)

本月十日之御用書相達拜見

一湊川碑亭供養之儀相濟候段被達　西山樣御耳候處御喜色ニ被思召候由得其意

奉存候就夫廣嚴寺へ之御狀御認被遣則被仰下候通□箱ニ入上書爲致銀絹ニ相添京都役人衆迄御指越京都より兵庫へはさと以飛脚被指越候樣ニ役人衆迄御申越候樣ニと來書之趣委細御用人衆へ申達候所逐一被得其意早速仕出し被差登候間右樣御心得可被成候(○下略)

八月十四日(○元祿八年)

新八

角兵衛

佐々介三郎樣

右自京都帝國大學圖書館所藏大日本史編纂記錄抄出

(第三十九卷)

北風家關係記錄

○文化中蝦夷地御用取扱一件

一文化貳丑閏八月三日從江戸表御奉書到來左記

其方儀蝦夷地産物賣捌取扱之儀申渡候尤此度其地町奉行衆にも申達候間可得

其意候以上

文化貳丑八月廿五日

岩間哲藏
三浦喜十郎
木原半兵衞
寺田忠右衞門
富山元十郎
比企市郎右衞門
藤本德三郎

兵庫津鍛治屋町
北風莊右衞門

追而取斗方之儀者諸事是迄之通可相心得候以上

一御書難有奉拜見候然者非常之節相用候ため御別紙御雛形之通高張御挑灯三張弓張御挑灯三張此度御渡被爲成下候間右挑灯者新規仕立可奉預置旨右入費之儀者追而可奉申上旨尤御用之節斗相用右之外者決而相用間鋪旨被仰渡難有奉畏預候右之趣此度大坂町御奉行樣にも被爲仰立被下候由是亦奉畏候乍恐右御

請御禮奉申上度奉呈愚札候恐惶謹言

九月四日(○文化二年)　　北風荘右衛門印(○荘兵衛貞常)

藤　徳三郎様

御用人中様御披露(○以下前掲奉書に見えたる調役六人宛名略)

乍恐口上

一當月廿四日私被召出大坂西御番所様ゟ罷出候様被爲仰付奉畏則去ル廿六日地方御役所へ罷出候處箱館御奉行所ゟ御渡被爲成候御挑灯之儀御尋ニ付左之通奉申上候

一私儀蝦夷地御産物賣捌方被爲仰付罷在候處右ニ付蝦夷地御用与書記候高張御挑灯三張幷ニ御弓張三張尤丑閏八月箱舘御奉行所ゟ御渡被成非常之節其外都而御用之節而已相用可申旨被仰渡候ニ付乍恐此段奉申上候尤心得違ニ而御斷延引仕奉恐入候右之段御赦免被成下候ハヽ難有奉存候已上右之通御斷奉申上候處御聞濟被爲成下則今日罷歸り申候ニ付乍恐此段御斷奉申上候已上

文化三年寅　　鍛冶屋町 北風荘右衛門(○荘兵衛貞常)

正月廿九日　　　病氣ニ付代安兵衛印

當津

御番所様

同町月行司

傳法屋十兵衛印

右之通御斷奉申上候ニ付御屆申上候已上

寅正月廿九日　　　安兵衛印

十兵衛印

北濱惣御會所

乍恐口上

一蝦夷地御産物積當所佐比江新地御影屋松右衛門船沖船頭善三郎乘今午刻入津當沖滯船仕罷在候ニ付乍恐此段御斷奉申上候以上

文化五年辰四月七日　　　蝦夷地御産物取扱人

北風荘右衛門印

(〇荘兵衛貞常)

當津御番所様

一筆啓上仕候然者御雇厚德丸積登此元藏入鱒粕仕切狀壹冊此度奉差上候此御代

金之儀ハ兼而廣原（○調役久作）樣御差圖之通大坂伊丹屋四郎兵衛（○大坂假會所御用取扱人）殿へ不殘先達而相渡申候宜被仰上可被下候

一同安泰丸藏入鱒粕之儀者廣原樣御見分被成下候通粕不宜長々不捌延引相成申候漸此節迄乍下直皆濟賣拂申候ニ付則別紙仕切狀一冊此度奉差上候此粕之儀ハ右申上候通之粕御座候ゆへ厚德丸粕ゟハ過分目減も多ク相立申候此段も宜御斷被仰上可被下候

右安泰丸粕御代金之儀も大坂伊丹屋四郎兵衛殿へ相渡可申旨廣原樣被仰付置奉畏罷在候處右申上候通不捌成粕故捌方延引罷成候ニ付伊丹屋四郎兵衛殿へ掛合候處御買物代金御拂方間ニ合不申候而ハ賣上人難儀可仕儀ニ付粕御拂相成候迄ハ延引相成兼候ニ付御會所向爲替取組可申段被申越候依之右御代金ハ此度御地に爲替取組奉相納候此段も宜敷被仰上可被下候

一御雇佐渡國仲吉丸當春園所出帆順々罷登候處三月十三日於雲州沖逢難風桁馳折滄（○淦）之道出來種々相働候內段々諸道具檢地方へ難寄既危相成候由ニ付無詮方御大切成御物ニ御座候へ共上荷刎捨漸滄之道留三月十六日長州赤間關入津仕同所御物取扱人內海七郎右衛門殿長□屋太兵衛殿兩人に相斷見分之上改

請此元へ罷登申候右躰逢難風滄之道も出來仕候ゆへ早速少濡之分者干立大坂表相場も相調申候處格別相變儀も無御座候ニ付於此元取〆別紙仕切狀通賣拂申候此段宜被仰上可被下候

依之右仕切狀此度奉差上候

右仲吉丸昆布代銀幷安泰丸粕御代金共此度別紙目錄之通大坂兩替米屋喜兵衞殿ゟ爲替取組手形封中奉差上候

一右仲吉丸昆布御運賃金百三拾壹兩之內六拾五兩貳歩は箱館ニ而船頭へ御渡殘り六拾五兩貳歩ハ此元渡御座候右殘御運賃金頂戴仕度船頭相願候得共右躰逢難風御物刎捨不納仕候儀ニ付御伺之上ならてハ難相渡段申聞候處去秋已來途中圍相成諸入用も多水給金等も相渡箱館へ罷上度由依之右殘御運賃金皆御渡難被下儀ニ御座候ハヽ何卒右六十五兩貳歩之內四拾兩拜借仕度段々相願申候ニ付無據筋ニ付聞屆遣右金四拾兩此度船頭ゟ一札取之相渡遣申候執右船箱館へ罷下候趣ニ付於彼地御勘定可仕樣申付置候仍之右船頭ゟ差出候一札此度奉差上候

一右仲吉丸御送狀之寫幷於赤間關改請候節之一札同所懸改帳面壹冊此度奉差上

候尤右掛改帳面駄數四千七百九十壹駄是ヲ於兵庫御賣捌勝手宜樣是迄何き之
船々ニ而も凡八貫目程結立揚來候依之其振合を以結立候處左之通
一四千七百九十一駄　赤間關改帳之表
此貳駄束ニ〆貳千三百九十五束半
是ヲ兵庫ニおゐて御賣捌勝手宜樣結立候處
貳千五百束ニ相成申候
此目形仕切狀面之通
右之通御座候是等も宜被仰上可被下候
一米相場之儀大阪表長々小往來節前昨廿六日限筑前正米帳合共六十九匁七八分
節後七日ゟ新かゝ米立替可申奉存候此元之儀追々北國登込目先順氣克麥作も
見直申候旁以小往來罷在候何分節後立替模樣次第高下可仕と奉存候
一肥物之儀出雲因幡幷北國筋不少漁事此節追々入込不絕御座候孰此末諸方捌
口次第是亦高下可仕奉存候則相場別紙申上候
右等申上度如此御座候恐惶謹言
辰四月廿七日(○文化五戊辰年)　北風莊右衛門(○莊兵衛貞常)

北村甚右衛門様
田中金六様

覺

兵庫織
一莚　五千枚
但拾枚ニ付銀四匁五分替
代銀貳貫貳百五拾目

同
一繩　百五拾丸
壹丸ニ付銀四匁三分替但壹丸貳十五把結目形七〆目宛
代銀六百四十五匁
代銀〆貳貫八百九拾五匁
六十五匁九分ゟへ
此金四拾三兩三歩ト永百八十文貳分
右之通奉買上候以上

巳三月（〇文化六年）

喜多屋 市右衛門 印

前書之通相改御船徳洽丸へ積入申處相違無御座候以上

御用取扱人

北風荘右衛門 印（〇荘兵衛貞常）（〇手形押切）

假御會所

覺

一丁八貫三百文

右者蝦夷地御固小屋御切組材木大坂ゟ此表へ御積廻ニ付御積船相廻迄濱圍被仰付右人足都合五十人賃錢壹人ニ付丁百六十六文ツヽ

一丁三〆九百三拾六文

右者右同斷晝夜番貳人ツヽ都合四十一人分壹人ニ付九十六文ツヽ

〆丁拾貳〆貳百三拾六文

丁百五文替

代銀百拾六匁五分三厘
六十五匁六分八厘替
此金壹兩三分と永貳十四匁貳分
右之通當浦方ゟ差出候人足幷番賃被下置慥奉請取浦方へ相渡申候已上
文化六年巳三月　蝦夷地御用取扱人
北風莊右衛門印
長川仲右衛門門様

乍恐口上
一蝦夷地御産物積神龍丸御船御作事有之船大工棟梁西出町川口屋庄九郎へ申付同町濱先に登セ御作事仕候尤御作事中非常手當之儀所へ被仰付被下度乍恐此段御斷奉申上候以上
文化七年午十一月二日　蝦夷地御用取扱人
北風莊右衛門
（〇莊兵衛貞常）
當津
御番所様　惣會所江も同様屆
代召仕　勘七

乍恐口上

一蝦夷地御用船政德丸御船頭大橋大次郎樣去午年九月下旬御荷物御積入箱館御出帆十月廿五日此表御入船御座候然ル所御同人樣箱館ゟ病氣ニ付當沖御船ニ而養生被成候所不被相勝候ニ付江戸歸府御願被差出候所御聞濟之上當月十五日此表出立被成候乍恐此段御尋ニ付奉申上候已上

文化八年未二月十九日

蝦夷地御用取扱人

北風莊右衛門

病氣ニ付代

吉右衛門

當津

御番所樣

乍恐口上

一去年十一月二日御斷奉申上候蝦夷地御産物積神龍丸御船御作事有之西出町濱先へ登セ置候所此度從江戸表依御下知右御船御拂相成候依之非常手宛御免之儀所へ被仰付被下候樣仕度奉存候

一去年十二月二日御斷奉申上候右同斷豐美丸御船御作事有之東川崎町濱先へ登セ置候所御作事出來此節乘下申候是又非常手宛御免之儀所へ被仰付被下度此

段御斷奉申上候以上

文化八年未

閏二月廿四日　　蝦夷地御用取扱人

鍛治屋町

北風莊右衛門（〇莊兵衛貞常）

代召仕

當津

御番所様　　惣會所にも相斷

一江戸御會所ゟ左之通申來候

松前御奉行

村垣淡路守様

去冬ゟ御病氣御願之通御役御免被仰付候

御勘定奉行

小笠原伊勢守様

右松前御奉行兼帶被仰付候

御目付

遠山左衛門尉様

右長崎御奉行被仰付候
右之通申二月十七日被仰付候由江戸御會所ゟ申來候由ニ而大坂伊丹屋四郎兵衞殿ゟ申來ル
申二月卅日(〇文化九年)

一御船政德丸御船頭喜太夫殿乘去未年冬琉球國に御漂流右御船も彼地ニ而御破船御乘組御水主之內兩人病氣ニ而御死去之由右喜太夫殿幷殘り御水主十七人當月八日長崎表ゟ御出立小倉ゟ船ニ而昨夜當地へ御着船同夜當所ニ而一宿今日晝時當地御出立ニ而江戸表へ御越之事
文化九年申十一月廿五日
其方儀蝦夷地御用產物賣捌方取扱申渡置候處此度東蝦夷地之儀も請負場所相成候ニ付以來產物不差廻候間右取扱之儀御免申渡候
酉正月(〇文化十年)
天田六三郞 印
田邊仲右衞門 印
森　覺藏 印

坂本傳之助　印
比企市郎右衞門　印
攝州兵庫鍜冶屋町
北風莊右衞門

覺

一高張御挑灯　三張
此分三張奉預罷在候所去ル巳年御切組御小屋此表船積迄之内濱圍被仰付其節荒濱ニ長々晝夜相建候ニ付骨計相成難御用立相成申候此段御斷被仰上可被下候
一弓張御挑灯　三張
一日之丸御印　二本
但此御印者去ル巳年御切組御小屋御積廻之節大坂假御會所ゟ御渡置被下候
右之通奉返上候御請取可被成候也
文化十年酉二月
北風莊右衞門　印
（○莊兵衞貞常）

高田屋
嘉藏殿

○天保中江戸御廻米賣上一件

差上申御請證文之事

一此度御趣意有之江戸表に御積廻米賣上萬事取扱之儀當津町人北風莊右衛門に
被仰付候ニ付而も同人儀土地障ニ不相成樣差略を以追々米買入當津ゟ船積仕
候度毎私共に手筈打合次第無遲々船繰仕積船差出可申右の運賃其外等之儀も
莊右衛門に懸合取極候積勿論御大切之御米ニ付船頭始乘組之者一同其儀相辨
如何之取斗不仕樣堅取締成丈江戸表に早着之積可申付自然如何之筋御座候ハ
ハ急度可被及御沙汰候條諸事御嚴密之御趣意相守誠實を盡掛引可仕段被仰示
候趣承知奉畏候大坂幷西宮問屋共に申達御用途不差滯樣可仕候依而御請證文
差上申處如件

酒諸荷物積仲間
下問屋荷聞

天保七申年九月廿五日

兵庫津川崎町
鹽屋　利左衛門　印

同斷
同　津嶋上町
北屋　惣　助　印

同斷
同　津宮内町
傳法屋　八　兵　衛　印

御奉行様

右之通被仰付候ニ付此度熟談仕候而御運賃幷缺米御用捨引辨納米直段取極左之通

御運賃銀　百石ニ付銀六百八拾目之定
但兵庫表御渡之定
缺米御用捨引
古米分　石ニ付貳升四合宛定

新米分　石ニ付壹升七合宛定

江戸表ニ而辨納米御取立直段石ニ百六拾目替

積りを以相納可申定

右之通取極仕候處相違無御座候手筈打合次第無遲々船繰仕積船差出可申

候已上

天保七申年

九月卅日

大坂樽廻船積問屋

惣代　小西屋新六

代文　助印

大坂樽廻船積問屋

惣代　毛馬屋彦太郎

代幸　七印

西宮樽廻船積問屋

惣代　鹽屋九兵衞

代源　七印

同

升屋　吉次郎
代　八　助印

北風荘右衞門殿

此度御嚴蜜之御趣意有之江戸表に之御廻米賣上萬事取扱之儀被仰付候ニ付而ハ土地其外に不差障樣勘辨差略を以買入早々船積之儀出精相働又者右運賃銀等も御不益ニ不相成樣其筋之者に熟談を以向後之儀をも取極候次第最前彦次郎迄申越候件々山城守殿に委細申上候處一己之損益ニ不拘專ラ御奉公筋を心掛候段神妙奇特之至ニ思召候條追々增御廻米被仰付候上者前同樣相心得是又出精相働可申候且右廻船浦賀表通手形之儀ハ江戸表ゟ其筋之御役所に御達有之事之由此度被仰越候間可得其意候依之右之段申達候已上

申

十月（〇天保七年）

內山彦次郎印
吉田勝右衞門印
朝岡助之丞印

北風荘右衞門殿

江戸廻米之儀追々致出帆都合宜骨折之儀ニ存候此上可相成者當月中貳萬石程ニも至候樣被成度旨尙又被仰出候其元出精之儀ハ申上置御承知之事ニ候得共右樣御沙汰有之候儀ニ付成丈ヶ石數捗取候樣取斗可有之候依之申達候已上

十月廿日（〇天保七年）

無請合ニ付無印

內山彥次郎印

吉田勝右衛門印

朝岡助之烝印

北風莊右衛門殿

覺

申十月七日

一銀五百貫目

米屋喜兵衛に
御下ヶ銀奉請取

同十月十二日

一同貳百五拾貫目

右同斷

同十月十七日

一同七百五拾貫目　右同斷

申十月廿五日

一銀五百貫目　米屋喜兵衛に御下ケ銀奉請取

同十一月七日

一銀五百貫目　右同斷

同十一月十四日

一金壹萬兩之　右同斷

兩替六拾壹匁四分四厘替

代六百拾四貫四百目

申十一月廿三日

一銀三百六拾貫目　右同斷

同十二月六日

一銀七百貫目　右同斷

同十二月十七日

一銀四百貫目　右同斷

同十二月廿五日

一銀六百貫目　　右同斷

申十二月廿八日

一銀六百九貫目　　米屋喜兵衛に
　　御下ケ銀奉請取

酉五月廿四日

一銀五百貫目　　右同斷

〆六千貳百八拾三貫四百目

此內

一銀四千貳百三拾貫三百六拾目

但　御賣上米高三萬石去申十二月
　奉差上候惣目錄之表代銀

一銀千貳百七拾七貫六百四拾匁七分八厘

但　右同斷七千三百四拾七石貳斗貳升
　八合五勺當六月奉差上候惣目錄之表代銀

貳口小〆　〆五千五百八貫目七分八厘

一銀八貫八百三拾七匁八分壹厘
　御賣上米高三萬石之内莊右衛門持米之分
　但　四百五拾石四升幷大坂納屋穀物中ゟ積廻し候分
　　九拾石壹斗八升五合引去り殘石貳萬九千四百五
　　拾九石七斗七升五合之分中買口錢〆高銀

一銀貳貫貳百四匁壹分貳厘
　右同斷七千三百四拾七石貳斗貳升
　八合五勺分中買口錢〆高銀

貳口小以〆拾壹貫四拾壹匁九分三厘

一銀七貫四百九拾九匁九分
　右同斷三萬石分藏出入舖仲仕賃
　但　銀〆高

一銀壹貫八百三拾六匁七分七厘
　右同斷七千三百四拾七石貳斗貳升
　八合五勺分藏出入舖仲仕賃銀〆高

貳口
小〆 〆九貫三百三十六匁六分七厘

一銀貳百貫三百九拾八匁五分八厘
但御買上米高三萬石廻船運賃銀

一銀四拾九貫百拾壹匁八分
但右同斷七千三百四拾七石貳斗貳升
八合五勺廻船運賃銀

貳口
小〆 〆貳百四拾九貫五百拾匁三分八厘

合五千七百七拾七貫八百八拾九匁七分六厘

指引殘而
五百五貫五百拾匁貳分四厘　過上

右之通清算勘定仕差引過上銀此度奉返納候以上
天保八酉年六月　北風荘右衛門

御奉行所

乍恐口上(扣)

一私儀去冬以來江戸表御廻米御用相勤候ニ付此度御褒美被爲下置其上已來御用向ニ付而も御用達町人同樣上訴御取扱被爲下置候段被爲仰渡冥加至極難有仕合奉存候右御禮御役所に其節奉申上候得共御玄關にも罷出別段御禮奉申上其節御扇子一箱獻上仕度且以來年始ハ朔御禮等も奉申上是又御扇子一箱獻上仕其節乍恐御目見被爲仰付被下候樣奉願上度尤五節句御禮暑寒御窺等も當津御勤番所に奉申上度乍恐此段書付を以奉願上候何卒前書之趣大坂御奉行所樣に宜敷御沙汰被下候ハヽ難有仕合奉存候以上

天保八年

酉九月十二日　　北風荘右衛門印

當津

御勤番所

○箱館產物會所一件

安政五午年四月

蝦夷地產物御仕法書御下ケニ相成幷

會所附仲買五軒に被仰付候一件假扣

乍恐口上

兵庫津鍛冶屋町

北風荘右衛門 病氣ニ付代

與助

同所同町

河波屋 志川

代判 彌兵衛

病氣ニ付代

勘兵衛

同所木戸町

和泉屋 彌兵衛

同所同町

瓜屋 忠七

同所匠町

柴屋　伊左衛門
病氣ニ付代
萬　助

一私共儀當月十五日御召出之上箱館産物御會所に可罷出旨被爲仰付奉畏罷出候處私共五人右御會所附仲買被爲仰付尤別紙御仕法書御下ケ被爲成下候ニ付左之通御請證文奉差上候

差上申一札之事

私共儀箱館産物御會所附仲買被仰付向後御別紙御仕法書之通相心得御用達申談事正路ニ取極可申旨被仰渡承知奉畏候依而御證文差上申候處如件

安政五午年
四月十六日

箱館産物
御會所

覺

一蝦夷產物船々入津いたし候ハヽ直々其船積付宿之者ゟ會所に屆可申事

一日方懸改并俵數改方之儀も於會所ニ取斗候ニ付荷主并積附宿之者立合見屆可申事

一入船有之候ハヽ仲買年行司之者に可相達問望之者罷出買取可申事

但水揚藏入藏出し等之儀も會所ニ而取扱之事

一會所附仲買ハ勿論其餘是迄蝦夷產物請拂仕來候者共も仲買共一同夫々立合直組可致事

一風袋引并入目引物等之儀も是迄仕來候通相心得可申事

一品物賣渡代金之儀現金上納之方行屆兼候者も其月廿日以前之分も同晦日限廿日後之分ハ翌月十四日限可相納候尤代金上納之儀も其組々仲買惣代之もの證人ニ相立萬一兩人納方相滯候節も組合ニ而期日限無相違上納可致事

一是迄荷主諸懸り物六步六厘之內以來左之通

一三步六厘　上納

一壹　步　會所附仲買并其外是迄積付宿之者着船之趣屆出船頭滯留中諸賄致候者へ被下且荷物賣捌候得も外仲買同樣貳步方

被下候事

但附船之儀も外振合と事柄相違致し候得共直々會所へ屆出候ハヽ荷物高ニ應し壹歩方被下候事

一貳　歩　　仲買江被下候

但荷物ニ寄貳歩口錢取來候分ハ以來壹歩被下候

右之外藏敷其餘荷主懸り物も是迄之通

右之通御仕法取極候ニ付其段可相心得候

午四月

右之通御仕法書御下ケ被爲成下其筋渡世仕來候者江不殘樣申聞候樣被仰渡奉畏候處右御仕法書之內會得仕兼候廉も御座候付乍恐左之通書付を以奉願上置候

乍恐口上

一今般私共御召出之上箱館產物御會所附仲買被爲仰付奉畏候右ニ付別紙御仕法書御下ケ被爲成下候御文面之內會得仕兼候廉も御座候ニ付乍恐此儀談之上其

向々ゟ御願可罷出程も難斗奉存候間何卒右之段御聞濟置被爲成下候ハヽ難有
仕合奉存候以上

安政五午年

四月十七日

五軒

連印

御産物

御會所

右之通御請證文差上御仕法書頂戴尚又以書附御斷奉申上置候ニ付乍恐此段御
斷奉申上候以上

安政五午年

四月十八日

與　助印

勘兵衞印

忠　七印

萬　助印

彌兵衞印

西

御奉行樣

右之通書付を以西地方御役所御懸り內山樣へ御斷奉申上置候處御聞濟被成下
仍而同夜一同歸庫いたし翌廿日當津御勤番所へ歸津屆致候書付左之通

乍恐口上

一當月十三日私共御召出之上同十五日四ツ時大坂西地方御役所樣へ可罷出候處私共五人に右御會所附仲買被仰付尤別紙御仕法書御下ヶ被爲成下候ニ付左之通御請證文奉差上候

此處へ前書同斷地方御役所へ差上候通產物會所へ之請證文壹通

同　御仕法書壹通

同　文面之內ニ會得仕兼候廉も御座候段差上候書付壹通

右之通相認ル

右之通御請證文差上御仕法書頂戴仕候段當月十八日西地方御役所樣へ御斷奉申上候處御聞濟被成下一同昨夜罷歸申候ニ付乍恐此段御斷奉申上候以上

安政五午年

四月廿日

鍜治屋町
北風莊右衛門
病氣ニ付代
與助　印

同町
阿波屋志門

代判彌兵衛
病氣ニ付代
勘兵衛　印

木戸町
和泉屋彌兵衛　印

同町
瓜屋忠七　印

匠町
柴屋伊左衞門
病氣ニ付代
萬助　印

當津
御番所樣

右之通御斷奉申上候ニ付此段御屆申上候以上
午四月廿日　前五人　印

三方
御名主中

右之通御勤番所幷惣會所とも歸津屆相濟直樣諸問屋會所ヘ一同罷出右御仕法

書御下ケニ相成候趣仲間年寄へ申達度候間年寄自宅可參哉亦ハ會所へ御出向被下候歟相尋候處其段會所ゟ早速筆五殿方へ尋呉候處いづゝ明廿一日會所へ出席之上委細承り可申旨被申越候ニ付其儘引取夫ゟ干鰯屋仲間會所へ罷出前同樣申入候處早速年寄兩人出席被致候ニ付右御仕法書相見セ請證文差上尙亦仕法書之內會得致兼候廉も御座候段以書付差上置候儀とも申達種々相談之上何分不遠內双方取極之儀申談候樣との事ニて引取夫ゟ相物屋仲間會所へ罷出候處鑢長殿山源殿山茂殿三人出席被致候ニ付前同斷始末申達尤兩仲間とも御仕法書之寫壹通ツヽ相渡置候事

一干鰯屋仲間幷相物屋仲間ゟ返事相待居候へ共双方一決不致候ニ付其段諸問屋會所へ罷出年寄へ委細申達候處今一應干鰯屋掛合可申旨被申聞尙カ亦五軒一同干鰯屋會所へ罷出咄合致候へども先方之存寄も有之由ニ付先ツ五軒組丈ケ彌今日登坂可致よし申置則廿四日登坂致候事

一廿四日朝太田爲之助樣ゟ御狀到來之事

一廿四日七ツ時過扇五へ着直樣模樣聞合旁布和へ參候處未タ表立會所ゟハ御下ケ無之候へ共今日地方御役所ゟ爲心得御下ケ被成下候此度御仕法替ニ相成候

書付見セ被呉候處文面之內難心得儀等有之候ニ付明日會所へ罷出候儀相見合セ夫ゟ仕立飛脚を以右之趣店方へ申遣候

一同廿五日七ツ時頃爲助樣登坂被致候ニ付一同種々評議之上明日何分會所へ罷出候積ニ相成候

一同廿六日會所へ罷出候處御役人中之前へ直々罷出候樣被申聞則一同罷出候處御仕法書御引替ニ相成則左ニ

覺

一蝦夷產物船々入津致候ハヽ直々其船積宿之者共ゟ會所附仲買申談之上會所へ屆可申事

一目方掛改幷俵數改方之儀共於會所ニ取斗候ニ付荷主幷積付宿之者立合見屆可申事

但水揚藏入藏出等之儀も會所ニ而取扱藏鍵ハ會所へ預り置事

一蝦夷產物積入候船々入津次第賣拂方之儀ハ會所ゟ差圖次第差支無之樣會所附仲買共差心得取斗可申事

一鹽魚干魚鰹節仲買幷干鰯仲買其餘是迄蝦夷產物商賣仕來候もの共等何品ニ不寄一同買方相成候而者諸色取締筋之御趣意ニも拘可申儀ニ付拂先之儀を其品ニ應し會所附仲買共差心得取扱可申事
一風袋引幷入目引物等之儀も是迄仕來候通相心得可申事
一品物賣代金納方之儀三十日限之積ニ候得ども一般ニ三十日限と相成候而ハ月越之差別も有之儀ニ付其月晦日限尤廿日後ニ相成候ハヽ其模樣ニ寄日限取極可及沙汰候へ共都而是迄之振合も有之由ニ付金高等ニ應し延納之儀其節々吟味次第勘辨取斗可遣事
一是迄荷主諸懸り物六歩六厘之内以來左之通
一三步六厘　　上納
一壹　步　　會所附仲買幷其外是迄積付候宿之者着船之趣屆出船頭滯留中諸賄致候ものへ被下且荷物賣捌候へも外仲買同樣貳步方被下候
但附船之儀ハ外振合と事柄相違致し候へ共會所附仲買申談之上直々會所へ屆出候ハヽ荷物高ニ應し壹步方被

下候事

一貳　歩　　仲買

但荷物ニ寄是迄貳歩口錢取來候分ハ以來壹歩被下候

右之外藏敷其餘荷主懸り物も是迄之通

右之通御仕法取極候ニ付其段可相心得候

午四月

右之通御仕法書御下ヶニ相成尤近日役人出張致候間其節種々懇談可致旨被仰聞候

同日右之趣地方御役所へ屆置候事

同廿七日朝船ニて一同罷下り候事

同廿八日當津御番所樣へ右之趣下り屆致候事

五月朔日朝丹カ万ゟ仕立飛脚到來之事此儀ハ地方御役所ゟ丹カ万へ被仰渡之儀有之同人通達被致候ニ付則書狀五軒へ相廻ス

外ニ爲助へ之書狀參ル是ハ內印ゟ之御內意之事

乍恐口上

一今般私共儀箱館産物御會所附仲買被仰付右於御會所ニ御仕法書御下ヶ有之候處此度私共被召出御仕法相替引替御渡ニ相成奉畏候依之一同罷下り申度奉存候ニ付乍恐此段御斷奉申上候何卒右御聞濟被成下候ハヽ難有奉存候以上

安政五午年

四月廿六日

北風　代與　助

ゐとや　代勘兵衛

いつ彌　代佐　七

瓜忠　代喜　介

柴い　代万　助

御（〇下缺）

乍恐口上

> 〔○附箋〕書面十二ヶ條下ケ札之外も莊右衛門見込之通ニ而存寄無之候

此度東西蝦夷地諸産物爲御取締大坂表に箱館御産物御會所御取建幷兵庫津よても同斷御出張會所御取建相成兩所入津之分御改方も勿論諸事御會所おゐて御取扱相成候御旨等之儀當三月中御觸渡有之右ニ付先月十八日兵庫諸問屋之內是迄松前最寄諸荷物請拂仕來候私外四人之者御召出之上兵庫表御會所附仲買被仰付幷廻着諸荷物御取捌方御仕法之儀も御當地永代濱御會所ニ而箱館御役人樣方ゟ被仰渡難有奉畏御請仕候次第其節御屆申上置候儀ニ御座候然ル處御當地尼崎町壹丁目加島屋作次郎儀大坂兵庫御會所御用達御掛屋元〆等其筋ニ而被仰付同人手代兩人を以相勤罷在候得共元來作次郎ハ兩替屋ニ而北海廻諸荷物問屋渡世仕候者にも無之業躰も違諸事不手馴ニ而第一兵庫の方者手遠之儀御當地ゟ兼勤ニ而も御不辨理之儀共有之其次第ニ寄入津船手之者共氣配ニ拘候儀抔有之候時も御趣意被行不申而已ならに其向々商人共始土地一躰之

融通合又ハ最寄在々肥手ニも差支諸作出來劣之基ニ相成一統難儀仕候筋ニ付右等之段々厚御心配被爲成候御儀之由右ニ付私方之儀を前書之通舊來右諸荷物之分兵庫ニ而者一手同前に請拂仕兼而手馴罷在其上右諸荷物之儀大坂ゟ者兵庫之方荷高多分ニ取捌仕來候譯も有之最早廻着入進候時節ニも差向候儀旁以此儘御差置難罷成候付江戸表江御伺之上私儀兵庫御會所御用達前書作次郎相仕ニ可被仰付候得共夫迄之處當分御用達並之名目ニ而此節ゟ兵庫入津諸荷物之分諸事御差支不相成樣私引請取扱之儀被仰付候御含之由右ニ付格別之御沙汰を以御內調請候次第冥加至極難有仕合奉存候則店方召使之者ゟも內々申談得と勘辨仕候處右御用達之儀ニ付先達而私內存御尋請候節ニも一通り申上置候通先代莊右衞門儀文化年中松前最寄一圓御上地相成候砌諸產物取扱御用達被仰付相勤候儀も御座候得共其節之儀者此度ゟ者御趣意も違第一私儀近年先代名跡相續仕いまゝ若年之儀召仕老分之者も追々死失仕當時之ものゝ共者其節之儀相心得不申候處右躰御趣意有之御會所御用達等願請勤方不調法等御座候時を別而奉恐入候付右御用達之儀堅御斷申上候處猶又再三厚被仰諭候次第

〔本文用達並之儀用達代ゟ心得爲置度候〕

重々難有承伏仕最早御斷可申上樣も無御座候乍去前書之通內存相決候儀ニ付私ゟ願書等差上候儀御免被成下候而此上御吟味次第若哉私に被仰付候儀も御座候ハヽ別而難有御請可仕候依之重々奉恐入候得共前以申上置度子細左之通御座候

一右躰御用達被仰付兵庫入津之蝦夷地諸産物取扱方之儀私引請候時を此度御會所附仲買共に被仰渡候御仕法之趣を押立候者勿論之儀ニ御座候得共猶又手內之儀者都而是迄之仕來も有之成丈手狹窮屈ニ不相成船手之氣請ニ相拘り不申樣專一ニ心掛取扱仕度候事

（本文手內之儀を都而是迄之仕來も有之趣ニ候得共新規之儀ニ付其節々出役之者迄一通を申聞置候樣致度候）

一右御會所御用向之儀私直々罷出相勤可申心得ニ御座候得共多端之儀故迚も壹人ニ而者行屆不申其上諸問屋渡世無暇業躰ニ御座候ニ付自然私差支候節を兼而召仕手代共之內其事ニ手馴實躰成者一兩人相撰私手元ニ而御會所御用掛申付重モニ其者共を名代ニ差出可申候間此段御聞置被成下候而諸事私同樣御用向被仰付被下候樣仕度奉存候尤日々御用之有無ニ不拘右手代共之內壹人宛手

辨當ニ而御會所に通勤爲仕可申候勿論御用有之壹人ニ而手足り兼候節ㇵ私其外ゟも手辨當ニ而罷出御用向御差支不相成樣取扱可仕候事

一御產物積入候船々廻着仕其船々積付候宿之者共ゟ御會所附仲買申談之上御會所に御屆申出次第御役人樣方御出向御改其外共都而御嚴重之御沙汰相成候ハヽ極而船々之ものゝ共窮屈ニ存荷物水揚以前夜中勝手ニ外浦方へ乘廻候儀抔間可有之哉ニ而既ニ御當地ニ而も御會所御取開無間も右御改方ニ付一旦混雜仕候儀有之其後御手心之御沙汰ニ相成御座候哉ニ粗傳承仕候間兵庫之儀も御同樣之御沙汰ニ相成候樣仕度奉存候然ル上者右積付御屆申出次第御用達之廉ニ而私又者御會所御用掛り申付候手代共之內罷越改方仕候ハヽ兼而手續も有之大躰知合之儀ニ付是迄之通相替候儀無之与相心得船々安心可仕尤改方之儀者御取締之御趣意相立候者勿論ニ御座候得共餘り嚴ニ過候時者船手之者共氣配ニも相障却而御取締方差支候付右等之處厚勘辨仕取扱候而右改濟俵數荷數等不洩樣早速御會所に可申上候事

一右廻着諸荷物目方俵數掛改又者藏入藏出し千木取掛渡等之儀者船手幷仲買共双方氣請第一之廉ニ御座候然ル處右等之議於御會所御取斗相成候ハヽ新規ニ

多人數御召抱相成乍恐御無益之儀其上夫々氣請も有之私手代共儀者年來無故
障取扱手馴罷在候ニ付是迄之ものに被仰付候方穩ニ而御用辨之筋ハ勿論猶も
夫々氣請宜廻着相進候樣取扱仕度候事

一右船々に御渡候仕切狀之儀御會所御振合も可有之儀ニ付右認方雛形等兼而御
渡置被下候樣仕度候ハヽ私手元ニ而相認御會所御調印申請直ニ私ゟ船々之者
に相渡可遣候事

本文仕切狀者大坂會所之振合も
候事故雛形相渡可申候
但書仕切狀之儀尤之筋ニ付何
樣ニも手操を以突合調印致
可相渡候

但右仕切狀之儀入船相嵩候節ハ數通相成風聞ニ寄一刻を爭ひ出帆差急候船
船之事情ニ付夫是之儀者右之者共隨意ニ取渡致遣少も滯無之樣是迄仕來之
通差略之取扱可仕事

一右諸荷物賣買出來次第船手之者に相渡候仕切金之儀前書加嶋屋作次郎方請持
之廉ニ可有之哉与奉存候得共手遠之儀其上諸事不手馴之故を以兵庫津之儀私
に引請被仰付候上ハ右仕切金繰合方之儀も是又引請是迄仕來候通船手之氣請

宜様差略第一ニ取扱速ニ手放レ相成候様仕度候事

〔御用達代申付候上者繰替金爲致候〕

但本文之廉私引請候ニ付而者作次郎方取扱筋ヲ乞請候様相當其儀ニ付內德も可有之哉と御不審之程も奉恐入且作次郎存寄茂氣之毒奉存候得共決而外ニ子細無之右仕切金渡方遲速ニ寄船手氣請之善惡者勿論跡船々入進方ニも拘取引之要ニ御座候處大坂ゟ兼帶ヨ而者手後レ相成始終之御爲不可然哉与奉存候付右之通申上候儀ニ御座候事

一右船々仕切之儀私差繰を以速金相渡置候而賣先仲買共代金納方之儀者御仕法之通壹ヶ月限又者金高ニ應し猶又延納之儀其節之御吟味次第御勘辨御取斗被成遣候筈ニ付船々入嵩候時者莫大之仕切高私手元ゟ御振替相成候ニ付而者右利分之儀可然御仕法御立被成下候様仕度奉願上候事

〔本文船手繰替金致候共右利分相下ヶ候譯ニ者無之荷物高之內壹歩方爲御手當被下候積尤右之內ニ而會所小買物共外當座繰替金申付候儀も可有之候〕

但本文船々に速金相渡候仕切之儀是迄私手元ニ而ハ莫大之金高ニ而手金を以取賄候儀中々以出來不申候付兼而取引兩替屋ニ而利附を以金子繰出置機會不取失樣速金相渡來候儀ニ御座候然ル處此後も右等之廉引請唯今迄之如く船々氣請専一ニ差略仕候ニ付而者右兩替屋利分出方無御座尤少分之儀ニ御座候得共御奉公与相心得右利金之儀何等申上候儀無御座候得共大金之儀ニ而迚も心底相任不申候付不顧恐ヲも右之廉御仕法之儀奉願候儀ニ御座候事

一右御賣拂諸荷物代金仲買共納日限ニ相成候ハヽ取集御會所江上納可仕候尤右之内まて私ゟ追々繰替置候分御償方被仰付被下候樣仕度候事

（本文繰替置候分償戻之儀上納金之内より追々相下候樣可取斗候）

但右仲買共代金納日ニ至右之もの共ゟ賣捌候先々ゟ代金不寄之由ニ而猶又延納之儀相願候者等有之其暇無相違相聞候分者御會所に伺之上御差圖次第取扱可仕候事

（但書仲買共買請候荷物代金延納之儀願出候者も候ハヽ事實承糺勘辨可取斗候）

一船々積附候間問屋之儀其荷物高ニ應壹歩方口錢被下之候此度之御仕法ニ御座

候然ル處私方之儀も是迄直ニ積附候分も御座候付たとへ御用達相兼候与も其船々之壹歩方者外同樣被下之候儀と相心得申候事

一船々廻着次第伺之上御會所附仲買共申談其品々ニ應し其向々之仲買共呼寄賣方直組仕賣買相成候樣精々世話可仕者勿論之儀ニ御座候得共是迄も直組之場ニ至荷主船頭等之差直与仲買共附直与双方落合不申無據賣買不相成儀間々有之候右樣之節私見込有之候ハヽ猶又相對次第右荷物私手元に買入置船々に者仕切即金相渡遣速ニ爲致出帆候而仲買共に者夫々勝手ニ應し追々賣出遣双方氣請宜樣取扱來候付此後も直組之節賣買出來不申儀御座候砌見込有之候ハヽ唯今迄之通相對次第私買入置候樣可仕候然ル時者代金即納之格ニ相成候付船に相渡候仕切狀幷仕切金之儀を前條之通御用達之廉を以速ニ取扱可仕候尤私買入ニ仕置候荷物追々仲買共に賣出遣候節ニ至相場下落仕手元損失相成候儀抔有之候共其儀者覺悟仕候儀ニ付御會所に歎願筋等決而仕間敷候依之

（本文荷物捌方之儀共筋之事實申立之次第ニも寄可申候得共先當分右之通ニ爲取斗候）

たとへ賣德御座候共右德分も上納仕不申損銀共一分之覺悟ニ可仕候事
但本文私買入ニ取扱置候分仕切金之儀たとへ何程金高ニ相成候共私買分ニ而手放し仕候儀ニ付此仕切金之分者御振替之格ニ者不相成候付前條利分御仕法相願候廉与者別段之儀ニ御座候事

一是迄廻着荷物直組落合不申分を前書之通成丈私買分ニ取扱速ニ手放仕來候得共數口之內ニ者船手之者强氣ニ而私買分之取扱仕兼候儀も間々御座候右樣之節者其儘外浦々に乘廻候儀も有之候得共先者右荷物私方へ預ヶ置候而仲買共附直ニ引當總代金之內六步又者八步方前貸之儀賴聞候振合ニ付然ル時者猶又事實之相對仕壹ヶ月壹步迄之利附を以金子貸附候而跡々取扱之儀私引請置船船爲致出帆候後相場相進最初船手之差直ニ出合候儀も有之砌右荷物賣拂此代金之內ニ而前貸元利者勿論荷物預中之藏敷等引去殘金ニ仕切狀相添其向へ差下候仕來ニ御座候然ル處此度都而諸荷物御會所附之姿相成候御仕法ニ候迚右差略之取扱相止候時者船々融通差支跡々入進方之ためニも不宜候付此後も私引請從來仕來之通取扱遣候樣仕度候事

一是迄諸荷物彼表積出候由ニ候得共未廻着不仕以前右荷物を引當爲替金取組參

其内ニ者積石高ゟ過上ニ相當候金高之分も御座候得共從來取引之儀ニ付無異議呑込爲替金渡遣追而荷物着仕候ハヽ私引請時合見斗賣出右賣代金を以夫々引去其外等都而前書預荷物同樣之振合を以取扱來申候此儀勘辨仕候處全私呑込之取扱ニ而右躰御會所附之荷物ニ相成候上者譯柄も違候儀与奉存候付右之廉者猶又御吟味次第被仰付候樣仕度候事

但本文取扱之儀船々氣請專一之廉ニ付相止候時者必定外浦々に乘廻し候儀增長仕却而御取締ニ差障候一基ニ可相成哉与乍見越心配仕候付乍恐可然御賢考被成下候樣仕度奉存候事

一右問屋仲買口錢之儀兵庫者先前ゟ六步六厘之定ニ御座候處此度問屋仲買ニ而三步ニ御取縮殘三步六厘之口錢者御會所に上納被仰付候御仕法ニ而向々口錢高格別相減候儀ニ御座候得共御趣意之儀ニ付去冬中御内糺之節も當津名主を以一統承伏之御請仕置候然ル處元來仲買共賣方之儀者乍居在々等ゟ注文引請相捌候而已ニ無之國々在々等に態々荷物持廻賣步行候振合ニ付格別諸雜費も相掛り其實おゐて者手を詰候薄口錢ニ相當畢竟唯今迄之口錢高ニ而漸渡世取續來候處前書之通格別減方被仰付仲買ハ別而之儀問屋俱々當惑仕候儀ニ御座

候右躰仲買共氣先相進不申時者御產物捌方差支御會所御成功方ニも拘候儀与重々心配仕候依而者去冬中御內糺之節名主共を以歎願仕置候通追々御吟味之上今壹步方程一統之中ニ增步被差遣被下候樣奉願候其外御仕法ニ付心付申上度儀共御座候付夫等之儀者前書作次郎懸り手代申談追々申上候樣可仕候事

〔本文問屋仲買共口錢步增之儀事實難澁之儀も候ハヽ承糺其節勘辨之上取斗可申候〕

一大坂兵庫江相廻候諸荷物之儀何品ニ不寄天秤与唱兩所直段等見合荷主船頭見込之方江乘附候振合ニ御座候然ル處箱館御產物之儀御用達廉ニ而是迄仕來之通私引請取扱仕候時者大坂表之儀も唯今迄之如く其筋問屋之內ニ而取扱被仰付候而加嶋屋作次郎儀者兩替屋業躰之通大坂兵庫商人ゟ掛込候代金大切ニ奉預掛ヶ屋之方重ニ相勤不申候而者兩所不釣合相成自然与船々之者共見込不宜荷物片寄兩所融通合之ためニも相成不申儀与奉存候付夫等之處深く御賢考之上猶御吟味次第被仰付候樣仕度奉存候事

〔本文之趣差含居候〕

一兵庫表御出張御會所御出來迄假御用所御入用之小買物萬事私引請之廉を以相納候儀ニ候ハヽ被仰付次第取斗候樣可仕候尤代金者大坂元御會所ゟ御仕拂相成候共又者御產物賣代金上納之內ニ而御渡被下候共御都合次第被仰付可被下候事

（本文會所小買物之儀爲引請代金仕上之上元會所ゟ相下候）

一廻着諸荷物賣買取扱方之儀前條申上候通唯今迄之如く私手人ニ而手馴候ものに申付人數少ニ而爲相渡候積ニ付別段新規御召抱之者申上候心得ニ者無御座候且當時假御用所ニ而御召使候面々之儀者私ニ者預り不申候付右之面々進退之儀者御手始之御模樣次第被仰付候樣仕度候所詮之所も御無益之御入用相省キ人數少ニ而御用向相辨候樣仕度奉存候事

（御用達代申渡諸事一手引請候儀ニ付書面之通ニ而差支無之候尤兵庫出張會所之儀者大坂表ゟ下役壹人宛壹ヶ月限交替之積當時出役詰所与捌所者別段譯ニ付捌所進退之儀者用達代之廉ニ而諸事取扱候樣爲致度候）

一前書加嶋屋作次郎儀者大坂斗ニ而兵庫之方御會所御川達御掛屋元〆等相退候儀ニ者無御座手遠之儀ニ付御用辨之ため相仕ニ而私引請被仰付候次第相辨罷在候付前書之通差向候廉々作次郎方ニ不拘私一分取扱候積申上候得共猶入組候儀等者右方申談之上連名を以申上候樣可仕候事

右之通奉申上候猶相洩レ候儀者追々申上候樣可仕候尤前書之趣者追而兵庫之方私引請取扱之儀被仰付候上ニ而委細可申上筈之處彌被仰付候得者早速手始不仕候而者此節追々入津之船々難儀仕諸船差支候付何角差置一日も早々請拂差急人氣取直候心得ニ御座候然ル時者其期ニ至品々御伺等申上候間合も無御座候付差越候儀ニ而奉恐入候得ども大辻之廉々御內々申上候可然御沙汰被成下候樣奉願候勿論右ヶ條之內ニも差當私ニ相預り不申儀も御座候得共心付候儀ニ付申上候儀ニ御座候御赦免之程是又奉願候以上

午五月　　　　　　北風荘右衛門 印

右差出候書面を以主役箱館方に被及打合候處夫々下ヶ札之通挨拶有之候付寫被相渡候條此旨可存者也

午　　　　　大坂表箱館會所掛

東西

五月　役人

北風莊右衛門方に

壹ヶ年　北風莊右衛門
代為　助

一箱館生産捌方取締手當金百両
右之通申付ル猶御為筋厚相心得出精相勤るし
正月四日

乍恐以書付奉歎願候(扣)

播州八部郡兵庫津
干鰯屋仲買

一前年ゟ兵庫津ニおゐて松前箱館産物御會所御取建ニ相成候付右荷物取捌方御會所附中買并舊來仕來候干鰯中買渡世之者共に被為仰付奉畏難有仕合奉存候則一統之もの共丹精を以賣捌罷在就中播州阿州泉州濱邊小浦々之儀も前々ゟ

兵庫津干鰯屋共重ニ多分之肥物賣捌候土地柄ニ候處昨年ゟ右場處に直着仕荷物直賣仕候風聞承候得共聢与取留候儀も無御座候付其儘打過罷在候處當春以來ゟも追々松前肥物積船多分商內仕候由ニ而當津干鰯屋共儀右場所ゟ例之通注文を受產物御會所ニ而肥物買受積送り候荷物追々積戾り候故御會所に書付を以其趣御斷奉申上荷物夫々御改を請水場仕候儀每々御座候付段々手ヲ盡し彼地之樣子承り合候處一旦注文いたし右注文之肥物當津干鰯屋共ゟ積送り候迄之內ニ松前肥物積船彼地へ入船いたし商內仕品々買請罷在候ニ付而故障申立積戾し候趣ニ相聞へ候依之船々外々に入船直買仕候土地夫々承り合候處既ニ

松平下總守樣御領分　播州二見村

但同村にも前々ゟ兵庫津干鰯屋共肥物積送彼地ゟ播州在々百姓方へ賣來候土地ニ而肥物積船壹艘も入船いたし不申場所ニ御座候處去々巳年ゟ海中に波當石垣ヲ築出し新規ニ湊同樣之構致し船繫りも出來候樣相成候付當七月ゟ此頃迄ニ數

（〇朱書）
但夫々御領主御名不書顯ニ差上候處書入可致樣被仰如斯跡ゟ加ル

艘入船商內取組仕候

酒井雅樂頭樣御領分　同州室津

但同所にも當四五月頃數艘又々七月ゟ此頃迄ニ

數拾艘入船仕商內取組候

同　御領分　同州餝万津（シカマツ）

但同所へも數艘入船仕商內取組候

岡部筑前守樣御領分　泉州佐野

但同所へも右同斷

卜半眞行院寺領　同州貝塚村

但當四五月頃ゟ數艘七月ゟ此頃迄數艘入船商內

取組候

同州堺

但此濱入船商內取組罷在候

右之場所々にて入船致し追々多分之商內仕候趣慥ニ承り及罷在候右故哉昨年以

來も兵庫津へ入船之肥物年々相減申候右樣兵庫入津可致肥物積船外浦々ニ而

直營仕候而も干鰯屋共商内先キ手狹ニ相成眼前必至難澁及歎ヶ敷儀も勿論御會所に入船無數ニ相成可申与乍恐奉存候右ニ付而も近頃右兩國之外阿州讃州浦々にも同樣積船入津多分有之趣ニ御座候間右國々に直着直賣之儀御差止ニも相成候ハヽ兵庫津産物御會所にも追々入船數艘ニ相成候上自与御仕法も相立多分之荷物も捌方差支無之干鰯屋渡世之者共迄永々安久之相續仕難有仕合奉存候何卒右之段御聞濟ニも相成候ハヽ廣大之御慈悲難有奉存候乍恐書付を以歎願奉申上候以上

安政六未年九月

兵庫津干鰯屋惣代

同 瓜屋半兵衛 印

同 魚屋惣左衛門 印

年行司

同 萬屋利右衛門 印

同 瓜屋嘉兵衛 印

年寄

同
住屋　徳兵衞　印

同
京屋　善右衞門　印

御會所附仲買
阿波屋　ゐ川
代判　彌兵衞　印

同
瓜屋　忠七　印

同
柴屋　ゑう
代判　宗八　印

同
和泉屋　彌兵衞　印

前書之通奉歎願度候付奥印致呉候樣申出候故御仕法御樣ニ中之趣ニ付今暫差控可申候樣利解申諭候處何分差當り眼前渡世難澁之

趣ニ相聞へ候付乍恐奥印仕候已上

御用達
北風荘右衛門印

箱館産物方
御會所

○朱書
右書付九月廿四日差上候處御留置相成追而御沙汰之旨被仰渡候然ル處右ヶ條書之内ニ眞行院寺領貝塚村之儀も領主之支配候歟又も寺社直支配ニ相成候哉且御朱印も何ヶ程有之事御尋ニ候得共其儀ハ委敷相辨候もの無御座候付其段御斷申上候處左候ハヽ急ニ取調跡ゟ可申上樣被仰聞置候事

一今般御會所附中買始干鰯屋中買共ゟ別紙奉歎願候付私へ奥印之儀致呉候樣申出候故承知仕候得共右も不成容易歎願之儀与被存且も御仕法未タ御試中ニ付奉恐入候故今暫見送り可申樣再度利解申聞候得共何分眼前差支ニ相成追々賣先キ手縮ニ成行最早必至難澁ニ可相成与種々歎出候故事實段々尋合猶相考候處當時ニ至入津之船々も不相替多分入船有之候得共當年ハ存之外直組不整出

船數多有之大坂表へ着船可有之哉与存候處出船之內國々小浦々ニ至迄入津有之候由相聞へ右ニ付而も當津中買共賣歩行候場所之內海邊之向も入船之內直買仕候趣其中ニも新規荷請屋等相始候土地も出來候樣子粗傳承仕候右等之樣子ニ而ハ御會所附中買幷舊來中買共實ニ迷惑可仕哉与存候乍去御上樣厚御仁惠も可有御座与乍恐奉存且も御樣（ママ）中之儀ニ候故如何とも勘辨仕暫之間是迄仕來候儘賣買相營可罷在候樣再應申諭候得共何分中買共賣先手狹ニ相成候上自ラ賣負ケ候模樣ニ成行眼前相續難相成趣再應歎出何きニも御歎願仕度奉存候間奧印致呉候樣申之候ニ付甚以心痛仕且先般御申諭之廉々ニ對し奉恐入候得共何分右之時宜ニ付不得止事奧印仕候付乍恐此段以書付御斷奉申上候以上

安政六未年九月　　御用達

北風莊右衛門印

箱館產物方

御會所

（〇朱書）

「右貳通とも一同ニ差上候處尙亦御會所御取建已後積戻り荷物中買共ゟ屆出候書付寫差出候樣被仰聞候付卽刻取調夫々日順ニ致し寫壹綴差上候事是ハ御用帳ニ扣有之事

但御調役富田類右衛門樣當津へ御出張之砌差上之其節當所御出役ニ支配定役木村滕右衛門樣御掛り」

萬延元申年差出内存書(控)

乍恐口上覺

一去々從午年於當所箱館方御産物御出張會所御取建相成御産物取扱方私与外四人御會所附中買并私儀者御用達被爲仰付冥加至極難有仕合奉存候依之取扱方精々丹誠罷在候得共御仕法御試中取扱來候通右年限後爲同樣相續之儀見込之次第乍恐私手覺内存無服臟(藏○腹)内密奉申上度併重キ御趣意柄も不憚下々ゟ兎哉角愚存申上候段ハ甚以奉恐入候得共從來手掛ケ之儀ニ付不顧恐多左ニ奉申上候

一午年以後御下知之通難有奉承伏一統出精賣買仕罷在候然ルニ元來當津問屋中買共之儀も諸國産之品々取扱候業躰ニ御座候處近年來關東筋西國筋ともニ不漁續キ蝦夷地一方ニ限り漁事有之候ニ付肥物類追々價高直ニ相成最寄在々自然ト手當薄諸作出來劣勝難澁之趣風聞ト位能相捌候得共以來東西漁事模樣ニ寄多分積廻候節も御産物不相替氣配克出捌ニ可相成トも乍恐難見留メ被相考候此儀東西荷物者舊來之通取扱出來候儀ニ而人氣宜敷樣相見ヘ既ニ當春ニ至

り東國漁事多分有之候由風聞ニ付如何可在之哉与存候中格別之大漁も無之哉大坂兵庫紀州地阿州邊迄少シツヽ右荷物積船廻着仕候夫管(それすらカ)段々不人氣御產物不捌ニ相成既ニ直段も下落仕候勿論蝦夷地產物ハ近年御產物唱ニ相成當時之人氣何となく窮屈之樣存候哉兎角外產廻着心懸ケ候樣推察仕候ニ付直組方手代共にも共意ヲ含せ無手抜駈引可仕候樣申付先是迄も可之取扱來候得共何分永年之處如何有之候哉難斗假令大小之漁事有之候とも右ニ不拘氣先能賣捌仕度御趣意柄も貫キ下々ニ至迄安堵渡世出來候樣永續之程種々勘辨仕候得共何分愚昧之私差掛り當惑仕候猶心附之儀も追々奉伺候得共右等之始末兼而宜敷御賢考之程奉願上度事

一御產物之儀未タ御仕法御試中且ハ冥加ニ叶御用達も相勤候儀ニ付可成丈ケ抽丹誠御趣意柄萬事一際相立取扱仕度志願ニ罷在候處前書ニも申上候通り兎角他國產ニ心掛候樣粗被存候之儀ニ付大ニ心痛仕候元々問屋中買共ハ大躰口銭之德益ヲ相考種々駈引勘辨仕候哉外產之儀ハ步合も前々同樣之振合ニ付右ニ泥ミ前書之運ひニ相成可申歟と推察も仕候ニ付御用達に被下置候御手當テ之壹步方等も私同樣ニ外問屋に差遣候得共兎角手縮メ取扱兼候樣子ニ被存候尤

當所中買共儀ハ他國ニ專一ニ賣歩く商躰ニ付諸雜費も多分相掛り其上近年も御產物積船他國浦々ニ直乘廻り多分有之尤右浦々ハ問屋中買無差別ニ而我勝ニ賣買仕口錢ハ當津振合ト申唱六歩六厘一手德益ニ仕其益銀ヲ以直引等も仕賣捌候由粗風聞就中播州之儀者彼之地商人ト當津中買共立會之賣場所ニ付近年ハ蝦夷地產之品兎角賣負迷惑之由尤右之外他國產物當所廻着之節ハ從來不相替候取扱方ニ付當津中買とも賣勝ニ相成候趣而粗傳承仕候右樣之成行ニ候ハヽ自然外產取扱ニ心力を用候樣相成甚以歎ヶ敷往々之處氣配ニも相拘り可申哉与深心痛仕候就而ハ折角之御趣意而貫キ兼候歟ト乍恐奉存候何分双方とも御產物賣方一際相立永續取扱可致樣仕度宜敷御賢慮被爲成下候樣願上度事

一諸荷物御取締方ニ付去未年御會所附仲買幷從來中買共ゟ奉歎願候廉々之儀御試中甚以早却之至ニ付種々申諭も仕候得とも事實無據仕合承り及候ニ付乍恐願出候右等何卒御吟味次第被爲仰付候ハヽ難有仕合奉存候事

一船方諸賄之儀厚キ御仁惠ヲ以壹步方賄料与して積付問屋ニ被下置難有仕合奉存候右事實承り合候處甚恐多次第ニも奉存候得とも都而日々賄方ハ勿論船々當湊滯船中或も風波之失費も有之且亦時合ニ寄直組等行合兼日々見送り月ヲ

重取組ニ相成或ハ其儘終ニ出帆等ニ相成候分も間々在之尙又年々八九月以後ハ北海廻船難出來時節ニ相趣キ候故大坂兵庫等ニ而圍船仕置船頭越年ニ而初賣ヲ相待候分も有之彼是失費多分之儀も在之候得共積荷物何ニ不寄從來賄方等船方ゟ申請候譯ニも毛頭無之兎角船手氣請宜敷樣專一ニ仕候次第ニ而壹歩方ニ而ハ迚モ引足り兼候樣事實難澁之趣ニ承り候自然右ニ而不取賄等之仕向相成船手氣受ニ拘り候樣往々成行候而ハ如何敷次第奉存候ニ付右等も此上厚ク御賢慮被爲成下候樣奉願上度事

一船々仕切金相渡中買共ゟハ代金納方卅日限り可受取就而も取引兩替方金子繰出し等ニ付爲御手當テ御用達之廉に壹步方御下ケ被爲成下難有頂戴仕候然ル所中買共ゟ限月晦日請取候金辻之儀も月々書附ヲ以御屆ケ奉申上候通兎角殘金相嵩中ニも延納賴出候者も有之廿日後ニも相成候ヘハ月越來晦日ニ相成商內模樣ニ寄中旬ゟ來月晦日取引等差含遣し候儀も有之融通合等實ニ迷惑仕候得共元來船手幷賣先キ等人氣取直大切之時節殊ニ亦仕切金之儀も兎ニ角肝要第一ニ御座候ニ付速ニ渡方仕罷在候右始末ニ付船々入嵩候時節ハ身ニ取莫大之金辻ニ相成繰出し方殆心痛仕候就而も足銀等之儀も多分內損ニ相成候得共

何分御試中之儀ニ付右等も御奉公とも相心得先是迄可ㇾ取渡仕來候得とも猶
永年之處乍恐宜敷御憐愍之御取斗被爲成下候樣御賢考伏而奉願上度事

一當所中買共之儀者御產物買請於自宅賣方仕候而已ニ無之大躰阿讃播紀泉州路
等重ニ賣步行細々渡世仕來り候處御產物類御會所御扱ニ相成御步合も貳步方
被下置難有頂戴仕去々午年以來不相替同樣之振合ニ而渡世罷在候得とも前書
ニも奉申上候通り遠路ヲ掛ケ候儀故諸失費も多分ニ入殊ニ亦他國浦々も是迄
通り我勝ニ賣買も出來既ニ松前最寄之品々積入候船々近年追々他浦ニ相廻り
候儀ニ付自然ト商內方ノ手縺レニ相成實ニ迷惑之樣子ニ候得共何分其身々々
之業躰ニ候得ハ不得止抽丹誠賣方仕候も申迄ニも無之候へとも右之始末ニ付
如何樣致候而も賣負ニ相成右ニ連レ多分雜費も相掛り旁々以難澁之趣事實承
之共ニ心痛致遣し候儀ニ御座候元來先前之步合貰請候時節ニ而も細々渡世罷
在候儀一段之御仕法も相立候儀ニ付左も可有之事ト內存罷在候乍併當分御試
中故諸事差控不申出候得共右之始末ニ而ハ永續之所も無覺束奉存候間右等之
處も乍恐宜敷御憐愍之御沙汰被爲成下候ハヽ重々難有奉存尙更人氣相進ミ丹
誠仕候儀ト愚考仕候事

一御上納銀之儀一ヶ年三度相納候樣先達而被爲仰付承知奉畏候右納方之儀御産物代銀取扱方都而有合金ヲ以取渡仕候仕來りニ御座候左候ハヽ右御上納之分も矢張右扱金之内ゟ生し候儀ニ候得は何卒限月晦日兵庫觸相庭ヲ以直附仕金上納ニ御取極は難相成御次第ニ御座候哉乍恐奉内伺度實ニ別達而銀買付之儀ニ付兩替方ニ而打銀ト申唱直合多分損失相懸り是等内損ニ相立迷惑仕候次第ニ付何卒右樣金上納とも被爲仰付候ハヽ重々難有仕合可奉存候事

右等之始末御願奉申上候儀は思召之程而重々奉恐入候得共最早御試中年限も無程相成候儀ニ付心腹之次第粗書取ヲ以奉申上候尤初發御會所御取建相成候節ハ積入船々一旦ハ不成容易混雜も仕右ニ準シ諸問屋仲買共而如何相成可申哉ト不成一方當惑仕候處御上樣ニ而御取開之節船手之者氣配ニ相拘り候儀も深ク御配慮被爲在候御儀も御座候由其節大旨之廉々奉申上候處御吟味之上取扱御川被仰付身ニ取難有仕合ニ付精々丹誠仕御蔭ヲ以聊人氣も取留申候姿ニ候得とも今一段之所船手人氣合第一付而ハ中買共賣先キ至迄人氣相進双方和順之商躰ニ相成御趣意柄第一押立申度志願ニ御座候ニ付前書之廉々深ク御仁惠ヲ以今壹步餘之御增步も被仰付候ハヽ商法も益盛ニ相成可申重々難有仕合

奉存候尤當津之儀も船手一方之土地柄ニ而不成數身元之者ゟ中仕濱稼キニ至
迄諸廻船之餘德ヲ受ル者共ニ付實ニ土地一躰之興廢盛衰ニ相拘り候儀ニ付夫
是深御配慮被成遣度全以御手當ヲ增而已奉願候筋ニハ毛頭無之偏ニ前條之廉
廉事實御糺之上御慈悲ヲ以永續之基御賢考も被爲成下候ハヽ實ニ廣大之御恩
澤一統難有仕合可奉存候尙右ニ相洩候儀御座候ハヽ追々奉伺候書過し候儀ハ
幾重ニも宜敷御赦免被爲成下度奉願上候已上

兵庫津　北風莊右衞門

箱館產物會所附

仲　買

惣　仲　買　共

此度申立之趣を以都而取斗步合上納之儀も書面之通相心得來酉年ゟ今度取調
之通可取扱候

兵庫津　總　仲　買　共

其方共箱館產物賣捌いたし先々之もの右代金不納相成難澁之趣も相聞間向後
は是迄會所附仲買共同樣ニ取扱遣すへく間得其意不納之節は篤と示談を詰御

用達奥印請申立へし
右之通申渡間得其意諸事可申談

北風荘右衛門

其方儀兵庫津産物會所之儀御試中諸帳面類其外都而引請假會所をも御用立候ニ付右爲御手當金百兩被下

箱館産物會所附用達
北風荘右衛門

箱館産物會所附御用達申付候爲御手當一ヶ年五拾兩被下諸事入念可相勤且會所御用ニ而罷出候節も繼上下著用可致候

○慶應四戊辰正月情報 ○半紙八枚端一ヶ所コヨリにて綴ぢたり

過日大坂大變ニ付當津勤番幷ニ地付同心一統離散被致候ニ付市中甚不穩且亂妨人も可有之哉与一統驚察仕不取敢御警衛之儀ニ付阿州樣へ歎願書差出候寫左ニ

乍恐歎願仕候口上覺

一當今之御時會奉恐入候御儀御座候然ル處御支配大坂御奉行樣御供ニ而御歸

府被成候趣ニ而當津勤番御役人も昨夜退散被致候ニ付地付役人中に相伺候處表向何等之御達も無之候得共地付役人不殘勝手次第ニ離散可致旨大坂支配向重役ゟ通達有之候ニ付無是悲(マヽ)離散致候段被仰聞候兵庫御奉行柴田日向守樣も當津御支配御引渡未相濟候得共差當り取締向等可相伺之處是又神戶御旅宿御引拂御支配向御役々も何方へ歟御退散被成候趣右樣御支配御役所ゟ何等之御沙汰も不被下候而御歸府御離散等ニ相成世上之風評ニ而も不容易御儀而已區々ニ候而取止候儀ハ無御座候得共何事可相伺御役所も無御座候由追々御取締之御沙汰も可被仰出候得共當節之形勢ニ而ハ押借亂妨强盜等入込候儀も可有之哉と津中一統甚恐怖仕居候御家樣も當時御固御役々樣御出張中之御儀ニ御座候間此段御伺申上候前書之趣御賢察被成下差當り右樣强盜共入込候節召捕方其外取締之儀御所置被成下度奉願上候御聞濟被成下候ハヽ津內一統安堵渡世相營難有仕合奉存候以上

月　日

惣代　連名
名主

阿州樣御陣所
御役人中樣

右之通願書相認一統同道ニ而眞光寺御陣所之内住友押次郎殿へ相伺候處追而沙汰可及旨被仰聞歸宅仕候然ル處御沙汰ニ付藤田氏（○岡方名主藤田善右衛門）被出候處先此書附ハ戻シ置候乍去願面之次第ハ聞濟自然亂妨人有之候節ハ早速陣所へ掛附可申召捕方可仕且夜廻り等ハ兼而指出し置其者之注進ニ寄召捕方可致旨被仰聞候右ニ付町々へ相達候次第左ニ

當今之御時會ニ付自然押借强盜亂妨人等在之間敷哉と心痛罷在候ニ付其□差當り御警衛之儀ニ付阿州樣へ歎願致候處御聞濟被成下夜廻り等可被成下趣自然右樣之儀有之候ハヽ隣家たりとも早速御陣所へ訴出可申且火事等之儀も心掛りニ付一町限家々ニ水溜町會所に消防道具等出し置夜廻り等嚴重ニ致し當分之處役人中之内町會所へ壹人ツヽ詰合候樣致度旨相達候處何れも身の上之儀ニ付早速嚴重ニ相成于今町々夜廻り等致居候

先日備前家老神戸邊通行之節阿蘭陀人道切致候ニ付槍ニ而殺され候より異人等相集り關門閉切戰爭ニも可相成勢ひニ而市中大混雜仕候折柄長州遊擊軍三隊平野村祥福寺へ御着ニ相成翌日神戸鐵屋（○專崎彌五平）より名主被召候ニ付不取敢藤田氏

被出候處隊長も井戸小太郎殿と申人ニ而探索方福井豊三郎殿傳言ニ而今般當所警衛之爲長州罷越候ニ付當分差當り之儀ハ祥福寺御本陣へ申出候樣且薩藩も出張被致候筈ニ付右兩藩之內最寄ゟ可申出樣且又外國人行違ひ之儀出來市中混雜致候樣子ニ付此書附を張置安堵可致旨被仰渡奉畏候寫左ニ

口達之寫

昨十一日當地ニ而外國人爭鬪有之候得共當地の難儀可相成候樣之儀ハ一向無之事ニ付老人女子たりとも驚申間敷荷物其外持出野侍(カ)(住カ)居抔致居てハ病人抔の難儀大方ならぬ事ニ付右等のきこぎ無之樣相心得可申候鎭靜のため當地出張之事ニ付孰れも安心いたし可申候事

正月

前條外國人關門固メ不容易形勢市中不穩折柄外國人より張紙致候寫左ニ

本日松平備前守家臣池田伊勢日置帶刀兩人神戶町通行之節右兩人供之者無故槍戰炮器を以外國人を襲しハ何故ニ□而哉早速申譯ニ罷出可申候若外國公使とも滿足たる(マヽ)樣不相立候ニ於而ハ彌外國へ對し干戈を動度と見定め猶外國より所置ニ可及候左候而ハ備前藩ニ不限惣而日本國中之大災難と可相成候事

十一日

右外國公使ゟ被申出候事

當津宿本陣（〇衣笠又兵衛）表へ左之通り張紙致し御座候

昨日松平備前守人數亂妨致し候ニ付各國ゟ夫々所置可及候得共決而町方村方之者等ニハ關係無之事ニ付夫々安穩ニ渡世致し騷敷儀一切無之候樣可致事

右各國公使ゟ被申出候事

昨日備前人數暴發ニゟ各國軍艦ゟして兵庫港內碇泊之日本人所持之蒸氣船差押候右も昨日各國公使ゟ被申出候通備前ニ不限惣而日本國中諸藩關係可有之依而也

昨日松平備前守家臣亂妨ニ付各國ゟ夫々警衛致居候得共兵器を携候者幷帶刀人之外ハ無滯通行可致候事

右四枚張紙仕候

御勅使東久世前少將殿（〇通禧）當津爲鎭撫且異國應接之儀有之候趣ニ而御旅館宿本陣ニ御座候右御應接之次第柄ニ寄而哉前條神戸異人廓內（〇居留地）警衛之儀も大意（マヽ）ニ穩ニ相成諸人無滯通行出來相成申候

右夜御警衛薩州岩下佐次右衞門樣ゟ名主被召候ニ付私罷出候處御觸貳通御渡しニ相成今度爲鎮撫出張御座候東久世殿且我等之儀ハ官軍之儀ニ付左樣相心得追追取締向之儀ニ付而ハ申談次第も可在之間左樣相心得可申旨被仰聞候御觸書左ニ

但右御觸書出候迄ニ先ニ長州より出候口達書ハめをり取置候樣長州家より御沙汰之旨傳承仕候

〔兵庫津神戸町爲鎮撫薩州長州兩藩へ取締向被仰付候ニ付市中村々各守家業致安堵居候樣當津名主庄屋ゟ早々可觸達旨申渡候事

十五日

外國掛り

岩下 佐次右衞門(○方平)

寺嶌 陶 藏(○宗則)

伊藤 俊 介(○博文)

〔今般

勅使御下向相成兵庫津神戸在留外國公使中ニ是迄之條約其儘御取結之爲御布告相成候間外國人ニ對不法之振舞無之樣可申觸置候且又外國人不法之振舞有之候節ハ御役所へ可申出候外ニ追々可申渡儀も有之候間右御趣意吃(屹カ)度相守候樣神戸町庄屋ニも早々可申達候間當津名主庄屋へ申渡候事

但御役所之儀ハ當分之中御本陣へ被立置候事

十五日

岩下佐次右衞門

寺嶌陶藏

伊藤俊介

右御勅使ニ恐悦之ため獻上仕候

御前ニ大鯛壹對五舛入壹樽　薩長御陣所へ白富士(○銘酒)壹駄ツヽ

右之通ニ御座候

銘々勤向帶刀之儀御伺奉申上候處勤方ハ是迄通り相心得可申候樣被仰聞候帶刀之儀ハ別紙御下ケニ相成難有奉存候

兵庫津名主庄屋惣代共ゟ當今之御時節柄市中取締向ニ付帶刀御免被下候樣願

出候趣尤之儀ニ付是迄之通相心得候樣申渡候事

正　月

岩下佐次右衛門

寺島陶藏

伊藤俊介

右之通御切紙御下ケニ相成申候

今般中國四國爲征討惣督四條前侍從殿明十八日辰刻御出馬別紙御休泊之通明石城に御進發之事候條御本陣等之儀宜可取斗者也

但前以宿割役差入候ニ付可問合候事

十七日

御本陣

右之通御先觸到來ニ付久世殿（〇東久世卿）ハ網佐（〇三好佐左衛門）に御移りニ相成手當致居候處御着座ニ相成翌御出馬ニ相成明石城へ御入城之趣

前條御役所之儀御本陣ニ而ハ大混雜ニ相成候儀ニ付其段申上當時御役所之儀ハ

勤番所ニ相成居申候都而公事訴訟とても名主惣代取次を以御訴申上候樣被仰聞
當時山崎三左衞門殿役宅へ名主壹人惣代壹人日勤ニ御座候得共中々繁用之儀ニ
付惣日勤同樣之次第ニ御座候且八部兎原兩郡村々當廿五日ニ御召ニ御座候實ニ
筆紙ニ盡かたき御時會荒増奉申上候尙得尊顏御物語奉申上度候

兵庫津市中村々取締向幷ニ公事訴訟之儀都而御役所へ可申出旨東久世前少將
殿ゟ被仰出候此段當津名主惣代庄屋へ申渡候事

月　日

岩下佐次右衞門

寺島陶藏

伊藤俊介

當月廿二日東久世殿御目見へ被仰付候
廿三日右爲御禮岩下樣始御三人へ金五百疋ツヽ名主庄屋惣代より持參廻勤仕候
事

右條々委細之儀ハ近々安田氏（〇南濱名主安田惣兵衞）御上京之旨承り候ニ付御聞取可被遊与奉存候餘も重便ニ申上度奉存候以上

〇北風莊右衞門貞忠（正造）戊辰御用日記

（慶應四戊辰年）

二月六日　初出勤　此日手掛御用無之

七　日　　出勤美晴

一宇和島少將樣御下津前夜西之宮御泊ニ付寺内（マヽ）遠見之後湊惣門外御出迎運上所に御立寄ニ付八ツ時御着網屋（〇三好氏）佐左衞門御本陣早速御着悅生鯛壹掛獻上御止メ置ニ相成候事暮半頃迄南惣會所ニ詰ル

八　日　　出勤美晴

一早朝ヨリ岩下佐次右衞門樣へ罷出ル

一陰陽道取締觸頭切戸町武田富之進舊來之通願出ル取調之上申上ル即刻御聞濟追而名前書差出し候筈

一御差紙人足受負三方小使庄三郎與助藤六三人願出ル名主手元ニ而聞届申渡

ス壹里三百拾文定之事
一酒小賣仲買出願依之酒造年行司九日四ツ時差紙出ス

九日　出勤美晴
一今日兵庫勤番所大坂同樣裁判所ト相成候事
一同名主中詰所之儀も裁判所取次御役所ト被仰付候事
一於朝廷一六日ハ御用御扱無之候ニ付兵庫も同樣一六之日休日被申付差向候用向ハ私宅ニ而取斗候樣御沙汰右御書付御下ケニ相成ル
一正月十一日於神戸備藩ト外國人鬪爭一條今日落着於永福寺本堂隊長瀧善三郎切腹三十貮才
一鳴尾村鴈(カ)屋善太郎相手取堂嶋米屋彥太郎滯銀出入大坂元松山屋敷長州役所へ出願右ハ元來卯四月中事濟ミ儀殊ニ願人筋違之儀ニ付其旨神戸運上所伊藤俊助殿へ寺嶋陶藏殿ゟ出狀被下候事
一小頭儀は御上知之後大坂長吏支配ニ候處此度改而名主支配被仰付候尤八部兎原武庫三郡之小頭當所小頭手下ニ相成候事嚴重之請書取置候事
一髮結職ゟ願出候ニ付當所牢屋番被仰付候事

十日　出勤終日雨天

一常例出入訴訟多ク其外相替事なし

十一日　休日時々霰

十二日　出勤快晴

一代人諸訴訟今日ゟ被相止候事

一摩耶山領字嶋田村吉坂屋ゑゐ代判吉坂屋又右衛門一判ニ而出訴右ハ御取上ケ難相成以後之次第も有之候ニ付地頭摩耶山僧衆ゟ取捌之儀御役所へ願出有之様申渡ス

一鳴尾村善太郎願一條右ハ大坂裁判所兵庫裁判所之外公事取捌無之筈ニ付其心得ヲ以應答可致趣ヲ以願書御下ケ依而十三日出差紙遣ス此分罷出候ニ付右之通申渡ス

一酒造家中ゟ小賣方出願之返答書差出ス近日御沙汰ニ相成候事此分書渡有之御下ケ相願候ニ付差戻ス

十三日　出勤終日雨天

一藥種屋仲間仕來り通ニ而當御役所御支配出願之處御聞濟ニ相成御免御下紙

下ル冥加銀之儀ハ壹株ニ付金百疋ツヽ十二月ニ相納候事追而株帳差上候筈
當辰改株人五十四軒内年行司兩人ヘ年々金貳百疋歟銀壹枚骨折料被下候仕來リ之由
一摩耶山領諸捌一山願之通御聞届ニ相成ル
同領之內酒造三株公領之株ニ候處前代僭心得違ニ而松下遠江守支配ト肩書有之不都合之段斷申出候此分も其儘ニ而御聞置ニ相成
一摩耶山領字嶋田村吉坂屋ゑんゝ代判吉坂屋又右衞門酒荷物取込出入百姓代奥印幷摩耶山役寺王藏院添願書ニ而御取上ケニ相成御裏書御下ケニ相成候事以後此振合ニ可相心得事
一櫓櫂屋河內屋與左衞門始十三人之者仲間株出願右ハ材木仲買株御免ニ相成候ニ付其分へ込入一株ニ相成候樣御免御書下ケ被下候冥加之儀銀五枚上納願候處願之通被仰付候
材木屋上納一株廿匁ツヽ相願候處此分追而御沙汰之事
一名主以下馬提灯之儀
上ニ菊之小御紋　自分紋之間　朱ノ二ツ引　名主
同　朱ノ壹ツ引　庄屋

同　　　　　　　　　　　　墨ノ二ツ引　惣　代

二月廿二日上菊之御紋之處朱ニ被仰付候事

右之通被仰付候尤朱ノ三ツ引相伺候處右ハ藝州家印と同様難見合趣ニ而右様被仰付候事

一江戸廻り荷物積出し此方共迄願出候處御聞置尤武器始武家荷物ハ御差止メ其餘ハ勝手次第米穀ハ商人荷たりとも時々石高船名相斷候事右請書取置候事

一右之始末ニ付問屋中買呼出し江戸積米穀積出し之儀同様相心得其分屆ケ出候様申渡ス

十四日　出勤晴

一常例(金カ)□銀出入訴訟之外相替事なし

十五日　出勤晴

一今朝岩下様始役々に御用達被仰付候廻禮相勤ル畠山同道之

一黒白砂糖手掛之者川崎屋源八始八人新株願立候處右ハ是迄無株ニ而相濟來候儀ニ付新規相願候ニハ何歟存込も有之候儀哉無謂株相許(カ)候而ハ自然ト下方手狹之仕法ニ相成可申ニ付無御聞濟願書御下ケニ相成ル

尤年々銀廿枚冥加可相納旨申出ル

一炭薪手掛之者新規株取立度願是も前同様之儀ニ付不伺願書差返ス併此分ハ從來大坂表ニ而京積津越差押之廉甚手狹窮屈之次第京都潤澤之仕法ニ而津越等相願ハヽ如何哉之旨及利解置

十六日　休日美晴

一神戸伊藤俊助樣に御用達被仰付候廻禮ニ罷越ス

十七日　出勤風雨

一金銀出入等訴訟申出裏書御差出し之後對談行届兼日延願等之儀名主共於役場取調對談行届候砌無遺失可申出御沙汰之事

一播州一圓公事訴訟之儀ハ立（龍カ）野脇坂侯幷ニ赤穗森侯に御托し裁判有之候御達之事

一卯年御地子殘納幷米納三百石當節可相納之御沙汰有之候處同年中迄數々所方ゟ扣ニ相成居候分貳百五拾貫目斗有之ニ付右差引殘り上納仕度三方連印願上候處右ハ尤之儀ニ候へとも何分外々差支ニ相成候事件ニ付先可納三百石ハ相納候上御上ニ而御存寄可有之候儀ニ付其邊尙一應篤ト勘辨可仕御沙汰之事

一炭薪屋大坂津越願再應出願右ハ追而御沙汰之事
一櫓櫂屋中買株ハ材木中買株に込入被仰付候ニ付右掛合候得とも和熟難相成
利解之上櫓櫂や日延ヲ願　材木屋願ハ都而是迄之通櫓櫂やとも一體勝手買之
積り　櫓やハ算盤買丈ケ引受度願之事此段手狹ニ付難有成

（附箋）
此一條櫓櫂や願之通算盤賣丈ケ引受之趣意ニ而對談
行届双方合印ニ而斷出候事

二月廿二日

一切戸町貸蒲團職坂本屋茂助儀役所ゟ申付候御用宿蒲團之儀一手引受願之通
名主手元ニ而聞濟右請書取置候事

十八日　出勤朝曇午後晴

一十六日境表ニ而土州藩佛人ヲ切害致候事件外國人申立候次第有之候ニ付左
之通御達

土佐藩神戸通行不相成候間山路より差越候樣尤荷物斗り相構不申帶刀人
不相成候趣可申達候事

二月十八日

兵庫
御役所
問屋場役人

十九日　出勤美晴

一常例訴訟取調之外他事無之候

一退出後中路權右衞門樣に出ル（金直段之事兵隊之事土地撫育見込之事）

廿日　出勤晴

一御役所鎭守稻荷明神別當從來能福寺相勤居候處社內掃除等一向不行届ニ付入念候樣御達ニ付其旨申渡ス尤神酒燈明之儀御沙汰ニ候へとも御手當テ無之候而ハ難相成候儀其趣申上追而御沙汰之事

一大坂始拾貳鄕酒造家之內元齋藤六藏殿支配之向丈ケ引分レ候趣ニ而魚崎村ゟ西兎原郡八部郡酒造人新酒番船願出御聞濟ニ相成

一住吉川ゟ武庫川迄之間ハ西ノ宮出帳之御役人取扱致され候ニ付右伺振前酒造家ゟ申立候ニ付壹人願之分左樣相心得連印願之向ハ兵庫に一手ニ申出候樣申渡ス

廿一日　休日雨天晝後晴

廿二日　出勤曇天

一御支配地之儀ニ付爲心得寫を以御達之書付

脇坂淡路守

森美作守

播磨國元代官齋藤六藏支配地取締之儀過日兩藩に被仰付候へ共右之地所兵庫裁判所支配ニ相成候間於兩藩不及取扱候此段申達候事

北條相模守

河內國元代官之內齋藤六藏支配左文ニ同し

松平遠江守

九鬼長門守

攝津國元代官之內齋藤六藏支配地之分兵庫裁判所之支配ニ相成候間過日取締之儀兩藩に被仰付候へ共不及其儀候仍而此段申達候事

二月廿日

一大坂表へ御用船之儀

貳兩貳歩　三月ゟ七月迄　凡三四人乗 人乗小渡海船
貳兩三歩　八月ゟ二月迄
三兩貳歩　右同斷　五人乗 人乗大渡海船
三兩三歩　同
拾七貫文　右同斷　百石ニ付 渡海船
貳拾貫文　同

右之通船役人幷行司共ゟ申出候尤諸色下直ニ相成候ハヽ減少可致候事
一酒造家一同ゟ小賣方出願一條返答書差出ス右ニ付名主共見込之儀申上候樣御沙汰之事
一土地取締筋ニ付歩兵組立方取扱見込之儀(申立候樣)岩下樣ゟ御沙汰之事
器械は官ゟ御下ケ被下物(○糧食)幷玉薬等ハ土地一體ゟ出方ニ相成小頭給ニ而相賄候積り

廿三日　出勤折々時雨
一酒造方見込之儀書付を以申上置扣別紙ニ有
一名主役名之儀ハ土地人別取締ニ付被申付候譯合之處今般攝播ヲ始他鄕御支配之御役所に出勤仕候上ハ何ト歟役名ヲ被下度段內願致置候

廿四日　出勤美晴

一東久世様御沙汰之趣ニ而御役所御用達に五人御扶持北風荘右衛門畠山助右衛門両人に同様被下之尤夫々に岩下様ゟ御達書御渡し被下候事

廿五日　出勤

一岩下様同清之亟様東條慶二様中路權右衛門様へ昨日御扶持方之廻禮相勤

一酒造家運上之儀幷小賣屋共に御利解之筋被仰付右年行司呼出し申聞ル

廿六日　休日美晴

一岩下君御始御一同拙宅へ御越傳來物御覧御望ニ付御感狀幷神代鐙寶刀其外古代短册之帖應擧大三幅對入御覧候床ハ明畫之鷲

廿七日　出勤晴

一昨日之御挨拶ニ岩下様へ罷出其序銃隊見込之儀申立ル右表立有志之者何人と歟炮之願可致御申聞

一中路様神戸運上所へ御越ニ付有合銃御周旋之儀御尋ニ付願置候事

一酒造家運上(マヽ)株高ニ四〆三百匁願出小賣方之儀ハ造り揚ゟ四月十五日迄他所酒造方へ買次其後ハ勝手買ニ而運上拾駄廿貳匁五分ニ而申分無之段申出候ニ

付尙亦其趣小賣屋へ可談候旨被仰下候ニ付小賣方五人呼寄申聞候處明廿八日
迄御猶豫相願出候
一神事ニ付當年柄成丈ヶ質素ニ可致段北濱年寄中へ申聞ル
廿八日　出勤終日曇天
一小賣酒屋書付差出候へとも直しニ相成ル
廿九日　出勤
一小賣酒屋御返答書差出し候ニ付明卅日酒造家一時ニ罷出候樣申渡ス
一來三月五日大阪西本願寺へ　御幸之御達し
古金□下之相庭ヲ以無滯通用之事
洋銀三步通用御達之事
右三ヶ條一集ニ御觸達し町々に通達
一於大坂御用達之事
晦　日　出勤快晴
一當御役所御支配所之內諸郡村之觸達之儀相伺候處高橋徹之進へ御談事之上
司農方ゟ觸達ニ取究候事

一家數合四千九百廿七軒（卯年改）
人數合壹萬九千八百五拾八人（男九千五百四拾五人 女壹萬三百拾三人）（〇兵庫津人口）
〆
右司農方ゟ宗旨人別被相尋此分十月納之趣相斷此書付遣ス野方川牛馬之員數調呉候樣被申候事
一酒造家幷小賣屋仲種々御調之上今日御達し之書付左ニ
其方共儀從來酒造免許之鑑札ヲ受渡世罷在候處今度御政道御一新ニ付右鑑札相改渡世向是迄通可相營旨被仰付候處爲御冥加ト銀四貫三百目宛酒造株元之者ゟ毎年十一月奉上納度旨願之趣聞届候もの也
辰二月　　兵庫
御役所
酒造株
仲間に
今度御政事向御一新之廉に（ニカ）附酒小賣手廣ニ致度旨願之通聞届候就而者是迄造酒仲間に引合之通新酒造り揚より四月十五日迄銘々勝手ニ他所酒買

入不致旨且右日限之外他所酒買入幷沖船に積込酒拾駄ニ付銀貳拾貳匁五分宛之割ヲ以銀納可致旨違背之もの在之ニおゐても嚴重之被及御沙汰候間銘々心得違無之樣正路ニ取引可致もの也

辰二月　　　　兵庫

御役所

小賣酒

仲間に

從來之振合ニ而も酒小賣渡世手狹ニ付造酒屋共ゟ是迄取極𠑊置候儀被及放解右小賣酒屋共他所酒買入且沖船に積込之節改方其方共ゟ申付候間不正之品賣買も勿論買入積出し之員數篤ト相改毎月其段可申出候尤右取調料其樽數ニ應し可被下候間無油斷出精可致もの也

辰二月　　　　兵庫

御役所

濱々

仲仕共

右之通被仰渡候ニ付夫々申渡ス尤三通とも御請書爲出候事

一小賣屋仲ゟ願出候前書四月十五日迄之內ハ酒造家ニ而新酒買付之筈然ル處口錢之儀廿貳匁五分ニて賣方致吳候樣申出候へとも右ハ酒造家へ相對ヲ以取究候樣申聞返ス尤酒屋年行司へも其趣申付置候事

三月朔日　休日晴

一神戶伊藤俊助樣へ畠山助右衛門同道今般被下候御扶持方之廻勤

二日　出勤美晴

一早朝ゟ中路氏へ罷出ル兵隊用談其外御用談色々

一岡仲士(仕)共小賣酒取締之請書取之然ル處何ゟ之仲間へも不組岡仲士(仕)働候者有之右ハ下々ニ而申諭組入候樣申聞候而自然强情ニ申立候節ハ當御役所ゟ可申諭候旨申達ス

一司農方ゟ被相尋候農業牛數四十三疋申上ル

一兵隊練兵之儀北風莊右衛門安田惣兵衛兩名願書差出御聞濟ニ相成候御書下ケ之儀ハ人數揃之上御沙汰之事尤御免之稽古ニ付精々丹誠可致御申渡し

一廻船取締方池田萬右衛門願書之趣取調被仰付候事
但神戸方へ差出し候由岩下様ゟ被申付

一御達書

播州姫路自今兵庫裁判所兼帯取締被仰出候事

二月　東久世前少將

一上巳之御禮相伺候處四ツ時御請被成候ニ付一同麻上下ニ而罷出候様御達之事

一岩下様ゟ於大坂御役所御用達之儀此程御談示有之候處右ハ大坂屋貞次郎へ被仰付候ニ付其段談事ニ不及旨被申聞候

三日

一上巳御禮一統申上ル

一今日ヨリ當津兵隊稽古として小倉壯九郎殿但六人出張南條（新九郎）ニ而止宿日々稽古ニ罷出候委細別帳ニ記ス

四日　稽古方ニ出ル

五日　同
一七宮神輿カキ判取當年柄ニ付及嚴達候事
六日　休日稽古ニ出ル
七日　同
八日　同
九日　神事之　美晴
一七宮御神事ニ付常服ニ而出勤尤三方ゟ同役中惣代中とも出ル
御役所御出役ハ探索方一人吟味方三人小頭共廿人斗當年柄嚴重取締候而御神
事聊無滞相收り申候
十日　稽古ニ出ル　時々出勤
十一日　休日同
十二日　同　地方混(雑カ)□之始末取締被仰付候畠山も御用達之廉ニ而同様
十三日　同
十四日　同
十五日　同

十二日分
一池田村制札之一條ニ付蒔田鐵太郎家來ゟ同村庄屋へ彼是申聞候趣有之右始末伺出候ニ付右當御役所ニ萬事振向候樣御沙汰ニ相成候
一於大坂會計所此度兵庫會計御用掛り被仰付候

十六日　休日
一明十七日山陰道鎭撫御總督西園寺樣下筋御通行御泊りニ付其手當テニ掛ル
一神戸二ツ茶や役人三人北濱へ罷越此度運上所ゟ御沙汰之趣運上所ゟ宇治川迄之間浪打際ヨリ拾六間四尺外國人往來ニ被仰付候處右ニ而同所之內建家貮三軒も取拂候場所も出來候程之儀ニ付段々歎願致候處外國人へ御掛合之上六間四尺御免ニ而十間道筋ニ被仰付候趣然ル處右ニ而ハ水上等都而出來不申依而高濱地先借受度趣賴出候事追而返答ニ及候段申答ル

十七日　出勤
一西園寺樣御着井筒屋御本陣五十人斗其外御人數六七百人斗十八日御逗留十九日蒸氣船に而御上坂泊り壹〆文晝五百文
一北濱惣會所當分會計御用所仕度段相伺候處御聞濟ニ相成

十八日　晝迄稽古　晝後時々雨
一御鎭臺東久世樣昨西之宮御泊り今日八ッ時御着麻上下ニ而御出迎
十九日
一東久世樣御禮獻上物（白富士壹斗樽生鯛壹掛ケ阿ゑび三）差上ル卽刻御目見被仰付□□（何ゟカ）之御言葉
被下候之
一摩耶山普請願御聞濟
一同領分酒造稼高四千石餘松下遠江守領分と鑑札ニ認メ有之ニ付當御役所御支配ニ相成候上ハ右名前ヲ相除キ度志願之趣演說ニ付其旨申上候處右其內都而御鑑札御改ニ相成候ニ付其節差心得居候段被仰聞候事
一同山普請ニ付日雇賃錢銀札ニ而相渡度旨出願右ハ下方相對ニ而承知致候ハハ可取斗御役所ゟ如何とも御達ニハ難相成筋御沙汰之事
一同宗旨一札之儀いまゝ太政官御達も無之儀ニ付是迄之一札別紙ニ相記し本文之處ハ是迄之御趣意ヲ以取締仕候段相記連印可仕御沙汰之事
一長傳寺ゟ出願永澤町増福寺幷野宮辨財天社支配ニ候處町中ゟ彼是申立支配不爲致鍵も相渡不申依而早々引渡し水魚之心得ヲ以祭り方出來候樣出願

一右ニ付永澤町年寄幷家持呼出し申聞候處右ハ兩支配ニ願度趣申出候其旨及言上候處長傳寺へ其趣可及利解旨被仰聞候廿日長傳寺呼出し其旨申聞ん
一非人人數取調右取締方御役所ゟ御談事有之差向人數取調小頭へ申付ル
一御役所四方之溝浚方見込御尋
一町々ニ門ヲ取立候見込之儀申上置

廿日　朝曇天稽古ニ出ル　晝後出勤　晝後雨ニ成ル
一東久世樣晝後御出馬明石御泊り姫路へ御出爲御附添岩下樣幷南條氏（○新九郎南濱名主）榎並好之助（○南濱惣代）御供被仰付候事
一東出町ニ而紀州買地面幷土藏當春長州侯ゟ封印付ニ相成居候ニ付御引渡し方伺出ル趣依之町内子細故障等無之候ハヽ可返渡候間町内取調候樣御沙汰廿二日四ツ時出年寄へ差紙遣ス

廿一日　出勤
一今夕中路樣御下津夜九ツ時ゟ早追ニ而姫路表へ御出向

廿二日
一裁判所御用ニ付（○以下空白）

○楠社造立に關する件

獻備之兩種兼而御持セ被下畏入候右も拙壹人拜味可致謂毛頭無之途中ニ而口外之譯ニ而有志中打寄萬歲を謠ひ可申儀可然歟とも存候ニ付右兩種乍失禮尙爲持差出候間可然御指揮可被下候草々已上

四月五日（〇慶應四年）

（〇端うヽ書）
北風莊右衛門樣 兩種相添

中路權右衛門

愈御淸榮奉賀候然も今日不寄存朝廷より楠公社造立御寄附金千兩被下置候ニ付御風意（吹聽）聽申候殊ニ難有御書付とも被下實ニ千載迄難忘仕合御同慶奉申候本書ハ明日ニも爲相寫差出可申候已上

四月廿三日

（〇端うヽ書）北風樣

中路

楠社神號幷造營之事願之通被聞召候

就而も神社繪圖面取
調神祇局へ早々可
指出被　仰付候
神號　勅許之儀も
清丸社之例ヲ以
勅使御指立ニ可相
成候
右之通其筋へ通達
早々取掛候樣
四月三日
東久世中將

北風莊右衞門
安田惣兵衞
南條新九郎

楠社御造營御用兼勤申渡候事

辰四月

北風丈助

覺

一金千兩也

右者今般楠社　御造營被　仰出從　朝廷御寄附金慥奉預候以上

慶應四年

辰四月

北風莊右衛門印

安田惣兵衛印

南條新九郎印

北風丈助印

○中路權右衛門書簡

今朝のくさのものを定助へ相渡置候已上

此どうらん（○兵庫兵隊彈藥入）只今參候付爲持上候今朝之貳兩貳歩又三兩壹歩之方ゟ御見

競可被下是ヲ相附廿兩壹歩之分也尤例之筒も差急キ候間早々此者へ御治定（　）且取引明後日与申越候然處御神事故いかんとも愚存ニ難屆御相談申上候　早々

七日（○慶應四年三月）

（端うは書）北　風　樣　　中　路

先日御咄申置候古高札ニ而爲造候大箱火鉢差進可申候間岩下家（○佐次右衛門）旅宿へ請取人御差出被下候樣今朝可申入之處失念仍此段申述候不備

廿八日（○慶應四年三月）

（端うは書）北　風　樣内用　　中　路

其後御風氣如何御案思申候折角御自愛草々御出勤祈上候偖日誌十只今相廻候間早々掛御目ニ候今日之分ハ前書殊ニ難有一昨夕御懇談之事件ニ付候而も愚存必敵之猶々此意ヲ以御教示ニ成候ハヽ愚人も目ヲ覺し可申歟御一笑々々市兵之儀達書も治定候間御出勤次第相達其上之策略尙相施し可申存候昨夕甚七（○北風の學校掛喜多甚七）同道岩間屋（○神田兵右衛門）入來之處學校（○明親館）取建之事件是非企之積ニ相聞本懷之

至ニ不堪御風意聴ニおよひ候御取締（○岩下氏）も昨日より出坂彼地之基本此度も十分盡力有之趣ニ付何事も追々規則相立可申哉ト唯う絶しく存候まゝ御同慶可被下候穴あしこ

四月廿日（○慶應四年）

（端うは書）北　風　君御親披　　中　路

彼老先生今日尋遣候處只今入來ニ付御手透ニ候ハヽ御來訪歟又ハ貴家ニ而も御尋試之儀候ハヽ同道可致歟御相談申上候以上

廿二日（○慶應四年）

（端うは書）北　風　様當用　　中　路

退出之砌小豆屋（○畠山助右衞門）鎮守へ參詣いたし岩間屋（○神田兵右衞門）為尋候留守之趣ニ付無據歸宅致候此段不惡御承知萬端可然御取斗可被下候早々已上

四月廿五日（○慶應四年）

（端うは書）北　風　様當用　　中　路

藤田善右衛門歎願之儀則同役にも申談候處至（カ）重病ニ就而も無餘儀次第ニ付願之通聞屆遣候間此趣被相心得當人へ可被相達候以上

后四月廿八日（〇慶應四年）

北風荘右衛門殿

安田惣兵衛殿

中路權右衛門

今朝御談示之愚狀則油紙包ミ爲持上候付御達可被下候文中大意別紙ニ認候付心得として御達可被下候將又アセラシヤ見本別封ニ爲差登直段聞ニ遣し候間是狀入京次第草々相達呉候樣御談可被下候早々不具

五月九日（〇慶應四年）

（端うは書）北風樣　中路

昨夜ハ例之酔躰大失禮御免偖姫印（〇姫路藩）金作不調ニ而ハ紅印（〇姫路藩用達紅屋兒島又左衛門）も不一方苦心之趣ニ而彼金札拜借之儀企テ申出候付歎願書ニ添書致會計所へ差向彼地

模樣爲聞繕可申方ニ治定致候然處表向書付差出候計ニ而ハ内情貫徹いたしかたくニ付三岡(〇參與兼會計事務掛三岡八郎(由利公正))以下要路之人によき手引之もの周旋方依賴候得共懇意之人更ニ思ひ出し不申貴兄御知人之內歟又ハ御取引先之兩替等より爲持込候得ハ不成事も成就之場ニ相運ひ可申歟ト相考申候御盡力序ニ此儀も御補助被遣間敷哉御都合御尋申上候已上

五月十四日(〇慶應四年)

(端うは書)北風樣當用內々　　中路

昨日御談之廉酔眠後打忘き甚不埒ニ候へ共一向覺出し申兼候偖今日兒島(〇姫路藩用達紅屋)初會計へ歎願上京之儀大阪表ニ而事足可申哉自然元方なら而ハと申樣之事ニ而ハ一刻も早ク京都へ罷出候方便利与存候乍去浪速ニ而事濟可申儀候得も夫程之都合ハ有之間敷御賢慮如何爲御聞可被下候將又客士明日引取ニ付添狀無之との事此御人ハ歸坂候哉上京候哉事實能く承知被呉候事ニ候ハヽ重疊之仕合ニ存候へ共何分今曉急行ニ而大目付中新井松崎之兩人(〇姫路の新非李左衛門松崎良介)今度一洗之事實歎願上京之儀ニ付いつれ此節謝罪之御沙汰被仰下候儀と存候付而も是非當今必

要之用辨方之儀ニ付呉々も手順能相果し申度存候付爲念御尋申候早々以上

十六日(〇慶應四年五月)

(端らは書)北　風　樣當用　　中　路

今朝も折角御入來被下候處例之來人多ニ而心事難屆殘念奉存候然ハ姫路貢金只今着之趣申出候ニ付而も右一條品々御相談申置度罷出候哉御立越被下候哉明朝ハ是非上坂致度候間乍御面倒今晩拜話行屆候樣御返事爲御聞可被下候早々不備

廿日夕(〇慶應四年五月)

(端らは書)北　風　樣當用　　中　路

昨夜ハ細々儀御念書畏入候偖相考候處兎角天氣も不宜且今日ハ外國人ゾンタク(〇休日)之樣ニも有之神主幷安田(〇惣兵衛)も他行之趣仍而も手近之邊のみ祭禮式營ミ事輕ニ爲致置候而ハ如何可有之哉例年之事ニ付不相替樣とハ一應相達置候へとも空模樣といひ無人といひ夫是おもしろゝらに候まゝ存付得御意申候されと人氣宜候ハヽ是則神慮ゆゑ別段存意可申立譯ニも無之左樣御心得御出勤候ハヽ南

條(〇新九郎)へも御申試可被下候早々

五月廿三日朝(〇慶應四年)

中　路

(端うは書)北　風　樣當用

昨日之姫路米五千石餘之分今般謝罪金之內に御請取ニ可相成筈ニ決評致今朝同藩細井甚左衞門へ引合置候付同人ゟも此段可申進候得共猶爲念早々申入候當分是迄通沖合ニ其儘差置候樣致度此儀も御心得可給候書餘面上ニ可申述候以上

五月廿三日(〇慶應四年)

中　路

(端うは書)北風莊右衞門殿當用急キ

今日ハ神慮ニも相叶候哉天氣合も宜罷成兵隊中も十分勇氣ヲ張候事与午蔭相悅申候偖江戶一條別紙之通ニ付御安眼可被下候今朝申入候米之儀且兼而神田(〇兵右衞門)へ着庫之金談申度儀御座候得ハ御手透候ハヽ今夕ニ而も明朝必御立越可被下候樣致度其節別紙御返し可被下候早々不具

岩下又々轉役之事ニ候可惜可恨もの也

廿三日晚(〇慶應四年五月)

（端うは書）北　風　様内用　　中　路

姫路貢獻之軍費金五萬兩先來ル廿七日迄ニ京都へ差向候樣達有之候處外ニ見込も無之沖合ニ乘來候同藩廻米壹萬五千ト岩兵（〇神田兵右衞門）ニ預ヶ有之貳萬五千兩トニ而明朝之內都合相付可申手順ニ立至甚當惑御察可被下候仍而ハ周助（〇北風の公用掛）へ委細申聞別紙封中致候間宜御指揮賴上度早々不具

廿五日（〇慶應四年五月）

今日ハ楠社建酒局之一統へもいさゝあせ相悅申候此段御禮申添候已上

（端うは書）北　風　様大急用　　中　路

昨日ハ不一方御盡力ニ而嘸御草臥之儀ト察上候然處今日上京可致都合ニ立至り候段左樣御承知可被下候追々御世話相掛候□□之儀も有之候得共只今運ひ付兼候付猶夫々引合濟ミ上追而御掛合可申存候此段御承知置可被下候此染麻到來品ニ而如何敷候へとも長々別段御懇情ニ預り候御禮之印迄ニ呈上仕度御笑留可被下候ハヽ本懷ニ存候早々不具

五月廿七日（〇慶應四年）

御祕藏之書物永々難有返上候間御改御落手可被下候頓首

中　路（〇此日京都へ轉任）

（端うは書）北　風　様　當用

殘り六萬兩之儀ハ御地ニ而軍艦御買入之御用辨ニ可相備筈ニ付軍務官出張會我氏へ此狀御持參米ニ而も何ニ而も艦主請取候品ものヲ六萬兩ニ相當り候程相渡し金高都合ニ相成候得ハ夫ニ而宜候間此儀も篤与夫々に達置候間左様御承知可被下候五日書頃西郷氏（〇隆盛）關東より上京之處江戸地上都合ニ而大勝利之趣ニ而官軍夫々奥羽之方へ出兵と申事正ニ承候間爲御知申候早々以上

以急飛得御意候然も兼々御談申置候姫路獻金殘拾萬兩之内四萬金出來次第大急キニ而此地辨事役所へ差出相成候樣輔相（〇東久世）より岩下へ御談有之候付乍御手數早々御取斗被下度尤此段爰元ニ而高須（〇隼人姫路藩老）初へ申入且兒島（〇紅屋姫路藩用達）等へも申送候付右御移り合夫々ゟ可被申候へとも爲念得御意申候草々已上

六月八日晩（〇慶應四年）　中路權右衛門

北風莊右衞門様

尚々着後一盃之酒も難被呑仕合ニ而大弱り罷在候付何歟之儀ハ快方之上与申殘候此段不惡御承知置可被下候併無理ながらも今日ハ被呼出右御用承り前文

得御意候仕合ニ付病氣御案思被下ましく存候穴賢

姫路米積入日數遲速模樣ニ而先前より庫着藏入之米相場迄格外下落ニ立至り殊藏敷入用も自ラ相嵩元方おいてハ迷惑之筋ニ相聞申候就而も出張之軍務官に此狀御持參曾我氏に篤与御引合右官ニ而入用米之儀ハ庫着屆之日限相場ニ而御買入直段ニ相積り獻金惣員數勘定御取斗相成候而可然歟兼而參着之米積入遲速ニ付前條之通格外直段相違いたし候而ハ何分時節柄何方おいても同憂之至ニ付可然御取斗有之度草々以上

六月九日朝(〇慶應四年)

中路權右衛門

北風莊右衛門殿

以飛札得御意候然も過日申入置候姫路獻金四萬兩之儀以今京着不致右も如何之儀候哉急御入用ニ付此狀着次第草々御手繰用意爲御取斗被下度尤今曉着坂屋敷表御用辨之上今夜神戸兵庫船之內へ乘込明朝ハ面上ニ委細可申述覺悟ニ候へと

も爲念以前此狀差立申候姫藩より申立ニハ城下より正金廻り三萬八百兩餘其他米ニ而凡六萬兩程之都合ニ御地へ上納ニ成有之哉ニも相聞候處過日得御意候御返事さへも無之ニ付此度ハ無是非身體迄も動搖之仕合御憐察可被下候早々不備

六月十七日朝（〇慶應四年）

炭政より（〇大坂胡木橋詰旅宿の）

北風樣

中路

尙々御地へ罷出候儀先外方へハ御風意聽御見合可被下候全急御用辨而已ニ罷越候儀ニ付無用之雜談世間話も一入迷惑致候間御含置可被下候殊ニ寄候へハ上下貳人一兩夜宿之儀御賴申候北仁（〇北風別家喜多二平）二階借り入兎角穩便ニ願上候以上

覺

一高金拾五萬兩之

此內

金五萬兩　　五月廿八日正金ニ而京都へ相納候

金六萬兩　　御下知ニ付軍務官へ可相納分

此內
金參萬八百兩　六月九日御役所へ相納候
金壹萬貳千貳拾六兩壹步壹朱　米七千八百五十俵代金追而北風莊右衞門ゟ可相納分
永壹文五分
小〆金四萬貳千八百貳拾六兩壹步壹朱
殘金壹萬七千百七拾三兩貳步貳朱
永五拾壹文　不　足
一金四萬兩之　京都へ納分
此內
金壹萬七百六拾七兩壹步　兵粮米御積送り代金
永五拾文也　(〇又別ノ覺書ニハ兵粮米御船へ御積込相成候七千百五十俵代トアリ)
殘金貳萬九千貳百三拾貳兩貳步三朱
永拾貳文五步　不　足
右二口殘金四萬六千四百六兩壹步貳朱

此處へ

金貳萬千四百六兩壹歩三朱　六月廿二日京都納中路様へ

金貳萬五千兩　從姫路未納

秋暑之節御揃愈御安榮可被成御座奉賀上候然ハ先日持登り候イツトル(○短銃)崩し賣ニ取斗候就而ハ輕筒至極之辨理ニ付御不用歟とも存候へとも壹挺爲持上候若御氣ニ入不申候ハヽ早々御差登セ被下度實ハ尾ノ舊友ともよりも賴越候へとも種々御世話被下候貴兄之御事ニ付又々御入用之節壹挺御求メト申も不辨之品故存付候儘草々得御意申上候不惡御汲取可被下候將又兼而御厚配被下候姫路貢金殘貳萬五千兩之儀首尾之邊昨日も曾我ゟ申越候然處一昨日兒島(○紅屋姫路藩用金懸屋)入來ニ而承り候處多分當月十日過頃ニハ成就之口振ニ付此段同人江も申送候貴兄ニも少し御放慮御安眠可被下候様乍序申上候早々不備

七月七日(○慶應四年)當賀　　瑞(マヽ)翁

（端うは書）北風荘右衛門様貴下

着後御細書ニ預候得共多忙中染々御返事も不申失禮御免可被下候偖追々秋冷相加候處御主家御揃愈御安全珍重之儀存候然者先日軍務官へ御買入相成候イツトール代貳千六百五拾兩乍延引此人ゟ爲持差出候間御改御入手可被下候正金ニしてト存種々心配も致試候得共何分御時節柄ニ而遲延致候而已ニ而可然振替をのも見當兼候間先々此儘御受取置可被下候其内都合能次第ニも立至候ハヽ御便り可申存候然ル上ハ過日御主人に御話申置候通御預ケ申置候ミニヘル七十挺オヒ皮付十四兩ゟへまて御受取被下相殘金高何程ニ相成可申□御序ニ勘定書御差越被下度將又先日御預ケ申候トウラン（〇彈丸入レ）三十五是ハ當所ニ而御用ニ成候間早々京着候樣御取斗賴上候尤薩州用達ふしミ寺田屋當ニ而御積登方御賴申候過日東條より差越候此手形入金として今般差送申候此シボアセラシヤ之口五百五十ハ賣レ次第御勘定之積候間左樣御心得可被下候又四千六百兩之口者大附府權判事稅所長藏より萬端首尾可致治定ニ候付左樣御承知置可被下候今日も取急キ用事而已早々不具

七月十四日(〇慶應四年)

尙々御主家へも一封呈度候得共無據儀ニ而只今より他出致候付先宜御傳達賴上候北越奥羽とも官軍大御勝利故此段御風(聽脱カ)意申候穴賢

中路

(端うは書)周輔様(〇北風の公用掛)
當用直披

一シボアゼラシヤ
右壹本ツヽ御取置之趣承居候得共拾貮本より御差送り無之ニ付此段請取書差上置候旨右取扱人申出候間爲念申上置候自然間違も有之候ハヽ其節御吟味可被下候已上

廿二日(〇慶應四年七月カ)

中路權右衞門

(端うは書)北風莊右衞門様
差置

〇家法箇條書

當卯年ゟ召使小ものニ至迄向後定法相立
末々双方爲ニ成候樣相究可申條々

定

一小もの拾壹才ゟ召抱爲相勤可申事
十六才　半元服申付
十七才　本元服申付
三十三才　宿持申付
三十五才　本別家申付
但右樣如此相究置候得共其人々勤方行狀次第右年齡不拘遲速可在事
一小もの置付候ハヽ五六月召仕見候上其人生質篤と考見候上人柄不宜歟間ニ合兼候ものならも等閑不致置早速親元江相斷差歸し可申事
一小もの半元服申付本元服迄ハ二季仕着幷小遣小ものは五百文宛半元服之者ハ壹〆文宛差遣可申事
一十七才元服申付候ハヽ木綿袷羽織秩父之單羽織等相渡其餘一切自分賄依之宿持候迄も給分相究當年ゟ三十貳才迄十六ヶ年之間左之通相渡可遣候

初年ゟ廿一才迄　貳百目宛
廿二才ゟ廿七才迄　四百目宛
廿八才ゟ三十二才迄　八百目宛

但右之通相究置其年限中取替物差引殘銀有之ハ預り置翌年ゟ年八朱利足加へ宿持候節元利共勘定可相渡候自然遣過候ハヽ其分別家申付候節仕付銀之內ニ而引去り殘銀可相渡事

一三十三才宿持申付候ハヽ諸入用銀貳貫目相渡本別家迄給分壹ヶ年ニ壹〆五百目宛相渡可遣候尤是迄ニ心得違馴染女等拵內分ニ而圍置候樣之儀決而不相成勿論右樣之者ハ女房ニも不相成本家ゟ差圖ヲ請女房呼取可申事

一三十五才首尾能相勤候ハヽ本別家可申付其節屋號喜多屋垂簾幷長持夜具式服等相渡爲給分壹ヶ年銀三貫目ツヽ相渡候間諸事儉約質素堅相守勿論家內着用もの等も紬ニ限り夫ゟ以上之品も堅ク不相成小兒あり共同樣之事外ニ別段仕付銀貳拾貫目可遣候得共是も幼年ゟ勤功次第ニ而增減可在之事

一別家申付仕付銀も其儘預り置年八朱之利足相渡元銀置据本別家之後三五年之間相應之役儀在之も相勤可申自然役儀等無之時も爲引取商賣ニ而も可致歟是

も其時之模様次第一同談之上可取斗尤悴儀も十一才ゟ本家に召仕前ヶ條之通
夫々取斗可致遣自分も可相成ハ本家勤之事

一小ものゟ宿持候迄勤中自然不奉公不丹誠間（ィ間に合兼）ニ合候者も取締之上席順幷役々順番上ヶ下ヶ可申付左候時も致別家候迄自然と延年ニ可相成候間銘々急度精勤可致候其節後悔不致様常々堅相守出精相勤可申勤方行状次第別段加増をも可致遣此儀も常々主人幷別家老分之者心得可在之事

一着用ものゝ萬端自分賄相成勿論綿服紬迄ニ可限事其外不相應之着用物在之も早速取上ヶ萬事右ニ準不相應之品見附次第其品々取上急度可申付事

一年々店方商内儲高之内諸入用臨時入用共引去り全儲高之内一割宛銀高日勤別家肩入店勤之者一同に着遣候間銘々配當可致事尤店勤之者萬一心得違ニ而引負等いたし候ハヽ其分全儲高之内ニ而引取殘銀配當可致事

一中年ゟ肩入勤之者其人々初年ゟ順々難方次第給分一ヶ年ニ壹貫目より三貫目迄可遣候尤貳十ヶ年出精全相勤其後老年ニ至難勤引取候節拾貫目可遣候勿論勤中取替物引去り殘銀可相渡事

但常々行狀勤方次第ニ而増減可在之事

一沖行召仕之者初年ゟ五ヶ年之間給分三百目其後五百目宛相渡全ク拾五年首尾能相勤候ハヽ屋號喜多屋暖簾差遣宿持申付右爲諸入用銀五百目差遣外ニ仕付銀五〆目可遣給分も一ヶ年ニ銀壹〆目宛可遣間大切相勤可申事

一臺所賄方召使下男拾ヶ年之間首尾能相勤候ハヽ銀壹貫目差遣自分宿持出入致度願出候ハヽ本出入方爲致可申事

一勤中夜分外ニ而寢泊り堅不相成四ツ時切急度可歸候此儀も銘々急度相愼可申自然右之儀いたし候者在之ハ其時々急度申聞セ其上不相用者ハ暇差出し可申事

一別家之内毎夜壹人宛當番相定置本家に泊り番相勤諸事氣を付可申事

但儀助善平兩人も老年ニ付差除キ置候事

一別家之内是迄ニ商賣相初居候者店方取引相止メ候而ハ差當り迷惑可致間其分ハ當分之間貳拾貫目迄ハ融通可致遣間利足日廻し貳分貳厘宛可相納勿論年々極月切ニも急度決算相立越年取替ハ堅不相成事

一別家以後自分所持之家督類も一切本家に書入預ヶ置可申事無左時(イ左候時)も自然子孫不心得之者出來候共自儘難成然ル時も家名相續別條無之事

一小ものゟ若キ者ニ至迄平日行儀作法等充分之者ゟ急度申聞セ嚴重爲相勤可申別而小もの之内ゟ其仕癖相付不申而ハ一同も勿論御客衆其外他向にも不作法相成甚見苦敷ものニ候間銘々互ニ其心得を以急度取示可致事

一當家主人と相成候而ハ第一家業大切相心得候而召使之者一同に日夜勤方能々氣を付自然右箇條ニ相振き不勤之者も其時々急度申聞セ其上不相用ものハ早早暇差出し可申事

右之通此度箇條相改定置候上も銘々急度相守主家大切精勤丹誠可致候勿論主人心得違無之樣相守自分相應之外過分之奢ヶ間敷儀決而不相成事萬々一心得違主人出來候ハヽ親類別家一同ゟ急度致諫言其上不相用主人も名前爲退押込隱居可致候倘亦實子在之候共相續爲致かゐく不束之悴あれハ他ゟ養子見立相續可爲致事何分主從一同申合家業大切永久相續在之度萬々一相續方之儀ニ付六ツヶ敷事とも出來候時も親類幷別家一同申談諸事取斗ひ永久相續可致樣可相願事也

安政二乙卯年正月吉日

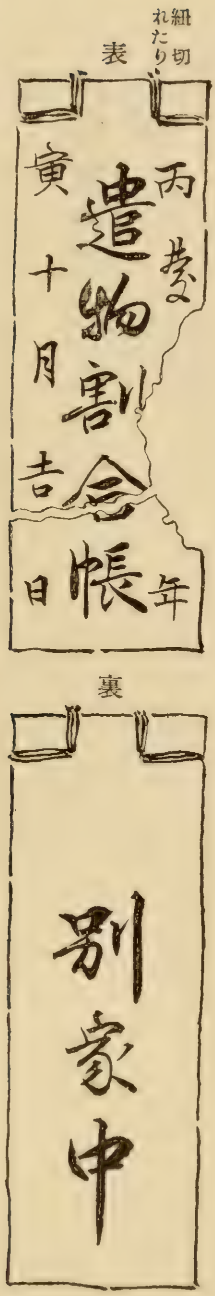
中興三代目貞和花押

莊右衞門印

右之通銘々共一統承知仕候

儀助 印
善平 印
喜助 印
營助 印
爲助 印
甚七 印
重助 印
與助 印
直七 印

○遺物割合帳



慶應二年

丙寅十二月

初ゟ

本家寒中御伺

として左ニ

寒之入十二月朔日

十二月三日

一羊羹弐朱ツヽ　三箱

代壹歩弐朱

嘉　助

榮　助

爲　助

十　助〇重助

與　助

直　七

勘助
伊助
卯助
善助
傳法屋 十兵衛
同 十助
(○讃岐屋) 佐兵衛
(○米 屋) 平助
油屋 伊助
京屋 せゐ
〆廿五軒
一同 四箱
代壹歩
喜多屋 二平
儀助

善平
文七
作兵衛
佐助
甚四郎
源兵衛
利七

町御隠居（〇貞和未亡人多喜女）

寒中御伺

一羊羹弐朱ッ、弐箱

代壹歩

（〇連名略す以下要領を錄す）

礒田様御安産ニ付祝ひ左ニ

一紅唐金巾壹反㊅代百四十匁弐分五厘（〇二十六軒連名略其内ニ幸助彌七ノ名見ユ）

十二月十八日　町御隠居へ

一御鏡餅料　金三歩貳朱

一歳暮御祝儀同壹歩貳朱

〆壹兩壹歩　（〇十四軒連名略）

本家へ歳暮御祝儀として

一大鰤三尾百五匁ゟへ代三百十五匁　（〇二十軒連名略）

礒田樣正月始ニ付

一破魔弓一價貳歩ト貳百文代六十九匁貳分參厘之（〇二十軒連名略）

御本家祝事遣物（〇慶應三年）正月十八日

一扇子　壹箱有合

一松魚十壹箱ゟを淸代五十匁

一紅白眞綿七小橋屋代百五十貳匁

〆貳百貳匁之壹軒前八匁八分ツヽ　（〇二十三軒連名略其内に平八の名見ゆ）

京屋おせい死去ニ付香料貳百文ツヽ　送之儀ハ最寄勝手次第可被成候葬式八ツ

時正月廿五日

一錢三貫六百文　（〇十八軒連名略）

繪屋右近右衛門（〇貞忠の室武津子の生家鷹見氏）小兒御死去ニ付香儀　二月二日
一金三朱　代廿貳匁八分八厘
（〇十五軒連名略）
四月十八日淨玄靈（〇貞忠實兄北風荘次郎貞壽）拾七回忌光輝靈（〇貞忠の先妻宇多子）七回忌上ヶ法事ニ付
一齊米料金百疋百廿七匁代三拾壹匁七分五厘
一御備物菓子壹歩ゑし本　代三拾壹匁七分五厘
〆
（〇廿五軒連名略）
礒田樣初節句ニ付　五月朔日
一立道具三本臺共壹箱
代貳百六十匁之外ニ箱代
（〇廿五軒連名略）
喜多屋源兵衞殿老母死去ニ付香料左ニ　五月六日
一金壹步三朱百廿五五〇代五拾四匁九分壹厘
（〇十九軒連名略）
礒田御和子樣御死去被遊候ニ付香料左ニ　五月十八日
一金貳百疋　代六拾貳匁七分五厘
（〇廿五軒連名略）
御本家暑氣御見舞として指上もの左ニ　六月廿一日
一羊羹貳朱ツヽ三箱代壹步貳朱四十七匁六厘

一同　　四箱代壹歩分八百文

〆八拾九匁六分壹厘　　（〇廿五軒連名略）

町御隱居之分左ニ

一羊羹貳朱ツヽ貳箱代壹歩三十一匁三分八厘　　前書名前書之通り

御本家へ中元御祝儀　　七月九日

一ぎうゑんめ方五貫目代拾六〆百十四文此銀貳百廿八匁

町御隱居之分

一廉品料　　金壹兩　　代百廿五匁五分

三口合〆　　三百八十四匁八分八厘

壹軒前十五匁三分九厘ツヽ　　右貳口共名前附前書之通〆廿五人

新宅御寮人（〇分家北風丈助貞孝の先妻恒女）死去ニ付香儀左ニ　　七月十六日

一金三百疋百廿五五〇代九十四匁壹分貳厘　　名前右同斷廿五人

新宅御寮人樣五十日取越備その左ニ　　八月十八日

一□湯も　　百四十京り代七〆八百五十文此銀百拾匁八分五厘

一齊米料金百疋百廿五匁三分代三拾壹匁三分貳厘

一野菜料當百三宛七〇代四匁壹分四厘

〆百四十六匁三分壹厘　〆廿五人

十月廿五日新宅御寮人さゐの施餓鬼ニ付備もの左ニ

一白餅百こは示代壹〆六百六十四文　〆十四人(〇連名略)

喜多屋二平殿死去ニ付香儀左ニ　十月六日

一金貳歩壹朱百三十匁代七十三匁貳分セに五拾四文の人廿貳人(〇連名略)

大神宮御天降ニ付備もの左ニ　十一月廿二日

一赤白鏡餅五桝二重壹つ(〇こは示二つ重ねの餅一組の意か)代百七十八匁

一御酒壹斗北丈代貳百匁

〆貳百七十八匁(〇誤記あるが如し)　(〇廿四軒連名略)

竹田長谷川様(〇山城國紀伊郡竹田村長谷川織部北風貞忠の生家なり)へ御天降ニ付備もの左ニ

一鰯ぬきし五把魚清代九拾匁　名前同斷廿四軒

十二月廿五日本家年暮御祝儀

一大鰤三本貳歩壹朱ツヽ代壹両貳歩三朱百七六貳百九十七匁

壹軒まへ拾貳匁四分　廿四軒

町御隱居へ

一御鏡餅料金參歩貳朱

一年暮御祝儀金壹歩貳朱

〆壹兩壹歩百七六　合貳百廿匁（○十五人連名略）

是迄一切集相濟申候

（○慶應四辰年（明治元年））二月十九日竹田ゟ御主人様方御機嫌克御歸宅被遊候就而も御悦之印迄左ニ（○貞忠前年秋以來妻武津と共に京都に潜入して勤王の事に盡瘁し竹田村生家にて越年し此月五日生母及び妻を伴ひて公然歸宅せるなり）

一重組四重魚長代貳百廿貳匁此セに十壹〆三百三十文

四百七十二文ツヽ　（○二十四軒連名略其内に北甚（甚七）の名見ゆ）

二月廿八日長谷川奥様（○貞忠生母登士子）（○竹田村へ歸れるなり）御歸宅被遊候ニ付乍輕少遣候その左ニ

一うるめ干（魚カ）□貳百入壹箇ゟ拔濟代百十匁　〆　十九人（○連名略）

傳法屋十助養子貰請候ニ付遣候左ニ　（閏カ）□四月二日

一白木綿壹疋　代百五十六匁

一扇子壹箱　〆　（○十八人連名略）

御本家へ暑中御見舞として則左ニ　六月三日
一ようかん弐朱ッ、三箱
一同　壹朱ッ、四包
代弐歩弐朱之(〇弐百弐十匁づゝ)百三十七匁五分
(〇壹軒前)五匁三分ッ、此ゼに四百廿文ッ、(〇約八十文替)(〇廿二軒連名略其内に北六(六兵衛)の名見ゆ)
礒田様幼御出産ニ付遺物則左ニ　六月五日
一紅木綿壹疋大丸代弐百四拾五匁(百三十五匁金 四十五匁金遣)(〇銀相場混乱せるものゝ如し)
(〇壹軒前)九匁四分此ゼに六百八十二文ッ、(〇約七十三文替)(〇廿六軒連名略)
本家様へ中元御祝儀遣いその左ニ　七月八日
一さうめん五貫目上ィ代十八貫文　名前前同断
町御隠居之中元御祝儀左ニ
一金壹両　代弐百十九匁五分(〇此ゼニ)十一貫文□(〇約五十文替)　前同断廿六軒
七月十日是迄集相濟申候
今般御主君様御名前正造様と御改名御相續之儀和子様に御讓被遊候ニ付則今日
吉辰ニ付御内祝御座候故別家中ゟ爲御祝左ニ

中鯛　貳尾
御酒三枡入貳樽
右之通呈進仕候依而御吹聽迄申上度云々　九月廿一日
代廿四〆文　うを長
代七〆八百文　北丈
〆三十一〆八百文

（〇二十六軒連名略其内に北要（要助）の名見ゆ）

新宅様（〇分家北風丈助）　御婚禮ニ付遣ㇱもの則左ニ　十一月廿三日
一扇子　壹箱有合
一松魚十壹箱箱有合
一赤白眞綿五袋
小豆屋様（〇畠山）御婚禮ニ付遣ㇱもの左に
一扇子　壹箱有合
一松魚十壹箱□友
一眞綿　五袋大丸

〆(○松魚)廿本代百四十七匁
(○眞綿)十袋代金貳兩四百文
新宅小豆屋二軒分
(○壹軒前)壹朱ト四百十六文ツヽ(○廿七軒連名略)

新宅樣御和子四ツ身始被遊候ニ付呈上もの則左ニ　十一月二十五日
一黒五日市拾壹尺巾五尺大丸代九〆六百文　名前同斷廿七軒

御本家寒氣見舞則左ニ　十一月廿六日
一ようかん貳朱ツヽ三箱そし本
一同　壹朱ツヽ四包
〆貳歩貳朱(○此ゼニ)六〆六十三文　名前同斷二十七軒

町御隱居寒氣見舞左ニ
一ようかん貳箱そし本代壹歩(○此ゼニ)貳〆四百廿五文　名前同斷廿七軒

十二月十八日御本家年暮御祝儀則左ニ
一大鰤貳本　代三百八拾匁　〆廿三軒(○連名略)

町御隱居御鏡餅料壹朱ツヽ年暮御祝儀料貳百文ツヽ

代　金貳歩
　同壹兩壹歩三朱

〆此處へ貳兩　名前同斷

右自神戸市安田莊右衛門氏所藏文書及同氏蒐錄本抄出

○高田屋嘉兵衛關係文書

（○袋上書）「文政五午年九月」

「蝦夷地より大坂御城内へ御積廻し之大筒廿八挺當津高田屋嘉兵衛舟沖船頭清右衛門乘同柴屋長太夫船沖船頭定五良乘右貳艘へ御積入御調役下役小堀泰三郎樣御乘組九月朔日當津へ入津同二日御上陸高田屋嘉兵衛方え御止宿御勤番所へ御屆相濟然ル所大坂御奉行所より　右嘉兵衛被召他行代米屋清兵衛罷出候所右大筒大坂表へ御積廻ニ付其裏（マヽ）渡船ニ積替相廻可申樣御書付を以被仰付清兵衛歸津早速積泰（マヽ）次郎樣御乘組同八日當津出帆右一件書付入

北　濱　惣　會　所」

乍恐口上

御筒拾三挺　西出町柴屋新七船
　　　　　　渡海船　直乘船頭

御筒七挺　東出町筑前屋太兵衞船
　　　　　同　直乘船頭

御筒三挺　出在家町日向屋權右衞門船
　　　　　同　沖舟頭權六

御筒五挺　關屋町油屋源兵衞船
　　　　　同　沖舟頭卯兵衞

右之船々天氣宜相見へ申候ニ付今八日巳中刻當地出帆　御申渡則小堀泰三郎樣御儀も當地御用濟ニ付右之內へ御乘船大坂表へ御登被成候ニ付乍恐此段御斷奉申候以上

文政五午年九月八日
　　　　　　　　　　西出町高田屋嘉兵衞
　　　　　　　　　　他行ニ付代清兵衞病氣ニ付代
　　　　　　　　　　　　　　久　五　郎

當津
　御番所樣

右之通御届奉申上候ニ付此段御届申上候以上

午九月八日　　清兵衛病氣ニ付代　久五郎　㊞

北濱御惣會所

大筒幷玉

員數書

鑄形

一大筒貳拾八挺　内

唐銅三貫五百目	三挺	同參貫七百目	壹挺
同　壹貫目	壹挺	同七百五十目	壹挺
同　七百目	壹挺	六百目	貳挺内入小筒壹挺
同　四百五十目	壹挺内入小筒壹挺	三百目	三挺同上
同　百七拾目	貳挺	二百目	壹挺
銑鐵參〆五百目	壹挺	參貫目	壹挺
同　九百目	貳挺	七百目	貳挺

二百五十目　壹挺　二百目　貳挺
百七十匁　壹挺　百五十匁　貳挺

玉員數

三貫五百目　五十五枚　壹〆九百目　貳拾五枚
壹貫五百匁　貳拾枚　壹〆目　貳拾枚
九百目　貳拾三枚　七百目　七十五枚
七百目/六百目取交　三十二枚　四百五十目　三十七枚
三百目　七十九枚

〆四百三十八枚内百二十五ニて百三貫目

鑄形　員數

三貫五百目　三膳　壹〆七百目　壹膳
壹〆五百目　壹膳　壹貫目　貳膳
七百五十匁　壹膳　七百目　貳膳但六百目兼用
六百五十目　壹膳　六百目　壹膳　四百五十目　壹膳
三四百五十目　壹膳但三百目兼用　三百目　壹膳　貳百五十目　壹膳

二百目　壹膳　百七十目　三膳　百五十目　三膳
〆貳拾六膳内十二膳ニて八十一貫目

御運賃銀請取書之寫

渡海船　日向屋權右衛門の船ニハ
三貫五百目筒二挺　二百目筒壹挺　七十匁
渡海船　柴屋新七ノ船ニハ
三百目六百二百百七十四百五十百七十二百五十三百目貳百目百七十目六百目
九百目九百目　〆十三挺　又入子筒四挺
運賃七十匁
渡海船　油屋源藏の船ニハ
壹貫目一〆七百目七百五十目七百目三貫五百目各一挺計五挺　運賃七十匁
筑前屋　太兵衛の舟ニハ
百五十目一〆目二百目百五十目七百目一〆五百目各一挺計七挺外ニ
御玉三十七箱御鑄形五箱　同長持壹棹　運賃七十匁

右ヲ兵庫津渡海船年行司紅屋治兵衛より請取狀浦方惣代原田哲藏更ニ之ヲ小堀泰三郎ニ屆出ヅ

午ノ九月(〇日缺リ)

右自神戸市七宮神社所藏文書抄出

文政五年午九月二日

一大筒御積入之船兩艘に御伺として惣代哲藏見習平次罷出候所御調役下役小堀泰助樣御逢被成大筒大坂表へ御引渡ニ付テハ當浦ニテ小船へ積替可被仰付右ニ付ハ大坂表より御沙汰可有之候間夫迄滯船罷在候間宿申付候樣被仰聞候ニ付奉畏早速西出町高田屋嘉兵衛御宿申付其段申上候所御陸上被成嘉兵衛ニて御止宿有之候事

一御勤番所へ御屆与して右御役人中御越ニ付御案內小使差出候事

一御勤番所より西出町高田屋嘉兵衛御召出御差紙左之通

西出町　高田屋嘉兵衛

右之者早々可罷出者也

午九月二日　番所

西出町高田屋嘉兵衛
他行ニ付代
米屋清兵衛

右召連罷出候所大坂東地方御役所へ早々可罷出旨被仰渡候事

一御勤番所より御差紙到來左之通

新在家町網屋三太夫　出在家町伊勢屋松右衛門
船大工町熊野屋長兵衛　嶋上町今治屋長兵衛
磯之町繩屋喜兵衛　新町豐後屋伊兵衛
宮前町野村屋半四郎　川崎町山屋善四郎
并問屋年寄年行司之内
兩三人附添

右者早々可罷出者也

午九月二日　番所

宮前町野村屋半四郎
病氣ニ付代平兵衛
島上町今治屋長兵衛
病氣ニ付要助

川崎町山屋善四郎　　諸問屋年寄備前屋作右衞門
同年行司筆屋五兵衞　　同　惣名代米屋平七

右召連罷出候所明後四日大坂西地方御役所へ可罷出旨被仰候事
九月四日
一大筒附御役人中樣御逗留ニ付御見舞として見習平八罷出番船通船差出置沖間爲見廻候事
九月六日
一大筒積替之儀雨天ニ付今日積替無之候事
九月八日

船中日記

御雇舟富繁丸
沖舟頭　清右衞門

此度御武器類別紙送狀之通積入大坂表ㇾ相廻し候間何きの浦々にても渦(沖カ)懸り又ハ長滯船いたし候共出帆之節暮入津出帆之記共日記帳へ相記し印形取之可

申候若其最寄浦役人無之候ハヽ村方へ可申達候以上
午七月　箱館御用所㊞

案　文　御雇船何丸
沖舟頭誰　水主共何人

一何月幾日　何浦入津
但何風ニて何刻入津
一同幾日より何日　何所滞舟
但何々之譯ニて滞舟
一同幾日より日和ニ付　何浦出帆
但何之刻何之風ニて出帆
右之通相違無御座候以上
月　日　何　浦　何　之　誰㊞

一午九月二日申刻當浦へ入津仕候
右之通相違無御座候已上
午九月二日

攝州八部郡兵庫津
浦方惣代　原田哲藏

右自神戸市七宮神社所藏北濱惣會所日記抄出

北濱惣會所

（〇袋上書）「文政六未年七月

「蝦夷地より大坂御城内納大筒拾挺當津高田屋嘉兵衛船浮（カ）榮丸沖舟頭安右衛門乘右御積入御調役下役中村伊太夫樣御乘組七月十二日入津高田屋嘉兵衛方ニ御止宿御勤番所に御屆相濟尙嘉兵衛代米屋淸兵衛罷出昨年御奉行所へ被召御渡被成下候御書付之例を以積廻し申度旨御願申上候所追而御沙汰之旨被仰聞同十四日昨年之通取計當十七日大坂表に可積登旨被仰遣候間例之通取計可申旨同十六日渡海船二艘へ積替翌日伊太夫樣御乘組出帆右一件書付入」

乍恐口上

御筒五挺　渡海船　新町座古屋善五郎船
御筒五挺　同　西出町柴屋新七船

但シ鑄形五箱不殘

右者大坂表ヘ御積登大筒不殘右貳艘ヘ今日積請申候ニ付乍恐此段御屆奉申上候

以上

文政六未年

七月十六日

船役人　源　三　郎

當津

御番所樣

乍恐口上

一當月十三日御斷奉申上候蝦夷地より大坂表ヘ御積廻し大筒拾挺當津渡海船貳艘ヘ御積替御役人中村伊太夫樣右貳艘之內ヘ御乘組天氣能今十七日午ノ中刻當津出帆被成候ニ付乍恐此段御斷奉申上候以上

文政六未年七月十七日

西出町高田屋嘉兵衞

他行ニ付代　久　五　郎

當津

御番所様

右之通御斷奉申上候ニ付此段御屆奉申上候以上

未七月十七日

代　久　五　郎

北濱

惣　御　會　所

奉請取御金之事

金二兩二朱永　　但金壹兩ニ付六拾四匁八分三厘

兵庫津新町　座古屋

善五郎

一銑鐵壹貫九百目玉御筒　　壹挺

一同　壹貫五百目玉御筒　　壹挺

一同　六百目　玉御筒　　壹挺

一三百目　　玉御筒　　壹挺

一貳百五十目　　玉御筒　　　　壹挺
〆　五　挺
御運賃金七十匁
西出町柴屋
渡海船　新　七
一銑鐵貳貫目玉御筒　壹挺
一同　一貫目玉御筒　壹挺
一同　六百目玉御筒　壹挺
一同　三百目玉御筒　壹挺
一百五十目玉御筒　壹挺
〆　五　挺
御玉　六箱
鑄形　四箱
〆
御運賃銀七十目

右船々御運賃銀御渡被遊難有慥ニ奉請取候以上
文政六未年七月十六日　攝州八部郡兵庫津
船役人　源　三　郎

前書御運上（マヽ）銀御渡被遊慥ニ奉請取候所相違無御座候以上
同所浦方惣代　原　田　哲　藏

中村伊太夫樣

乍恐口上

一蝦夷地より大坂表ゟ御積廻之大筒拾挺當津高田屋嘉兵衞船浮（カ）榮丸御積入即中村伊太夫樣御乘今曉當津へ入津御滯船ニ御座候付乍恐此段御斷奉申上候已上
文政六未年七月十二日
西出町高田屋嘉兵衞
他行ニ付代　淸　兵　衞

御番所樣

一兵庫渡海船ニ而當表川口迄被積登候ハヽ一夜ハ川口ニ而滯船可有之儀与存候
一右船川口迄罷登候ハヽ其方ヨリ成とも又ハ泰三郎樣より書面ヲ以テ此方共迄
御左右有之候ハヽ早速積替川船共へ相達早々場所に差出候樣可致候尤右船ハ
當表ニテ石運送之船ニて石船と唱右船持共に御用申付候間川口へ被到着候節
御案內有之節右船持共之內重立場所へ罷出候もの名前并印鑑差遣し可申間其
ものへ御引合之上積替御申付有之樣存候
但川口御船ヨ太田雲八郎殿にも御滯船等の儀御達相濟有之候間其段御心
得可有之候マヽ可申達候
右之外委細之儀ハ泰三良殿着坂之上御談可申間無相違申達置く樣可致候事
午九月四日
高井山城守組與力
寺西彥四郎
同
寺西源五兵衛
高田屋嘉兵衛代

清兵衛へ

右者昨年當津ニ而御積替之節御渡被爲成候御書取ニ御座候奉差上候

一、此度大筒拾挺凡百石目餘御座候尤時節柄風波之程も難計候間早々大坂川口へ積廻申度旨御乘組御役人被仰聞候

但川口積替之儀ハ高田屋嘉藏同嘉十郎兩人共西横堀西笹町高田屋金兵衛店ニ居合申候間御用向之儀ハ右兩人之內相勤申候

一御乘組御役人中村伊太夫樣御旅宿西笹屋町高田屋金兵衛店御逗留之積ニ御座候

一昨年御積替御同樣ニ御座候や早々御下知被爲成下度當津渡海船積替手當仕度此段御伺奉申上候已上

七月十二日

高田屋嘉兵衛他行ニ付代

米屋清兵衛

寺西源五兵衛樣

寺西彥四郎樣

乍憚口上

辰壽丸
一廻船三百石積
　拾壹端帆拾人乗
右者大坂桑名町伊勢屋
重兵衞より買船

西出町高田屋嘉兵衞船沖船頭紀州
比井浦　源　助
水　主　同所　八右衞門
同　越前三國傳兵衞
同　幡州高砂善兵衞
同　防州室住文藏
同　能登靏木村仁兵衞
同　豐後岡村市兵衞
同　讃州粟島繁藏
同　四國小豆島貞藏
同　兵庫西出町七五郎

右同人船

沖船頭兵庫東出町吉五郎
水　主　淡州都志平　吉
同　　　同　所嘉　吉
同　　　防州小松直　吉
同　　　長州下ノ關武兵衞
同　　　備中孝ノ嶋銀兵衞
同　　　讃州箱　貞　平
同　　　越後岩船萬四郎
同　　　藝州廣島文　藏

〆

右同人船

沖船頭　大坂　五郎兵衞
水　主　下ノ關　吉兵衞
同　　　同　所　長兵衞
同　　　雲　州　宇兵衞

辰榮丸

一廻船四百石積
　拾三端帆拾人乘
右者大坂寺嶋尼崎屋
吉左衞門より買船

辰久丸

一廻船四百五拾石積
　拾五端帆拾三人乘

右尼崎屋吉左衞門より買船

同　淡州　嘉藏
同　出羽國　與四郎
同　能代　藤七郎
同　兵庫　源助
同　鹽飽　武兵衞
同　同所　八兵衞
同　大坂　藤兵衞
同　同所　又四郎
同　同所　佐兵衞

右之船々三艘共船頭水主國所吟味仕慥成ル者共ニ而往來手形寺手形銘々所持仕罷在候ニ付相雇爲乘組申候依之諸國往來御手形申請度奉願上候則兼々嚴被　仰付候唐物拔荷之類取扱候儀ハ不及申紛敷荷一切積申間鋪其外不法之稼方仕間敷趣者精々急申付置候右願之通御聞濟被成下候ハヽ難有奉存候以上

享和元酉年四月廿二日

西出町　船主　高田屋

右之通願上候ニ付乍憚加印仕候以上

嘉兵衛㊞

船役人　源　藏㊞

西出町年寄　丹　堀ヵ　元　平㊞

北濱

御名主中様

（〇袋上書）文化

「西出町高田屋嘉兵衛ヲロシヤへとらはれ候節風聞書一件」

當津廻船渡世之者之内兼而松前荷物ォ積通ひいたし先達て異國に被捕候上無恙歸朝いたし江戸表ニて御糺之上當時者元之通松前荷物積通ひ等もいたし當津にも折々者罷歸候由之風聞有之候て御頭及御聽彌當津ニ而も左樣之風聞有之候哉左候ハヽ名前幷異國に被捕又者歸朝年月江戸御糺之樣子等御內々御承被成度候間於當津無急度聞繕各樣迄申進候樣可致与被仰出候間兩濱名主又者船方役人之

類等に無急度聞調早々可得御意と御申越書面之趣委細致承知候則兩濱名主呼寄御書面之趣を以承候所異國に被捕其後歸朝いたし候ものは當津西出町高田屋嘉兵衛と申ものにて同人儀元來廻船取持之上松前荷物積廻いたし候所拾五六年已前箱舘表ニ於て同人へ御雇船頭被仰付於彼地御用相勤罷在候所去申年八月之頃兼而嘉兵衛に支配被仰付有之候蝦夷地之内エド（マヽ）ロフより同人幷其外五拾人斗乘組松前迄罷登候海路蝦夷地クナシリ沖ニ而ヲロシヤ船行合候處嘉兵衛乘船に利不盡ニ鐵砲ヲ打懸ケヲロシヤ人乘移手荒く狼籍いたし嘉兵衛乘船之人數不殘召捕可連歸躰ニ有之候ニ付乘組之者共皆々水主樣之者共ニ而事之辨も無之連歸候とも無益之事ニ候間嘉兵衛一人可被捕と申聞候所ヲロシヤ人承知いたし候ニ付嘉兵衛幷同シ隨身罷越候もの三人都合四人ヲロシヤ船に被捕嘉兵衛船ハ殘り之船頭水主乘組無難ニ松前表に罷登候所當春ニ至嘉兵衛幷同人ニ付添罷越候者貳人都合三人無恙ヲロシア人付添前書クナシリ迄送り來殘り兩人之ものは其節病死いたし候由ニ而前書エドロフニ於ゐて先年御召捕ニ相成候ヲロシア人共御差返有之嘉兵衛儀者右躰一端異國へ被捕候儀ニ付松前表ニおいて始末御糺之上御伺ニ相成候所御下知ニ而嘉兵衛儀最初ヲロシヤ船クナシリに渡來行合候節ヲロ

シヤ人共へ諭方宜敷多人數無難ニ松前へ着航致候段取計行屆幷同人送來候節も取扱方宜ニ付御褒美金被下候上身分御構無之是迄之通御用可相勤旨於松前表被仰渡候由尤右ニ付嘉兵衞儀前段江戸表へ御呼出ニ者不相成趣ニ相聞其後同人儀いまた當津へ罷歸不申併當秋中ニハ歸宅可致趣ニ相聞候由勿論前書趣ハ風聞迄ニて嘉兵衞罷歸候上ならでハ委細難相分旨名主共申聞に付此段得御意候間宜被仰可被下候右御返報如此御座候已上

七月廿七日　　淺羽與五郎

東上知方

御役人中樣

追て嘉兵衞罷歸委細之樣子相分り候ハヽ尙又申出候樣申聞度候間左樣御承知被下口上宜被仰上可被下候已上

（〇右は戌七月浦方名主北風莊右衛門より右本文と同樣なる書付を差出し之によりて作製したるが如し莊右衛門の文省略）

一御雇船頭兵庫西出町高田屋嘉兵衛儀當八月クナシリ沖ニてヲロシャ船ニ被取
一件左之通之風聞ニ御座候
例年蝦夷地働人働仕舞にて嘉兵衛初船頭船主働人船役乗廿（込カ）凡五六拾人斗乗順ニ罷登候處クナシリ沖ニテヲロシャ船ニ行合候其折柄近邊霧相懸殊ニ嶋影ニテヲロシャ船不相分候處ヲロシャ方より見附候哉ズアイ船と申蝦夷人之乗候小船右ヲロシア人蝦夷人之着用之品ヲ着シ姿ヲカヘズアイ船數艘ヲ以て嘉兵衛船に追付鐵砲打掛元船へ取乗候處殊之外手荒いたし船頭水主乗組之者をとらへ申候由然て嘉兵衛申候者船頭水主乗組之内頭取候者ハ此方ニ候子細アラハ可申聞旨申聞候處嘉兵衛頭分ニ相極候故其外之もの共ハ差ゆるし嘉兵衛主従四人ヲロシャ船へ乗セ移シ船中糧米四十俵餘其外鹽噌諸道具等迄彼船へ取込候由ニ御座候右ヲロシャ人と嘉兵衛船乗候節打驚乗（マヽ）幷水主之内海中ニ飛込候者共六七人程溺死いたし候由ニ御座候尤嘉兵衛船ハ松前表迄着仕船頭水主ハ御預ニ相成候由ニ而彼地ニ相留船者兵庫浦へ罷登候得者松前ニて雇水主故右一件不存候趣ニ相聞申候間風聞之趣乍恐奉申上候已上
但本文一件者箱館表ニヲロシャ人先達御召捕ニ相成候由右を引替度趣意之

由風聞ニ御座候

一松前御上知ニ相成候後近年北國登米多御座候内秋田庄内越後津輕米石數何程与申儀ハ不知候へ共右四ヶ所別而登り米多御座候由風ニ御座候

右之通風聞之趣奉申上候已上

十月廿五日　　原田哲藏

土木權九郎様

(〇右は浦方惣代よりの上申書の草稿なれど文化九年八月ヂヤーナ號に捕はれし二ヶ月後に風聞として差出したるものなり)

(〇端裏書)
「此手紙米清(〇米屋清兵衛不在中の代人嘉兵衛)借用心得迄ニ寫置候」

一筆啓上仕候春暖之節御座候得共彌御家内様御勇健被成御座珍重奉存候降而私儀無異儀罷在申候乍憚御安意可被下候　さてきハ一昨年已來魯西亞一件ニ相掛り當三月三日迄相愼罷在候處今般御免被下御褒美頂戴仕誠ニ難有仕合奉存候高田屋嘉兵衛魯西亞船に被召捕候得共構無之只今迄之通御用向相勤可申様被仰付

尙又水主二人金藏平藏儀ハ國元ニ歸候ハヽ他出留嘉兵衞手ニ付居候ハヽ構無之候樣被仰渡右ニ付兩人之者共永く私家來ニ仕候御褒美之儀高田屋嘉兵衞其方儀去夏魯西亞船クナシリに渡來之節船たさにさとし方彼是骨折尙又去秋箱舘に再渡來之節取扱方宜ニ付金五兩爲取候右者牧備前守殿に窺濟与被仰渡御國法ニ者是迄無御座候誠に私共大慶仕候魯西亞之事ニ付段々骨折候得共御國法之他參留ニ相成可申樣相心得罷在候所又元之ごとく諸國往返も相成難有仕合ニ奉存候右ニ付私儀も早速罷登申度ニ付願差出候處當年亦々魯西亞船エトロフ嶋に參候ニ付右之掛り被仰付此度エトロフ嶋に御用ニ付罷下候當八月頃ニハ御地へ罷登候間貴面之上積る御物語可申上先者急便早々申上度如此ニ御座候恐惶謹言

三月十四日(〇文化十一年)

高田屋嘉兵衞

米屋淸兵衞様

一西出町高田屋嘉兵衞儀定御雇船頭改御免被仰付候段斷出候左之通

乍恐口上

一私儀先年蝦夷地御用定御雇船頭役被仰付相勤罷在候處此度松前様舊地へ御歸被遊候ニ付當時御用向無之就之定御雇船頭役箱舘ニおゐて御免被仰付御手當として米七拾俵被下置候趣未兵庫津不申來定而書狀差出可有之義ニ御座候へ共遠方之義途中ニテ相滯カ延着致候義与奉存候御尋ニ付此段奉申上候右之段大坂表ニ而御斷奉申上候處御聞濟之上今日罷歸申候ニ付此段乍恐奉申上候以上

文政午年九月七日

西出町高田屋嘉兵衛

他行ニ付代　清　兵　衛

當津御番所様

右之通御斷奉申上候ニ付此段御屆申上候已上

午九月七日

清　兵　衛　㊞

北濱御惣會所

右自神戸市七宮神社所藏文書抄出

（〇表紙）
「寛政十年ヨリ高田屋嘉兵衛及二代金兵衛承
幕府蝦夷地御用且松前家御用相勤書記内抜寫
高田屋嘉兵衛四代孫
函館縣下函館區大黑町
明治十六年八月
高田慶太郎」

一エトロフ島大船通路ノ基ヲ開キ爲メニ已來蝦夷地御用定御雇船頭申付蝦夷地御用金ノ内ヨリ三人扶持ニ御手當金貳拾七兩ヲ取ラセ度段享和元酉年二月立花出雲守種周朝臣へ伺ひ其通タルベシとの御事

一苗字帶刀御免箱館ニ於テ御船御雇船共指配諸事裁判仕彼ノ地御役所へ日日相勤秋ヨリハ上方江戶御用ヲ命ゼラレ商賣向ハ勝手ヲ以テ高田屋ト相唱商用私用之外ハ帶刀致候

一道中往來ハ人馬送り御證文御添觸幷御印付御挑灯等被下置候

一嘉兵衛弟嘉藏金兵衛嘉四郎嘉十郎追々御公邊御用被仰付時々御褒美等頂戴

一寛政十年秋カラフト島サンタン島御見分トシテ御公儀御役人間宮林藏殿御出

張嘉藏手船久寶丸千三百石積ニ乘嘉藏御供船頭云々

一　乍恐以書付奉願候

私儀當三月廿九日羽州酒田港より松前迄御用荷物運送被仰付同四月十七日首尾能彼ノ地へ着岸同月二十七日松前出帆同廿九日酒田港へ着御用荷物積入五月十日松前着廿三日東蝦夷地へ出帆六月朔日アツケシへ入津キイタツフアツケシクナシリ右三場所の御園荷物積入之御引合も仕り罷下候故此度キイタツフへ御用之諸物凡八百石目蒙御用候得共爲御冥加松前表より運賃頂戴不仕候六月三日近藤重藏殿ゟ呼ハレ御用ニテヱトロフへ圖合船ニテ渡海可相成やと御尋有り何れ夷船ノ渡ル所ナレバ渡レヌ筈も有間敷かと返事私ニ渡海ヲ仰付ラレ同月十三日八ツ時重藏殿子モロより乘船同日七ツ時クナシリ着同十六日クナシリ西海路夷船ニテ漕海邊所々深淺ヲ窺同十九日アトイヤ着二十日餘日和ヲ待チ其間海路二三里位ツヽ乘出シ深淺汐行相伺七月十三日クナシリへ重藏樣漸く御歸り私一人ニ彼島之樣子試ミ爲渡海仕船ノ掛り泊海濱等見立候樣被仰付夫ニヨリテ御船冥（マヽ）温丸七十石ニ積ミ七月十八日五ツ時より渡海尤番人二人ハ夷船ニテ渡り八ツ時比タン子モイへ着夫より海濱四十里ハカリ丑寅之

方シャナ河港迄罷越委シク調ベ同月廿八日ナイボより夜七ツ時午風ニ出帆翌日八ツ時アトイヤニ着凡海濱十八里バカリ夷船ハ四日遲レ着夫レヨリクナシリ東海邊淺深風請相考八月七日ニトマリ御會所着是より九月十七日シベツへ渡り高橋樣近藤樣之御供仕クスリ越へ仕シヤマニへ着夫より箱館着候處御手當金頂戴

一來春エトロフ御用荷物ハ大坂表ニて積入荷物松前ニテ積揃エトロフ迄運賃百石ニ付金四十三兩一步宛下サル樣願上奉候

一來春エトロフ島へ下り込候節圖合船鯨船共五艘打立差配其外鱒網仕立等私幷ニ水主之者ニも爲手傳候樣仰付にて候出精鱒漁之御間似合候樣相働可申云々運賃ハクナシリ箱館間一上下分外船幷ニ被仰付樣又大阪ニテ金五百兩拜借願度御聞濟云々

十月(〇寛政十一年)

高田屋嘉兵衞

蝦夷地御用掛中樣

一此度蝦夷地御用之御船五艘赤塗新ニ御造船仕候ニ付右御船造立乗廻シ方諸事裁判仕候樣被仰付右御船造立之義者大坂奉行所へも御配被仰出候間御金之義ハ大坂表へ爲御替ニ相成候へ共云々高田屋嘉兵衞へ諸事爲御任云々直樣大坂表へ罷登り船棟梁大坂寺島尼ケ崎屋吉右衞門方ニテ造立申付同人濱ニテ御圍ヲ構朱之丸之御印立テ江戸表よりも御役人罷越候て早速取懸り翌巳二月廿日頃より三月中旬迄ニ都合五艘出來直樣出帆被仰付嘉兵衞義者ハ同月二十日兵庫出船箱館へ向罷下り候云々御船帆印之義ハ帆之眞中ニ朱之日ノ丸ヲ付有之艫之方ニハ日之丸御印御幟御吹貫キ御用高張挑灯打立申候

一此度御造船五艘之内柔遠丸御船ハ松平信濃守樣蝦夷地御順見ニ付御召船ニ相成船頭者嘉藏相勤申候

一瑞穗丸御船ハ石川左近將監樣蝦夷地島御順見ニ付御召船ニ相成船頭ハ嘉十郎相勤申候

一寧濟丸福祉丸安焉丸（マヽ）ノ三艘ハ蝦夷地御場所御産物積取ニ相成候寧濟丸船頭ハ嘉四郎外二人船頭ハ嘉兵衞手元之者相勤申候

一辰八月二日附千石餘積ノ船造立ノ爲メ當月七日阪本傳之助幷ニ下役代り內藤

關藏江戸表出立大坂へ相越云々嘉兵衞宛手紙來ル

一船ハ七百石積三艘外ニ三百石積二艘造立此大船ハ日數六十日程小船ハ四十日程カヽル大ハ一艘千兩小ハ五百兩

一往來觸書

覺

蝦夷地定御雇船頭
高田屋嘉兵衞

右嘉兵衞義御用向有之奥州津輕青森より羽州秋田通庄內夫より越後通り木曾路攝州兵庫迄差遣シ候條右宿々村々ニおゐて人馬入用之旨申出候ハヽ無遲滯差出諸事無指支樣可被取計候以上

享和元酉年九月

寺田忠右衞門㊞
鈴木甚內㊞

奥州津輕青森より羽州秋田庄內夫
より越後通り木曾路攝州兵庫迄

右村々宿々問屋
年寄中
名主

一蝦夷地御用船都合四十五艘之御造船ニ相成ニ付南部野邊地且シヤマニ大坂兵庫ニテ御造船被爲候よつて御造船中高田屋嘉兵衞へ可被申付候
但シ其後兵庫大坂より船大工雇下シ箱館ニ於テ大船始メテ造ル

子五月

高田屋嘉兵衞㊞

箱館御役所

一　乍恐以書付奉申上候
當春御固人數乘送御運賃格別金高之様御尋尙又此後御固メ御人數御越被遊候節當春より相減シ御雇船可相成哉御內々御尋被遊至極御尤奉存候然ル處當春蝦夷地カラフト御運賃百石ニ付四十四兩ソウヤ金三十八兩宛船頭より御願申上候譯水主共甚不𛀙ママ一候ニ付何分右蝦夷地へ御固メ御人數御乘船ニ相成候得

共一統暇ヲ呉候樣松前船頭へ申出甚當惑仕候　此度御用ニ相立不申候てハ蒙御咎メ候段申聞候處漸く聞入左候得者カラフト給金貳拾五兩ソウヤ金貳拾兩宛呉候得者可參段水主一統申出餘高給金故色々利害申聞カラフトへ金十四兩ニ相定メ其內ニもソウヤ金十二兩ニ相定不心得之者も有之候得共色々申含メ出帆仕候　右金高頂戴仕候ても船主義ハ水主へ一人ニ付金十四兩宛給金遣し候ては千石積增水主共拾六人給金凡二百二十四兩船頭へ手當金七拾四兩此譯ハ二十八兩水主二人前給金四十四兩ハ百石之御運賃船頭手當ニ相成候是ハ大坂堀立船之商物又ハ運賃物積入候時之定ニ御座候左候得者都合二百九十八兩船頭手當水主給料其外一上下金三四十兩も入用相かゝり申候左候得者船主は百兩ばかり德用ニ相成此內ニテ道具痛ヲ引去り候得者遠海一上下之德川ニ御座候云々貳番上下御迎船之義者カラフト百石ニ付金八十五兩御定メニ相成下り候樣ニ承り候是ハ彼地まて御引取迄滯留仕左候得者水主共へ金又々手當二度分遣シ候故右等ノ譯ニテハ金八十五兩申請候やニ奉存候併私義ハ當春よりエトロフへ罷出居春之義ハ存候へとも其後之委細之義ハ存不申候

一東蝦夷地エトロフクナシリ御人數御乘下リ御運賃エトロフ百石ニ付金三十五

両クナシリ金貳拾五両是迄御定メ御運賃ニテ罷下申候貳番御迎之義エトロフ百石ニ付金五十五両此譯を前文西蝦夷地之通水主給金過分ニ入候ニ付無據頂戴仕候

一明年御固メ御人數御座候節者前以被仰付候得者堀立船頭ニ得与申聞水主之給金幷諸事取締方仕候得者御運賃爲多少相減申義も可有之委細之義者書面ニ難盡何分蝦夷地行御雇船之義者大坂堀立船三十六七艘ばかりニテ外船者彼地不案内故御用立不申候（以下〇略）

文化五辰年九月

蝦夷地御用御雇船頭
高田嘉兵衛 ㊞

箱館御奉行様

御用状ヲ以テ申遣候今般蝦夷地御用御仕入鹽大俵一萬二千俵御注文書當着（マヽ）ニ付陸地注文申遣候指支無之樣手當ノ事追々積船相廻シ候注文書延引故有鹽不足やも不知其節ハ新鹽焚出シ御用差支無之樣可取斗候御用狀着次第請書ヲ急て爲差登可被申候

正月十日

蝦夷地御用取扱人
高田屋嘉兵衛

瀬戸田鹽濱役人衆中
同所問屋増田彦右衛門殿

一正月十三日出御書面當二日着佐竹樣御備船之義御內々御尋ニ付申上候千石積
三月中旬より八月十日迄右之運賃金七百兩御貸上可申上候
尤エトロフネモロクナシリアツケシカラフト島ソウヤイシカリ邊非常之節御
乗船被遊候節者御運賃之外水主ニ御手當トシテ一人前金十八兩宛御遣シ被下
置度尚又船頭に者金五十兩も被下置度
一船御備場所ハ能代御弁利ナリ右能代ニ御備置何事も無之八月十日切ニ御暇被
下置候節ハ七百兩より外頂戴不仕候猶又松前箱館マテ御乗船被遊候節ハ水主
手當一人前金五兩宛船頭へも御見積御手宛可然奉願上候八月十日迄ト申上候
ハ最早右十日より末ニ相成候てハ船乗廻シ方甚六ケ敷相成御人數御乗組蝦夷

地抔へハ危難に候
一最早私共船々追々出帆仕候ニ付當地ニ船も無御座候右之通ニテ被仰付候はヽ
御地より箱館へ早々御申越被下置候ハヽ箱館より手船の內隨分丈夫成船頭ヲ
乘セ能代川へ相廻し可申上候
一私義者一兩日之內ニ當地出立仕嘉藏ハ今暫地當地ニ居可申候間當方へも六日
切之御狀差出可下成候御狀へ名面之義ハ松前ニ店有之高田屋嘉兵衞店伊助と
上封被下置着早々箱館店へ飛脚ヲ以テ差遣し下樣御添狀被下度(〇中略)御人數
御乘セ方之義二重棚ヲ作相成丈ケ出精仕御乘方可仕候恐懼謹言
文化七年五月五日
高田屋嘉兵衞
岩間哲藏樣

一嘉兵衞魯船ニ捕ハルヽ文化九年十月十三日江戸蝦夷地御用會所へ
一筆啓上候迎寒ニ御座候處先以御掛中樣益御機嫌能被爲遊御座恐悅至極ニ奉
存候然者兄嘉兵衞義不慮之義ニテ奉恐入候右ニ付嘉兵衞落着迄兄弟とも引受

相續仕度候ニ付箱館ニおゐて御願申上置候尚又當方御用向等も御座候ハヽ不相替御用被仰付候樣偏ニ奉願上候此段宜敷御披露被下置度奉願候　恐惶謹言

十月二十三日

高田屋嘉藏

蝦夷地御用掛

田中金六樣

小村甚右衞門樣

申渡

金五十兩

此度渡來ラソア人クナシリ場所へ引分候ニ付其方手船觀厚丸同所渡海船別段出精相勤メ候ニ付爲御手當被下之

文化七年八月

文化十年二月五日江戸御用狀之寫

申渡

是迄蝦夷地御用取扱申渡置候大坂平野町小山屋吉兵衛本町一丁目伊勢屋四郎兵衛惠野子島多田屋清左衛門新天滿町廣屋三之助助右衛門町大和屋定七攝州兵庫鍛冶屋町北風莊右衛門京都室町錦小路上ル越後屋利右衛門へ右取扱中御用印幷御用文字記候挑灯小道具類仕入物見本等相渡置候處此度東蝦夷地不殘請負場所ニ相成候ニ付てハ以來仕入物產物差廻之方とも無之候ニ付御用取扱差免且渡置候右品々其方便船ヲ以積廻シ箱館表御場所へ可相納旨申渡候間得貴意右品々請取候ハヽ追て箱館表へ積廻シ御役所へ可被差出候以上

酉正月

天田六三郎㊞
田邊仲右衛門㊞
森　覺藏㊞
阪本傳之助㊞
比企市郎右衛門㊞

攝州兵庫西出町高田屋嘉兵衛

代
嘉　藏
金兵衛
嘉四郎
嘉十郎

嘉兵衛文化九年被捕十年歸國迄ノ始末御糺ノ上無構之段被仰渡其後十一年戌九月十四日大阪御番所より嘉兵衛御召一件左ニ記ス
　但兵庫在住ニ付大坂御支配に候
大坂ニテハ御掛阿部良左衛門様より御糺之義ハヲロシヤ國ニテ彼地宗門ニ相隨不申候や此段松前御奉行所ニテ御糺在之候や有無以書付申上ヘキ旨御申渡左ノ通奉申上候云々宗門ニ隨ハサル旨書上
右同日御用濟後阿部良左衛門樣被仰渡候ハ御中玄關より御奥ヘ罷上り候樣被仰渡則參上仕候處東西御奉行西水野因幡守樣東平賀信濃守樣御出席ヲロシヤ國應接之始末御尋云々御膳御酒頂戴云々
文化十一年十一月三日夕嘉兵衛兵庫より來坂

十一月四日和田源助より來翰來ル五日四ツ半時比御城代樣御下屋敷へ罷出候樣申來候間右樣御承知麻上下御用意有之や御用意の有無ニヨリ御着用被致候義ハ可申達候云々（〇此手紙宛名に高田屋嘉兵衛樣とあり）
十一月五日四ツ半時次罷出候中御玄關より奥へ上ル御掛目付藤牧新助大西藤九郎御取次御城代大久保加賀守御前へ御召出ヲロシヤ應接之始末御尋云々御膳御酒頂戴金二百疋被下置尙又來春迄之內ニテ今一度參上候樣被仰渡云々
十月二十七日寧濟丸能州柴垣村沖之島ニテ破船右ハ沈荷十分一浮荷物ハ二十分一御定法通掛ケ揚ケ候者へ被下候間得其意入札之上落札御拂値段ヲ以可相渡候
十月二十七日
岩間　哲藏　三浦喜十郎　木原半兵衛
寺田忠右衛門　富山元十郞　比企市郎右衛門
藤本德三郎　（〇連名印）
高田屋嘉兵衛へ

大樂丸御船之事

大樂丸御船此度松前表御用達中へ御預ヶ被仰付御船ヨ大作事柱立替幷足シ道具之義ハ持切同一御冥加之爲年々爲江戸登御用物三百石目迄ハ無遲滯積廻シ御用相勤候積り其餘ハ御用達勝手次第廻シ方仕萬一修船等之節ハ御上樣之御入費ニ被成下候筈之御約定ニ承知仕候然ル所右御船私へ御預ヶ被仰付候取扱手續之義ハ左之通りニ御聞濟被成下度奉存候

一右御渡矢張り箱館御備船之儘被成置御船頭中山甚太夫殿乘組被仰付表向ハ是迄之姿ニテ内通り御船廻シ方諸入費運賃取出入過不足共一式私へ御任セ被下置候樣奉願上候左候へ者年々江戸爲御登御用物三百石之分者御運賃頂戴不仕無滯御用弁可仕且箱館より南部地へ御役人樣方御渡海之義ゟ一式無運賃ニテ御引請御用弁可仕候

一御船定式タシ道具御引請五ヶ年相續仕候ハヽ私方ニテ持切り御上樣へ毛頭御苦勞掛ヶ上ヶ申間敷候萬々一難破船等之義も御船引請八ヶ年以上相續仕候上之義ニ御座候へゞ元成ニ御船出來奉差上候五ヶ年以上八ヶ年迄之三ヶ年之内ニ破船等之變御座候節ハ乍恐從御上樣半金御下ヶ私より半金ノ割合ニテ新ニ

造船被仰付被下置度奉存候云々　御船積石千百石ニ御座候へ共萬一新ニ作事之義御座候へ共八百石目位ニ取縮メ候方者出金ニ拘り申上兼候間此段共奉申上置候

一中山甚太夫殿義御船私へ御任セ被仰付候共是迄之通爲乗組候義ニ御座候ハヽ御同人へ從御上樣御定式御手當被下置候外ハ私より程能骨折料相餘內候樣仕可候其外及承り候得者御船乘廻シ候內之御拜借金も餘程之金高ニ御座候樣承知仕候假令甚太夫殿向後御船へ不被乘組候共船中ハ相互ニ內通り法式も御座候て私共雇船頭暇差出候共格外之渡金差遣候事ニ付右同人御拜借金之分者私御引請御廻相廻シ候初年より六ヶ年ニ奉上納御同人へ助成可仕候右之趣ニテ不苦御義ニ御座候ハヽ私へ御任セ被成下置候樣奉願上候　右等之分ハ大勢之水主召仕候內ニハ雇給貸過シ或ハ病氣ニテ暇差遣シ借潰シ等ニも相成其上年御船數艘乘廻シ不仕候てハ御運賃之內六分雜用ニテ右貸潰シ等之分ハ是非引下ヶニ相成候義ニ奉存候間右大樂丸御船御預ヶ手續キ御尋ネニ付乍恐此段以書付奉申上候

亥　五　月

御奉行所様

高田屋嘉兵衛

乍恐口上

一私義奥州箱館ニテ蝦夷地御用定御雇船頭御用被仰付御座候處去ル寅年八月病氣ニ付養生願仕則弟金兵衞ト申者ヲ代人ニ差出置候處別紙書付之通江戸表蝦夷地御用會所ニ當六月十五日御用御差免被仰渡御米七十俵被下置難有奉頂戴候此段御禮申上候云々

文政五年午八月二十九日

兵庫西出町高田屋嘉兵衛

病氣ニ付代

高田屋嘉藏

大阪御奉行所様

右自函館圖書館所藏本抄出

福原びんかゝみ

序

ころは二月半より名高き須ま寺の開帳とちかきはいふにたらす遠つ國〳〵まて其かくれ南きよし聞え侍れはかつは貴賤の案内者ともならんかしと道の行手の名所舊跡たゝにしるすもすゝろなれは所に付たる俳諧なへての發句を若木のさくら板にえりて福原ひんかゝみとなん名付侍る彼つれ〳〵草にいへる八幡詣のたくひもやと浪の爰許の道しるへにおもひたちぬるものならし

延寶八庚申曆二月中旬　　村尾一風

山田博宥

〇上　略

〇佛母摩耶山の挿繪略

摩耶山　此所元弘年中赤松入道圓心陣所

まやのはらに茂る佛のは丶そ哉　樽井氏 伴英

蟬の經は安居の法か忉利天　山口氏 繁生

立願成就の意に

南無觀世おんとくふかし摩耶の月　北風氏十二才 次郎三郎

〇中略　〇みぬめのうらの挿繪略

敏馬浦

〇中略　〇いさこやま・ぬのひき瀧・いくた川の挿繪略

布引瀧

古今　ぬき亂る人こそあるらし白玉の

まなくもちるか袖のせはきに　在原業平

布引や瀧のみにする八重霞　溝口氏 重次

かすみ引布や瀧の名鼠色　博宥

〇中略　〇生田大明神の挿繪略

生田川

〇中略

生田海

○中　略

生田森　生田池　箙梅　子敦盛幻父子對面所

河原太郎高直・同次郎盛直兄弟ノ塚

○此說明及句略　○花隈城跡大龍寺の挿繪略

城ケ口村・花熊村城跡・再度山大龍寺・かぢはら二どのかけの所

○中　略

○楠ほたいしよ・くすのきつか・しやほうつかの挿繪は附圖を參照

楠河内判官正成塚　付菩提所

印ニ梅松有兵庫ヨリ五丁北海道ヨリ壹町上手

同菩提所右塚ヨリ貳町上手坂本村ニ有醫王山廣

嚴寶勝禪寺ト號ス

楠や其なはたけの花軍　宗因

楠や名を植次の松と梅　博宥

せうのふや楠か勢とふ螢　衛田氏吉一

楠やいく秋を經て石佛 立意 高橋氏
古塚や名を菊水の簇薄 浮萍

差方塚

〇中略 〇みなと川・ゆきみの御所・安德天皇假皇居等の挿繪略

安德天皇假皇居

湊川ヨリ北海道ヨリ上手ニ荒田村と申所

假の皇居も今はあせはてけれは

皇居もや田をすきひたいのほうかふり 思省

湊川山

川ハ兵庫北はつれに有之昔ハ兵庫ヨリ西ニ有之由申傳いつの比川筋替りたるもマヽ所の者年數おほえす山ハ川上

〇中略 雪見御所

〇中略

夢野

湊山つゝき凡十丁西南ニ當テ山ノ腰の在所を云昔ハつけ野

と申鹿の夢合の子細事なかけれは是を略ス中興夢野と改

○中　略

鵯　越

○中略　○兵庫津の挿繪略

佐比江

兵庫北濱町はつれニ有

年を經てにこりたにせぬさひ江には
玉もかりえて今そすむへき　忠　峯
三日月や雲にさひ江の小長刀　浮　萍
影うつすさひ江の月や鏡とき　扁　舟

若狹守平經俊塚

右さひえの堤にしるしの木有

福原經島

兵庫ヲ云兵庫の中ニ一宇ノ堂有經嶋山來迎寺ト
號ス此寺ニ築嶋人柱ニ入候松王児童木像影有建

武ノ比脇屋右衛門佐義助陣所又尊氏是ヨリ西國
へ落玉ふ

其春や松王十七とらのとし　宗因
しやうこかや啼うくひすの經の嶋　灘山路氏 包宥
字も六の花ふれ彌陀の來迎寺　同山路氏 定長
爰に咲や妙法蓮花經のしま　路昌
風の神も兵庫の花に御免あれ　西光寺 不染

○中　略

福嚴寺　兵庫ノ中ニ有之

佛燈國師ノ開基也後醍醐天王隱岐國ヨリ御歸洛ノ時御一宿ノ所
御所柿や後醍醐味ある福嚴寺　福嚴寺 沙門

尊氏都落左馬督直義陣所二本松ハ兵庫西ノ門ヨリ貳丁西海道ヨリ上
手

○中略　○わたの笠松の挿繪略

輪田笠松

○中略　○眞光寺の挿繪略

藤澤元祖一扁上人廟所

右同所ニ有之時宗眞光寺ト號ス寺内ニ有

秋風やあした一扁の塚をはく　樽井氏 延貞

○きよもり石塔・ひはつか・すさの入江・かやの御所の挿繪略

清盛石塔

高サ四間壹尺六寸臺五尺壹寸四方年號弘安九年二月ト有之

右同所有之鎌倉西勝園寺貞時御建立

清盛のおそはさらすか佛の座　小曾根氏 正吉

蟬の羽やなすともつきぬ石の塔　博宥

萱御所

琵琶塚

須佐入江

○説明及句略　○だいりやしき・和田の小松原・和田のみさき・燈籠堂・船見番所の挿繪略

和田御崎

兵庫南濱はつれより三丁南也建武ノ比湊川合戰ノ時新田義貞陣所

〇中略

汐干にや和田一門兵庫□衆　宗因

〇中略

燈籠堂

右同所ニ舊跡有之建武ノ比將軍筑紫ヨリ上洛ノ時大館左馬助氏明陣所

月影や燈籠堂のあふらつき　北風氏貞長

〇下略　以下三ノ谷まで名勝二十九箇所挿繪十及其説明并に句略

右自舊北田紫水文庫本(松本義一氏所藏本)抄出

神戸市史第二輯 年表

中世の年表

天皇	將軍	年	月	件名	西暦
後二條	久明親王	延慶一	一二	二十七日伏見上皇院宣ニヨリ兵庫島ノ升米ヲ東大寺八幡宮ニ寄附ス	1308
花園	守邦親王	應長一	六	阿波國商人兵庫島問丸ト結ビ北關關係者ヲ打擲刃傷ニ及ブ	1311
		正和二	二	兵庫島ニ於ケル目錢收入ノ半バヲ東大寺ニ寄附シ塔婆修理料ニ充ツ	1313
		三		以後石清水八幡宮大山崎神人等諸關ノ關稅ヲ免除サル	
		四	九	十二日六波羅御教書ニ兵庫島修固料ヲ徵收ス	
後醍醐		元德三	四	兵庫島修固料ハ月宛金額ヲ支出サル○兵庫關月宛錢ヲ全部島修固ニ用フ	1331

後醍醐（光嚴）	元弘二（正慶一）	六	兵庫島修固料ヲ月宛錢中ヨリ支出ス	1332
		三	兵庫島修固料ヲ月宛錢中ヨリ支出ス	
		一二	借入ノ兵庫島修固料ノ返濟分擔方ヲ定ム ○北關奉行下知狀ニ島修固料ノ寺家院家分擔支出ヲ示ス	
後醍醐（光明）	延元三（曆應一）	一一	幕府ヨリ兵庫島ノ目錢ヲ興福寺修造料トシテ寄附ス	1338
後村上（光明）	延元四（曆應二）		兵庫島商船目錢ヲ神崎渡邊ノ升米ト共ニ西大寺ニ寄附ス	
	興國一（曆應三）	三	十四日幕府紀伊ノ海賊衆ニ櫓別錢ヲ兵庫島ニ於テ徵收スルコトヲ許ス	1340
後村上（後光嚴）	正平八（文和二）	一一	二十八日武家文書案ニ石別升米及置石ノ事出ヅ	1353
	正平一二（延文二）	三	東福寺領周防國得地庄年貢運上ノ勘過ヲ與ヘラル	
	正平二二（貞治六）	二	十四日高麗使金龍海賊禁遏ヲ求ムル書狀	

				ヲ齎シテ兵庫ニ來著ス○二十七日高麗使金逸モ來朝	
長慶（後圓融）	義滿	文中三（應安七）		細川頼之攝津守護ヲ兼ヌ	1374
		天授一（永和一）	八	幕府東福寺造營材木ノ諸關勘過ヲ與フ	1375
		天授六（康曆二）	三	兵庫ニテ爲替ヲ請負フモノアリ	
後龜山（後小松）		元中四（嘉慶一）	八	晦日西國船ノ兵庫ニテ興福寺ニ關税ヲ納ムルヲ忌避スルモノニ對シ神崎關ニテ札狩ヲナスヲ許ス	1387
後小松	義持	應永一		兵庫ヨリ攝州兵庫津平方民部尉忠吉ト稱シ朝鮮ニ使ヲ遣リ歲遣船一隻ヲ約セルモノアリ	1394
		二		西宮ヨリ西宮津尉長鹽備中守源吉光ト稱シ朝鮮ニ使ヲ派セルモノアリ	
		八	九	十六日足利義滿畠山基國及細川滿元等ヲ隨ヘ兵庫著岸ノ朝鮮船ヲ見ル 是年第一回遣明船出發○相國寺普廣院ノ	

年	月	事項
		仲芳中正隨伴渡航ス
九	八	一日明使天倫一如ノ乘船兵庫ニ著ス○三日足利義滿兵庫ニ下向○九日義滿歸洛ス
		是年遣明船歸朝ス
一〇	三	三日明使天倫一如兵庫ヲ發航ス○第二回遣明船出發ス○天龍寺堅中圭密正使トナル
一一	四	十九日唐船(歸朝船カ)兵庫ニ著岸ス○二十七日義滿兵庫ニ下向
	五	三日唐船三艘兵庫ニ著ス○七日義滿歸洛
	七	建仁寺明室梵亮ヲ正使トシテ明ニ派遣ス
一二	四	明使兵庫ニ著シ足利義滿兵庫ニ下向
	八	三日足利義滿兵庫下向
		是月明使一行歸國○第三回遣明船出發○源通賢遣明正使トナル

年	月	事項
一三	五	二十九日唐船一艘兵庫著岸
	六	十五日義滿唐船ヲ見ンガ爲メ尼崎ニ下向 是月明船及歸朝船共六七艘兵庫ニ著ス〇義滿歸洛
	閏六	歸朝船中ノ寶丸赤間關ニ著ク
	八	第五回遣明船兵庫出發〇堅中圭密正使トナル〇足利義滿兵庫下向
一四	七	二十二日足利義滿兵庫下向〇二十九日歸洛 是月遣明船兵庫歸著明使又來ル
一五	二	一日足利義滿兵庫下向〇三日明使兵庫ヲ發航シ第六回遣明船ニ圭密又正使トナリ兵庫ヲ出發ス
	五	此頃第七回遣明船出發
	一二	以後大友氏ノ春日丸屢〻過書ヲ與ヘラル

天皇	年	月	事項
稱光	一六	六	遣明船歸朝明使兵庫ニ來ル○二十五日足利義持兵庫下向○二十九日歸洛
	一七	四	(明曆永樂八年四月)第八回遣明船乘組員明都ニ入ル○圭密正使トナル
	一八		明使王進兵庫ニ來リ九月九日入洛スルヲ得ズシテ歸ル
	二〇	六	二十七日朝鮮回禮使宋希璟一行尼崎ヲ經テ兵庫ニ入リ長福寺ニ泊ス
		七	三日宋希璟兵庫ヲ發ス
	二五		春明使呂淵兵庫ニ來ル
	二六	七	明使呂淵又兵庫ニ來著ス○十九日鹿苑院ノ元容西堂福嚴寺ニ來リ明使ノ書ヲ一見ス
	二七	八	九日明使空シク歸ル
			朝鮮使節宋希璟來朝

天皇	將軍	年號	年	月	事項	西暦
			二八	四	十六日朝鮮回禮使宋希璟一行本邦人亮倪及宗金ト共ニ兵庫ニ著キ二十日出發上洛ス	
			二九	一二	小早川生口因幡入道ノ船兵庫關其他ノ過書ヲ與ヘラル	
	義量		三〇	三	生口舟ノ過書ヲ召返ス	
				八	兵庫問丸ヨリ脱税者ニ對シテ徴收スベキヲ申立ツ	
			三二		八月及九月ニ兵庫島修固料ヲ支出ス	
後花園	義教	永亨	一		朝鮮通信使朴瑞生來朝海路兵庫ニ來ル	1429
			四	八	十七日足利義教兵庫下向二十五日歸洛○十九日龍室道淵正使トナリ第九回遣明船兵庫出發	
			五	六	東寺領播磨國矢野庄ニ課シタル五反別一人ノ免除方ヲ請ハシメタルモ許サレズ	

年	月	事項
	七	幕府攝津守護代藥師寺ニ命ジ多田院善源寺ニ課セル兵庫砂掘人夫ノ催促ヲ止メシム
	八	琉球船兵庫ニ來ル
六	二	唐船糧米幷公方渡御ノ費用ヲ「兵庫事」ト稱スル記事アリ○土倉ノ代官ヲ兵庫ニ置クノ議アリ
	五	二十一日足利義教兵庫ニ下向行粧善美ヲ盡シ目ヲ驚カス○二十二日遣明船及明使船和田御崎ニ著ス○二十四日同船兵庫ニ著岸○二十五日義教歸洛○三十日明使雷春一行勘合及制書ヲ齎シ兵庫ヲ發シ上洛 是月兵庫歸著ノ遣明船ニ貿易品ノ不正問題起ル
	六	歸著セル遣明船ノ積載物ヲ幕府直轄ノ兵

八

庫ノ藏ニ置ク○遣明船ノ瑞書記兵庫ニテ死去ノ噂傳ヘラル

七 遣明正使等幕府及商賈ノ商品ヲ携ヘ兵庫ヨリ傭船ニテ赤間關ニ向フ

八 二十一日明使雷春兵庫ニ下向

九 三日明使兵庫出發恕中中誓正使トナリ第十回遣明船六隻兵庫ヲ出發ス

是月遣明船ノ幕府船客人衆ノ中ニ兵庫問丸左衛門四郎兵庫櫛屋蘆屋孫三郎ノ名見ユ

四 二日北關關料ノ中ヲ北野御經ヲ差引キ殘額七百十貫文ヲ寺納トス

是月雜掌ニ代リテ代官職ノ關務請負初メテ現ル

六 二十六日遣明船兵庫ニ歸ル

			一二	二十三日相國寺等持寺ノ國料ニツキ東大寺ニ返濟ヲ命ズ	
		一一	一二	兵庫北關代官正實ノ預ル幕府ノ倉庫ニ朝鮮通信使ノ獻ゼル方物ヲ藏置セシム	
				永享年間兵庫北關々務ハ代官請負職トナリ島修固ハ大體其責任トナル	
義勝	嘉吉	三	一〇	相國等持兩寺ノ國料ヲ北關代官納付ス	1443
義政	文安	一	八	興福寺南關ニ對シ新過書及國料ヲ停止ス	1444
		三	六	二十六日新ニ過書船ヲ定ム	
			七	十二日新定ノ過書船ニツキ興福寺幕府ニ訴フ	
		六	四	幕府石清水八幡宮ニ兵庫上庄ノ内德珍名ト福原庄ノ內西方散在田地トヲ寄進ス	
	寶德	二	一二	竈戶關ノ藥師丸東大寺領周防富田ノ公用米ヲ兵庫ニ運ブ	1450

	三	七	琉球使船兵庫ニ來著	
		八	過書ニツキ興福寺寺門ヲ閉鎖ス	
		九	神木遷座大衆蜂起ス	
		一〇	二十八日遣明正使東洋允澎兵庫ニ來リ永福寺ニ滯在ス	
		一一	九日遣明正使兵庫ヲ出帆ス○第十一回遣明船兵庫ヲ出發ス	
享徳	二	八	晦日國料ハ北關代官ヨリ二季ニ分納ノ例アリ	1453
	三	一〇	遣明船ノ大部分兵庫ニ歸著ス○五日細川勝元兵庫ニ來ル○十日幕府奉行等荷檢査ノ爲兵庫ニ來ル	
	四	五	竈戸關ノ藥師丸東大寺領周防富田ノ公用米ヲ兵庫ニ運ブ	
長祿	三	一一	十二日兵庫問丸景孝兵庫著ノ運上米運漕	1459

		ヲ請負フ	
寛正四	八	二十九日北野御經料ヲ北關代官ヨリ寺納ス	1463
	一一	興福寺ノ訴ヘタル過書ノ問題全ク解決セズ○細川勝元一條家領福原庄ヲ押領ス	
五	五	二十五日攝津守護細川勝元明船來朝ニツキ兵庫島ノ修理ノ要アルヲ集證(蔭凉軒)ニ傳達ス○二十七日集證兵庫島修固ノ件ヲ繪圖ヲ示シテ義政ニ伺フ	
		是月幕府北關代官ノ島修固怠慢ヲ責メ代官職交替ヲ命ズ	
	六	二日兵庫島修固ノ事先規ノ如ク倉方ニ命ジタルモ倉方ハ負擔ニ堪ヘズトテ拒絕ス	
	七	兵庫島修固ハ北關領主タル東大寺ニ於テ端板修補ヲ承諾ス○遣明使ノ一人妙增都	

後土御門			聞兵庫ニ下ル○第十二回遣明船兵庫ヲ出發ス	
	文正 一		此年迄ノ琉球船ノ參洛六度ヲ數フ悉ク兵庫ヲ經過セルガ如シ	1466
	應仁 二	九	西軍ヨリ兵庫ノ實情ヲ大内氏ノ部下ニ糺ス○西軍ヨリ問田弘綱ニ對シ東軍方成身院ノ南關宰理ニツキ糺明ヲ命ズ	1468
		一〇	興福寺大内氏ノ兵庫關及神供料違亂ニツキ集會ヲ催ス○十七日北野社幷相國寺國料月俸ヲ停止シテ悉ク東大寺八幡宮料所ニ寄進ス	
		一一	二十三日一條政房其家領ノ福原庄ニ來リ福嚴寺ニ入ル	
			是月大内政弘ニ從ヒ前年東上セル其代官問田弘綱兵庫ヲ守備ス	

			是年興福寺領兵庫南關ハ東方ノ成身院宰理セルニヨリ西軍ノ方ニテ沙汰スル旨ヲ通達セルコトアリ	
文明	一	七	兵庫ノ實權ヲ獲タル大内氏ノ軍池田氏ヲ豐能郡池田城ニ攻メ之ヲ拔ク	1469
		一〇	一條政房福嚴寺ニ於テ害ニ遭フ〇山名持豐赤松氏ノ兵ト共ニ兵庫ヲ攻メ守將問田弘綱ノ子弘胤ヲ破ル〇此時南關所在民家寺院悉ク燒亡住民多ク殺サルトイフ〇幕府兵庫五箇庄ヲ山名是豐ニ與ヘ福原庄ハ日野勝光ニ給與セラルトノ風評アリ	
		一一	兵庫ニ於ケル從來ノ西軍大内氏ノ勢力此月以後東軍ノ細川氏ニ移ル	
		一二	山名是豐大内氏ノ守將仁保弘有ヲ神崎城ニ攻ム〇細川氏攝津ノ勢力ヲ恢復ス	

義尚	二	四	一條兼良福原庄領家分及檢料人足分ヲ春日社及興福寺造營料所トシテ寄附ス	
	四	九	足利義政福原庄地頭職ヲ沒收セントシ是豐ノ代官怒リテ兵庫ヲ退ク	
	五	一二	鹽飽島船ノ兵庫兩關ノ特權ヲ停止ス	
	七	三	寺門ヨリ大内氏ニ福原庄代官ヲ申付ク	
	八	三	遣明船堺ヲ出發シ爾後第十七回ノ最後迄兵庫ヲ起點トセザルニ至ル	
	一五		此年以後一條家ト細川氏及其守護代トノ間ニ福原庄年貢ニ關シ屢〻折衝アリ	
	一七	六	二十八日月俸錢ヲ春日社ニ寄進ス	
	一九	四	月俸錢ニ關シ相國寺側ノ者興福寺領福原庄ニ押寄セ爭鬪ス	
	長享一	一一	幕府ヨリ再ビ月俸錢ヲ等持寺相國寺領ト定ム	1487

		二	二	六日月俸錢ヲ東大興福兩寺ヨリ相國等持兩寺ニ付ス	
後柏原	義澄	永正三	一〇	十八日遣明正使桂悟住吉ヨリ乘船シテ尼崎ヲ經テ兵庫ニ來リ滯在禪昌寺ニ住セル龍皐眞乘ト往來ス	1506
後奈良	義晴	天文九	一二	兵庫ニテ米一石六匁三分ニテ賣買セラレ又輸入商品ノ木綿賣買セラル	1540
	義輝	弘治年間		明ノ鄭舜功來朝	
正親町		永祿二年		耶蘇會ノバテレン・ガスパル・ヴィレラ及日本人イルマン・ロレンソ豐後府內ヨリ上洛ノ途兵庫ニ滯泊堺ニ赴ク	1559
	義昭	天正七年	一〇	博多ノ商人宗室永秀丸ニテ兵庫ニ著キ郡山及堺ヘ赴ク	1579
後水尾	秀忠	元和四	一一	十七日英商館員リチャード・コックス大阪ヨリ兵庫ニ著キ五日間滯留ス	1618

大正八年以降の年表

年	月	件名	西暦
大正八年	一	是月勸業館階上ヲ稅務署ニ貸與ス〇阪神急行電鐵會社神戸市內乘入ヲ出願ス〇佛國航空派遣團フォール大佐一行及第二次派遣團一行來訪	1919
	二	五日氣溫ノ遞減著シク最低氷點下五・一度ニ下ル 是月西部公設食堂開設〇濟生會診療所ヲ起工ス〇神戸高等商業學校ニ商業研究所ヲ附設ス	
	三	十九日最强風速十八・三米ノ烈風吹ク〇三十一日神戸市區改正事業都市計畫事業ト改稱。神戸市區改正調查委員會廢止サル。新ニ神戸市區改正委員會組織サル。同委員會兵庫地方委員會ト改稱セラル。特別會計市區改正委員會	

（大正八年）

費ヲ廢止ス
是月特別會計區費ヲ廢止ス○湊東湊林田三區會ヲ廢ス○
結核豫防法公布セラル○名譽職費用辨償規程ヲ制定ス○
神戸三菱職工學校創立○神戸家畜株式會社經營期間滿了

四

一日大正七年制定ノ市營電車乘車料三錢ヲ四錢トシ學生
勞働者及時間ニ依ル割引制實施。神戸家畜株式會社ヲ買
收市營トス。神戸市處務規程ヲ改正實施ス。市商工課及
救濟係新設。內務省神戸土木出張所設置セラル○八日神
戸商業學校西灘村ニ新築移轉○九日第十二潛水隊將兵上
陸ス○十五日市電熊內延長線開通○二十八日本年度最初
ノ市會ヲ開ク○三十日神戸港第一期修築工事ニ關スル追
加命令來ル
是月特別會計都市計畫事業費ヲ設定ス○新ニ神戸市特別
稅條例制定實施○高工創立費寄附決定○屎尿臨時汲取市
營決定○條例ヲ改正シ電燈料電力料電車乘車料値上○葺

合・林田二實業補習學校開設○葺合警察署廳舍建築起工○第二期神戸港修築工費豫算決定○第一突堤第十五十六號上屋利用開始○西部遞信局海事部神戸出張所花隈町ニ移ル○株式會社神戸常設家畜市場設立○蒙古喇嘛僧一行及日米交換教授ジョン・デュイー博士來訪

五

七日皇太子御成年式ニツキ市正廳ニ拜賀式ヲ擧グ○十日千苅貯水池堰堤構築工事竣功○十九日皇太子御成年式奉祝ノ爲メ扁額ヲ獻上ス○二十日熊內淨水構場乙淨水池工事竣功○二十六日市營電氣鐵道第二期線建設案可決

是月西部公設市場開設○市吏員加給追加豫算案可決○市電軌道建設費決定○梅ケ香町二丁目須磨間路線測量ニ著手ス○西部遞信局海事部神戸出張所ヲ大阪遞信局海事部神戸出張所ト改稱

六

十日琴緒町及蘆原通ニ市吏員派出所新設○二十五日市臨

（大正八年）
七

時屎尿汲取ヲ行フ○二十八日市會阪急電鐵ノ市內乘入計畫ニ支障アリト答申ス。市會議事ノ疑義ニ關シ紛糾ス。勝田銀次郎外二人ノ道路改良費寄附金十萬圓採納。平和條約祝賀會費ヲ可決ス

是月都市計畫部下水道計畫調査ニ著手ス○市區改正第一期道路開設案決定○神戸米穀株式取引所ヲ神戸取引所ト改稱

一日講和條約締結賀表捧呈○五日平和克復大祝賀會開催。奥平野淨水構場乙丙淨水池工事竣功。總量五十九・三粍ノ大雨降ル○十五日イエス團友愛救濟所四番町ニ出張所ヲ設ク○十六日特設消防署規程發セラル○二十日消防署名稱位置管轄區域制定セラル。東西兩消防署新設開廳○二十二日千苅水源量水開渠工事竣功

是月國際汽船會社設立○兵庫縣救護視察員制度ヲ設ク○佛國軍艦ル・デストレー號來港○丁抹領事代理フランツ・ヨルダン來任

八	是月神戸市度量衡取締規程ヲ改正○神戸信用組合設立○兵庫中學校瀧川中學校ト改稱○中華民國領事柯鴻烈來任○戰利舊ドイツ潜水艦入港市民觀覽ス
九	十日小學校七校新築十四校增改築決定ス。市吏員職員傭人ノ加給案決定。名譽職費用辨償規程學務委員手當及旅費規程一部改正。兵庫電氣出願ノ海岸線敷設方支障アリト決定○十三日暴風雨アリ總雨量八十九・三粍ニ及ブ○二十日コレラ患者發見○二十二日市會都市計畫事業費可決シ申請ス 是月湊川運河葺合三發電所ヲ統一ス○市會選擧有權者名簿作成錯誤ニツキ注意起ル○神戸新聞社新築落成○大池野田池今池廢止處分決定○濱邊通地先埋立地同町ニ編入○神戸取引所增資ス

（大正八年）

一〇　一日田村新吉澤田淸兵衞紺綬褒章ヲ賜フ。市吏員給料規程一部改正實施○十日葺合警察署本館竣功開廳ス。縱貫鐵道改良ニ關シ政府神戶市區改正委員會ニ照會シ來ル。鐵道高架線問題起ル○二十五日市營屎尿臨時汲取ヲ中止ス○二十七日兵庫運河株式會社ノ事業及物件買收案可決是月低利資金十萬圓ヲ借入レ公設市場增設ニ充ツ○寺池重池蓮池ヲ市營住宅地トシテ埋立ツ○二月以來ノ痘瘡患者千二百餘人ニ達ス○神戶市區改正委員會阪急電鐵市內乘入ニ對シ地下式工法ヲ條件トシテ認ム○森本倉庫株式會社開業ス○市營住宅建設案ノ決定○英國總領事館海岸通ヨリ仲町ヘ移轉○米國巡洋艦ニユー・オルリアンス號來航

一一　九日皇太子行啓西須磨住友男爵別邸ニ入ラセラル○十日大正天皇行幸大本營（武庫離宮）ニ入ラセラル○十一日ヨリ

四日間兵庫縣ニ於テ陸軍特別大演習擧行。大演習中須磨町ニ臨時市吏員出張所ヲ設置ス。皇太子大演習統監部ナル須磨小學校ヲ御泊所トセラル。市内物產ヲ天覽ニ供ス。神戸市ヨリ御菓子燐寸獻上。勝田銀次郎四本萬二紺綬褒章ヲ賜フ〇十二日武庫離宮ニ於テ實業功勞者ヲ召サル。市内神社學校造船所製鋼所ニ侍從ヲ御差遣アラセラル〇十四日皇太子住友男爵別邸ニ入ラセラル。須磨小學校ヲ開放シ皇太子御居室拜觀ヲ許サル〇十五日九十歲以上ノ高齡者ニ御菓子料傳達式擧行。本縣ノ功勞者十六人ニ位階追陞及贈位ノ御沙汰ヲ賜フ。大正天皇還幸皇太子還啓ノ途ニ上ラセラル〇二十四日市區改正道路開設事業費認可セラル〇二十五日ペスト病死亡者發見〇三十日又ペスト病患者發見

是月輸入牛肉關稅免除〇稅關及東神倉庫海岸一帶有菌鼠續出〇大演習陪觀外國武官來神

(大正八年)

一二		一日市吏員給料更ニ一割加給決定○三日鼠買收價格ヲ五錢ニ値上ス○十八日汚物掃除法施行細則一部改正○二十一日神戸市屎尿ノ臨時汲取ヲ開始ス○二十三日阪急電鐵會社市內乘入レ地下式工法ヲ條件トシテ特許セラル
		是月神戸市兵庫運河及苅藻島ヲ買收○第一突堤第十四號上屋ノ利用ヲ開始ス○再製樟腦株式會社設立○市營屠場新築落成○市會兵電ノ路線變更願ヲ支障アリト答申ス○流行性感冒大イニ流行ス○和蘭領事館京町ヨリ浪花町ニ移轉
是年		電燈需用戸數十一萬五千ヲ算ス○市ノ取扱文書約九十四萬通ニ達ス○六甲西灘西郷編入ノ議起ル○本年度ノ歲入決算激增シ好況ヲ反映ス○此年度ノ縣費負擔激增ス○高架線工事測量ニ著手○第二期築港工事起工○阪神國道開設工事起工○長田村道路開設工事竣功○對蘭領印度揮發

油輸入激增○綿織物香港向輸出激增○私立工場數及年產額激增○市內大工場職工ノ爭議怠業頻發○市內瓦斯供給戶數二萬六千戶ニ達ス○日本發動機株式會社設立○山林約七十町步ノ新植補植ヲ行フ○市內米產額八千三百石ヲ算ス○漁業組合三アリ○神戶港貿易十四億ヲ超エ未曾有ノ數字ヲ示ス○市內工業會社數百五十九資本額四千三百餘萬圓ヲ算ス○市內組合銀行數二十四預金勘定三億八千五百萬圓總貸出金額四億二百萬圓ニ達ス○市內營業會社資本總額三億四千萬圓ヲ算ス○電車事故ニヨル死傷者激增ス○林田ニ補習學校開設○筒井眞野ノ二夜學校新設○鮮人勞働濟進會創立○公設市場ニテ官行木炭外國米ヲ販賣ス○上筒井町外五箇村ニ縣農會ヨリ馬鈴薯栽培奬勵金ヲ交附ス○第一回兵庫縣肉牛共進會開催○各種重要物產同業組合成立○人口六十三萬四千人世帶數十四萬ニ達ス○火災數八十一回ヲ算フ○布引町春日野墓地間道路開設

（大正八年）		工事施行○腦脊髓膜炎患者數四百三十三人（內死亡二百二十四人）ヲ算ス○コレラ病流行ス○流行性感冒猖獗ヲ極ム○米國領事館明石町ヨリ京町ヘ移轉	
大正九年	一	二十日神戸婦人同情會財團法人ヲ組織ス○二十五日降雪五糎ニ及ブ 是月市營屠場事業開始	1920
	二	一日屎尿處分市ノ義務トナル○二日市參事會員補缺西本茂吉當選。都市計畫道路改正費可決。市電軌道建設費修正案可決。發電機一臺新設案可決。松方幸次郎社會救濟費二十五萬圓ヲ寄附ス。川崎芳太郎社會救濟費幷教員優待基金百萬圓ヲ寄附ス。村野ふく盲啞學校新設基金七萬九千六百圓ヲ寄附ス。兵庫縣知事ヨリ須磨町編入ニ關シ諮問アリ○九日特別市制問題ニ關シ始メテ運動ヲ起ス○	

二十一日內務大臣ヨリ市長候補三名推薦命令アリ。氷點下五•八度ニ降リ測候所創立以來ノ低溫ヲ示ス○二十二日積雪十•八糎ニ及ブ○二十八日須磨町編入ヲ可決ス

是月電氣事業公債發行○初メテ都市計畫事業公債條例ヲ制定ス○川西機械製作所設立○神戸發動機製作所設立○伯剌西爾副領事デュトラ來任

三

六日市長候補者推薦ノ件詮衡委員附託トナル○十二日市長鹿島房次郎任期滿了退任。助役乾長次郎市長代理トナル○二十四日皇太子九州行啓ノ御途次米利堅波止場ヨリ御乘艦○二十五日神戸高工創立費トシテ市ヨリ約六十萬圓寄附ト決定

是月第一期道路開設事業ニ著手○財界好況ノ反動至リ市內工業界不振ニナラントス○第二突堤第十號上屋利川開始○米國領事亞爾然丁領事事務ヲ兼攝○米國亞細亞艦隊

（大正九年）

旗艦ダコタ號來航○伊汽船ピルナス號入港シ日伊航路開始ノ宴ヲ張ル

四

一日市電乘車料四錢ヲ五錢ニ値上ス。八雲菊水御藏御崎四尋常小學校開校。生田川小野柄諏訪山山手入江水木遠矢ノ七小學校ニ高等小學ヲ併置ス。須磨町神戸市ニ合併ス。市外山田村ヲモ管セル須磨警察署ハ須磨町ノミヲ所轄トス。須磨町消防組ヲ廢止シ須磨消防組ヲ創設ス。同町避病院ヲ東山病院分院トス○十三日九年度最初ノ市會開會。前市長鹿島房次郎ニ慰勞金十萬圓贈與ノ件可決。神戸港修築工事ニ關スル稟請書ヲ提出ス。市會議員選擧區並定數條例改正

是月行政區設置ニツキ調査ス○市社會課ノ新設○市役所須磨出張所ノ設置○特別市稅トシテ觀覽稅新設○市立臨時教員養成所ヲ神戸小學校內ニ開設○兵電特許線ノ一部

五

變更出願市會之ヲ支障アリトス○兵庫縣救濟協會經營ノ生田川口入所ヲ市へ繼承ス○神戸聾啞學校神戸盲啞學校ト改稱○市電ニ低床式ボギー車新設○伯剌西爾領事館下山手二丁目ニ移轉○英國下院議員ランドルス一行來訪

三日市中央職業紹介所開設○七日風速二十七米ノ强風吹ク○二十七日神戸製鋼所ノ脇濱町一丁目埋立工事成ル

是月市電第二期線特許變更認可アリ○熊内三宮宇治川平野入江ノ五公設市場ヲ開ク○公設市場使用條例及同細則制定實施○神戸養老院新築移轉○瀧川中學校新築校舍落成○内務省港灣調查會特別委員會開會○墨西哥領事フェリス來任○米國々際協會總裁以下米國一流紳商觀光團來訪○和蘭東印度艦隊ワロムプ號外一艦來訪○佛國巡洋艦ル・デストレー號入港

（大正九年）

六　六日コレラ病患者發生シ爾後續出ス○九日神戸港修築工事ニ關スル命令書交付セラル○十五日キネマ倶樂部開業是月神戸稅關陸上設備工費半額負擔決定○西消防署明和出張所增設○西部共同宿泊所建築著工○屎尿處分困難ヲ來ス○亞爾然丁領事アエルサ來任○巴奈馬領事館開設領事ロヨ來任

七　十六日阪神急行電鐵開通○二十三四日市會議員增員及補缺選擧ヲ行フ○二十五日土岐助役任期滿了シ再選セラル。岡崎藤吉寄附ノ社會事業費五十萬圓採納是月特別市制委員上京ス○塵芥小型容器ヲ備付ク○火葬場葬儀場ノ買收契約成ル○玖馬領事館開館、領事ドミンゲス來任

八　一日神戸百貨店開業○五日市會議員補缺選擧ヲ行フ○十

二日海岸通元居留地埋立地利用ニ關スル建議成立○二十日颱風襲來風速二十九・九米ニ達ス○二十七日雷雨襲來、落雷數箇所震死人ヲ出ス

是月内務省港灣調査會特別委員會議決事項ヲ本市ニ移牒シ來ル○隔離患者輸送自動車新調○關税撤廢ニヨリ米材輸入激增ス○米國上下兩院議員一行日本觀光團來神○佛領事シモン來任

九

二十五日猛烈ナル雷雨襲來降雨總量五十三粍ニ達ス○二十六日市會神戶税關陸上設備工事施行請書提出ヲ決定○二十七日長時間ニ亙ル烈風襲來、三十日夕刻ニ及ブ○三十日第二突堤竣功

是月林田區二十箇町新設命名○東消防署ニ葺合出張所及相生橋分遣所ヲ設ク○世界日曜學校大會參列者一行來神○市社會課歸農調査ヲ行フ○神戶學習院神戶自助學院ト

（大正九年）

改稱○內務省神戸土木出張所海岸通一丁目ニ移轉

一〇　一日櫻井鐵太郎市長候補者選擧ニ當選ス。火葬場市營トナリ其條例及規則制定。第一回國勢調査執行○十八日櫻井鐵太郎市長ニ就任

是月市營住宅建設ニ著手○既定神戸港修築計畫變更アリ

一一　三日神戸村野徒弟學校設立認可セラル○五日皇太子大分縣ヘ行啓ノ御途次米利堅波止場ヨリ御乘艦○十八日東消防署明石町ニ新築落成シ移轉ス○二十二日西消防署新築落成シ移轉ス。瀧川辨三鈴木岩次郎紺綬褒章ヲ賜フ○二十五日小曾根喜一郎紺綬褒章ヲ賜フ

是月神戸佛教聯合慈友會設立○運河管理條例幷使用條例制定○須磨線設計完成ス○佛國軍艦デ・セクス號來港○和蘭領事ボルゲル去リクイスト來任○米國領事フレーゼル

去リカルドウェル來任

一二

一日大倉山公園ニ圖書館新築工事著工○十一日市會議事規則ノ一部改正。學務委員補缺員補償審査委員決定。助役乾長次郎任期滿了退任。乾前助役ニ慰勞金三萬五千圓贈與決定

是月縣會ニ於テ林田方面ニ警察署增設決定ス○補習學校規則大改正○神明急行湊川公園明石間電鐵敷設ノ免許ヲ得○白耳義總領事ワーテュ來任○諾威領事館浪花町ニ移轉領事代理アンドレセン來任○希臘領事館開設名譽領事マクノートン來任

是年

此年度ノ歲入出決算未曾有ノ數字トナル○市吏員總數千百九十九人取扱文書九十萬通ヲ算ス○兵庫葺合夢野石井方面西代白川間等ノ路面改修工事施行○本年度ヨリ須磨

（大正九年）

水道事業費ヲ特別會計トス〇神戸港貿易十六億圓ヲ超エ空前ノ記錄ヲ示ス〇淨瑠璃琵琶流行ス〇海運界不振ヲ極ム〇漁業組合二ヲ增ス〇海外渡航者講習所設立〇神港信用組合成立ス〇休業工場續出、失業者激增ス〇神戸發動機製作所設立〇販賣購買利用諸組合逐次成立〇葺合方面人口激增〇親和高等女學校修業年限ヲ五年ニ延長ス〇コレラ患者累計六百九人ニ達ス〇流行性感冒前年ヨリ更ニ流行〇市囑託學校醫學校醫會ヲ組織ス〇葡萄牙領事ス｜ザ來任

大正十年　一　1921

十三日市會議員神田兵右衞門逝去〇十四日降雪七・七糎ニ及ブ〇十八日神戸高工敷地トシテ市ヨリ一萬坪寄附決定〇二十二日故市會議員神田兵右衞門ノ市葬執行

是月神戸取引所三百五十萬圓ニ增資ス〇關西生絲業者同盟會組織セラル〇第二突堤第八號上屋利用開始〇狂犬ヲ

發見ス

二　七日道路開設事業中加納町下山手通間下山手通楠町間工事起工〇八日內務大臣ニ水道擴張工事竣功檢査申請。湊川陸橋橋橋架設工事ニ著手ス〇二十六日市吏員表彰規程可決。市會決議尊重論出ヅ。助役永田龜作推薦決定

是月佛國領事ブルゴエ來任

三　十四日上席助役永田龜作就任〇十九日村野徒弟學校村野工業學校ト改稱〇二十日電氣市營神戶開港五十年市制實施三十年水道擴張須磨町合併等綜合記念祝賀會開催〇二十一日勤續市吏員百五人表彰セラル〇二十五日退隱料遺族扶助料條例改正可決。市會議員待遇規程制定〇三十一日市須磨出張所燒失。特別會計水道擴張費ヲ廢止ス

是月宮前魚市場株式會社設立〇神戶市道路開設事業工事

（大正十年）

費ノ國庫補助申請○大部分ノ屎尿汲取市營ト決定○佛國巡洋艦デストレー號來ル

四

一日神戸市公報發行規程制定實施。須佐尋常高等小學校開校。同朋保育園ノ開設○十五日黃砂襲來ス○十六日本年度最初ノ市會開會。公會堂建設案決定。神戸市區會條例中葺合區會廢止諮問案ヲ決定ス。市ノ須磨出張所火災應急施設費支出ノ件可決。須磨町水道工事施行ノ件可決。電氣裝置火葬場改築費可決。市稅特別稅條例原案可決○二十三日市區改正事業ヲ三箇年ニ延長ス。村野工業學校開校○二十五日第三級ノ市會議員選擧執行○二十六日第一級第二級市會議員選擧執行

是月メートル法專用改正度量衡法公布セラル○市立第一神港商業學校ニ第二神港ヲ附設ス○縣立第三神戸中學校創立○須磨聯合教育會創立○西消防署西代出張所ヲ設置

五

ス○特別市税ニ遊興税・雇人使用税・新開免租地反別税新設○伯剌西爾名譽副領事クーート來任○佛國報知艦及英國巡洋艦入港

一日市立兵庫職業紹介所開設。野崎尋常小學校開校○六日新市會招集セラル。勝田銀次郎市會議長ニ當選。森本淸副議長ニ當選。補償審査委員學務委員參事會員都市計畫地方委員區有財產管理委員決定○十一日吳錦堂柴田享一範多龍太郎紺綬褒章ヲ賜フ。男爵川崎武之助表彰金杯一箇副賜○二十日市會ニ財政調査委員會設置建議出ツ。○區有財產管理委員條例改正○二十三日雷雨襲來被害甚大是月變電所新設擴張工事著工○前月ヨリ狂犬病猖獗トナル○公設市場ニ共同仕入部設置○松原公設住宅竣功○神戶實業學院開設○神戶瓦斯株式會社一千萬圓ニ增資○神戶港荷取扱所新設

（大正十年）

六

五日市會議員ヨリ始メテ兵庫地方委員會委員八人推薦○十三日都市計畫區域ニ關スル諮問アリ○十四日收入役服部幸作辭職。服部幸作ニ慰勞金八千圓贈與ノ件可決○十六日橘橋架設工事竣功○十八日岡山次夫收入役ニ就任。吉田政治副收入役ニ就任

是月松原公設住宅貸與開始○神戸瓦斯トノ報償契約改定○葺合區會廢止○島田義治巴奈馬領事事務官トナル○狂犬病豫防ニ關スル博覽會映畫等ヲナス○四日以來飼犬ノ豫防注射約八千頭ニ及ブ

七

八日神戸稅關陸上設備費分擔支出可決○十日西部共同宿泊所開所○十一日市營兒童相談所開設○十三日暴風雨襲來風速二十九・三米ヲ算ス○二十日道路開設事業下山手楠町間竣功。都市計畫區域支障ナシト決定○二十六日臨時神戸港設備委員會神戸稅關陸上設備計畫ヲ可決ス○二十

八

八日清盛塚ハ墳墓ニアラズトノ通牒ニ接ス
是月清盛塚琵琶塚移轉問題紛糾ス○第二突堤第十一號上屋利用開始○生絲市場委員ヲ設置○川崎三菱兩工場ノ勞働爭議起ル○中旬ヨリ四十餘日間旱魃高溫續ク
十二日兵庫縣救濟協會財團法人トナル○十五日道路開設事業加納町下山手間竣功○二十五日加納町三丁目大倉山下間市電開通○二十九日勞働紹介所開設
是月恩賜財團濟生會神戸診療所新築落成シ同兵庫縣病院ト改稱○林田警察署新築成ル○岡田修養保護院創立○佛國東洋艦隊旗艦モン・カルム號來ル

九

三日皇太子御歸朝奉祝電報捧呈。官民合同皇太子御歸朝奉祝會開催○六日ペスト病感染船員發見セラル○十六日都市計畫區域設定ニ關スル諮問アリ○二十六日昨日來ノ

（大正十年）

颱風ニ被害多大ナリ。御大典記念圖書館ノ寄附採納。電燈電力値下案可決。區有財産管理委員條例制定

是月青物市場有志淸盛塚移轉阻止ニ反對運動ヲ起ス○阪急市內乘入工法ヲ高架式ニ變更方出願○電燈從量制度採用○第三期線敷設ノ件提案○臨時事務改善委員規程制定○市社會課內ニ臨時兒童保護調査會設置○西部勞働紹介所開設○市商工課內ニ商工相談所ヲ附設ス○第二突堤第十三號上屋利用開始○降雨日數二十三日ヲ算ス

一〇

七日建議案ト發案ニ關スル希望市會ニ出ヅ○十二日松方幸次郎生島五郎兵衞男爵川崎武之助渡邊孝平各紺綬褒章ヲ賜フ○十五日湊川陸橋工事竣功○二十五日楠町三丁目同六丁目間市電開通。市立圖書館大倉山ニ移轉ス。高塔信號所竣功○二十六日須磨警察署新築落成○二十九日雷鳴ト共ニ豌豆大ノ降雹アリ○三十日第一期築港工事ノ鐵

道工事竣功
是月米國桑港會議所主催觀光團一行來神○東部勞働紹介所開設○市營電車從業員發明奬勵規程制定

二

一日市電回數劵ノ一部改正○八日市參事會ニ區設置案ヲ附議ス○九日近年稀ナル寒氣早來○十日市立圖書館新築落成式擧行○十一日區有財産管理委員ヲ選擧ス。電氣局共濟組合設立決定。運河第二橋工事固定橋ニ決定ス○二十三日ペスト病患者發見○二十五日市長及市會議長ヨリ大正天皇御惱御平癒祈念ノ執奏ヲ乞フ
是月神明急行其特許權ヲ明姫電鐵ニ讓リ神戸姫路電氣鐵道株式會社ト改稱ス○市電第三期線敷設ノ件可決○高濱倉庫ヨリペスト病有菌鼠續出ス○米國領事カルドウェル去リシヤナール來任

（大正十年）

一二　一日市立圖書館々外貸出ノミ開始。市ト肥料會社トノ屎尿濱渡賣買契約成ル○十三日縱貫鐵道改良ニ關シ諮問來ル○十五日市ヨリ須磨線ノ特許ヲ出願ス○二十一日市會ニテ清盛塚移轉ニ關シ路線變更ノ建議アリ○二十五日市立葺合職業紹介所ヲ開設ス○二十六日楠町六丁目上澤七丁目間市電開通。森本瑞明直木政之助川西清兵衛各紺綬褒章ヲ賜フ

是月縣水產會及市水產會設立○縣會ニテ神戸刑務所移轉ヲ圖ル○神戸商業會議所舊獨逸倶樂部ニ移ル○基督教青年會館開ク

是年　此年度ノ市財政尙餘力ヲ示シ歳入歳加ス○電燈電力料ヲ値下ス○瀧川儀作神戸商業會議所會頭トナル○神戸實業團野球大會ノ創始○貿易不振ニシテ十億圓ニ足ラズ○納稅滯納者激增ス○夢野石井地方道路開設工事竣功○西代

村道路開設工事竣功○板宿道路開設工事竣功○妙法寺川改修工事竣功○天井川生田川ノ決潰箇所復舊○運河浚渫工事終ル○屎尿加工ノ爲硫安製造案可決○神戸法律學校創立○神戸法學院創立○夜學校規程ノ改正○小野柄夜學校ヲ新設ス○專任學校醫ヲ増員ス○トラホーム治療所ノ新設○須磨兵神ノ兩信用組合設立○氣候不順ヲ極ム○チフテリア死亡率激增○發見ノ狂犬數二百頭ヲ「超ユ○塵芥運搬車置場ヲ新設ス○疱瘡又流行ス○獨逸總領事館開館トラウトマン總領事ニ就任

大正十一年	一	七日上澤七丁目五番町二丁目間市電開通○十三日特別市制促進ニ關シ意見書ヲ提出ス○十四日積雪五・八糎ニ及ブ○十七日市ハ清盛塚移轉問題ニ關スル路線變更ヲ申請ス○二十日神戸稅關燒失ス。氣溫劇降シ氷點下五・六度ニ下ル○三十一日第一期築港ノ上水道工事竣功	1922

(大正十二年)

是月神戸生絲貿易促進同盟會設立〇神戸取引所五郎池跡ノ新築市場ニ移轉ス〇生絲市場開設ニ關シ市協議會開會〇縣廳內ニ兵庫縣工業懇談會ヲ創立ス〇日本劇場八千代座ト改稱〇神戸普選聯盟及神戸普選促進會設立〇米國領事シャナール去リディクコヴァル來任

二

八日市電第三期線敷設特許ノ件報告アリ〇十四日市會會議規則一部改正〇二十日東部共同宿泊所開所〇二十七日助役收入役俸給改正

是月ジョッフル元帥市廳ニ來訪

三

十日皇后(皇太后)九州へ行啓ノ御途次武庫離宮へ行啓〇十七日市立圖書館一般閲覽ヲ開始ス〇十八日皇后(皇太后)武庫離宮御發御西下アリ〇二十七日皇后(皇太后)御召艦入港艦內ニテ御假泊アリ〇二十八日皇后(皇太后)住吉神社御參

拜後武庫離宮ニ入ラセラル。皇后（皇太后）ヨリ神戶市ニ一千圓御下賜アリ○二十九日皇后（皇太后）東京御還啓ノ途ニツカセラル○三十日市ヨリ御機嫌奉伺幷御禮言上ヲ乞フ○三十一日市立女子技藝學校廢止セラル

是月十一年度市豫算ノ增稅案否決サル○市會ト市長ノ意見睽離ス○東部燒芥場新築案決定ス○神戶美術協會成ル○下水道ノ調査成ル○高濱倉庫ヨリペスト有菌鼠十九匹發見

四

一日吾妻神樂二尋常小學校開校。野崎荒田長樂御藏ノ四小學校ニ高等科併置。市立第二高等女學校開校。補習學校規程改正。若菜湊山東須磨ノ三商工實修學校開設。葺合兵庫ノ二公設食堂開設○十日五番町二丁目長田交叉點間市電開通○十一日神戶高工村野工業ノ一部ヲ假用開校ス○十二日十一年度最初ノ市會開會。區有財產管理委員

（大正十一年）

決定。神戸市財政調査委員會規程制定案否決セラル。諏訪山開發案決定。臨時衛生施設調査會規程發布○二十四日神戸都市計畫區域公示セラル○三十日第一期築港工事構內照明設備竣功

是月神戸都市計畫區域認可セラル○商業會議所新築敷地ヲ京橋東ニ定ム○祕露總領事カンセコ來任○ロリニ亞爾然丁臨事領事代理ニ就任○佛國軍艦入港

五

五日第一期築港工事ノ下水道竣功○十六日神戸港第一期修築工事竣功式擧行○二十二日清盛塚移轉ニ關スル路線變更セザルコトニ內務省ニテ決定ノ旨通牒アリ○二十五日臨時衛生施設調査會規程改正○二十七日市長櫻井鐵太郎辭職裁可。助役永田龜作市長代理トナル

是月市巡回産婆ヲ置ク○市立神戸診療所設立ヲ決ス○日本赤十字社兵庫支部救護部ヲ開ク○鮮人勞働濟進會解散

○英國皇太子殿下御召艦入港○佛國領事オーシエルコヌ來任

六

一日市長選擧詮衡委員ニ附託ス。櫻井前市長ニ慰勞金一萬圓贈呈ニ決定○二十四日神戸高工校舍一部成リ移轉ス○二十八日日本毛織株式會社表彰セラル

是月神戸驛前ニ中央職業紹介所出張所ヲ開設○清盛塚移轉反對ノ餘燼收マラズ○二十五日ニ至ル迄降雨ヲ見ズ

七

五日第一期築港工事ノ道路工事竣功○十二日湊川公園下三角公園間市電開通。長田交叉點菅原通五丁目間市電開通○二十二日清盛塚移轉手續ヲ了ス

是月イエス團友愛救濟所財團法人トナル○神戸製鋼所勞働爭議起ル○連日降雨アリ被害廣範圍ニ及ブ

（大正十一年）

八	八日稀有ノ高溫三十六・四度ニ達ス〇十七日市ノ須磨線特許出願認可セラル〇二十九日次席助役土岐銈之進死亡。弔慰金三萬五千圓贈與 是月變電所新設擴張工事完成
九	五日湊川裁縫女學校開設。コレラ患者荒田町ニ發生〇十一日市立湊川職業紹介所開設〇二十一日清盛塚移轉設計承認サル〇二十八日攝政宮御結婚御納采奉祝執奏ヲ乞フ 是月神戸都市計畫道路指定サル〇本市住宅建築資金貸付規程ヲ定ム〇芦原保育所新築〇兵庫ノ塵芥積込用棧橋撤去〇コレラ發生ニヨリ海水ノ使用禁止〇歸還ノ支那駐屯軍來神〇英總領事館商船ビルニ移ル
一〇	五日變電所新設擴張成リ送電開始〇七日都市計畫神戸委員會鐵道省ノ諮問ニ答申ス〇二十三日市聯合青年團創立

委員會團則ヲ制定ス○二十六日大倉山ノ市立圖書館新築工事完成○二十七日市聯合青年團結成。風速二十九米ノ烈風雨アリ

是月市公會堂建設々計懸賞募集ス○都賀川改修方出願○村野ふく養老院設立基金ヲ寄附ス

二

五日市聯合青年團發會式○十一日神戸稅關假廳舍成ル○十三日攝政宮香川縣行啓ノ御途次米利堅波止場ヨリ御乘艦當夜艦內ニテ假泊アラセラル。岡田磯八岸本信太郎紺綬褒章ヲ賜フ。林田警察署開廳○十四日攝政宮神戸港ヲ拔錨高松港ニ向ハセラル○十五日泉灘水先人組合成ル○二十一日縣工業試驗場新築移轉○二十六日縣會議事堂及工業試驗場竣功式擧行○二十八日猛烈ナル驟雨降霰アリ

是月都市計畫第二期工事ノ計畫成ル○神戸美術協會第一回展覽會開催○長田公設市場開設○湊川兵庫神戸ノ三實修學校選奬セラル○神戸聯合慈友會救護團トシテ認可セ

（大正十一年）

ラル○楠保育所新築移轉ス○郵船々員減員減給ニ抗議ス
○米國領事エルシャナール來任

一二　一日石橋爲之助市長候補者ニ當選○三日大倉山神戸驛前間市電開通○六日神戸都市計畫防火地區決定告示○十四日神戸愛山協會成ル○十五日攝政宮御不例ニツキ市ハ天機幷御機嫌ヲ奉伺ス○二十二日石橋爲之助市長ニ就任裁可○二十四日重池公設住宅開設
是月西代耕地整理地區內ニ新町名附設○兵庫港地方新町名增設○長田村內新町名新設○發電機故障相次イデ起ル○大正水力電氣トノ電力受給ノ件決定○墨西哥領事ツッケルマン來任

是年　市吏員總數千二百七十八人取扱文書百萬通ヲ超ユ○神戸相互信用組合成立ス○勸業館ニ於テ納涼博覽會開催○產業統計調査施行○京神中等學校對抗野球大會創始○對米

大正十二年

一

爲替相場暴落○物價暴騰ス○神明國道開設ヲ計畫ス○神戸衛生聯合會創立○若菜眞野校ニ朝鮮出身者教育ノ學級ヲ新設ス○改正補習學校規程實施○臨時教員養成所廢止說起ル○市立第一神港商業學校定員ヲ增加ス○縣立第一高等女學校定員ヲ增加ス○塵芥掃除區域ヲ改正ス○兵庫縣美術協會成ル

三日神戸愛山協會第一回新年聯合登山ヲ行フ○五日中央劇場燒失○二十一日市立救護院開設○二十七日都計第二期事業ノ認可申請○二十八日氷點下五度ニ下リ近年稀有ノ寡濕ヲ現ス

是月花莚檢查所舊西灘村ニ新築移轉○神戸佛教聯合慈友會少年部ヲ開設○友愛俱樂部成ル○港灣協會設立○家畜檢疫所新設

1923

（大正十二年）

二　一日神戸都市計畫防火地區ニ關スル規程施行セラル。都市計畫道路ニ關スル規程施行セラル○四日伏見宮貞愛親王薨去ニツキ敬悼ノ電報ヲ奉ル○八日市會天井川改修工事ヲ可決ス○二十七日市會增稅案ヲ否決ス

是月神戸訓盲院敎育部ヲ神戸盲學校ト改稱○和蘭領事レヒベル來任○智利領事ウイエル來任

三　一日大日土地區劃整理組合設立認可セラル○七日湊區聯合青年團成立○二十三日神戸高商ノ大學昇格議會ヲ通過ス○三十日吏員退職特別手當三萬二千圓追加支出決定。山下勝田川崎國際帝國ノ五社結合プール團成ル。電氣局檢查委員設置ノ建議成立

是月市局課ヲ廢合シ處務規程改正○緊縮方針ニヨリ市吏員整理行ハル○大正水力電氣ヨリ受電設備工事竣功○市立葺合技藝女學校廢校○西野尋常小學校廢止○神戸職業

補導會設立セラル○岡崎藤吉寄附金五十萬圓ヲ社會事業積立金トス○近海郵船株式會社創立○道路工事第七號線著工

四

一日佛國ニ於テ北白川宮不慮ノ御災難ニツキ天機ヲ奉伺ス。市處務規程改正實施。市港灣部設置。市兵事係ヲ庶務課所管トス。市立葺合女子技藝學校ヲ生田川校ニ附設。須佐商工實修學校開設。吾妻長狹橘神樂ノ四小學校ニ高等科併置。○五日菅原通五丁目梅ヶ香町二丁目間市電開通○六日大正水力電氣株式會社ヨリ受電開始○二十八日十二年度最初ノ市會開會。發電擴張費繼續年期及支出方法決定。市電第三期路線工事第一號線須磨線建設費支出案可決

是月公設市場ヲ商工課ノ所管トス○清風及西野ノ二幼稚園開設○第三神港商業學校開校○森高等女學校開設○神

（大正十二年）

戸盲唖教育協會神戸盲唖院ト改稱○市勞働者ニ賃金立替拂ヲ開始ス○電氣使用條例ヲ改正シ電燈電力料ヲ値下ス○國際汽船減資斷行○市稅特別稅條例改正○溝渠幹線浚渫ヲ土木課所管トス

五

一日三宮警察署新廳舍新築起工。實業協會私立神戸工業高等專修學校ヲ開設○五日市聯合青年團々報ヲ創刊ス。梅ケ香橋架設工事竣功。米人ゼー・シー・ニユートン藍綬褒章ヲ賜フ○八日渡邊靜沖助役ニ推薦決定○二十日神戸水上警察署廳舍新築起工○二十四日渡邊靜沖次席助役ニ就任○二十五日市會議員補缺選舉ヲ行フ

是月神戸矯修會經營ノ保育所ヲ市營トシ眞砂保育所ト稱ス○市營火葬場新築竣功○夢野火葬場廢止○實業協會實業教育ニ力ヲ致ス○白木屋神戸出張所新開地ニ開業○佛國領事アンドレー來任

六

一日電氣火葬開始○四日梅ヶ香橋渡初式擧行○九日正田房次郎紺綬褒章ヲ賜フ

是月市電鋼鐵車新造○市立トラホーム診療所開設○夢野土地組合設立○六月下旬ヨリ降雨日數廿六日ニ及ブ

七

九日神戸愛山協會「愛山」ヲ創刊ス○十三日市吏員給料規程一部改正。市廳舍增築案可決○十四日市長神戸港擴張工事速成方申請書提出○二十八日市會神戸港擴張工事促成意見書提出。ロバートヤング記念基金ノ寄附ヲ受ク

是月地方改善事業協議會ヲ開ク○須磨共濟會經營ノ五市場及金三萬圓ヲ市ニ寄附ス○神明國道開設工事認可セラル○東遊園地改修ニ著手ス

八

十三日天井川改修工事起工○二十三日神戸港內務省指定

（大正十二年）

ノ重要港灣トナル
是月運賃同盟規約違反者及脫退者續出○市立第二高女及女子商業新築移轉ス○港灣協會兵庫縣支部設立○稀有ノ高溫旱天續ク

九

一日關東地方大震火災突發○二日本市直ニ天機幷御機嫌ヲ奉伺ス。縣市共同ノ震災救援船山城丸ヲ派遣ス○六日緊急市會震災慰問費十萬圓支出ヲ可決。關東地方震災救援事務掌程決定○十二日全國生絲業者大會開カル。神戸港ニ於ケル生絲取引幷輸出決定○十五日市會市立生絲檢查所設置案可決。澤野定七參事會員補缺トシテ當選○二十七日清盛塚琵琶塚ノ移轉工事著工
是月關東震災ニヨリ海運界活躍ス○外國船ノ輸入開始○神戸艀業組合成ル○私立鐘紡診療所開設○芬蘭領事館開設○祕露領事エルアス來任

一〇　十日風速二十九・三米ノ烈風吹ク〇二十六日神戸港修築ニツキ促進ヲ陳情ス
是月板宿地方字名ヲ町名ニ改稱ス〇郵船々員同盟罷業〇希臘副領事ヤング領事事務ヲ執ル〇ガスコ伊太利總領事ニ就任〇丁抹領事館江戸町ヨリ商船ビルニ移ル〇丁抹領事マックスウエル來任

一一　八日市會神戸港擴張工事促進意見書提出〇十日郵船會社船員盟休事件解決ス
是月西須磨公設市場開設〇市營電車從業員規程制定〇帝國製糖神戸工場明治製糖ニ讓渡ス〇港灣協會神戸港修築工事促進ヲ陳情ス〇市營葬儀場改築工事竣功

一二　六日畜魂碑除幕式擧行〇二十日清盛塚琵琶塚移轉供養并竣功式擧行〇二十五日梅ヶ香町二丁目清盛塚前間市電開

（大正十二年）

通○二十七日市會神戸港自由地區設置希望意見書ヲ提出ス

是月神戸中央卸賣市場區域指定セラル○第二期小學校擴張案市會ニ提出セラル○東須磨公設市場開設○兵庫縣清和會發會式○墨西哥總領事ペスケイラ來任

是年

此年度市稅減收市況ノ不振ヲ示ス○八雲吾妻御藏ノ三夜學校增設○須佐商工實修學校設立○縣立工業學校別科ヲ專修科ト改稱ス○池長孟育英商業學校々主トナル○神戸洋服專修學校創立○市立女子商業ニ分敎室ヲ開ク○トラホーム治療專任醫ヲ三人ニ增員ス○市立第一高女定員ヲ一千人ニ增ス○兵庫及灘ノ二信用組合成立○兵庫縣工業展覽會開催○神戸港貿易品見本展覽會開催○學而園開設○生絲業者ノ親睦機關タル神蠶會設立○岸本銀行閉店○明治製糖株式會社神戸工場開設○神戸美術展覽會解散ス

大正十三年　一

○人力車數漸減○男子ノ洋服著用激增○撞球場激增○震災復興材料輸入激增○神戸港過去五十七年來ノ入超額ヲ示ス○生絲絹織物ノ輸出激增○山林原野火災燒失二十回八百餘町ニ及ブ○狂犬病大イニ流行ス○獨逸總領事オールト來任

二日長田神社炎上○八日神戸稅關陸上設備豫算繰延決定○十五日關東地方再ビ震災本市ハ天機幷御機嫌ヲ奉伺ス○二十日道路工事第八號線ノ一部起工○二十一日救護院ノ開院○二十四日生絲檢查事務開始○二十六日市ヨリ攝政宮御成婚奉祝賀表賀牋ヲ奉ル。市ヨリ御成婚奉祝品ヲ獻上ス。官民合同奉祝會ヲ擧グ。御成婚記念事業ヲ決定ス

是月縱貫鐵道改良案ノ大綱決定ス○市教育會々報「更生」創刊○神戸信愛共濟會設置○兵庫保育所開設○中央劇場再

1924

（大正十三年）

築成リ松竹劇場ト改稱ス○神戸水難救護會組織セラル○ヴェネジュラ領事館開設ピックカート來任○白耳義領事アーロプト來任

二

八日電氣局檢査委員會ノ報告アリ。電氣局處務規程改正○二十五日市電須磨線敷設決定○二十八日都市計畫道路第二期事業施行認可セラル○二十九日神戸診療所開所式擧行

是月湊東區青年團聯盟成ル○東須磨耕地整理組合地區内ニ新町名附設○神戸青果株式會社設立○大手土地組合事業ニ著手

三

一日開港港則改正シ神戸港界擴張セラル。市立神戸診療所ノ開所○六日天井川改修工費決定○十日神戸デパート開業。神戸診療所神樂分院開設○十一日報德實業學校報德商業ト改稱○十五日親和女子商業專修學校創設○二十

四日華頂宮博忠王薨去ニツキ弔意ヲ奉表ス。ペスト有菌鼠發見○二十七日市會第二回水道擴張工事可決○二十九日城ケ口墓地移轉費區費充當決定。須磨方面ノ舊字ヲ新町名ニ改正○三十一日特別會計須磨水道事業費ヲ廢止

是月市會第二期小學校擴張案ヲ修正可決ス○給水戸數三年後ノ豫定ヲ突破ス○第二回水道擴張計畫市會ニ提案○臨時教員養成所ヲ廢止ス○兵庫縣傷痍軍人聯合會成ル○市處務規程一部改正○市吏員ノ整理行ハル○神戸港修築工事竣功期ヲ昭和四年度ニ繰延ラル○日本輪業ゴム株式會社設立○平均氣溫四・八度ノ低溫ヲ現ス

四

一日脇濱若菜北野明親道場ノ五小學校ニ高等科併置。笠松通七丁目東高松間市電開通○五日港灣協會第一回總會開催○七日神戸診療所大日分院開院○二十八日十三年度最初ノ市會開會○二十九日湊川公園ノ音樂堂開堂

（大正十三年）

五

是月市立第一神港商業學校々舍一棟ヲ增築ス○第三神港商業學校移轉ス○市立第二高等女學校別科ヲ廢止ス○專任學校醫全部ヲ解職ス○私立聖家族女學校創立○私立神戸成德高等女學校創立○市營墓地使用料規程ヲ改正ス○神戸海洋氣象臺設立

十五日阪神船主運賃同盟ヲ結成ス○十六日神戸診療所本院夜間診療ヲ開始○二十一日全國的ナル船主聯盟成立○二十三日攝政宮御慶事御饗宴奉祝費可決。高架鐵道架道橋新設擴張費支出決議

是月中央職業紹介所神戸驛前出張所事務ヲ擴大ス○湊川發電所內ニ發電機增設起工○新ニ專任學校醫ヲ置ク○伯剌西爾領事シモンセン來任○佛領印度支那總督メルラン一行來神

六

十五日郵船屬員倶樂部落成式○二十二日神戸都市計畫事業公債條例及築港公債條例ヲ改ム。市電第三期線建設費繼續年期支出方法ヲ變更ス○二十六日都市計畫及電氣各公債條例改正○三十日三宮警察署新廳舍竣功。大輪田橋架設

是月都市計畫第二期事業起債認可○同事業用地買收ヲ始ム○長田土地組合認可セラル○神戸蠶絲貿易同業組合創立○消防署神戸タワーヲ望火臺トシテ使用ス○大手耕地整理組合內新町名附設○船舶陸上間有線電話開通○空梅雨ノ現象ヲ呈ス

七

五日葺合ノ假廳舍ニアリシ三宮署新廳舍ヘ移轉ス○七日大輪田橋渡初式○十五日暴風起ル○二十日船大工町築島間市電開通○二十九日市會市電從業員ノ自重ニ對シ感謝ノ意ヲ表ス

（大正十三年）

是月ダンロップ護謨工場勞働爭議起ル○神戸港荷扱所神戸港驛ト改稱○植物檢查所神戸支所京橋側ニ新築移轉ス

八

五日東高松今出在家町間市電開通○十三日弱震アリ○三十日都市計畫事業公債條例ヲ改正

是月阪神電鐵會社市內乘入特許ヲ申請ス○突堤ニテ船車連絡運轉開始○水笠保育所移轉○流行性腦炎始メテ流行

九

一日不具者救濟互助會創立○九日市會築港工事促成意見書提出○十日阪神運賃同盟協定率廢止ヲ決ス○十一日颱風襲來各所ニ被害アリ○二十七日市立生絲檢查所移轉費可決

是月重池公設住宅增築工事竣功○神戸生絲檢查所設備ヲ擴張ス○港灣協會神戸港修築促進ヲ陳情ス○ペスト病猖獗

一〇

八日風速二十六米雨量三十七粍ニ及ブ〇十日第一回勞働統計實地調査施行〇十三日政府都市計畫各種地域ヲ指定ス〇十四日合名會社鈴木商店兵庫電氣軌道株式會社內田汽船株式會社兼松翁記念會株式會社兼松商店川崎造船所神戶銀行集會所各表彰セラル〇十六日神戶高等工業學校開校式〇十八日御料地有償讓渡ノ通牒アリ〇二十九日市電從業員ニ特別臨時賞與支給可決

是月西代公設市場開場〇阪神電鐵三宮ヨリ荒田町二丁目ニ乘入ヲ出願ス

一一

一日都計商業工業住宅三地域指定施行

是月縣傷痍軍人聯合會長定マル〇花莚檢查所輸出野草莚ノ檢查開始

（大正十三年）	一二	三日兵庫縣淸和會神戸支部發會式○七日初氷ヲ見ル○十日神戸愛隣館財團法人トナル○十二日暴風雪アリ○十六日決算調査委員會ノ報告市政上ノ大問題トナル。新ニ市會議員選擧區竝定數條例制定○十八日阪神運賃同盟總會ニテ存續ヲ決ス○二十三日神戸生絲檢査所元町ニ移轉開業 是月西代公設市場開設○兵庫縣港務部神戸稅關ニ合併○神戸稅關植物檢査課ヲ置ク○御料地ノ年賦拂下ヲ受クルコトニ決ス○日淸製粉神戸工場ノ設立○海港檢疫所ノ事務ヲ稅關ニ移ス○和田岬隔離所ヲ市ニ讓受ク○西班牙名譽領事ポルテル領事トナル
	是年	市吏員總數千四百十八人取扱文書百四十四萬通ニ達ス○此年度ノ決算ニ繰越金過年度收入激減ス○田村新吉音樂堂建設基金ヲ寄附ス○文化洋家具競技展覽會開催○貿易

大正十四年

一

大イニ振ヒ十七億五千萬圓ヲ超ユ○神戶商業銀行開業○本市人口七十二萬七千人ヲ超ユ○東須磨耕地整理完成○西灘德井方面耕地整理ニ著手○大手村道路開設工事竣功○新川浚渫工事施行○加納町小公園植樹○湊川公園及東遊園地野球場ニ補設工事施行○神戶官公署野球大會創始○須磨町迄配水管敷設完了○神戶美髮九十九學校創設○神戶盲人技術學校神港盲學校ト改稱○縣立第一高女高等科ヲ併置ス○神戶盲啞學校神戶聾啞學校ト改稱○春秋二回屋外清潔法ヲ施行ス○賣藥營業税及其附加税徵課廢止サル○法人所得税新設○瑞典副領事オクタロニー來任○瑞典領事館前町ニ移轉ス

六日摩耶鋼索道開通○十二日郵船東洋汽船合併案成立○十六日葺合區青年團聯盟成ル○二十九日紅雪降ル○三十日須磨線ノ中東尻池町二軒家間道路改設起工

1925

（大正十四年）

是月神戸中央職業紹介所聯絡紹介所ニ指定○平野公設市場廢止○神戸蠶絲貿易同業組合認可○神戸造船勞働神戸機械勞働兩組合合同ス

二　六日市稅特別稅條例一部改正。塵芥燒却場增改築案決定○九日縱貫鐵道工法ヲ地下式ニ變更方建議成立○二十五日臨時神戸築港陸上設備調査會規程公布○二十八日第一期道路開設工事（山手尻池兵庫高松間）全線竣功。新川橋架設是月入江公設市場廢止○神戸區靑年團聯合會成ル○六甲村都賀土地組合設定○市會高架鐵道反對ノ陳情ニ關シ紛糾ス

三　三日中央卸賣市場設置案可決○七日今出在家出在家町間市電開通。新川橋渡初式○十日臨時神戸築港陸上設備調査會第一囘委員會開催○十七日上席助役永田龜作退任○

十八日神戸港修築工事計畫ノ一部變更○二十七日高商設立建議成立。第二回水道擴張案決定。市吏員恩給條例ヲ新ニ制定ス○二十八日都賀川改修起工

是月神戸中央市場開設準備ニ著手ス○私立神港中學校設立○兵庫縣內鮮協會創立○市內日傭勞働者調査施行○琴緒町及葺合變電所設備完成○神戸市有給吏員定數規程制定○市電第三期須磨線起工○國產波止場市營トナル○第二期道路開設事業完成○墨西哥名譽領事ラタフ來任○白耳義領事モウリン來任○希臘副領事領事ニ昇任ス

四

一日縣營棧橋ヲ市營トス○六日特別市制ニ關シ第三回市會議長會議ヲ本市ニ開ク○八日第二回水道擴張工事目論見書認可申請○九日東川崎町二丁目地先埋立工事成ル○十日日本絹業博覽會開催○眞砂保育所新築移轉シ生田川保育所ト改稱○十七日天皇皇后御成婚二十五周年奉祝費

（大正十四年）

支出決定。苅藻島運河開鑿并埋立決定。永田助役ニ慰勞金一萬五千圓贈與決定○二十日國産波止場管理並使用料條例制定○二十一日日本少年保護協會兵庫支部設立

是月變壓受電設備成ル○電燈從量制度範圍ヲ擴張ス○電氣使用條例ヲ改正ス○本年度ヨリ第二回水道擴張費ヲ特別會計トス○國産波止場事務所ヲ設置○恩賜財團濟生會兵庫縣病院ノ增築成ル○市立第二神港商業學校ヲ夜間商業學校トス○市立女子商業學校選修科ヲ廢止ス○縣立第二高等女學校創立○私立盲學校ヲ合シテ縣立トス○武庫の里創立○湊川音樂堂使用ヲ無料トス○神戸女子商業學校創立○大阪放送局神戸出張所設置セラル◎グアテマラ領事館開設名譽領事ロヨ來任

五

五日長田神社御造營奉贊會成リ奉告祭行ハル○六日市會議場暴漢ノタメ混亂ス○十日天皇皇后御成婚二十五周年

奉祝賀表捧呈奉祝拜賀式擧行。奉祝品ヲ獻上ス。官民合同奉祝會ヲ擧グ○十三日市會混亂ス○十八日國產波止場處務規程定マル○二十二日日本絹業博覽會褒賞授與式○二十三日北但地方ニ激震アリ○二十五日ヨリ二日間市會議員總選擧執行

是月大藏大臣官房臨時建築課神戶出張所ヲ大藏省營繕管財局神戶出張所ト改稱○新湊川大橋架設起工○元居留地經費ノ國庫補助廢止セラル○對印輸出絹物補助問題解決○明治座改築成リ朝日座ト改稱○普通選擧法公布セラル○芬蘭領事ワール神戶專任トナル○佛國實業團來訪

六

三日市長石橋爲之助辭任裁可アリ○五日新市會開會。市會議長ニ太田保太郎當選。副議長ニ當選セル福永嘉吉辭退ス。副議長ニ前田二一六當選。名譽職市參事會員決定○十二日市長詮衡委員選任。公金費消事件落著ス。湊西

（大正十四年）

區青年團聯盟成ル〇十三日第一回市長詮衡委員會開會〇十七日收入役岡山次夫副收入役吉田政治退任〇十八日安光力收入役就任。鷹取町西須磨終點間市電開通〇二十日市臨時統計調查庶務規程制定

是月六甲村八幡土地組合成立〇六甲村篠原土地組合成立〇ソヴエット聯邦總領事館設置

七

一日湊川發電所增設發電機運轉開始〇四日林田須磨青年團聯盟成立

是月兒童相談所內ニ兒童預所ヲ併置ス〇生田川改修建議成立〇阪神電鐵市內乘入ニ關シ市會ニ諮問アリ〇海岸通地先其町々ニ編入〇慶德寮創設

八

五日受電力ヲ增加ス〇十日市長候補者選擧ヲ行ヒ黑瀨弘志當選ス〇十七日黑瀨弘志市長ニ就任〇三十日神戸水上

署新廳舍竣功移轉ス
是月兒童相談所内ニ神戸兒童愛護聯盟會ヲ設置○發聲映畫始メテ聚樂館ニ試寫

九 十二日石橋前市長ノ慰勞金二萬圓ト決定○二十一日國勢及失業統計準備調査執行
是月中央卸賣市場設置起債認可○少年團日本聯盟神戸地方聯盟成ル

一〇 一日第二回國勢調査執行失業ヲモ調査ス○十六日助役事務擔當内規制定○十七日元町デパート開業○二十四日市會ニテ神戸刑務所移轉ニ關スル建議ヲ可決ス。田村啓三紺綬褒章ヲ賜フ○三十日特別市制促進委員決定。杉野繁助役ニ推薦。田中算吉副收入役ニ推薦。神戸刑務所移轉促進建議案成立

（大正十四年）		是月市職業紹介委員規程制定○室內小學校開校○相生座帝國キネマ會社ノ經營ニ移リ映畫館トナル○二萬キロワット受電計畫決定○亞爾然丁領事オルチス來任○智利領事ファブレス來任○中華民國領事周珏來任○極東熱帶病學會々員來神
	一一	三日兵庫縣聯合保護會財團法人トナル○十九日神戸勞働保險組合設立○二十八日學務委員選擧 是月東須磨小學校竣功○外人ノ滯納ニ關シ强制處分執行方稟請○神戸稅關港務部大阪遞信局海事部神戸出張所神戸水上署海岸通綜合廳舍ニ移轉ス○祕露領事ヴェルガス來任
	一二	一日梅ヶ香町二丁目苅藻通一丁目間市電開通○五日對獨船舶損害賠償決定○六日皇孫御降誕ニツキ天機幷御機嫌

ヲ奉伺シ奉祝ス○九日神戸市東防波堤工事促進ヲ申請ス。
第二回水道擴張工事目論見書認可○十二日皇孫御命名式ニツキ賀表幷賀牋ヲ捧呈シ奉祝會ヲ開ク○二十二日最初ノ失業救濟土木事業決定
是月御崎町材木町新設○灘淨水場起工○遠矢長田小學校竣功

是年

此年度ノ歳入決算豫算ヨリ減少ス○第二回水道擴張費特別會計設定○都計事業費激增○鹿島房次郎神戸商業會議所會頭トナル○大日本蠶絲大會開催○圓爲替暴落綿織物輸出激增○對獨輸出空前ノ盛況ヲ呈ス○英吉利關稅引上實施○貿易額十九億圓ヲ超エ輸出入共ニ本港貿易ノ最高記錄ヲ示ス○日本汽船會社太洋汽船會社持船ヲ其手ニ收ム○船債整理進捗ス○工業製品意匠圖案改良ニ著手ス○天王谷縣道ノ一部道路改修○氷室御船室內各橋架設○市

（大正十四年）

電須磨線運轉開始○コレラ病大正九年以來ノ大流行ヲ呈ス○狂犬病未曾有ノ猖獗ヲ來ス○「大正十四年神戸市國勢調査結果表」發行○パルモア女子英學院創立○ハルピン市市會關係者來訪

大正十五年
昭和元年

一

四日都市計畫第二期道路中二軒家須磨驛間起工。神戸勞働保險組合事業ヲ開始ス○十四日川西合資會社震災寄附ニヨリ表彰セラル。福原貸座敷業組合同上。川崎總本店同上。小曾根合資會社同上。神戸海上運送火災保險株式會社同上。神戸瓦斯株式會社同上。株式會社兼松商店同上。乾合名會社同上。神戸組合銀行同上。川崎造船所同上。神戸海運業組合同上。山口合名會社同上○十五日澤野定七田村市朗子爵九鬼隆輝各紺綬褒章ヲ賜フ

是月中山手公設市場開設○神明急行神戸明石間電鐵敷設起工命令アリ○兵庫縣輸出絹織物檢査所創設○英國總領

1926

	事フォスター去リロイツ來任○ドミニカ領事館開館初代領事ピカール來任
二	一日中央職業紹介所少年部開設○神戸婦人同情會愛兒園ヲ開ク○九日小磯吉人綠綬褒章ヲ賜フ 是月三年繼續ノ第二期發電擴張計畫可決○天神橋架設工事起工○新大橋架設工事竣功ス○縣立工業修業年限ヲ四年ニ延長○高架橋工事ノ施工認可アリ○東洋汽船郵船ニ合併
三	三日新湊川大橋渡初式○四日苅藻通廌取町間市電開通○二十二日市會ノ縱貫鐵道改良工事問題全ク落著ス○二十三日大阪商船東阿直通航路ヲ開ク 是月電氣事業公債發行○神戸婦人同情會新築移轉○大日本洗心義會創設○都市計畫ニ依ル受益者負擔金制定○脇

（大正十五年）
（昭和元年）

濱燒芥場新築竣功〇宇治川電氣トノ電力受給契約締結

四

一日葺合女子技藝學校八雲小學校內ニ移ル。宮本蓮池ノ二尋常小學校開校。若松尋常高等小學校開校。全市小學校高等科ヲ獨立セシメ八雲野崎中宮長狹楠兵庫明親若松ノ八單立高等小學校ヲ開ク〇十日市會神戶鐵道局移轉阻止運動ニ著手〇十二日中央職業紹介所俸給者部ノ設置〇十五日中央職業紹介所新築移轉

是月兵庫女子尋常高等ヲ兵庫尋常大開尋常ヲ大開第一大開女子尋常ヲ大開第二尋常ト夫々改稱〇二部教授撤廢セラル〇十夜學校ノ廢止〇第三神港商業再ビ長狹小學校內ニ移ル〇神戶女子商事神港女子商科學校ト改稱〇神戶成德高女新築移轉ス〇市立第一高等女學校修業年限ヲ五年ニ改ム〇神戶山手高女開校〇佛國東洋艦隊來航

五

一日曩ニ著工セル灘淨水場起工式ヲ擧グ○七日市會生絲檢査所新廳舍建築案ヲ可決。學校建築不正問題調査委員附託トナル。市營貯蓄銀行設立案委員附託トナル○八日千苅導水工事變更方稟請○二十日旋風起ル○三十日前々日ヨリ大降雨所々ニ被害アリ

是月阪急電鐵市內高架乘入工法施行認可ヲ申請ス○阪急高架乘入問題起ル○兵庫縣方面委員規程制定○市內在住鮮人生活狀況調査施行○中華民國實業團來神○米國ロスアンゼルス市實業團來神

六

二日長田神社地鎭祭執行○十七日都市計畫第二期道路中六軒家須磨驛間竣功○二十六日鷹取町西須磨間市電開通○二十九日學務委員條例改正案決定。青年訓練所開設案決定○三十日天井川改修工事竣功

是月中央卸賣市場ノ敷地中ノ島ト決定ス○市會阪神電鐵市

（大正十五年）
（昭和元年）

内乘入ニ條件ヲ附シテ答申ス○濱中町中村町御崎本町命名○日本燐寸工業組合設立○西消防署西代出張所移轉○此月降雨量平年ノ約三分一ニ過ギズ○ソヴエツト聯邦總領事マリツエフ來任

七　一日十二青年訓練所開所式及入所式。都市計畫道路改設工事中東尻池六軒家間竣功ス○六日三越神戸支店開業○二十八日學校建築ニ關スル不正問題落著ス○三十日强雷アリ數箇所ニ落雷。汽船衝突艀船三十餘隻流失

是月行政區設置ニ關シ調査ス○私立小泉工場青年訓練所開設○ラヂオ號無電通話事務取扱開始○葺合熊內町方面新町名附設○白耳義領事メリシオル來任

八　二日市會東防波堤工事促進意見書提出○三十日日本郵船セレベス島行定期航路新設

是月高架鐵道工事灘驛西方ヨリ生田川間先ヅ起工〇神戸診療所本院增築著工

九

一日國産波止場事務所神戸水上署舊廳舍ニ移ル〇五日千苅導水工事變更方認可〇八日出在家町地先埋立地無償使用ノ承認ヲ得〇十日山下汽船日本上海間定期航路開始

是月區設置ニツキ廳內打合會ヲ開ク〇颱風襲來被害尠カラズ〇東遊園地貫通道路工事ニ著手〇中央卸賣市場建設起債ノ件認可セラル〇外人ニ對スル滯納處分執行許可方稟請〇神戸人造眞珠硝子珠工業組合設立〇日本精華高女廢校〇野田高女開校〇神戸診療所附屬看護婦養成所開所〇神戸普選準備會成ル〇殘暑酷シク高溫續ク〇米國水泳選手一行來神

一〇

一日兵庫埋立地管理竝使用規程實施〇五日市會議員徽章

（大正十五年）（昭和元年）

規程可決。市會議員當選異議申立落著ス〇二十三日石井川改修認可サル

是月東須磨北野土地組合設立認可〇二萬キロワット受電工事竣功〇平年ニ比シ低溫ヲ示ス〇瑞典皇太子同妃御來神

一一　六日郵船下級船員ノ同盟罷業起ル〇九日最大二萬キロワット受電開始〇十三日米利堅波止場護岸法線改築決定〇十六日武岡豊太紺綬褒章ヲ賜フ〇二十五日大正天皇御不例ニツキ天機幷御機嫌ヲ奉伺ス〇二十八日西灘村會神戸市ト合併ヲ決議ス〇二十九日大正天皇御平癒祈願祭執行

是月西須磨東須磨公設市場移轉改築〇神戸稅關新築竣功〇八幡保育所新築〇米國海上大學一行來訪

一二　一日市及市會ヨリ天機幷御機嫌ヲ奉伺ス。市會議場新設

建議成立○三日千苅導水工事第二回變更方稟請。市ト西灘村交渉委員會合議ス○六日神戸少年暉精寮開ク○十一日新湊川隧道出口ト交流點間改修工事ヲ起ス○十五日川崎汽船舞鶴浦鹽間定期航路開始○十七日天機幷御機嫌ヲ奉伺ス○二十四日市會議事規則改正決定。市會傍聽人取締規則改正。海事協同會成立ス○二十五日大正天皇崩御アラセラレ市民震駭市ヨリ敬悼文ヲ捧呈ス

是月大阪放送局正式放送ヲ開始ス

是年

本年度決算ニ市稅大イニ增收アリ○阪神國道工事完成ス○天井川埋立地道路新設○新開地其他路面鋪裝工事竣功○天王谷縣道一部改修○下水改良工事施行○日本郵船ト東洋汽船會社合併ス○川崎銀行第百銀行ト合併ス○學校看護婦會創立○淸和洋服學校創立○日伯協會設立○海運界稍〻活況ヲ呈ス○縣下中等學校庭球大會開始○屎尿加工

(昭和元年)		ノ硫安製造案廢止トナル○十五年間ニ火災回數最モ多シ ○定期清潔方法ヲ年一回ニ改ム	
昭和二年	一	十四日昭和二年度豫算案提案○二十七日御大葬ニ關シ敬悼奉表ニツキ心得方ヲ市民ニ告示ス 是月室内入江須磨ノ三小學校ニ訓練所分所ヲ設ク○日本勞農黨神戸支部設置○松竹劇場松竹座ト改稱シ映畫館トナル○兵電宇治電合併シ宇治川電氣鐵道部ト改稱ス○阪神電鐵市内ノ國道下ヲ利用スル地下式乘入ヲ出願ス○神戸海事會成立○中旬ヨリ降雨ヲ見ズ	1927
	二	六日大葬儀禮艦鬼怒入港○七日大倉山ニテ大正天皇御大葬遙拜式嚴修○二十二日市電第三期線須磨線成ル○二十八日天神橋竣功 是月路線工事第三期第一號線竣功○野田高女新築移轉ス	

○鹿島房次郎川崎造船所社長ニ就任○明治元年創立ノ外人商業會議所神戸大阪外人商業會議所ト改稱ス○須磨方面人口激增○郵船司廚部員ノ爭議起ル○イ・ダヴリユー・ジエームス外人商業會議所會頭ニ就任

三

一日西須磨下一丁所西須磨東町間市電開通○七日北丹後烈震アリ阪神沿線被害甚大○二十一日長田神社上棟式。日本海員組合對日本船主協會爭議起ル○二十五日神戸都市計畫道路網告示セラル○二十六日千苅導水工事第二回變更方認可

是月神戸中央市場開設及國庫補助申請認可○第二回電氣事業公債發行○阪神國道開通ス○市會停車場ホテル設置意見書ヲ提出○米國クラーク社主催世界觀光團來神

四

一日海事協同會船員職業紹介事務ヲ始ム。市立林田職業

(昭和二年)

紹介所ヲ開設シ兵庫紹介所ヲ廢ス。室内入江須磨ノ三青年訓練所分所獨立○五日大丸神戸支店三宮ニ新築移轉ス○十六日神戸稅關新廳舍淸祓式執行○神戸大豆粕取引所神戸米穀肥料市場內ニテ開業○十七日市會苅藻島運河開設幷附近埋立案ヲ可決○十九日山下龜三郎內田信也紺綬飾版四箇ヲ賜フ。河內研太郞同飾版一箇ヲ賜フ○二十日改正開港港則施行規則實施セラレ神戸港內區分及航路變更○二十二日モラトリアム實施セラル○二十七日海運俱樂部商談部會開會

是月基本財產及積立金ヲ特別會計トス○特別稅條例大改正○鍬下年期地ニ課稅ス○金庫稅電柱稅ヲ新設ス○都市計畫費ニ特別地稅ヲ課ス○市電受電力二千キロヲ增ス○兵庫縣實業協會成ル○大橋公設市場開設○林田公設食堂開設○宇治川熊內市場增改築○民衆協會組織セラル○長狹高等小學校ヲ廢シ其校舍ヲ第三神港商業學校舍ニ充ツ

〇神姫電氣宇治川電氣ト合併ス

五

六日鈴木よね紺綬飾版三箇ヲ賜フ〇二十日松方幸次郎同飾版三箇ヲ賜フ〇二十一日本年度最初ノ市會開會。助役渡邊靜沖再選〇二十三日中村準策飾版一箇ヲ賜フ。男爵川崎武之助飾版二箇ヲ賜フ〇二十八日都市計畫第二期道路中東高松線起工

是月社會民衆黨神戸支部發會式〇港灣協會神戸港修築工事促進方ヲ建議ス〇第二神港商業ニ專任校長ヲ置ク〇帝國汽船ノ整理アリ〇丁抹領事ヨルゼンセン來任

六

一日葺合新川不良住宅地區改良臨時調査會ヲ設置ス〇四日川崎造船所救濟ニ關スル意見書提出可決〇十四日勝田銀次郎紺綬飾版二箇ヲ賜フ。範多龍太郎同飾版一箇ヲ賜フ〇十八日市ヨリ東部町村編入ニツキ內申書ヲ縣ニ提出

（昭和二年）

ス。神戸市民館開ク○二十九日電氣使用條例決定。市立生絲檢査所國營移管方申請書可決
是月赤十字社兵庫縣支部救護部ヲ無料診療所ト改稱○生絲檢査所新廳舍落成○中央卸賣市場開設調査委員會設置○涸梅雨雨量平年ノ三分一ニ過ギズ

七

一日阪神國道電鐵開通○三日消防協會設立○十一日少年職業指導委員會設置○十二日林田須磨青年團聯盟分離獨立ス○十七日神戸市立生絲檢査所落成式○二十三日六甲村會神戸市ト合併ヲ可決ス○二十九日神戸商大ノ郡部移轉阻止要望ニ決ス
是月使用條例ヲ改正シ電燈電力料ヲ値下ス○第三次小學校擴張案ヲ可決○輸出生絲檢査法案實施セラル○兵庫縣護謨工業組合設立○移民收容所官制公布セラル○兵庫縣方面委員規程ノ實施○市內在住鮮人生活狀況調査施行

月	記事
八	八日西平野ハ神戸市編入除外ヲ出願ス○十日平雄丸海州ニテ馬賊ニ襲ハル○二十七日苅藻島運河開設埋立案認可 是月神戸勞働保險組合ノ取扱事業ノ範圍ヲ更新ス○縣立第二高女新築移轉○ウルグアイ領事館開館淺井義嗎名譽領事トナル○伯剌西爾領事ヴィラ來任
九	一日市電第三期二號線梅ケ香町東尻池墓山間市電敷設工事起工○十日內親王御降誕祝詞言上○十五日縣令食料品市場取締規則公布○十九日國立移民收容所建築著工○二十一日神戸港ニ龍卷起ル 是月聚樂館映畫館トナル○中央卸賣市場敷地買收ニ著手
一〇	五日苅藻島運河起工○十日市ハ西鄉町トノ合併協定案ヲ議ス○第二回勞働統計實地調查施行○三十一日東防波堤

（昭和二年）

工事促進意見書提出。築港繰延反對委員ヲ擧グ
是月海員勞働特別調査委員會設置○東洋日本公益ノ三社合併シ大同燐寸ヲ起ス○芬蘭領事瑞典領事事務ヲ兼ヌ

一一　十四日築港繰延運動ノ經過報告アリ。苅藻川八雲橋ヨリ合流點下流改修決定○二十八日不良住宅地區指定方申請案可決
是月商業會議所ノ敷地定マル○外人ニ對スル滯納處分執行許可方稟請○智利領事ラヴァンデロ著任

一二　十四日市內浮浪者調査執行○二十四日特別市制促進委員選定。市會ハ阪急乘入工法高架ニ變更方出願ヲ否決ス○二十五日市正廳ニテ大正天皇御一年式年祭遙拜式ヲ擧グ○二十八日市ハ商業會議所ト共ニ阪急乘入問題ニ善處ス
是月神戸佛教會館成ル○石井川隧道出口ト合流點間改修

工事竣功○東尻池地方新町名附設

是年

本年度歳入出決算未曾有ノ數字トナル○始メテ納稅組合ヲ設ク○市吏員千七百人取扱文書二百萬通ニ及ブ○宇治川沿道路改修○東出町道路擴張○東遊園地貫通道路起工○永澤町柳原間及長田神社附近路面鋪裝○千森川境川間路面修築○第十五銀行休業ス○鈴木商店破産○第六十五銀行休業○國際汽船整理○市電須磨線沿道新築家屋激增○洋風建築激增○カフヱー激增マネキンガール出現○鈴鹿橫山倉庫開業○運河葺合兩發電所運轉休止○電氣局ニ疑獄事件起ル○神戸專修簿記學校開設○神戸神學校中央神學校ト改稱○市聯合青年團各區ニ區聯盟ヲ設置ス○處女會漸次設立○葺合新川ノ不良住宅地區指定ヲ申請ス○中小商業振興問題擡頭ス○勸業館ニ於テ輸出絹加工實習展覽會開催○塵芥運搬車ヲ改良シ面目ヲ新ニス○アルゼ

(昭和二年)		ンチン和蘭英米伊等ノ軍艦入港○ポルトガル領事モラエス退官シテ徳島ニ移ル	
昭和三年	一	一日商業會議所商工會議所ト改稱○十八日日本毛織株式會社表彰セラル○二十五日新湊川隧道入口ヨリ上流合流點迄ノ改修ニ著手○二十八日川崎造船所ノ脇濱地先埋立工事成ル○三十一日新湊川隧道増築工事起工。神明バス運轉開始 是月神戸診療所本院増築竣功○私立神戸製鋼所青年訓練所開カル	1928
	二	三日國立移民收容所竣功○九日市吏員給料支給規程改正。電氣局書記ノ公金横領費消事件落著ス○二十日普通選擧法ニ依ル最初ノ衆議院議員選擧施行 是月洗心學院開設○川崎造船所甦生ノ緒ニ就ク○苅藻島	

附近埋築工事起工○ソヴエット總領事アスコフ來任

三

五日都市計畫第二期道路中東高松線竣功○十二日都市計畫第三期道路改設事業案地方委員會ニテ可決セラル○十三日久宮祐子內親王御葬送遙拜式ヲ擧行ス○十六日縣立第一神戶商業內ニ夜間ノ第二神戶商業開校ヲ決ス

是月中央卸賣市場業務規程調査委員會ニ諮問ス○三年度市豫算增稅案否決セラル○神戶商工會議所建築一部竣功シ事務局ヲ移ス○縣立工業修業年限ヲ五年トス○家政女學校甲種實業女學校トナル○市立小學校訓導保姆住宅料六圓ニ減額○市ト日本電力トノ受電協定成立○大每神戶支局新築移轉○天理教兵神大教會本殿建設○阪急電鐵市內乘入工法變更願書ヲ取下グ○ポンジユラス領事館開館

四

一日神戶診療所市民病院ト改稱。鵯越尋常小學校開校。

（昭和三年）

阪神國道電鐵阪神電鐵ニ合併。東尻池町二丁目同六丁目間市電開通〇十九日內田信也紺綬飾版四箇ヲ賜フ〇二十六日都市計畫第三期事業案認可セラル

是月市立春日野紹介所開設〇葺合紹介所ヲ廢止ス〇市電受電力ヲ增ス〇神戸取引所蠶絲上場ヲ認可セラル〇輸出絹織物檢査所國營移管〇神戸善照會創立〇縣立一中內ニ第一神戸夜間中學講習所ヲ設置ス〇私立神港中學中學校令ニヨル神港中學校トナル〇三菱船舶部本部東京ニ移ル〇湊川溫泉開場

五

二日東防波堤工事促進方陳情。昭和三年度最初ノ市會開會。御卽位大典奉祝費可決。臨時財務調査委員規程可決セラレ委員初メテ選任サル。脇濱町地先埋立地市域編入決定。兵庫外墓ノ鵯越移轉決定。神戸港修築工事一年繰上要望意見書提出〇三日臨時財務調査委員規程告示。日

本海員組合大會ニテ最低賃銀制確立ヲ決議ス○十二日川崎汽船爭議起ル○十三日長田神社正遷座祭○十六日川崎汽船停船爭議解決○二十一日神戸船主會發會式

是月中央卸賣市場敷地地上物件移轉完了○慈友會少年部天王谷學園ト改稱○川崎車輛株式會社成ル○阪急新ニ市內高架式乘入願書ヲ提出ス○日本船主協會對海員組合爭議起ル○北米ヨリ生絲技師十人來神

六

三日小寺謙吉紺綬褒章ヲ賜フ○六日小田東紺綬褒章ヲ賜フ。勝田銀次郎小曾根喜一郎鈴木岩次郎紺綬飾版一箇ヲ賜フ○七日矢田績藍綬褒章ヲ賜フ○二十二日諏訪山動物園開園式○三十日八雲橋下流鐵道橋迄ノ新湊川改修工事竣功

是月平年ニ比シ約六割ノ多雨○外人拒納稅相當額ノ國庫補給方稟請○諾威領事ガンスモー就任○ボリビア領事館

（昭和三年）

開設瀧川儀作名譽領事トナル

七

一日捕鼠班幷殺鼠劑配付班ヲ設置ス。長田公設市場移轉ニ決ス。神戸地下鐵道會社ノ出願ヲ否決ス〇三日市電新ニ一萬二千キロ受電ヲ契約ス〇十四日諏訪山公園落成式擧行

是月兵庫假留監跡ヲ兵庫署ノ敷地ト定ム〇市ト神戸瓦斯トノ報償契約ヲ更訂ス

八

三日普通選擧ニ備ヘ市會議員選擧區竝定數條例改正〇五日聯合青年團御大典記念事業タル鉢伏山山道開設起工式〇十四日東尻池町六丁目同七丁目間市電開通

是月兵庫縣護謨工業組合護謨試驗所ヲ設立ス〇兵庫縣無產大衆黨結成〇山陽電鐵姬路直通運轉開始〇殘暑猛烈ヲ極ム

九　二日平均氣溫三十度ニ垂ントス○二十四日市會川崎造船所救濟資金三百萬圓轉貸ヲ議決○二十八日秩父宮雍仁親王御婚儀ニツキ天機幷御機嫌ヲ奉伺ス。奉祝品ヲ獻納ス是月無產大衆黨神戶支部成ル○殘暑烈シク平均氣溫二十五度ヲ示ス

一〇　一日小寺敬一紺綬褒章ヲ賜フ○七日今上天皇御卽位大典奉祝行事決定○九日御眞影傳達式擧行○十三日市ニ於テ御眞影拜戴式擧行○十五日御大典奉祝神戶博覽會開會式擧行○二十四日吉田吉兵衞紺綬褒章ヲ賜フ○二十九日國際汽船大整理ヲ斷行シ本店ヲ東京ニ移ス是月神戶自治協會成立○運河高松橋詰所設置○神戶市小學校教員共濟會設立

(昭和三年)	一一	一日染谷寛治紺綬褒章ヲ賜フ○三日市聯合青年團ノ鉢伏山道開設奉仕事業竣功式擧行○五日川西機械製作所飛行機部川西航空機會社ニ繼承セラル○六日神戸保導聯盟創設○七日谷江長緑綬褒章ヲ賜フ○九日高松橋架設工事竣功。都市計畫第二期事業道路工事全部竣功。市内二十七社ニ御大典記念ノ神劍奉納○十日今上陛下御即位大典奉祝式擧行○十一日御即位大典奉祝賀表捧呈○十七日矢野殼藍綬褒章ヲ賜フ。太田道銀杯ヲ追賞セラル○十九日高松橋渡初式。梅ケ香町東尻池墓山間市電開通○二十日日本海運業組合聯盟成立○二十一日御大典奉祝獻上品獻納○二十三日中野初太郎緑綬褒章ヲ賜フ○二十四日電力一萬二千キロワット購入認可○二十八日神有電鐵開通 是月近郊ノ公私設社會事業團體神戸社會事業協會ニ加入ス○西宮内有馬道小野中道ノ三商店聯合會成立○兵庫縣教員共濟會成ル

一二	四日市會御大典記念市民運動場建設ヲ議決。市會市廳舍及公會堂新築計畫案可決○十九日初雪降ル 是月長田公設市場移轉○神戸取引所元町分場ニ於テ生絲清算取引開始○海岸鐵道線開通○湊川驛工事竣功
是年	本年度歳入種目殆ド減收不況深刻ヲ證ス○市吏員千七百四十人取扱文書百九十萬通ニ達ス○市立小學校訓導及保姆住宅料四圓ニ減ズ○神戸理髮實修學校開設○諸材料低落シ建築熱高マル○毛織絲羅紗セルヂス輸出品トナル○トツプ毛織絲關税引上○都賀川改修工事竣功○四番町四丁目貫通道路擴張工事竣功○須磨燒芥場完成○第六十五銀行神戸岡崎銀行ニ併合セラル○新湊川上流改修○中央卸賣市場業務規程制定ニ關シ調査委員會審議會ヲ開ク○中央卸賣市場建築案ヲ委員會ニ附議ス○神戸瓦斯會社二

（昭和三年）		千萬圓増資○大正八年乃至昭和八年火災中燒失坪數及損害見積額最モ多シ○四月以降獨米佛英伊蘭ノ軍艦入港
昭和四年 1929	一	三日本年中最低氣温ノ極氷點下五・二度ヲ示ス○七日神戸保導聯盟事業ノ開始○十二日聯合處女會發會式○二十六日神戸商工會議所新築竣功開所式○二十八日元帥久邇宮邦彦王薨去ニツキ天機幷御機嫌ヲ奉伺ス○三十日石井川隧道增築工事竣功○三十一日神戸バス運轉開始 是月滿洲駐劄部隊歸還兵來神○領事團及國際委員ヲ招待シ中絶セル新年祝賀會ヲ開ク
	二	一日新ニ特別市制促進委員十一人ヲ選定ス。市會阪神地下式乘入出願ニ條件ヲ附シ支障ナシト決定ス○八日阪急高架式乘入阻止ヲ決議。阪急乘入ニ關シ知事不信任問題起ル○十一日知事及市長上京シ今上陛下本市ヘ行幸アラ

セラレンコトヲ請願ス○十四日市會阪急高架式乘入ニ對シ意見書ヲ提出○十六日山下龜三郎紺綬飾版一箇ヲ賜フ○二十六日宮內省ヨリ市長ノ出頭ヲ命ゼラレ本市ニ行幸御聽許ノ御趣ヲ達セラル
是月條例ヲ廢シ市學務委員規程ヲ制定○地方委員會阪急電鐵ノ高架式乘入ヲ修正可決○旱魃續キ飲料水ニ支障ヲ生ズ

三

二日行幸主務官及侍從來神。東部町村ノ市內編入支障ナシト答申ス○二十日新湊川隧道上流合流點間改修竣功○二十二日市會市營乘合自動車事業經營可決。市會議員選擧區竝定數條例改正○二十三日北地鶴松紺綬褒章ヲ賜フ○二十八日神戶輸出絹織物檢查所新築落成式○二十九日神戶家政女學校神戶高等家政女學校ト改稱。阪神電鐵市內乘入契約調印

（昭和四年）

是月下水道計畫ノ再調査成ル○近海航路不振○阪神電鐵ノ寄附金ヲ以テ建築資金積立金ヲ設定○私立以文學校廢止○市會内國貿易陸上設備工事施工ヲ決議○祕露領事イグレシアス來任○ドミニカ領事館總領事館ニ昇格ピカール總領事ニ就任○英文「神戸市」二千部發行○ポルテル西班牙名譽領事ニ就任

四

一日六甲村西灘村西郷町ヲ本市ニ編入ス。西灘六甲西郷ニ市ノ各出張所ヲ新設ス。編入町村葺合警察署所管ニ入ル。官立神戸高商大學ニ昇格ス。縣立神戸高商縣立第一神戸商業ニ開校。二葉尋常小學校開校。市電乘車料ヲ六錢ニ値上ス。阪神國道バス運輸開始。編入町村吏員特別任用ニツキ告示ス○四日オリエンタルホテルニテ市域擴張祝賀會開催。特別市制ニ關シ第八回市會議長會議ヲ本市ニ開ク○九日神戸高工土木科ヲ新設○十八日市稅特別

税特例案可決。有給吏員恩給條例改正○二十日行幸奉迎事務章程ヲ制定ス。內國貿易陸上設備工事施工認可ヲ申請ス○二十五日第一回普通選擧法ニヨル市會議員總選擧執行○二十六日開票六十八人ノ新議員定マル

是月區設置ノ議又起ル○此年度ヨリ代書人營業人力車課税ヲ廢ス○雜税々中ニ女給税ヲ新設ス○縣立二中內ニ第二神戶夜間中學講習所ヲ開ク○縣立第一高女內ニ夜間女學校ヲ設ク○有給吏員定數規程改正○市電宇治川電氣トノ受給契約ヲ更新ス○春日野火葬場ヲ市營トス○國產品愛用獎勵運動起ル○キネマ倶樂部始メテ洋畫トーキーヲ興行ス○丁抹領事ヨルゼンセン去リ名譽領事ピヤース來任○瑞典領事芬蘭領事事務ヲ兼攝ス

五

六日新市會招集未曾有ノ混亂ヲ呈ス。市會議長丹下良太郎副議長大久保直次郎當選。名譽職市參事會員選任セラ

（昭和四年）

ル。補償委員決定〇十一日稅關陸上設備工費最終納期變更〇十五日榎並充造綠綬褒章ヲ賜フ〇十七日行幸御日程御變更發表セラル〇二十日市會行幸奉迎表ヲ可決ス。都市計畫地方委員選擧〇二十一日瀧川英一小磯いし表彰セラル〇二十四日田村市郎綠綬褒章ヲ賜フ〇二十八日行幸打合ノ爲メ侍從來神〇三十一日兵庫警察署新築廳舍ニ移ル

是月第三回電氣事業公債發行〇大日土地組合區劃整理實施設計成ル〇成德小學校新校舍ニ移ル〇降雨量平年ノ半バニ過ギズ〇英國皇族グロスター來神歡迎會ヲ開ク〇埃及領事ベイラム事務開始〇西班牙領事ダメート來任

六

四日阪急高架式乘入阻止陳情書提出〇七日今上陛下本市ニ行幸アラセラレ縣廳市役所湊川神社稅關ニ臨幸。市ヨリ奉迎表ヲ奉ル。神戸市史外四點ヲ奉獻ス。戰艦長門ニ

御假泊アラセラル〇八日今上陛下御還幸ノ途ニツカセ給フ〇九日市ヨリ天機幷御機嫌奉伺ノ電報ヲ發ス〇十日縣會開設五十周年記念式幷縣政功勞者表彰式ヲ擧グ〇十二日市長宮内省ニ出頭シ行幸ノ御禮執奏ヲ乞フ。阪急高架阻止ニツキ市會紛糾ス〇十九日山下龜三郎紺綬飾版一箇ヲ賜フ〇二十一日阪急高架式乘入政府ヨリ認可セラル〇二十六日市會議員徽章規程改正

是月市民病院夜間診療ヲ開始ス〇市聯合少年團成ル〇滿洲駐屯部隊出港〇支那駐屯部隊歸還兵來神〇神明急行特許線ノ大變更案ヲ出願ス〇涸梅雨ノ現象ヲ呈シ高溫續ク

七

四日米人スーザン・エー・ツール藍綬褒章ヲ賜フ〇八日市會阪急電鐵ノ施行ヲ阻止セントス〇九日市會刑務所移轉ニ關シ議決ス。市長ヨリ阪急高架乘入認可ノ旨市會ニ報告。〇十七日刑務所移轉生絲檢查所國營ニツキ意見書可決。

（昭和四年）

東防波堤工事促進方陳情
是月神戸製鋼所勞働爭議起ル○兵庫縣産業奬勵館ヲ起工ス○暑氣酷シ

八

二日中央卸賣市場敷地埋立地無償使用認可セラル○六日市長選擧執行黑瀨市長重任ニ決定。臨時財務調査委員規程改正決定。神戸船主會海運界ノ不況對策審議會開會。染谷寬治紺綬飾版一箇ヲ賜フ○十四日烈風起リ被害甚大ナリ○十五日名譽職參事會員定數條例ヲ改正シ九人ヲ十五人トス
是月大手村及池田村ノ舊字ヲ改稱○生田川改修暗渠工事ニ著手○第五回電氣事業公債發行○コレラ病患者發生ス○高溫旱魃續キ水飢饉ヲ生ズ

九

六日神戸婦人同情會愛兒園分園ヲ設置○十四日灘區電氣

料値下問題起ル。議長毆打事件起ル。第六第七選擧區投票分會及開票分會改正。增員參事會員選擧○三十日內親王御降誕天機幷御機嫌ヲ奉伺シ賀表ヲ捧呈ス

是月電燈電力料ヲ値下ス○筒井町ヲ三箇丁ニ分ツ○神戸船主會不況對策ヲ講ズ○パラグアイ領事館開館柴田音吉名譽領事ニ就任

一〇

六日內親王御降誕祝賀式及祝賀會開催○九日神戸協和寮創立○二十四日東防波堤工事促進方陳情。村上金次郎收入役ニ就任。神戸港修築工事繰延反對意見書可決。臨時財務調查委員ヲ推薦決定

是月中央卸賣市場建築案決定ス○鐵道改良ニ伴フ市電軌道工事費補助金決定

一一

一日葺合及三宮警察署管轄區域改正○四日上席助役杉野

（昭和四年）

緊退任。副收入役田中算吉退任〇十八日勢新平紺綬褒章ヲ賜フ〇三十日港灣資源調査規則公布セラル

是月神戸食料品市場協會成ル〇誠佛兒童園設立〇市内鮮人生活狀況調査〇新湊川鐵道橋以南ノ改修工事起工〇松竹座竣功舊松竹座松竹劇場ト復稱〇神戸瓦斯三千萬圓ニ增資ス〇大阪朝日新聞社神戸支局新築移轉

一二　十日市内戸別ノ住宅職業調査施行。神戸市區會條例改正。瓦斯料金値下問題委員附託トナル〇二十三日區會議員選擧執行

是月新湊川運河修築工事著工〇山下汽船内紛ヲ生ズ〇交通標示器設置〇神戸借地借家協調會成ル

是年　本年度市費歲入決算費目豫算ニ比シ殆ド減收トナル〇市吏員千七百人取扱文書二百四十四萬件ヲ算ス〇六甲火葬

場市營トナル○西灘六甲西郷三消防組東消防署附屬トナル○鹿島房次郎商工會議所會頭ニ再選セラル○奉迎道路其他鋪裝工事施行○六甲登山自動車道路春日野墓地内道路改修○特別會計市民病院費設定○同中央卸賣市場費設定○雜種稅條例ヲ改正シ納稅組合設立○生絲輸出激增○紡績機輸入增加ス○生ゴム輸入逐年激增ス○入超額激減ス○神戸美術展覽會創立○船舶金融法案特別議會ニ上程可決○借地借家調停事件漸增○麻雀流行ス○神戸麻雀組合聯合會創立○南米航路殷盛トナル○市内燐寸生產額減少ス○神戸華强學校神阪中華公學ト改稱○市妙法寺川尻ニ公設食堂ノ臨海食堂ヲ開設○神戸海員ホーム財團法人トナル○勸業館ニ於テ納凉海洋博覽會開催○馬匹畜產組合設立○神戸市農會設立○兵庫運河護岸工事施行○英文「神戸市」二千部ヲ發行世界各都市及圖書館ニ贈ル○人形使節神戸孃ヲ北米合衆國ニ贈ル○丁抹領事館江戸町ニ移轉

(昭和四年)		ス○三月以降米英佛ノ軍艦入港ス	
昭和五年	一	九日梅津芳三助役ニ推薦決定。前助役杉野繁ノ慰勞金一萬五千圓ト決定○十二日神戸船主會石炭運賃ノ標準協定ヲナス 是月縣立兒童研究所開設○松蔭高等女學校新築移轉○金輸出解禁實施○ソヴエット總領事代理ボリソフ來任○和蘭領事レヒベル總領事ニ昇任	1930
	二	四日高松宮宣仁親王御婚儀ニツキ天機幷御機嫌ヲ奉伺ス。奉祝品ヲ獻納ス○六日港灣資源調査施行細則公布セラル○二十五日神戸市恩給條例ヲ改正ス。灘水道工事施行認可セラル 是月日本海員掖濟會病院中山手通ニ新築移轉ス○勞務者補導學級ヲ創設○西灘村耕地整理完成新町名附設○須佐	

青年訓練所縣ヨリ私立神戸製鋼所訓練所文部省及縣ヨリ夫々選奬

三

十五日黄砂襲來ス〇十六日小龍卷起ル〇十七日船主强制組合設立ノ協議會東京ニ開ク〇二十六日私立育英商業西代ニ移ル〇三十一日私立村野工業第二本科ヲ併置ス。特別會計第二回水道擴張費ヲ廢止ス

是月本年度增税案又否決サル〇國立移民收容所別館ヲ增築ス〇私立神戸高等技藝女學校創設〇山下等ノ五汽船會社北洋材プール結成〇中華民國領事周珏總領事ニ昇任〇元港長マールマン逝去〇米國世界觀光團一行來神〇丁抹皇族アクセル來神〇同國皇太子東上ノ途來神〇バレーナ西班牙名譽領事ニ就任

四

十五日助役事務擔當内規ヲ改正ス〇二十四日高松宮同妃

（昭和五年）

鹿島丸ニテ御發向アラセラル
是月神戸市有給吏員定數規程改正實施〇家屋賃貸價格調査成ル〇灘區教育會創立〇私立神戸三菱青年訓練所開設〇神港女子商科學校神港女子商業學校ト改稱〇鐘ヶ淵紡績兵庫工場總罷業起ル〇神戸立正慰靈會創立〇英領印度差別關稅設定〇ソヴエツト總領事ヴエセロフスキイ來任〇米國世界觀光團一行來神

五

十五日縣產業獎勵館落成式〇十九日中央卸賣市場敷地ノ使用認可セラル〇二十二日市電從業員同盟罷業ス〇二十八日同盟罷業解決。瓦斯料金値下認可指令アリ。觀艦式記念海港博覽會協會ニ對シ市ヨリ十五萬圓補助決定。背山開發計畫決定〇三十日觀艦式御擧行御內定ニツキ事務委員任命ノ旨海軍省ヨリ通牒アリ
是月青年訓練所ニ囑託醫ヲ置ク〇輸出補償法實施セラル

〇鐘鑄場一帶ヲ川中町ト命名ス〇外人滯納處分ニ付稟請

六

一日兒童相談所東山町ニ新築移轉ス。船舶金融法實施セラル〇三日國勢調査ニ關スル臨時事務規程ヲ制定ス〇二十日市內國道線ヲ起工ス〇二十六日觀艦式事務委員規則制定セラル

是月中央卸賣市場建築實施設計成ル〇支那駐屯部隊歸還兵來神〇阪神電鐵市內乘入特許セラル〇神戸船主會時事對策ヲ決議ス〇私立親和女子商業專修學校移轉ス

七

一日市營乘合自動車業經營免許セラル。觀艦式海港博覽會第一會場敷地トシテ埋立地使用認可セラル〇十一日觀艦式關係諸費支出可決。裏山開發調査委員會設置ノ建議成立ス。社會課雇員ノ公金費消事件ノ報告アリ。瓦斯料金値下問題落著ス〇二十九日內國貿易陸上設備工事施工

（昭和五年）

一部認可アリ〇三十一日神戸商工會議所政府ニ海運振興策ヲ建議ス
是月蠶絲業者市立生絲檢査所ノ格付實施方ヲ政府ニ陳情ス〇太平洋同盟成立シ運賃協定ヲ決ス〇神戸船主會大量繫船ヲ決ス〇日本船主協會船員下船手當貸付ヲ行フ〇長田土地組合域內ノ字名ヲ改稱ス〇板宿地方町名改稱〇東尻池村町域改正〇海岸通一丁目地先埋立地同町ニ編入〇高溫旱魃續ク〇埃及領事エム・フハウヂイ來任

八

一日觀艦式記念海港博覽會場地鎭祭執行〇二十五日日本船主協會等三團體ヨリ海運審議會設置方ヲ政府ニ陳情ス〇二十六日兵庫中央埋立地第一第二突堤間使用認可セラル〇二十八日中央卸賣市場地鎭祭執行〇三十日落雷豪雨アリ
是月中央卸賣市場建築ヲ指名入札ニ附ス〇神戸藤花園創

立

九

六日捕鼠班ヲ增派ス○十日兵庫臨港道路開設工事起工○
十一日水上協會創立○十六日市營乘合自動車運轉開始○
二十日海港博覽會開催○二十五日海港博覽會開會式擧行。
灘水道工事變更方認可
是月黑田侍從來神觀艦式事務打合ヲ行フ○生田川改修暗
渠工事竣功○郊外本山村西部魚崎町等五土地組合認可○
濱添燒芥場廢止○菊池小學校開校ス○灘區青年團聯盟成
立○汚泥ノ海上投棄ヲ廢ス○交通安全協會組織セラル○
海員協會生田町宿泊所開設○第二十一號上屋竣功

一〇

一日第三回國勢調査執行。乘合自動車ホワイト大型車十
五輛完成○四日高架鐵道工事政府補助金決定○八日東防
波堤工事促進方陳情。神戸港修築繰延反對意見書ヲ提出

（昭和五年）

ス○十日第三回勞働統計實地調査施行○二十日忠魂碑除幕式○二十二日陛下觀艦式奉迎賀表可決。今上陛下御召艦霧島ニテ御入港羽黑ニ御移乘江田島ニ向ハセラル。市長ヨリ獻上品目錄ヲ捧呈ス○二十三日觀艦式參加全艦隊神戸沖ニ集結。全艦隊將兵ニ市ヨリ清酒其他ヲ贈呈○二十五日御召艦羽黑入港霧島ニ御移乘アラセラル。市ヨリ奉迎賀表ヲ捧呈ス○二十六日神戸沖ニテ觀艦式ヲ行ハセラル。午後海路御還幸ノ途ニ上ラセラル

是月觀艦式拜觀ノ爲メ空前ノ賑ハヒヲ呈ス○第三神港商業新築起工○神戸案內所中央紹介所ヘ移ル○米國觀光團來神○英國經濟使節「トムソン」一行來神○長田村ノ耕地整理成リ新町名附設○兵庫縣土地區劃整理組合協會成立ス○吾妻通等ノ一部ヲ不良住宅地區トシテ指定セラル

一一

一日觀艦式記念海港博覽會閉會式○五日海員萬靈塔除幕

式○十三日今上陛下岡山縣へ行幸ノ御途次神戸市ヲ御通過アラセラル○十五日消防職員招魂碑除幕式舉行。失業者表成ル。菊水橋警察署新設○二十六日市立第一高等女學校增改築決定。三小學校增設決定。名譽職員費用辨償規程改正。特別市制促進委員改選○二十八日川中町外墓移轉式執行

是月苅藻島運河附近埋立一部竣功○善福寺開堂式○須佐處女會文部省ヨリ選奬セラル○船舶陸上間無線電話通信範圍擴張○カナダ東洋觀光團來神○英國經濟使節又來神○シャム國カムペルベッチ親王來神○西班牙領事エス・ピノザー來任

一二

五日市ノ第一回勞務者輔導學級開設○十七日縣立神戸病院落成式舉行

是月神戸愛隣館特別御下賜金三千圓ヲ拜受○川西航空機

（昭和五年）

會社鳴尾ニ移轉○川崎造船所第二次整理案作成○ラヂオ需用戸數一萬五百ニ上ル○大同海運創設○繋船累增新記錄ヲ出ス○阪神電鐵市內乘入工事ニ著工ス○中央職業紹介所授職部ヲ設置○和蘭領事館明海ビルニ移ル

是年

本年度歲入決算ニ市稅減收トナル○市ノ巡回產婆ヲ增員ス○西灘夜學校ノ新設○市ノ勞働紹介率九割ヲ超ユ○中村燒芥場完成ス○新生田川ノ埋立及植樹完成○湊町一丁目相生町間道路擴張起工○マールマン記念ノ時砲ヲ會議所前ニ移ス○神戸法律學校創立○公設質屋費ヲ特別會計トス○第二回水道擴張事業完成ニヨリ特別會計ヲ廢止ス○松蔭高女靑谷町ヘ移轉○馬匹畜產組合共同厩舍二箇所設置○停繋船數激增ス○郵船及商船會社無配當斷行○海上從業者ノ爭議屢々起ル○漁業組合二ヲ增シテ七組合トナル○阪急電鐵特急運轉開始○阪神電鐵御影高架線完成

昭和六年	
	○松本座閉鎖○以後本港輸出貿易額全國ノ首位ヲ占メテ三十五%ヲ超ユ○本市在住朝鮮人著增○「昭和五年國勢調査事務概要」印行○「神戸市勢調査結果表」印行○丁抹皇太子フレデリック親王來神○英米伊葡ノ軍艦來港
一	九日菊水丸佛船ポルトス號ト衝突ス。積雪十六糎ニ及ブ○十一日最低氣溫氷點下五・九度ニ下ル○十四日市長ヨリ貯木場設置方盡力ヲ港灣協會ヘ依賴ス○十八日市長ヨリ臨港鐵道工事ヲ促進ス
	是月市電ト省線ノ湊川交叉豫備工事ニ著手ス○兵庫縣美術家聯盟成ル○岡崎忠雄商工會議所會頭トナル○日本海員組合神戸授產所ヲ開設○兵庫突堤事務所設置○伯剌西爾總領事館ヲ開ク
二	一日恩賜財團濟生會林田診療所開ク○四日市會傍聽人取
1931	

（昭和六年）

締規則改正。市會貯木場設置方建議案ヲ可決ス。競馬場市營意見書提出ヲ決定○七日松方幸次郎紺綬飾版一箇ヲ賜フ○十一日不具者救濟互助會九州支部ヲ設置○十九日神戶市區設置規程案市會ニ提案セラル

是月長田北部ノ溜池廢止處分決定○繫船激增ス○三宮歌舞伎座映畫館トナル○大手土地組合整理工事完了○聯合母の會成ル○入江青年訓練所及私立小泉青年訓練所縣ヨリ選奬

三

七日內親王御降誕祝詞言上○十三日內親王御降誕奉祝賀表捧呈○十五日菊水橋方面委員會授產場開ク○十八日第二突堤頭部使用認可○二十八日苅藻島埋立幷運河竣功式擧行○三十一日行政區設置案可決セラル

是月市電省線ノ相生橋交叉ノ豫備工事ニ著手ス○中央市場鐵道引込ニツキ意見書提出○洗心學院明星寮ト改稱○

東消防署西灘出張所新築○市ヨリカナダ晩香坡市ニ櫻苗木ヲ寄贈ス○駒榮町地先埋立工事竣功○新湊川下流改修工事竣功○新湊川運河竣功

四

一日昭和六年度ノ豫算決定ス。同七年度ヨリ屎尿汲取料徴收ニ決定ス。國立神戸生絲檢査所事務開始。湊川方面委員會授産部開設。海事協同會高級船員ノ授職事業開始。運河管理竝使用料條例制定○七日市會臨港鐵道促進意見書提出○八日晩雪降ル○二十日區役所設置方認可ヲ政府ニ稟請ス○二十一日臨時事務改善委員規程ヲ廢シテ新ニ臨時事務整理委員會規程ヲ設ク○二十三日第一回臨時事務整理委員會開催○二十四日縣立神戸高商市外垂水町ニ移轉ス○二十七日市長貯木場設置方ヲ陳情ス

是月點滅式交通整理柱設置○濠洲航路配船激増ス○苅藻島運河附近埋立全部竣功○同運河東西ノ二徴收所設置○

（昭和六年）

メートルとサイズ展覧會開催○ハンブルグ・アメリカン觀光團來神○トーマスクック社觀光團來神

五　十七日神戸商大本館起工式執行○十九日郵船商船兩社提携成立○二十三日市參事會員選擧○二十六日市長再ビ貯木場設置ヲ陳情ス○二十八日豌豆大ノ降雹アリ○三十日陸上設備工事急施申請

是月神戸商業銀行解散ス○生絲檢査所廳舍增築起工○中部日本馬鈴薯玉葱輸出組合成立○神戸小賣商聯盟成ル○不良住宅地區改良事業方法ノ認可○芬蘭大阪駐在名譽領事阪神事務ヲ管ス○ヴェネジュラ東京名譽領事神戸ノ領事事務ヲ管ス○ハイチ領事館開館名譽領事コルズ來任○伯剌西爾總領事コート來任

六　四日市會國際海水浴場幷國際ホテル設置方建議ヲ可決○五日第二波止場地先防波堤除却工事著手方ノ通牒ニ接ス

七

○八日商船山下兩汽船相互扶助契約成立○十七日市長臨港鐵道工事促進ヲ陳情ス

是月巴里ニ開催ノ「日本ニ關スル人文地理展覽會」ニ市ヨリ出品○市立第一神港專修科ヲ廢ス○海運協和會成ル○降雨平年ノ三分一ニ過ギズ○巴奈馬領事館閉鎖

一日神戸市行政區設置官報ヲ以テ布告セラル○六日川西清兵衞紺綬飾版及章記ヲ賜フ○十日既定年度內ニ築港完成方ヲ希望ス○十四日市會神戸土木出張所廢止ニ反對ス○十七日兵庫方面委員會授產部ヲ開ク○二十一日不良住宅地區改良事業ニ著手○二十八日市長以下ノ俸給改正セラル○三十日天王川上流改修工事竣功

是月市電省線瀧道交叉點ノ豫備工事著工○日本栗北米輸出組合成立○乘車料條例改正案議決○山下川崎兩汽船提携成ル○須磨地方新町名附設○都賀西灘地方新町名附設

（昭和六年）

八

○御大典記念市民運動場建設工事著工○降雨量平年ノ二倍ヲ算ス○ヒューストン夫妻來神

四日市長臨港鐵道工事促進ヲ陳情ス○八日田村新吉紺綬飾版一箇及章記ヲ賜フ。辻田いし樫田豊谷江長小曾根貞松紺綬褒章ヲ賜フ。神戸矯修會表彰セラル○十四日市吏員採用選拔試驗施行○二十二日稅關陸上設備工事二箇年繰延ベラル○二十八日屎尿汲取運搬手數料條例發布○二十九日臨港國道開設起工

是月區役所設置ニツキ市民ニ注意ヲ促ス○市吏員任用規程改正○市吏員ノ整理ヲ行フ○市電省線御幸通交叉點ノ工事ニ著手ス○南防波堤東燈臺點燈ス○東防波堤ノ北及南燈臺點燈ス○山下東洋兩汽船共同經營實施○グワテマラ領事バイル來任

九	一日新處務規程ヲ實施シ大イニ局課處務ノ廢合ヲ行フ。新ニ市ニ土木部ヲ設ク。神戸市區設置規程告示。明治四十一年來ノ懸案解決シテ八區役所開廳ス○二十一日林田公設質屋創設○二十二日六甲登山架空索道開通ス○二十三日名譽職市參事會員十五人選任セラル○二十五日臨時觀光施設調査委員規程制定○三十日春日野車庫竣功 是月菊池小學校板宿小學校ト改稱○東須磨北野ノ字名ヲ改稱ス○此頃ヨリ邦畫トーキー出ヅ○シャム國皇帝皇后皇族來神○ヴェネジュラ領事館再ビ開設
一〇	一日中央埋立地北部使用認可セラル。鐵道線ト市電ノ切替ニ著手ス○十日鐵道高架線及市電軌道切替工事完了シ高架鐵道開通ス○十二日風速二十一・九米ノ颱風雨アリ○十九日湊西區ヲ兵庫區ニ改稱方建議成立 是月市會名倉尋常小學校新設ヲ可決○神戸鍼按學校創立

（昭和六年）

○鬼ヶ平土地會社鷹取山麓ノ土地整理ニ著手ス○西須磨地方新町名附設○滿洲事變ニヨリ海運界活氣ヲ呈ス○日本護謨工業組合聯合會成ル○神戸海陸產物輸出組合成立○ソヴエート總領事館北野町四丁目ニ移轉○エキスプレス社主催觀光團來神

一一　七日共同漁業株式會社表彰セラル○十六日外人滯納金處分方ヲ稟請ス○十八日神戸港沖合ニ小龍卷起ル○二十一日灘區役所新築落成
是月日本海運業組合聯盟全國大會開カル○エチオピア答禮使來神上京ス

一二　一日改正乘車料條例實施○十日野口前戸籍課長ニ慰勞金贈與ノ件可決。特別市制委員十三人選定。市會高架複々線工事ヲ促進ス。同神戸港修築工事繰上施行ヲ促進ス○

十六日市長神戸港修築既定年度內完成方陳情〇十八日市會同上ニ付意見書ヲ提出ス〇十九日中央卸賣市場業務規程市會ニ於テ可決ス〇二十三日臨港鐵道敷設工事著工〇二十八日市上水道幹線鐵管及變電所位置ニ關スル條例議員ヨリ提出サレ可決

是月屢々陳情セル神戸土木出張所存置ノ內報ニ接ス〇海員協會會下山宿泊所開設〇市內工業極度ノ不振ニ陷ル〇縣會ニテ灘警察署新設決定〇神戸輸出織物染色工業組合設立〇神戸絹布人造絹織物輸出組合創立〇日本綿屑物輸出組合創立〇再度筋ヲ再度町ト改稱ス〇阪急電鐵乘入工事認可ヲ申請〇英國總領事館領事館トナル〇英總領事ローイツ去リ領事オーースチン來任

是年

本年度歳入中市税ノ減收著大ナリ〇市吏員千七百五十人取扱文書二百二十三萬通ヲ超ユ〇海運協和會結成〇日本

（昭和六年）		郵船優秀船就航○神戸港貿易大正六年來ノ不振ヲ示ス○阿弗利加洲貿易躍進○綿業界不振原棉輸入激減○財界動搖混亂ス○印度政府關税引上實施○北長狹通長田交叉點須磨電車道路等鋪裝○在留支那人激減○神戸同文學校休校○神戸姫路間電鐵山陽電鐵會社ノ經營トナル○軍需工業隆盛トナル○米國領事館東町ニ移ル	
昭和七年	一	一日新湊川運河使用開始。運河管理竝使用料條例實施。生絲新檢査法强制施行。救護法實施○四日須磨方面委員會授産場開設。中央市場鐵道引込線工事著工○十三日千歳座燒失	1932
		是月上海事變勃發シ海運界ニモ影響ス	
	二	二十六日市政事務調査會設置セラル	
		是月衆議院議員選擧棄權率增加ス○兵庫青年訓練所及灘	

處女會縣ヨリ選奬○タテイル白耳義領事事務代理ニ就任○ワシントン二百年祭祝賀會開催

三

十日六甲越有馬鐵道開通○十二日第二期水道擴張工事竣功式○三十一日市廳舍及市公會堂新築案廢止。フォース追悼式

是月第二期發電擴張計畫認可遲延シテ繼續年限ヲ延長ス○生田川公設市場廢止○阪急高架工事ニ關スル諮問ヲ議ス○湊川方面委員會授產部裁縫部ヲ設置ス○神戸商大ニ存置セル商業專門部廢止セラル○神戸商大第一回卒業生ヲ出ス○公設市場規程制定○神戸能樂會組織セラル○阪神電鐵線路增設計畫成ル○國際聯盟調査委員一行來神

四

一日無料法律相談所開設。屎尿汲取手數料條例ヲ實施ス○十二日兵庫臨港道路竣功○二十日中央卸賣市場建築竣

（昭和七年）

功○二十八日私立神戸女子藥學專門學校開校○二十九日市民運動場開場式

是月中央卸賣市場事務所ヲ新築市場內ニ移ス○荒田公設質屋開設○西灘第一西郷六甲ノ三尋常高等ヲ灘西郷六甲ノ各尋常小學校ト改ム○灘高等小學校開校○西灘第二同第三各小學校ヲ稗田摩耶ト夫々改稱○福住成德ノ二小學校開校○縣立第一商業市外垂水町ニ新築移轉ス○縣立盲學校市外ニ移ル○縣立工業專修科ニ電氣護謨ノ二科ヲ增設○親和高女改築落成○報德商業移轉ス○神戸蠶絲貿易同業組合分裂シ輸出問屋ノ二組合トナル

五

一日市內ニ火災報知機ヲ設ク○三日屎尿汲取ニ關スル施行細則成ル○四日澤田清兵衞紺綬褒章ヲ賜フ○十七日學齡兒童就學奬勵規程制定○二十六日國產波止場內航大棧橋ヲ移ス○二十八日中央卸賣市場竣功式。總量六十一・一

六

耗ノ大雨降ル

是月公設食堂食器ヲ改良シ酒類ヲ販賣ス○成德小學校新築移轉○中央卸賣市場規程同處務規程制定○第二十號上屋竣功○水族館擴張ス○佛國前大統領ズーメル追悼會開催○外人商業會議所會頭ブルム逝去○英國領事オースチン去リフイプス來任○米國領事デイクコヴアル去リドノヴアン來任

十日石井川上流改修工事竣功ス○十三日裏山開發ニ關スル委員會ノ報告ヲ承認ス○十五日上水道幹線鐵管及變電所ノ位置ニ關スル條例ヲ市會ノ再議ニ附ス○十八日縣食料品市場取締規則改正○二十三日防空演習第一回具體的協議ヲ開ク○二十九日海上燈火管制協議會ヲ開ク

是月市ノ失業勞働者食糧補給事業開始○神戶勞働組合同盟結成○渡滿部隊來神○政府海運審議會ヲ設ク○歐洲同

（昭和七年）

盟汽船神戸大阪間運賃ヲ撤廢ス○祕露領事サラス來任

七　一日燈火管制ニツキ告示ス○五日防空演習打合。地區防護本部ヲ設ク。市商工課奉天出張所ヲ奉天商工會議所内ニ設ク○十三日神戸防空演習本部ノ組織成ル。十一日ヨリ一週間防空週間トシテ防空思想ノ普及ニ努ム○十五日市及伊丹尼崎西宮御影ノ綜合演習ヲ行フ○十七日本市最初ノ大防空演習擧行○二十四日七月ノ最高氣溫新記錄三十六・六度ニ上ル○二十六日海事審議會總會ヲ開キ船質改善助成等ヲ議ス○二十九日市會議員選擧區竝定數條例修正

是月西灘地方區劃整理ニヨル町名新設○兵庫及岩屋埋立地ニ新町名ヲ附ス○屢々豪雨アリ慘害全縣下ニ及ブ○神戸大豆粕取引所神戸穀肥取引所ト改稱ス○瑞典燐寸會社破綻○神戸米穀肥料市場解散シテ神戸米穀市場組合神戸

穀肥問屋組合成立ス○市教育會會報「更生」「神戸市教育」ト改題ス○全市小學校ニ於テ學校給食ヲ開始ス○大開第一第二校合併シ大開尋常小學校ト改稱ス○郵船ノ歐洲航路復航ノ大阪寄港反對運動起ル○氣溫三十五度以上九日ニ及ブ○藤井俊雄西班牙領事事務代理トナル○國際聯盟調査委員再ビ來神

八

十五日市會議員選擧區並定數條例改正認可ヲ稟請○二十四日海事協同會船舶改善助成法實施ニ伴フ失業船員問題ヲ議ス

是月兵庫縣滿蒙事變犒軍會設立セラレ神戸支部會ヲ置ク○海軍協會神戸支部ヲ兵庫縣支部ト改稱ス○市營乘合自動車增設○海外移住組合成ル○海事協同會失業船員ニ食糧補給ヲ開始ス○川崎造船所債權債務者間ノ和議成立○伯剌西爾總領事ボップ來任○大阪駐在亞爾然丁名譽領事

（昭和七年）

神戸ヲ兼攝ス

九

十日颱風襲來ス○十六日失業救濟土木事業案可決サル○二十一日失業應急山地開發土木事業費支出可決。無料宿泊所二箇所設置案可決。市會議員選擧投票分會及開票分會改正。改正市會議員選擧區並定數條例改正願更正認可セラル。神戸市會議員選擧區條例定マル。市會議員定員六十人トナル○二十六日船舶改善協會成立

是月神戸鷄卵株式會社創立○市電軌道第六號線建設著工○渡滿部隊來神○市會山陽電鐵ノ高架線乘入ニ反對ス○移住渡航者支度品供給委員會成ル○日本燐寸組合燐寸工業ノ統制ヲ期ス○西班牙領事モンテ來任○伯剌西爾領事館大阪ヘ移ル

一〇

一日船舶改善助成法實施○九日神戸協和寮別館旗塚通ニ

成ル○二十七日前日來第十三回市會議長會議ヲ本市ニ開キ特別市制ニツキ協議○三十日光徳寺古代印度式殿堂ノ新築成ル

是月地方委員會高架線下ノ利用ヲ議ス○縣立兒童研究所新築移轉ス○神戸女子神學校市外ニ移轉ス○縣下中小商工業者低利資金融通ヲ開始ス○滿洲國特派大使謝介石一行來神ス

一一

十四日强風起リ難破沈沒船ヲ出ス○十六日外人滯納金處分決行ヲ稟請○二十二日海員會館建設案可決。旅費條例制定。名譽職費用辨償規程改正。外國人市稅滯納ニ關シ意見書ヲ政府ニ提出ス○二十八日中央市場鐵道引込線工事竣功

是月神戸國產鷄卵株式會社創立○須磨市電車庫新築著手○海運界活況ヲ呈ス○第一回水道擴張公債起債○電氣事

（昭和七年）

業公債發行○移民收容所移住教養所ト改稱ス○大同燐寸會社瑞典燐寸會社ヨリ獨立ス○英國領事館京町クレセントビルニ移ル

一二

二日鵯越遊園墓地落慶式擧行○十四日無料宿泊所東光寮ヲ開ク○十六日神戸市場驛營業開始○十七日兵庫第一突堤西半岸壁中央埋立地東部等使用認可セラル○十八日中央市場業務規程施行セラル○二十二日神戸中央卸賣市場生魚部及鳥卵部開場。外人滯納稅强制徵收永代借地權ノ解消ニツキ意見書提出○二十八日無料宿泊所西輝寮ヲ開ク

是月市電臨港國道線成ル○林田區内工場數激增ス○生田川埋立地植樹及鋪裝工事完成○市内物品販賣營業所二萬二千ヲ算ス○市内工場及職場總數六千六百ヲ算ス○第二回水道擴張公債起債○使用水量激增シ水不足ヲ告グ○中

央卸賣市場業務規程施行細則制定〇信用組合合同問題擡頭ス〇亞爾然丁領事アランブル來任

昭和八年

是年　本年度歳入決算ニ徴シ市況ノ回復ヲ知ルニ至ル〇公共貯木場設置決定〇受驗壯丁數大正八年來ノ最高ヲ示ス〇滿洲事變後ノ國防獻金激增〇布引市ヶ原再度山等水害復舊工事施行〇中道筋湊川右岸其他ノ道路鋪裝施工〇雜種稅ニ對シ新ニ都市計畫費ヲ徴課ス〇貿易回復ノ徴ヲ示ス〇燐寸輸出貿易稍〻活況ヲ呈ス〇棉花輸入激增ス〇京神兩都市對抗陸上競技大會ヲ創始ス〇本市方面委員聯合委員會ヲ組織ス〇佛英伊軍艦入港〇伊太利領事事務ヲ佛國ニ委任ス

1933

一　一日市電第六號線(臨港國道線)開通。神戸市區設置規定改正セラレ湊西區ヲ兵庫區ト改稱ス〇十四日外人滯納ニ關

（昭和八年）

シ國庫補給金交附方禀請○十九日永代借地權委員會官制公布實施セラル○二十一日神戸港振興調査會設置案議決○三十一日私立神戸女子藥專市外ニ移ル

是月市ト阪急トノ契約成リ阪急ヨリ百萬圓寄附決定○神戸取引所正米部ヲ設ケ正米市場ヲ宮前町ニ新設○實業協會神戸港振興ニ盡ス○市ノ救護院新築及灘分院ノ新設ヲ決ス

二

三日山田村合併問題起ル○七日中央埋立地西南部使用認可セラル○二十四日神戸刑務所火災

是月兵庫縣滿蒙事變犒軍會慰問袋取扱開始○中央市場ノ北海物産業者合流問題解決○瓦斯料金值下問題解決○松上青年團縣ヨリ表彰セラル

三

十日海員保護施設協議委員會成ル○十六日中村直吉紺綬

褒章ヲ賜フ○十八日教育界ノ不祥事件市會ニ報告セラル○二十七日第三回水道擴張計畫施行認可申請○三十日市會會議規則改正案議決。市教育廓清調査會設置ノ建議出ヅ

是月神戸漬物會社創立○兵庫縣工業試驗場神戸工業試驗場ト改稱○輸出絹織物檢査所海岸支所ヲ新設○神戸少年暉精寮改築成ル○市立小學校大擴張案定マル○瓦斯會社市ニ二十萬圓ヲ寄附ス○神明國道竣功

四

一日葺合女子技藝學校其冠稱ヲ廢ス。神港百貨店開業○二十五日市會議員選擧執行。市會選擧棄權率二割八分ヲ超ユ。赤尾善次郎紺綬褒章ヲ賜フ○二十八日私立學校幼稚園補助規程ノ制定

是月第三回水道擴張費ヲ特別會計トス○運河管理條例竝使用條例改正○名倉尋常小學校開校○小學校二部教授ヲ

（昭和八年）

復ス○實修學校規程改正○神戸女學院市外甲東村ヘ移轉ス○市電須磨車庫新築竣功○都市計畫區域ノ墓地ヲ定ム○市立春日野紹介所移轉ス○渡滿部隊來神○仲仕休憩所開ク○神戸觀光案内所開設○地方委員會高架線下ノ利用方ヲ可決○兵庫縣傷痍軍人聯合會兵庫縣傷痍軍人會ト改稱○六甲山乘合及六甲越有馬兩社買收交渉開始○佛英軍艦入港○佛副領事ロアイエールル事務ヲ視ル

五

二日神戸港修築追加工事分擔支出額定マル○八日新市會開會。市會議長ニ勝田銀次郎副議長ニ前田二一六當選。名譽職市參事會員補償委員都市計畫地方委員各定マル。發疹チフス突發ス○九日兵庫縣國防協會發會式。大日本國防婦人會神戸支部發會式○二十日神戸刑務所移轉促進委員決定。市會議員滿洲視察囑託費支出可決。學務委員決定。臨時觀光及臨時財務調査委員決定。區有財産管理

委員決定。灘區塵芥燒却場設置建議成ル○二十二日市會永代借地權解消幷外人滯納ニ關スル委員選定

是月電氣事業公債低利ニ借替○神戸海產物株式會社創立○渡滿部隊來神○神戸取引所新築著工○濟生會兵庫縣病院改築ニ著手○眞砂住宅竣功

六

一日眞砂住宅收容ヲ開始ス○六日高架複々線工事促進意見書提出ニ決定ス。西宮市外十七箇町村組合組織及規約改正可決。神戸區鹽ヶ原ノ山林ヲ市ニ寄附ス。永代借地幷外人滯納ニ關スル意見書決定○二十一日兵庫港驛新設○二十三日稅關陸上設備工事一箇年繰上トナル

是月市場區域內類似業取締ニ關スル建議市會ニ出ヅ○神戸肥料卸商業組合設立○實業協會港灣研究委員會ヲ組織ス○神戸陶磁器輸出組合設立○兵庫縣製氷工業組合成ル○戰役紀念保育會東明ビル內ニ移轉ス○神戸愛隣館一時

（昭和八年）

解散ス○私立鐘紡青年訓練所開設○第三神港商業新築落成○阪神電鐵ノ岩屋灘道間地下鐵竣功○寡雨高溫涸梅雨ノ現象ヲ呈ス○亞爾然丁領事館總領事館ニ昇格○同總領事ガロ來任○ジエームス瑞典名譽領事ニ就任○瑞典領事館江戸町ニ移轉ス

七

八日縣保安課ヨリ獨立セル交通消防課市內消防事務ヲモ管ス○十日兵庫新川運河本市移管幷改修工事施行認可セラル○十二日國產波止場埋立地使用認可セラル○二十三日梨本宮台臨大倉山ニテ防空兵器獻納式擧行○二十四日中央卸賣市場鹽干魚部開業

是月神戸砂糖小賣商業組合設立○理髮業從業者ノ爲メ八訓練所ニ第二部ヲ設ク○公設質屋生業資金ノ貸付開始○灘警察署新築起工○六甲山乘合幷六甲越有馬鐵道買收案可決○中央卸賣市場業務規程改正

月	事項
八	一日兵庫新川運河改修工事著工○二日阪急電鐵乘入問題解決○七日市長選擧ノ件上提詮衡委員ニ附託ス。神戸刑務所移轉促進委員ヲ選ブ○十六日市長黒瀬弘志任期滿了シテ退任ス○十八日市長詮衡委員總會ヲ開ク○十九日市長詮衡小委員會ヲ開ク 是月電氣事業公債低利ニ借替○市共同住宅使用條例及同施行細則ヲ制定ス○市會授産所設置ヲ議決ス○福住小學校新築校舎ニ移轉ス○公設市場新築移轉案可決○電燈電力料ヲ値下ス○大阪汽船會社創立○芬蘭名譽領事オクテルロニー領事ニ就任○瑞典皇族カール來訪
九	六日中央卸賣市場漬物部開業○十三日水上生活者救護委員任命サル○二十一日市電第三期第五號線ノ一部脇濱春日野間開通○三十日裏山開發工事中ノ隧道工事ニ著手

（昭和八年）

是月四信用組合合併シ信用組合神戸金庫ヲ設立ス○實業協會神戸港振興ニ關シ努力ス○大光汽船會社創立○聚樂館新築著工○松竹劇場一時映畫館トナル○中央卸賣市場分場設置案可決

一〇

一日十合神戸支店開業ス○十日第四回勞働統計實地調査施行○十二日市長詮衡緊急委員會開會。滿蒙貿易調査委員會設置案決定。公設市場新築移轉案上程○二十日颱風ノ爲メ大阪商船屋島丸遭難沈沒○二十四日和田尋常小學校廢止○二十七日發疹チフス又發生ス

是月電氣使用條例ヲ改正ス○中突堤ノ陸上工事起工○神戸中央青果株式會社創立○神戸綿布綿製品輸出組合設立○神戸輸出布帛製品加工工業組合設立○御崎尋常ヲ川中尋常ト改稱○中華民國總領事江華本來任○英國巡洋艦入港

一一

一日六甲山乗合バスヲ市營ニ移ス。市臨時商工調査部開設○三日朝香宮妃薨去ニツキ天機幷御機嫌ヲ奉伺ス○六日兵庫突堤竣功式擧行○七日本日ヨリ二日間第一回みなとの祭執行空前ノ賑ハヒヲ呈ス。みなとの祭ニ外國人モ參加ス○十五日解體船ノ爲ニ日本解體三日會設立○十八日神戸港修築ニ關シ陳情書提出○二十日神戸地方防空設備基金設置

是月川中小學校新築移轉○神戸麵類卸商業組合設立○神戸乾物株式會社創立○不良住宅改良第三號館起工○兵庫縣國防協會神戸支部成ル○國防婦人會神戸支部神戸本部ト改稱○林間學園再度山尋常小學校設立認可○私立全購聯ゴム靴工場青年訓練所開設○大和汽船會社創立○乾汽船會社創設

（昭和九年）

褒章ヲ賜フ
是月工業試驗場ノ加工陶磁器研究所開設○日印新通商條約成立○ルース和蘭總領事代理ニ就任

二　十日市公會堂建設ニ關スル建議可決。港內交通機關市營ノ建議成立。敎育部新設ノ要望アリ○十六日市廳舍幷公會堂建設資金積立金規程成ル。市會議長ノ選擧ヲ執行シ前田二一六當選○二十六日市政事務調査委員會設置セラル
是月伯剌西爾日本視察團來訪○獨逸總領事ワグネル來任

三　二十日阪神電鐵加納町五丁目荒田町二丁目間乘入延長認可セラル○二十五日裏山開發計畫工事中隧道工事竣功○三十日市處務規程改正告示。觀光課新設サル○三十一日日本海員組合神戸授產所閉ヅ

是月此年度ノ豫算ハ明朗ナリトセラル○都市計畫費ニ新税ヲ課スルコトトナル○有給吏員給料額幷支給規程改正○名譽職費用辨償規程改正○三箇年繼續ノ神戸市史第二輯編纂決定○特別會計市廳舍及市公會堂建設資金設定○生田川小學校廢止○小泉製麻會社ノ新在家入船町及濱田町五丁目ノ埋立工事竣功○長田土地組合ノ工事竣功ス○滿洲國特使鄭孝胥及熙洽一行來朝

神戶市史第二輯書目

神戸市史
堺市史
日本海法史　住田正一
日明交通史上に於ける明使の誤想に就て　後藤秀穂（史學雜誌第二十八編第六・七號）
永享條約に就て後藤肅堂君の說を評す　栢原昌三（史學雜誌第二十八編第九・十號）
兵庫兩關稅務の研究　栢原昌三（史學雜誌第三十編第四・五・六號）
日明勘合の組織と使行　栢原昌三（史學雜誌第三十一編第四・五・八・九號）
倭冦に就て　後藤秀穗（中央史壇第十三編第九號）

延喜式
三善淸行意見封事
山槐記
高倉院嚴島御幸記
遊女記
和漢船用集

東寺王代記
武家年代記
武家年代記裏書
如是院年代記
蔭凉軒日錄
大乘院日記目錄
大乘院記錄
大乘院寺社雜事記
滿濟准后日記
東寺執行日記
吉田家日次記
經覺要鈔
鹿苑日錄
師鄕記
兼敦朝臣記

臥雲日件錄
兼宣公記
敎言卿記
看聞日記
薩戒記
補菴京華集
康富記
建內記
蔗軒日錄
蜷川親元日記
齋藤親基日記
天文日記
善隣國寳記
續善隣國寳記
續史愚抄

幻雲文集
南方紀傳
衣裝日記
下行價銀帳并驛程錄
島隱集
宮寺緣事抄
和漢合符
書江山小隱圖詩後
不二遺稿
毛吹草
蓋簪錄
運歩色葉集
球陽
翰林葫蘆集
竹居清事

南嶺和尙道行碑文
增修和漢合運圖

明史
明史藁
明律集解
明律
皇明實錄
明會典
明會要
皇明資治通紀
大學衍義補
成宗實錄
日本一鑑
籌海圖編

日本考略
海防纂要
海東諸國記
殊域周咨錄
日本圖纂
吾學編
修史爲徵
蠶餘雜集
續文獻通考
澳門紀略
天下郡國利病書
高皇帝御製文集
蒼霞草
歷代寶案
李朝實錄

世祖實錄
老松堂日本行錄
大正八年十一月大演習關係記錄　兵庫縣廳藏
大正十一年皇后陛下御西下一件書類　神戸市役所藏
昭和元年御大喪一件書類　同
昭和三年十一月御大禮一件書類　同
神戸稅關行幸記念誌 昭和四年刊
神戸市行幸記念誌 昭和四年刊
觀艦式關係書類 昭和五年　神戸市役所藏
觀艦式記念海港博覽會誌 昭和六年刊
平和祝賀會書類 大正八年　神戸市役所藏
官幣中社長田神社復舊御造營史 昭和四年刊
兵庫突堤竣功式關係書類 昭和八年　神戸市役所藏

第一回みなとの祭關係書類昭和八年　神戶市役所藏

神戶みなとの祭寫眞帖昭和九年刊

式辭祝辭等決裁書類　神戶市役所藏

神戶市事務報告及財產表大正八年度乃至昭和八年度、各年刊

神戶市會成議錄大正八年度乃至昭和八年度、各年刊

神戶市會議事速記錄大正八年度乃至昭和八年度、各年刊

神戶市歲入出豫算書大正八年度乃至昭和八年度、各年刊

神戶市歲入出決算書大正八年度乃至昭和八年度、各年刊

神戶市財政要覽大正八年度乃至昭和八年度、各年刊

神戶區有財產沿革史大正八年刊

神戶市例規類集大正十五年刊

神戶市長物語伊藤貞五郎、大正十五年刊

神戶市例規類集追錄昭和四年乃至同九年、各年刊

大都市公企業比較調査書昭和五年刊

市制町村制逐條示解 五十嵐鑛三郎等、昭和六年刊

地方財政の實際問題 三好良夫、昭和六年刊

日本都市年鑑 昭和八・九・十年用

隣接町村編入關係書類 神戸市役所藏

兵庫縣例規

神戸市會正副議長市會議員名譽職參事會員常設委員一覽表

特別市制促進運動の經過

永代借地問題に就て

事務改善調査關係書類 神戸市役所藏

區役所設置調査關係書類 同

武庫郡誌 大正十年刊

西灘村史 大正十五年刊

大正九年以降神戸港修築工事關係書類 神戸市役所藏

神戸港外國貿易陸上設備工事關係書類　神戸市役所藏

神戸港內國貿易陸上設備工事關係書類　同

神戸市工業概況大正八年乃至同十四年、各年刊

神戸港外國貿易概況大正八年乃至昭和九年、各年刊

日本外國貿易年表大正八年乃至昭和九年、各年刊

神戸商工會議所事業成績報告大正八年乃至昭和九年、各年刊

神戸港勢一班大正八年乃至同十一年、各年刊

神戸に於ける三菱勞働爭議大正十年刊

神戸港外國貿易大要大正十一年刊

神戸稅關海陸運輸聯絡設備概要大正十一年刊

兵庫縣の畜産大正十一年刊

神戸稅關新設備報告大正十二年刊

神戸港勢大觀大正十二年刊

神戸自由港設置の提唱大正十二年刊

神戸港大觀大正十二年乃至昭和九年、各年刊

神戸港外國貿易大正十四年刊
神戸港の生絲と絹織物大正十四年刊
神戸市失業統計調査概況大正十四年刊
神戸市商工要覽昭和元年乃至同九年、各年刊
Annual Report of the Kobe Foreign Board of Grade, 1925
海運興國史昭和二年刊
大正年間神戸港外國貿易通觀昭和二年刊
神戸市會社名鑑昭和二年刊
產業組合要覽昭和三年刊
兵庫縣工場統計表昭和三年乃至同九年、各年刊
海運概況昭和四年乃至同九年、各年刊
神戸港概觀昭和四年刊
神戸商工會議所要覽昭和四年刊
神戸市商工名鑑昭和五年乃至同九年、各年刊
兵庫縣會社一覽昭和五年乃至同九年、各年刊

日本經濟の最近十年　昭和六年刊
神戸稅關沿革略史　昭和六年刊
兵庫縣工場一覽　昭和六年乃至同九年、各年刊
神戸港と大阪港　昭和七年刊
神戸在留華商及其取引事情　昭和七年刊
海運月報　大正十二年乃至昭和九年、各月刊
神戸港ノ振興策ニ就テ　昭和八年刊
港灣問題所見　昭和八年刊
神戸港の將來に就て　昭和八年刊
神戸港對英屬領地貿易　昭和八年刊
神戸港對蘭領印度貿易　昭和八年刊
神戸港對中米幷南米貿易　昭和八年刊
最近歐米港灣の概況　昭和八年刊
神戸生絲市場滿拾年史　酒井義一、昭和八年刊
神戸船主會會員幷船舶名簿　昭和八年刊

神戸商工會議所統計年報昭和八年刊
神戸港重要貿易品調査叢昭和九年刊
神戸市各種組合一覽昭和九年刊
港灣協會十年史昭和九年刊
經濟十年史エコノミスト、昭和九年刊
神戸商工情勢昭和十年刊
神戸市工業調査書昭和十年刊
神戸港外國貿易概覽昭和十年刊
日本の產業と貿易の發展昭和十年刊
兵庫縣工業組合概況昭和十年刊
兵庫縣商業組合一覽昭和十一年刊
神戸市商業調査書昭和十一年刊

第一回水道擴張關係書類　神戸市役所藏
天井川改修書類　同

神戸市第二回水道擴張目論見書　神戸市役所藏
灘水道工事變更目論見書（追加工事第一回變更、神戸市第二回水道擴張追加）　同
千苅導水工事第一回變更目論見書（第一回變更、神戸市第二回水道擴張）　同
上ヶ原淨水工事變更目論見書（第二回變更、神戸市第二回水道擴張）　同
千苅導水工事第二回變更目論見書（第三回變更、神戸市第二回水道擴張）　同
西部淨水場工事變更目論見書（第四回變更、神戸市第二水道擴張）　同
葺合耕地整理ニ關スル書類明治四十三年乃至大正六年　同
明治四十四年葺合耕地整理組合同意書　同
北部耕地整理ニ關スル書類大正元年乃至同十年　同
長田耕地整理ニ關スル書類大正二年乃至同九年　同
板宿耕地整理一件大正六年以降　同
土木地理ニ關スル書類大正七年乃至同十年　同
神戸市區改正委員會議事速記錄大正八年刊
神戸市電氣事業報告書大正十一年乃至昭和九年、各年刊
神戸市下水道調査概要大正十一年刊

神戸市水道擴張誌大正十一年刊
神戸都市計畫調査概要大正十一年刊
神戸都市計畫地域調査大正十二年刊
神戸市縦貫高架鐵道ニ關スル諸問題大正十二年刊
交通量調査幷ニ電車網大正十二年刊
神戸都市計畫區域調査大正十二年刊
市街區劃及高架線ニ關スル調査大正十二年刊
神戸市下水調査大正十二年刊
神戸市區改正調査委員會及市區改正調査委員會事蹟概觀大正十二年刊
公園及遊園の設備大正十二年刊
都市計畫參考資料(財政的方面)大正十三年刊
神戸都市計畫事業第一期道路改設顛末大正十四年刊
神戸都市計畫調査及參考資料大正十四年刊
神戸都市計畫決定事項大正十四年、昭和二年各刊
大正十四年都賀川改修關係書類

神戸市役所藏

神戸都市計畫部調査彙報大正十四・十五・昭和二年、各刊
神戸都市計畫一覽附參考資料大正十五年刊
神戸都市計畫街路網計畫說明書昭和二年刊
十年間の神戸市電氣事業昭和二年刊
山地開發ニ關スル調査及計畫昭和三年刊
都市計畫問題所見昭和三年刊
神戸都市計畫事業第二期道路改設大要昭和四年刊
神戸市下水道調査設計報告昭和四年刊
神戸市電氣事業要覽昭和四年刊
神戸都市計畫要覽昭和四年刊
本邦軌道事業ニ關スル調査昭和七年刊
水道擴張工事概要昭和八年刊
バス事業概要昭和九年刊
神戸市水道略說昭和九年刊
都市計畫第三期事業前期工事報告書昭和十年刊

神戸都市計畫ニ關スル事項(都市計畫經過、高架乘入)昭和十年刊
神戸市電氣局事業概要昭和十一年刊

神戸市傳染病史大正十四年刊
神戸市衛生施設大觀大正十五年刊
全國都市衛生狀態比較表大正十五年刊
本市に於ける乳幼兒死亡調査昭和三年刊
神戸市衛生施設要覽昭和十一年刊
神戸市立屯田療養所年報昭和九年刊
神戸市社會事業概況大正七年乃至昭和九年、各年刊
神戸市立相談所紀要大正十三年乃至昭和八年、各年刊
神戸市內の細民に關する調査大正十三年及同十五年、各刊
神戸市に於ける日傭勞働者調査大正十四年刊
神戸市に於ける婦人職業調査大正十四年刊
神戸市に於ける日傭勞働者問題大正十四年刊

勞働統計實地調査大正十四年、昭和四年・同七年・同十年、各刊
神戸勞働保險組合大正十五年刊
日稼勞働者の失業事情大正十五年刊
日傭勞働者失業救濟事業大正十五年刊
神戸市失業統計調査概況大正十五年刊
在神半島民族の現狀昭和二年刊
神戸勞働保險組合事業年報昭和三年乃至同九年、各年刊
移民收容所概要昭和四年刊
日本勞働年鑑昭和四年刊
兵庫縣社會事業概要昭和五年刊
兵庫縣立兒童研究所要覽昭和七年刊
兵庫縣社會事業要覽昭和九年刊
浮浪者の調査昭和九年刊
神戸市內公私社會事業施設分布圖昭和十年刊
社會事業關係法規類蒐昭和十年刊

兵庫縣立健康相談所概要昭和十一年刊

神戸市學事提要大正八年乃至昭和九年、各年刊

寄附者行賞上申書類大正十二年　　神戸市役所藏

神戸市三十年の補習教育大正十四年刊

教育演習召集ニ關スル書類大正十五年以降　　神戸市役所藏

教育召集勤務演習ニ關スル書類昭和三年度　　同

兵庫縣立第一神戸商業學校一覽昭和五年刊

兵庫縣管內學校幼稚園教員養成所青年訓練所圖書館青年團婦人會一覽昭和五年乃至同八年、各年刊

神戸市聯合青年團拾周年記念史昭和七年刊

神戸地方防空演習に於ける燈火管制昭和八年刊

神戸市青年訓練所狀況一覽昭和八年刊

神戸高等商業學校一覽昭和九年刊

兵庫縣社會教育概要昭和九年刊

神戸商業大學一覽昭和十年刊　神戸市役所藏
神戸高工一覽昭和十年刊　同
神戸市聯合青年團書類　同
私立學校及幼稚園臺帳
小學教員共濟會書類
船舶燈火管制及情報通報要領
滿洲事變獻品錄
神戸愛山協會書類　神戸愛山協會藏
兵庫縣外事課記錄　兵庫縣廳藏
神戸市祕書課外事係書類　神戸市役所藏
文豪モラエスの日本觀に就て有吉正勝（史叢第三輯）
明治四十一年神戸市勢調査顛末幷要計表　神戸市役所藏
戸口ニ關スル綴大正二年乃至同十年
兵庫縣統計書大正八年乃至昭和九年、各年刊

神戸市統計書大正八年・同十二年・同十四年・昭和二年・同三年・同五年・同七年・同八年・同十年、各刊
日本帝國統計年鑑大正八年乃至昭和九年、各年刊
國勢調査表(兵庫縣の部)大正十年刊
神戸市國勢調査結果表大正十四年刊
神戸市國勢調査報告大正十四年刊
國勢調査報告(兵庫縣の部)大正十四年刊
商工省統計昭和四年・同七年・同八年、各刊
神戸市衞生統計書昭和五年刊
國勢調査事務概要昭和五年刊
神戸市國勢調査概報昭和五年刊
神戸市國勢調査概要昭和五年刊
神戸市勢調査結果表昭和五年・同七年刊
氣象年報大正八年乃至昭和九年、各年刊
神戸測候所觀測記錄

官報大正八年乃至昭和九年

兵庫縣報大正八年乃至昭和九年

神戸市公報大正十年乃至昭和九年

神戸又新日報大正八年乃至昭和九年

神戸新聞大正八年乃至昭和九年

大阪朝日新聞大正八年乃至昭和九年

大阪毎日新聞大正八年乃至昭和九年

神戸市史第二輯 索引

凡例

一本索引は第二輯神戸市史全編に渉り、各方面の事項を摘出して是を辭書體に排列し、以て本文の記事内容を檢索するの便に供せむが爲に編纂した。

一本索引の五十音順に從ひたること、其假名遣は表音的假名遣に據り、長音には總べてウを用ゐたること、イヰ、エヱ、オヲ、ジヂ、ズヅ等を區別せず撥音を最後に置けること、各事項中に――符を挿入して其項目と同一字句を省略したること、文中――符を挿める時は之を短くし、別行の始めにある時は長くして容易に一項目中の別事項なることを知らしめたること、一〇―一五の如く記せるは十頁乃至十五頁なるを示せるが如き、略、皆前輯神戸市史索引に準ずることとした。

一同一項目に屬する事項は略、年次順若しくは頁數順に據りて配列した。

一第二輯神戸市史は第一冊に本編の總説及各説を、第二冊に別錄一及同二を、第三冊の中に古代・中世・近世の各資料全部を收めたれば、本索引は本編總説及各説は本編、別錄一・二は別錄、資料は資料の略符を以て各之を現し、頁數を其下に記入することとした。

一前輯神戸市史索引は之を專門家に委囑編纂したれども、第二輯の索引は編纂の傍ら編纂員に於て編纂したれば、往々にして脫漏不備あるを保せず、これ最も遺憾とする所である。

ア

ウ

エ

オ

カ

キ

ク

ケ

コ

サ

シ

ス

セ

ソ

タ

チ

ツ

テ

ト

ナ

ニ

ヌ

ネ

ノ

ハ

ヒ

フ

へ

ホ

マ

ミ

ム

モ

ヤ

ユ

ヨ

ラ

リ

レ

ロ

ワ

神戸市史第二輯　編纂顛末

曩に大正七年六月開港五十年記念事業として起したる神戸市史編纂事業は、同十四年六月を以て完成し、古代より大正七年末迄の事歴は之に收錄せられた。蓋し神戸市にありては最初の系統ある修史事業にして、其大綱篇目はよく此種事業の模範とせられ、貢獻する所尠からざるものがあつた。

然るに其後に於ける神戸市の市勢の上には、世界大戰の終熄、其反動等によりて著しき變動を來し、動搖せる財界の影響又免るべくもあらず、爲に商工貿易を以て立てる神戸市の情勢は頓に變轉せるのみならず、其間に市の施設は大正七年以前に比して洵に隔世の感あらしむるに至つた。即ち大正八年以降昭和八年に至る十五年間の神戸市の事歴は、一般世態の變替に影響せられて複雜多岐となり、而も昭和七年以降の經濟界の好轉と共にこゝに更に一段の伸展を遂げんとするに至れるを以て、文書課長門前嘉久一は此著しき市勢變動の情勢を敍し置くの必要なるを認め、上司に進言するに神戸市史第二輯の編纂事業を以てした。

昭和八年十二月新に就任せる市長勝田銀次郎は此文書課長の進言を容れて、神戸市史第二輯編纂事業を計畫し、之を昭和九年度乃至同十一年度の繼續事業と爲し、同九年二月二十日第二八號議案神戸市史編纂費繼續年期及支出方法と其關係

豫算を市會に提案し、同年三月二十八日を以て原案の可決を見た。惟ふに當時理事者は遠く開港百周年を考慮し、其時に計畫せらるゝことあるべき「改版神戶市史」編纂に備へ、此第二輯を過渡的中間的計畫となしたるものなりしことは注目に値する。かくて勝田市長は祕書課長土師俊次をして同年四月前神戶市史編纂員囑託たりし市立第一神港商業學校敎諭岡久穀三郎に之が編纂依囑方を交渉し、其編纂大綱の提出あるや、同月を以て編纂主任囑託の辭令を發して實際の事務を開始することとなつた。是より先神戶市處務規程中改正を加へられ、昭和九年四月一日より實施せられしが、當時文書課管掌事項中に新に市史編纂事務を加へたれば、此編纂事務は文書課之を管することとなり、同課書記神崎紀郎をして取扱はしめ以て今に及んだ。

此くて昭和九年四月前輯神戶市史編纂顧問たりし京都帝國大學敎授文學博士新村出を顧問に囑託し、岡久囑託は其立案にかゝる大綱につきて顧問の指示に據り、編纂方針は前輯市史に從ふこととなりしが、前輯市史中別錄に收錄せる「中世の兵庫」の補充を爲さんが爲に、「中世の兵庫と外國關係」の起稿は之を臺北帝國大學助敎授小葉田淳に囑託し、其資料の補充としては前市史の場合に資料蒐集を依囑せ

る東京帝國大學史料編纂所史料編纂官岩橋小彌太を通じて同掛員永島福太郎に之を囑託し、次いで編纂員として文學士日置彌三郎・同原山淑夫・經濟學士佐伯敏夫を囑託し、兵庫區役所階上に於て事務を開始し、鋭意之に從ふに至つた。其後十年五月に至り事務所を文書課内に移して今に至つた。

前輯神戸市史は別錄二に收錄せる氣象・海運・港灣・貿易等は之を各專門家に依囑せるも、第二輯に於ては悉く之を範として編纂員之が起稿に當り、又索引も之を編纂員の擔任とし、本編各說二の章目中一部の改定を加へ、昭和十一年八月末を以て第二草稿の修正を了し、同九月には年表・索引の編纂に著手し、かくて諸般の整理を了するや、十二月五日第九二號議案神戸市史編纂費繼續年期及支出方法變更の件、豫算第五五號議案昭和十一年度神戸市歳入出追加豫算を可決して、五百部刊行の豫定を增加して六百三十部と爲し、十二月二十二日を以て印刷契約を爲し、一月上旬より校正に著手し、印刷の進行に伴ひて索引を整理し、同年六月を以て其業を了へたのである。

編纂開始以來の市長・助役及編纂關係者を左に掲ぐる。

市　長

自昭和九年四月　　勝田銀次郎

助役

自昭和九年八月　　八木林作

自昭和十年十月　　守屋磨瑳夫

文書課長

自昭和九年四月　　門前嘉久一

文書課市史編纂事務擔當書記

自昭和九年四月　　神崎紀郎

編纂顧問

自昭和九年四月　　新村出

編纂主任

自昭和九年四月　　岡久穀三郎

編纂員

自昭和九年五月　　日置彌三郎

自同十年四月至同十一年二月　　原山淑夫

自同九年五月至同十一年五月　佐伯敏夫
自同年五月至同年十月　木村滋（筆生）
自同年十一月至同十一年二月　加納房枝（同）
自同十年七月至同十一年一月　白川諦男（同）
自同十一年二月至同十二年一月　松岡進（同）
自同年二月　瀬川千代子（同）
自同年二月至同十二年一月　永野敏子（同）
左に當初の起稿豫定と其後の起稿者を表示する。

第一冊

第三章　神戸の海運　　佐伯囑託　岡久囑託

第四章　神戸港外國貿易の變遷　　日置囑託

第三冊

附圖　　岡久囑託

資料　　同上

年表　　各編纂員

書目　　同上

索引　　同上

編纂顚末

神戸市史第二輯編纂及出版に要せし經費を左に掲ぐ。

	雜給	需用費	合計
昭和九年度(決算)	三、五三〇・八〇圓	二三九・〇七圓	三、七六九・八七圓
昭和十年度(決算)	五、二五八・九九	四〇・三四	五、二九九・三三
昭和十年度(決算)遞次繰越	一、二〇〇・〇〇	—	一、二〇〇・〇〇
昭和十一年度(豫算)	五、〇〇八・〇〇	八、三九一・〇〇	一三、三九九・〇〇

昭和十一年度　遞次繰越	一、五九九・一四	四九・六六	一、六四八・八〇
合計	一六、五九六・九三	八、七二〇・〇七	二五、三一七・〇〇

昭和十二年六月三十日印刷
昭和十二年七月五日發行

編纂
發行者　神戸市役所

東京市本所區厩橋一丁目廿七番地
印刷者　井上源之丞

東京市本所區厩橋一丁目廿七番地
印刷所　凸版印刷株式會社